

—茨城県土浦市—

八幡脇遺跡

—田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第8集

2009

田村・沖宿土地区画整理事合
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

—茨城県土浦市—

はち まん わき
八幡脇遺跡

—田村・沖宿土地区画整理事業に
—伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第8集

2009

田村・沖宿土地区画整理組合
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

口絵 1



第6号住居跡（玉作工房跡）



第6号住居跡出土玉作関連遺物（勾玉未製品）

口絵2



第8号住居跡出土玉作関連遺物（管玉未製品等）



第6号住居跡出土玉作関連遺物（砥石）

口絵 3



第 1 号住居跡鍛冶炉



第 7 号火葬墓出土遺物

例　　言

- 1 本書は、土浦市田村沖宿土地区画整理事業に伴う、同市沖宿町に所在する八幡脇遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は沖宿町字八幡脇2696外である。
- 2 調査は田村・沖宿土地区画整理組合の委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。
- 3 本遺跡の調査期間は1991（平成3）年10月21日～1992（平成4）年2月12日で、調査面積は約8,700m²である。
- 4 発掘調査は閔口　満が担当し、調査員として吉澤　悟、駒沢悦郎、調査補助員として星野保則、香取　渉、松下謙一があたった。
- 5 本書の編集は閔口が担当した。
- 6 本書第3章の執筆は、縄文時代の遺構・土器を吉田　匠・福田礼子、古墳時代の遺構・遺物を閔口、火葬墓を吉澤、第1章・第2章及び全体の補訂を閔口が行なった。そして、第4章については、「2古墳時代」の「B玉作工房跡と出土遺物」を塩谷　修（土浦市立博物館学芸員）が担当し、その他は閔口が執筆した。
- 7 整理の分担は下記のとおりで、全体の統括を閔口が行った。
実側　雨宮瑞生（石器・石製品）、吉田（縄文時代の遺構と土器）、吉澤（火葬墓）、黒澤春彦、小松葉子（古墳・平安時代の遺構と遺物）。遺構図版作成 小松 遺物図版作成 雨宮（石器・石製品）、閔口（縄文土器）、黒澤・小松（古墳時代の遺物）、吉澤（火葬墓）。写真 現地調査写真を閔口、遺物写真については古墳・平安時代の土器を黒澤、縄文時代の遺物及び玉作関連遺物などを鶴田圭吾氏に御協力頂いた。
- 8 玉作工房跡の調査方法や玉作関連遺物の取り扱い、玉作工程などについては寺村光晴氏（当時和洋女子大学文学部教授）にご指導・ご教示頂いた。
- 9 鍛冶工房跡の調査方法や鍛冶関連遺物の取り扱い、科学分析方法については穴澤義功氏（当時たたら研究会委員）にご指導・ご教示頂いた。
- 10 上記のはか、本調査報告書の作成には下記の方々よりご協力・ご助言を賜りました。記して感謝の意を表したい。茨城県教育委員会 茨城県県南教育事務所 田村沖宿土地区画整理組合（株）川鉄商事（株）清水建設 沼津工業高等専門学校 赤熊浩一 浅田員由 穴澤義功
飯塚守人 鶴田健一 上野真由美 大久保隆史 岡田勇介 大澤正巳 小川和博 瓦吹 堅
窪田恵一 駒見和夫 木崎 悠 木下 豆 酒井広子 佐々木義則 鶴田圭吾 鈴木素行
寺村光晴 仲野泰裕 仲山英樹 棚崎彰一 長谷川福次 服部文孝 平井昭司 松本貴子
茂木雅博 望月明彦 本橋弘美 森木岩太郎 矢野徳也
- 11 本遺跡の出土資料や図面などの記録資料は土浦市教育委員会が保管する。本遺跡出土遺物には遺跡の略称としてT.O.9を記してある。
- 12 本遺跡の遺構・遺物に関わり以下の科学分析を実施している。火葬墓内人骨の鑑定、鍛冶関連遺物の金属学的分析及び放射化分析、黒曜石の蛍光X線分析。
- 13 本遺跡の発掘調査報告書は全11集の予定である。各集共通の事項や考察、科学分析は第11集の総集編に掲載予定である。

凡　　例

- 1 八幡脇遺跡の遺構番号は報告書刊行にあたっても基本的に現地調査時に付けたものを踏襲している。一部整理作業の過程で遺構名称を変更したものもある。
- 2 遺跡内の遺構の表記は次のものを用いた。

S I…竪穴住居跡 S K…土坑 S X…竪穴遺構 S D…溝跡 S S…集石
S F…焼土址 M Y…土器埋設遺構 C T…火葬墓 P…ピット
- 3 土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」(日本色研事業株式会社)を用いた。
- 4 各遺構の実測図は原図(20分の1)を使用し、縮尺3分の1を基本としたが、大きさによって2分の1、4分の1を用いた。
- 5 遺構実測図中の標高はすべてm単位で示している。
- 6 遺構実測図(土層)中の表記は次のものを用いた。

K…搅乱 L B…ロームブロック H L…ハードローム
- 7 遺構実測図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。また、接合関係にある遺物は、各々実線で結んだ。
- 8 遺構実測図中の破線は推定線を示す。又、遺構図中床面の一点鎖線は硬化面を示す。
- 9 遺構及び遺物実測図中の網掛けの指示は下記のとおりである。

遺構：焼土 

遺物：繊維を含む土器  土師器の赤色塗彩  黒色処理 

須恵器  炭化物・煤の付着  灰釉陶磁器の釉薬 

砥石の砥面 

- 10 遺物実測図の縮尺は3分の1を基本としたが、材質や遺物の大きさなどにより縮尺を変えたものがあり、それらについてはスケールを変えてある。
- 11 遺物実測図中心線の一点鎖線は回転(復元)実測を示す。
- 12 土器観察表について、図版番号は実測図中の番号である。表中のAは口径、Bは器高、Cは底径を示す。()の数値は現存値であり、[]は回転復元径である。胎土中の半透明・透明の鉱物は石英、不透明・白色の鉱物を長石とした。焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
- 13 色調は原則として外面、内面の順で記してある。
- 14 土器観察表中の備考のNaは実測台帳の通しNaである。

調査者名簿

試掘調査 石川 功 土浦市教育委員会社会教育課
中澤達也 土浦市教育委員会社会教育課

調査主任 関口 満 土浦市教育委員会社会教育課

調査員 黒澤春彦 土浦市教育委員会社会教育課
井上敏昭 土浦市教育委員会臨時職員
小松葉子
福田礼子 土浦市教育委員会臨時職員

雨宮瑞生 筑波大学大学院
吉澤 悟 筑波大学大学院
駒沢悦郎 東洋大学大学院
吉田 匠 国学院大学大学院

調査補助員 星野保則 専修大学
香取 渉 東洋大学
松下謙一 東洋大学

事務担当 秋元照子（～H5.3.31）中村博子（H5.4.1～）

事務局 土浦市教育委員会社会教育課（H5.4.1から文化課）

発掘調査参加者（10日以上）

浅川和代 安達浩二 伊勢山こう 岩瀬いま 岩本よし子 大久保さだ江 大根陽子
大竹きみ子 岡村美樹 小倉はる 貝塚雪枝 加藤博司 川島敏子 川又茂子 倉田俊夫
郡司征子 坂本たえ 坂本みつい 桜井久代 清水せつ子 清水たまの 鈴木きみ 鈴木秀雄
鈴木みね 土肥すえ 繩野重雄 野口八重子 安田トミエ 山口仁一 横浜長一郎

整理作業参加者（10日以上）

青木光恵 阿部秀子 天谷瑛子 石浜敏子 石山春美 五十嵐耀子 遠藤或江 大坪美知子
大野美津子 川田光子 小松崎廣子 佐久間郁子 椎名まさ子 島津恵美子 須貝和子
田辺利子 富田シズエ 長嶺道子 中村節子 浜田久美子 松川綾野 松川さち子
村井律子

土浦市遺跡調査会組織 (平成5年度まで)

会長	永山 正	土浦市文化財保護審議会長
	須田直之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	青木利次	土浦市教育委員会教育長
理事	茂木雅博	土浦市文化財保護審議会委員
	大塚 博	土浦市文化財保護審議会委員
	雨貝 宏	土浦市建築指導課長
	横田紀夫	土浦市耕地課長
	内海崎保生	土浦市耕地課長
	野口幹雄	土浦市区画整理課長
	小川和博	日本考古学研究所
監事	藤枝 正	土浦市教育委員会教育次長
	二野屏昌男	土浦市教育委員会教育次長
	鶴町喜美雄	土浦市教育委員会教育次長
	淺ヶ崎洋之	土浦市企画課長
	廣田宣治	土浦市企画課長
幹事長	田中紀夫	土浦市教育委員会教社会教育課長
	福田統太	土浦市教育委員会教社会教育課長
	竹本喜一郎	土浦市教育委員会教社会教育課長
	宮本 昭	土浦市教育委員会文化課長
幹事	久松一夫	土浦市教育委員会教社会教育課副参事
	岩沢 茂	土浦市教育委員会教社会教育課課長補佐
	加倉井藤雄	土浦市教育委員会文化課主査
	石山淳一	土浦市教育委員会教社会教育課担当係長
	飯村 善	土浦市教育委員会教社会教育課主幹
	石川 功	土浦市教育委員会文化課主事
	黒澤春彦	土浦市教育委員会文化課主事
	中澤達也	土浦市教育委員会文化課主事
	関口 満	土浦市教育委員会文化課主事
	塙谷 修	土浦市立博物館学芸員

目 次

図版 1 第 6 号住居跡（玉作工房跡）	2. 壊穴遺構（SX）…………… 188
第 6 号住居跡出土玉作関連遺物 (勾玉未製品)	第 3 節 平安時代…………… 189
図版 2 第 8 号住居跡出土玉作関連遺物 (管玉未製品等)	1. 壊穴住居跡（SI）…………… 189
第 6 号住居跡出土玉作関連遺物（砥石）	2. 火葬墓（CT）…………… 195
図版 3 第 1 号住居跡鍛冶炉	3. 溝跡（SD）…………… 210
第 7 号火葬墓出土遺物	第 4 節 古墳時代以降の遺構外出土遺物 … 212
例言	第 4 章 総括…………… 213
凡例	写真図版
調査者名簿	抄録
土浦市遺跡調査会組織	
目次	
第 1 章 経過…………… 1	
第 2 章 調査…………… 4	
第 1 節 地区設定…………… 4	
第 2 節 基本層序…………… 4	
第 3 節 遺構確認…………… 4	
1. 試掘調査及び表土除去…………… 4	
2. 遺構調査…………… 4	
第 3 章 遺構と遺物…………… 9	
第 1 節 漢文時代…………… 9	
1. 壊穴住居跡（SI）…………… 9	
2. 壊穴遺構（SX）…………… 60	
3. 土坑（SK）…………… 64	
4. 土器埋設遺構（MY）…………… 78	
5. 集石（SS）…………… 81	
6. 焼土址（FP）…………… 82	
7. 遺構外出土遺物…………… 84	
第 2 節 古墳時代…………… 99	
1. 壊穴住居跡（SI）…………… 99	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	遺跡周辺地形図	3
第3図	遺構配置図	5
第4図	調査エリア図	6
第5図	第7号住居跡	10
第6図	第7号住居跡遺物出土状況	12
第7図	第7号住居跡出土遺物(1)	13
第8図	第7号住居跡出土遺物(2)	14
第9図	第7号住居跡出土遺物(3)	15
第10図	第7号住居跡出土遺物(4)	16
第11図	第7号住居跡出土遺物(5)	17
第12図	第7号住居跡出土遺物(6)	18
第13図	第7号住居跡出土遺物(7)	19
第14図	第9号住居跡	23
第15図	第9号住居跡遺物出土状況	24
第16図	第9号住居跡出土遺物(1)	25
第17図	第9号住居跡出土遺物(2)	26
第18図	第9号住居跡出土遺物(3)	27
第19図	第9号住居跡出土遺物(4)	28
第20図	第9号住居跡出土遺物(5)	29
第21図	第12号住居跡	32
第22図	第12号住居跡出土遺物(1)	34
第23図	第12号住居跡出土遺物(2)	35
第24図	第12号住居跡出土遺物(3)	36
第25図	第13号住居跡	38
第26図	第13号住居跡	39
第27図	第13号住居跡出土遺物(1)	41
第28図	第13号住居跡出土遺物(2)	42
第29図	第15号住居跡・炉	44
第30図	第15号住居跡出土状況	45
第31図	第15号住居跡出土遺物	46
第32図	第16号住居跡	47
第33図	第16号住居跡遺物出土状況	50
第34図	第16号住居跡出土遺物(1)	52
第35図	第16号住居跡出土遺物(2)	53
第36図	第16号住居跡出土遺物(3)	54
第37図	第16号住居跡出土遺物(4)	55
第38図	第16号住居跡出土遺物(5)	56
第39図	第16号住居跡出土遺物(6)	57
第40図	第16号住居跡出土遺物(7)	58
第41図	第1号竪穴造構出土遺物出土状況	60
第42図	第1号竪穴造構出土遺物(1)	62
第43図	第1号竪穴造構出土遺物(2)	63
第44図	第1号竪穴造構出土遺物(3)	64
第45図	第1・2・6・8~11・13・14・ 19~22・24・30号土坑	65
第46図	第25~28・45・47号土坑	66
第47図	第31・32・34号土坑	67
第48図	第33・35・36号土坑	68
第49図	第16・40~44号土坑	69
第50図	第16号土坑出土遺物(1)	71
第51図	第16(2)・33・44号土坑出土遺物	72
第52図	第37~48~51号土坑	74
第53図	第50号土坑出土遺物(1)	75
第54図	第50号土坑出土遺物(2)	76
第55図	第51号土坑出土遺物	77
第56図	第2~4号土器埋設遺構	79
第57図	第2~4号土器埋設遺構出土遺物	80
第58図	第1~2号集石・遺物出土状況	81
第59図	第1~4・6号焼土址・出土遺物	83
第60図	遺構外出土遺物(1)	85
第61図	遺構外出土遺物(2)	86
第62図	遺構外出土遺物(3)	88
第63図	遺構外出土遺物(4)	89
第64図	遺構外出土遺物(5)	91
第65図	遺構外出土遺物(6)	92
第66図	遺構外出土遺物(7)	94
第67図	遺構外出土遺物(8)	95
第68図	第1号住居跡・鍛冶炉・掘り方	100
第69図	第1号住居跡出土遺物(1)	101
第70図	第1号住居跡出土遺物(2)	102
第71図	第1号住居跡出土遺物(1)	104
第72図	第1号住居跡出土遺物(2)	105
第73図	第1号住居跡出土遺物(3)	106
第74図	第2号住居跡・遺物出土状況	108
第75図	第2号住居跡出土遺物	109
第76図	第3号住居跡	112
第77図	第3号住居跡出土遺物	113
第78図	第3号住居跡出土遺物	114
第79図	第4号住居跡	116
第80図	第4号住居跡・炉・貯蔵穴	117
第81図	第4号住居跡炭化材等出土状況	117
第82図	第4号住居跡出土遺物(1)	118
第83図	第4号住居跡出土遺物(2)	118
第84図	第4号住居跡出土遺物(3)	119
第85図	第4号住居跡出土遺物(1)	120
第86図	第4号住居跡出土遺物(2)	121
第87図	第4号住居跡出土遺物(3)	122
第88図	第4号住居跡出土遺物(4)	123
第89図	第4号住居跡出土遺物(5)	124
第90図	第4号住居跡ほか接合資料	125
第91図	第5号住居跡・掘り方	127
第92図	第5号住居跡出土遺物出土状況	128
第93図	第5号住居跡出土遺物(1)	129

第94図	第5号住居跡出土遺物(2).....	130
第95図	第6号住居跡.....	133
第96図	第6号住居跡柱穴等土層.....	135
第97図	第6号住居跡遺物出土状況(1).....	137
第98図	第6号住居跡遺物出土状況(2).....	139
第99図	第6号住居跡遺物出土状況(3).....	140
第100図	第6号住居跡遺物出土状況(4).....	141
第101図	第6号住居跡遺物出土状況(5).....	142
第102図	第6号住居跡遺物出土状況(6).....	143
第103図	第6号住居跡遺物出土状況(7).....	144
第104図	第6号住居跡遺物出土状況(8).....	145
第105図	第6号住居跡遺物出土状況(9).....	146
第106図	第6号住居跡出土遺物(1).....	148
第107図	第6号住居跡出土遺物(2).....	149
第108図	第6号住居跡出土遺物(3).....	150
第109図	第6号住居跡出土遺物(4).....	151
第110図	第6号住居跡出土遺物(5).....	152
第111図	第6号住居跡出土遺物(6).....	155
第112図	第6号住居跡出土遺物(7).....	156
第113図	第6号住居跡出土遺物(8).....	157
第114図	第6号住居跡出土遺物(9).....	158
第115図	第6号住居跡出土遺物(10).....	159
第116図	第6号住居跡出土遺物(11).....	160
第117図	第6号住居跡出土遺物(12).....	161
第118図	第8号住居跡.....	164
第119図	第8号住居跡炭化材出土状況.....	165
第120図	第8号住居跡遺物出土状況(1)・貯藏穴.....	166
第121図	第8号住居跡遺物出土状況(2).....	167
第122図	第8号住居跡出土遺物(1).....	168
第123図	第8号住居跡出土遺物(2).....	169
第124図	第8号住居跡出土遺物(3).....	170
第125図	第8号住居跡出土遺物(4).....	171
第126図	第8号住居跡出土遺物(5).....	174
第127図	第8号住居跡出土遺物(6).....	175
第128図	第8号住居跡出土遺物(7).....	176
第129図	第8号住居跡出土遺物(8).....	177
第130図	第8号住居跡出土遺物(9).....	178
第131図	第8号住居跡出土遺物(10).....	179
第132図	第8号住居跡出土遺物(11).....	180
第133図	第8号住居跡出土遺物(12).....	181
第134図	第8号住居跡出土遺物(13).....	182
第135図	第17号住居跡・出土遺物.....	184
第136図	第18号住居跡・遺物出土状況.....	186
第137図	第18号住居跡出土遺物.....	187
第138図	第2号堅穴遺構.....	188
第139図	第19号住居跡・遺物出土状況.....	190
第140図	第19号住居跡カマド・遺物出土状況.....	191
第141図	第19号住居跡出土遺物(1).....	192
第142図	第19号住居跡出土遺物(2).....	193
第143図	第1号火葬墓.....	195
第144図	第1号火葬墓出土遺物.....	196
第145図	第2号火葬墓.....	197
第146図	第2号火葬墓出土遺物.....	198
第147図	第3号火葬墓.....	199
第148図	第3号火葬墓出土遺物.....	200
第149図	第4号火葬墓.....	201
第150図	第4号火葬墓出土遺物.....	202
第151図	第5号火葬墓・出土遺物.....	203
第152図	第6号火葬墓出土遺物.....	204
第153図	第7号火葬墓.....	205
第154図	第7号火葬墓出土遺物(1).....	207
第155図	第7号火葬墓出土遺物(2).....	208
第156図	調査区外火葬墓出土遺物.....	209
第157図	第1号溝跡・出土遺物.....	211
第158図	古墳時代以降の遭撲外出土遺物.....	212

写 真 図 版

口絵1	第6号住居跡(玉作工房跡)、第6号住居跡出土玉作関連遺物(勾玉未製品)
口絵2	第8号住居跡出土玉作関連遺物(管玉未製品)、第6号住居跡出土玉作関連遺物(砥石)
口絵3	第1号住居跡鍛冶炉、第7号火葬墓出土遺物
P L 1	八幡塚遺跡航空写真(1)
P L 2	八幡塚遺跡航空写真(2)
P L 3	試掘測量状況(8T r)・試掘調査状況(33T r)
P L 4	第7号住居跡、第7号住居跡遺物出土状況
P L 5	第9号住居跡、第9号住居跡遺物出土状況
P L 6	第12号住居跡、第13号住居跡
P L 7	第15号住居跡、第15号住居跡遺物出土状況
P L 8	第16号住居跡、第16号住居跡炉1、第16号住居跡炉2
P L 9	第16号住居跡遺物出土状況、第1号堅穴遺構遺物出土状況
P L 10	第28号土坑、第31号土坑、第32号土坑
P L 11	第33号土坑、第33号土坑上層、第36号土坑
P L 12	第16号土坑、第16号上坑遺物出土状況、第40号土坑
P L 13	第44号土坑遺物出土状況、第50号土坑、第50号土坑遺物出土状況
P L 14	第51号土坑遺物出土状況、第2号土器埋設遺構、第3号上器埋設遺構
P L 15	第4号上器埋設遺構、第1号集石、第1号焼土址
P L 16	第1号住居跡、第1号住居跡床下溝等完掘状況
P L 17	第1号住居跡鍛冶炉、第1号住居跡遺物出土状況

P L 18	第2号住居跡、第2号住居跡遺物出土状況	16号土坑出土遺物、第44号土坑出土遺物
P L 19	第3号住居跡、第3号住居跡遺物出土状況	P L 51 第50号土坑出土遺物
P L 20	第4号住居跡、第4号住居跡遺物出土状況	P L 52 第7号住居跡出土遺物、第9号住居跡出土遺物、第12・13号住居跡出土遺物
P L 21	第4号住居跡貯藏穴遺物出土状況、第4号住居跡遺物出土状況、第4号住居跡炉火上遺物出土状況	P L 53 第15・16号住居跡出土遺物、第1号堅穴道構、第16・33・44・51号土坑、第3・6号焼土址出土遺物、第13・16号住居跡出土遺物
P L 22	第5号住居跡、第5号住居跡遺物出土状況	P L 54 第7号住居跡、遺構外出土遺物、遺構外出土遺物
P L 23	第6号住居跡、第6号住居跡遺物出土状況	P L 55 第1号住居跡出土遺物 (1)
P L 24	第6号住居跡貯藏穴、第6号住居跡炉火、第6号住居跡入口ピット	P L 56 第1号住居跡出土遺物 (2)
P L 25	第6号住居跡飛作関連遺物出土状況 (1)、第6号住居跡工作関連遺物出土状況 (2)、第6号住居跡床土面層サンプリング状況	P L 57 第2号住居跡出土遺物 (1)
P L 26	第8号住居跡、第8号住居跡炭化材出土状況	P L 58 第2号住居跡出土遺物 (2)、第3号住居跡出土遺物
P L 27	第8号住居跡貯藏穴、第8号住居跡遺物出土状況 (1)、第8号住居跡炭化材出土状況	P L 59 第4号住居跡出土遺物 (1)
P L 28	第8号住居跡遺物出土状況 (2)、第8号住居跡遺物出土状況 (3)、第8号住居跡玉作関連遺物出土状況	P L 60 第4号住居跡出土遺物 (2)
P L 29	第18号住居跡、第2号堅穴道構	P L 61 第4号住居跡出土遺物 (3)、第4・8号住居跡接合資料、第4・6号住居跡接合資料
P L 30	第19号住居跡、第19号住居跡カマド内遺物出土状況	P L 62 第5号住居跡出土遺物、第6号住居跡出土遺物 (1)
P L 31	第1号火葬墓 (1)、第1号火葬墓 (2)、第2号火葬墓	P L 63 第6号住居跡出土遺物 (2)
P L 32	第3号火葬墓、第4号火葬墓 (1)、第4号火葬墓 (2)	P L 64 第6号住居跡出土遺物 (3)
P L 33	第5号火葬墓 (1)、第5号火葬墓 (2)、調査区外火葬墓	P L 65 第6号住居跡出土遺物 (4)
P L 34	第7号火葬墓 (1)、第7号火葬墓 (2)	P L 66 第6号住居跡出土遺物 (5)
P L 35	第7号火葬墓 (3)、第7号火葬墓 (4)、第7号火葬墓 (5)	P L 67 第6号住居跡出土遺物 (6)
P L 36	第1号溝跡、作業風景 (1)、作業風景 (2)	P L 68 第6号住居跡出土遺物 (7)
P L 37	第7号住居跡出土遺物 (1)	P L 69 第6号住居跡出土遺物 (8)
P L 38	第7号住居跡出土遺物 (2)	P L 70 第6号住居跡出土遺物 (9)、第8号住居跡出土遺物 (1)
P L 39	第7号住居跡出土遺物 (3)	P L 71 第8号住居跡出土遺物 (2)
P L 40	第7号住居跡出土遺物 (4)	P L 72 第8号住居跡出土遺物 (3)
P L 41	第9号住居跡出土遺物 (1)	P L 73 第8号住居跡出土遺物 (4)
P L 42	第9号住居跡出土遺物 (2)	P L 74 第8号住居跡出土遺物 (5)
P L 43	第9号住居跡出土遺物 (3)	P L 75 第8号住居跡出土遺物 (6)、第17号住居跡出土遺物、第18号住居跡出土遺物
P L 44	第12号住居跡出土遺物 (1)	P L 76 第19号住居跡出土遺物
P L 45	第12号住居跡出土遺物 (2)、第13号住居跡出土遺物 (1)	P L 77 第1号火葬墓出土遺物、第2号火葬墓出土遺物、第3号火葬墓出土遺物、第4号火葬墓出土遺物
P L 46	第13号住居跡出土遺物 (2)、第15号住居跡出土遺物	P L 78 第5号火葬墓出土遺物、第6号火葬墓出土遺物、第7号火葬墓出土遺物、調査区外火葬墓出土遺物、第1号溝跡出土遺物
P L 47	第16号住居跡出土遺物 (1)	
P L 48	第16号住居跡出土遺物 (2)	
P L 49	第16号住居跡出土遺物 (3)、第1号堅穴道構出土遺物 (1)	
P L 50	第1号堅穴道構出土遺物 (2)、第16号土坑出土遺物、第16・51号土坑出土遺物、第	

表 目次

表 1	堅穴住居跡・堅穴道構等一覧	96
表 2	土坑一覧	96
表 3	焼土址一覧	97
表 4	土器埋設遺構一覧	98

第1章 経過

1988（昭和63）年

12月から1989（平成元）年4月にかけ本事業に関わる試掘確認調査を実施。八幡脇遺跡部分については1988（昭和63）年12月1日と1989（平成元）年4月14日に調査を行なった。前者は台地基部から先端に向け第8トレンチを設定し調査を行ない、後者は台地基部に北東－南西方向で第33トレンチを設定した。調査の結果、前者では溝状遺構や土坑、そしてピット群が確認された。後者では焼土址が確認された。

1991（平成3）年

10月21日 テントの設営、プレハブの移動を行ない、調査を開始する。切り株の土を排除する。

10月24～31日 方眼測量・水準測量を実施し、基準杭と標高杭の設置。駐車場の砂利敷き。

10月24～11月11日 調査区内の遺構確認を行なう。台地東側に縄文土器の散布が多い。

11月10日 平安時代の火葬墓の調査にあたりお祓いを行なう。

11月12日 遺構調査は土坑・火葬墓・溝・不明遺構から開始する。

11月20日 不明遺構は灰釉陶器壺を用いた火葬墓（第7号火葬墓）であった。第2～4号住居跡調査開始。

12月6日 第1号住居跡で鍛冶関連遺物が出土、第4号住居跡で玉作関連遺物が出土。

12月9日 穴沢義功氏が来訪し、第1号住居跡で確認された鍛冶関連遺物・遺構の調査方法について指導を受ける。

12月10日 第1号住居跡床面に方眼を組んで、鍛冶関連遺物の検出のため土層採集を行なう。

12月11日 第4号住居跡が玉作工房跡であるかの判断をするために数地点の覆土採集・水洗い選別を行う。第6号住居跡の覆土中からもメノウの玉作関連遺物出土。

12月12～17日 第6号住居跡が玉作工房跡であるかの判断をするために覆土採集・水洗い選別を行う。玉作に関わるメノウや片岩の微細な剥片が採集された。

1992（平成4）年

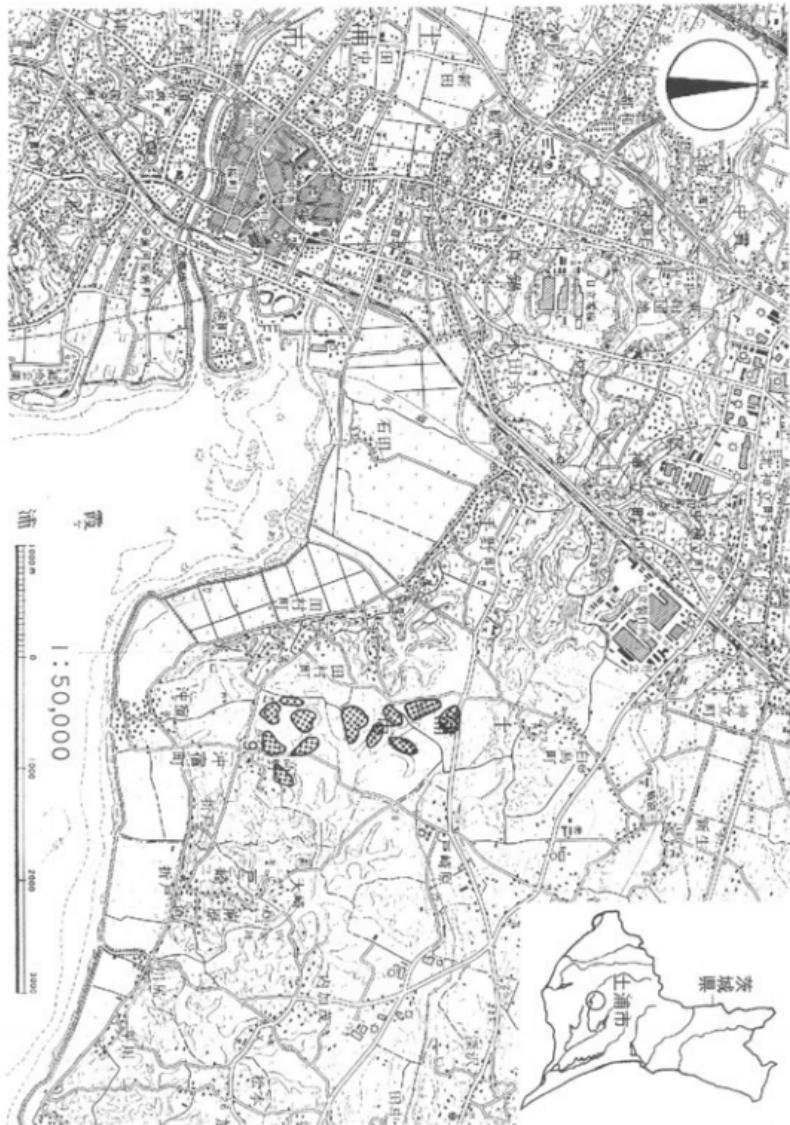
1月6日 第6号住居跡床面に方眼を組んで床近くの土を採集し、玉作関連遺物の検出とその出土状況の検討のために備える。

1月13日 和洋女子大学寺村光晴教授が来訪し玉作関連遺構・遺物調査の指導を受ける。

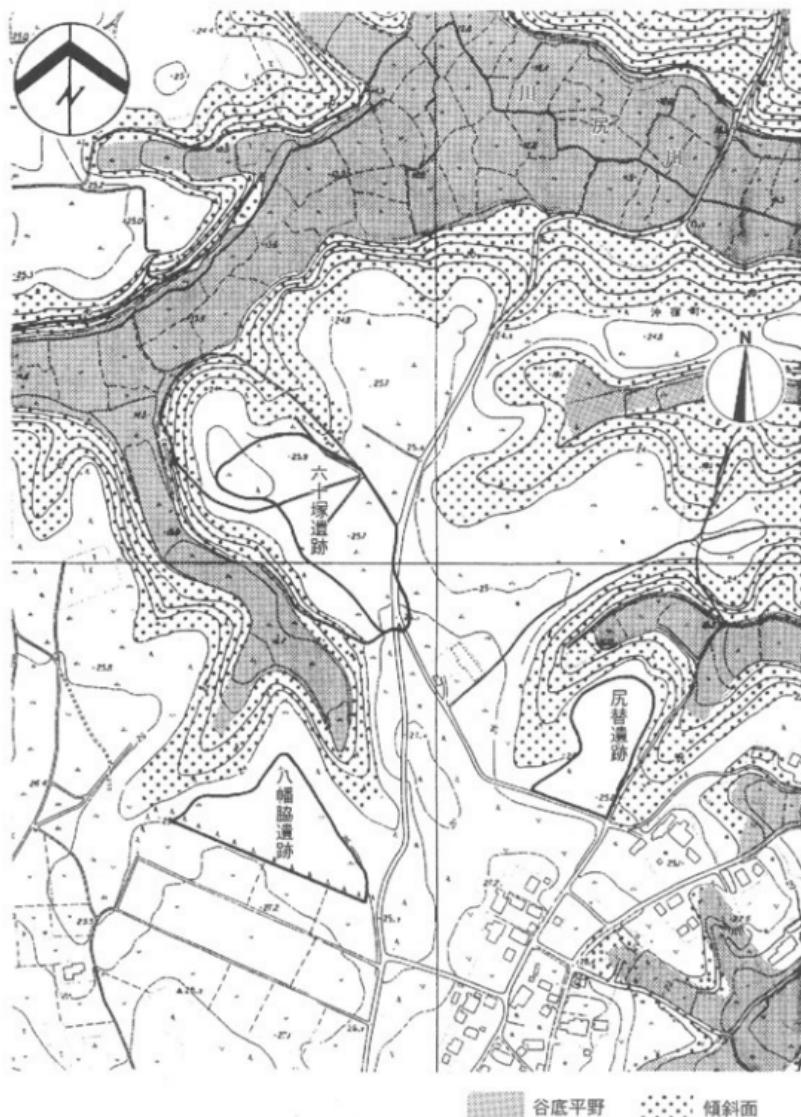
1月14日 鍛冶関連遺構及び玉作関連遺構床面上の水洗い選別開始。

1月23日 航空写真撮影

2月12日 調査終了



第1図 遺跡位置図（国土地理院発行 1/50,000 に加筆）



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

第2章 調査

第1節 地区設定

発掘調査では日本平面直角座標を用い調査地区を設定した。基準杭は調査開始時に20m間隔で設定し、この大グリッドを4m間隔の小グリッドに分割して用いた。先の大グリッドについては特に名称を付してはいない。小グリッドの名称はアルファベットと算用数字を用い、西から東へA・B・C・・・、北から南へ1・2・3・・・とし、各方眼の北西角を「A-1区」のように呼称した。そして、調査区内の「Z-10区」は日本平面直角座標第IV座標系、X=8,800m軸、Y=38,360m軸である。

第2節 基本層序

当遺跡は舌状の台地に占地しており、台地上の平坦部からなる。そのため、台地上の基本的な層位は、上層に黒褐色から暗褐色の表土（耕作土）が約30～40cm程堆積し、その下に関東ローム層が見られる。当遺跡では、表土下の関東ローム層上面が遺構確認面となった。

第3節 遺構確認

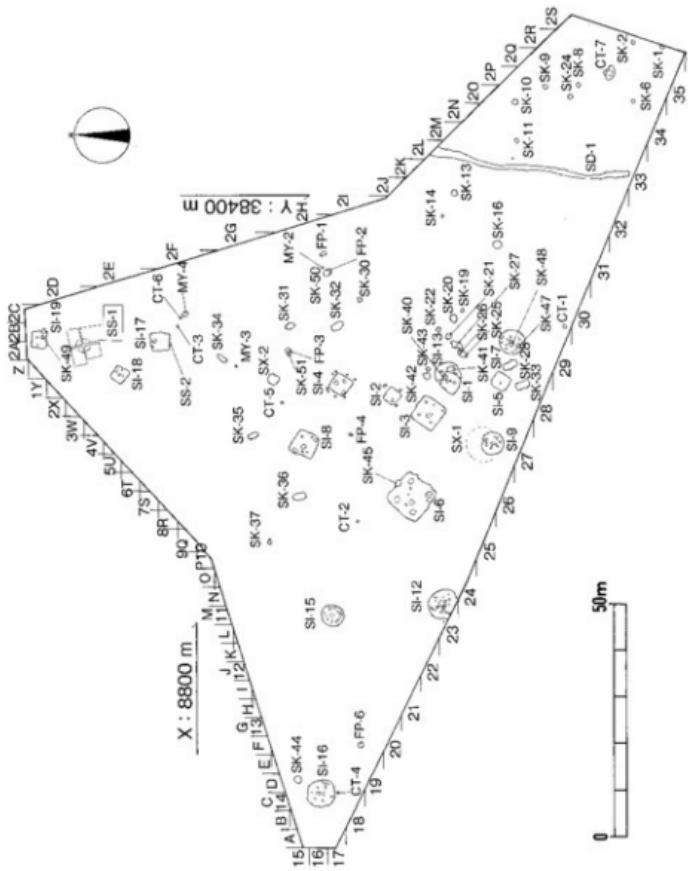
1. 試掘調査及び表土除去（PL3）

1988（昭和63）年12月1日と1989（平成元）年4月14日に重機による試掘調査を実施した。調査トレンチは、舌状台地中央部に東西方向で第33トレンチを設定し、台地基部に北東一南西方向で第8トレンチを設定し遺構確認を行なった。トレンチの規模は、前者が幅は1.5m、長さ58m、深さ30cm程度で、後者が幅2.0m、長さ85m、深さ30cm程度であった。遺構の確認面は関東ローム層上面を基本とした。調査結果、第8トレンチの東半で溝跡（本調査第1号溝跡）やピット群と思われるものが確認され、第33トレンチの西端で焼土址が確認された。

本調査にあたって表土除去は重機を用いて行なった。調査区南側境界近くに列になって残る切り株については、遺構にかかるものについて人力で排除した。

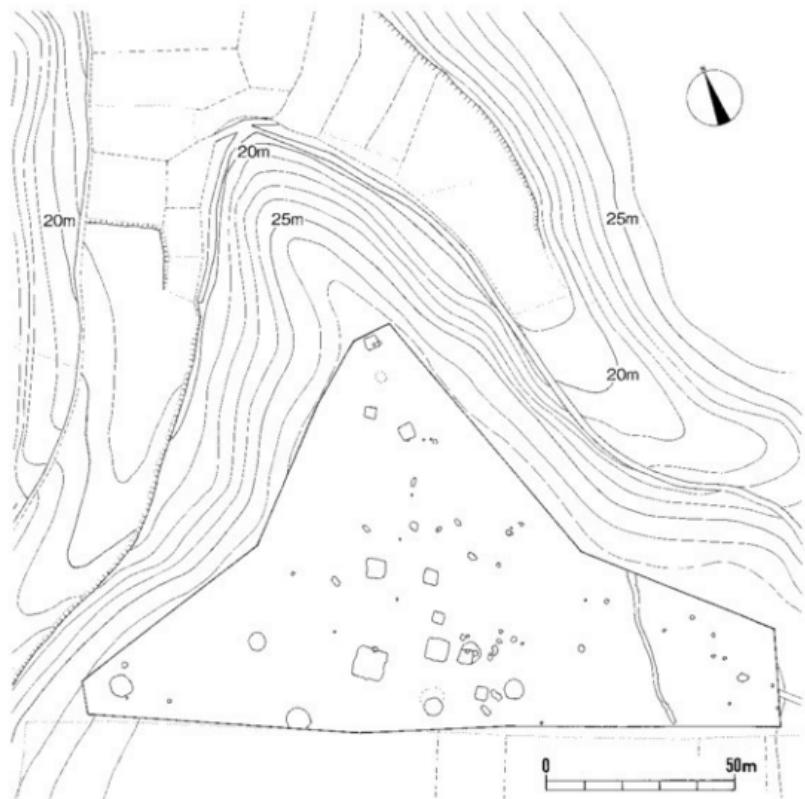
2. 遺構調査

遺跡内の住居跡の調査は、主軸方向を勘案して土層観察用ベルトを十字に設定して、遺物や床



第3図 遺構配置図

面を検出する方法を原則とした。住居跡内の地区設定は十字のベルトを基に4分割し、時計回りに1～4区とした。土坑などについては長軸方向で半裁することを基本とした。床面や底面などの検出作業は覆土の変化や遺物の出土状況に注意して掘り下げを行なった。土層観察は色調、含有物の種類と量、繊り・粘性などを観察し記録した。土層観察ベルトを除去した後、遺物の出土状況を写真や図面で記録し、遺物の取り上げを行なった。その後、カマド、柱穴、貯蔵穴などの付属施設を調査して完掘し、写真や図面などで記録した。写真撮影は、ローリングタワーや脚立を用いて35mmカメラを基本として撮影し、補助的に120mmカメラも用いた。カメラのフィルムは



第4図 調査エリア図

35mmモノクロ・リバーサル、120mmモノクロを使用した。

なお、本遺跡では特徴的な遺構として第1号住居跡の鍛冶工房跡や第4・6・8号住居跡の玉作工房跡が確認された。これらの遺構については、微細な鍛冶関連遺物や玉作関連遺物の出土状況や分布状況を把握するため、床面近くに調査区座標軸に沿った25cm又は50cmの方眼を設定し、その床面上の厚さ3～5cm程の土層を採集・水洗い選別を行った。これらの遺構の調査方法の詳細については以下で述べる。

※鍛冶工房跡の調査方法

鍛冶工房跡と考えられる第1号住居跡では、鍛冶関連遺物の検出にあたって、床面近くに25cm方眼の試料採集区（第1～96区）を設定し、方眼ごとの床面上3cm程度の覆土を採取して水洗い・選別を行なった。水洗いは採集試料を洗面器に入れ、水によって余分な土壤を洗い流し、残った砂鉄・鍛造剥片・粒状滓などの鍛冶関連遺物を乾燥させ、磁石を用いて砂・小石などと分別・採集した。鍛冶関連遺物の選別にあたっては、6種類の網目（①0.4mm、②0.8mm、③1.5mm、④2.0mm、⑤4.0mm、⑥7.0mm）のふるいを用いて種別・大きさごとの選別を行なった。一応の区分としては、①のふるいを通過したものは砂鉄として扱った（その中には微細な鍛造剥片も含まれる）。そして、鍛造剥片・粒状滓・鉄滓については、先の②～⑥の5種類のふるいがけで区別された資料をそれぞれ採集区ごとに集計した。鍛造剥片や鉄滓は重量によって、粒状滓は個数で集計したうえ、それを便宜上の数段階の区分を用いて第70図の鍛冶関連遺物の出土状況図を作成した。また、鍛冶炉や鍛冶関連ピットの覆土の水洗い選別によって得られて微細な鍛冶関連遺物の数量や重量については先の採集区ごとの数量に加えて集計した。

※玉作り工房跡の調査方法

玉作工房跡の中でも第4号住居跡や第6号住居跡では、微細な玉作関連遺物の検出のため、床面近くに50cm方眼（第4号住居跡）・25cm方眼（第6号住居跡）の試料採集区を設定し、方眼ごとの床面上3cm程度の覆土を採集して水洗い・選別を行なった。水洗いは採集試料を目の細かいふるいに入れ、水によって余分な土壤を洗い流し、砥石破片や玉作の材料であるメノウ・緑色凝灰岩・琥珀などの微細破片を分別・採集し、それぞれ採集区ごとに集計し、重量によって示した。そして、それらを便宜上の数段階の区分を用いて玉作関連遺物の出土状況図を作成した。また、第6号住居跡については柱穴・貯蔵穴などの覆土についても上記同様の水洗い・選別を行い、玉作関連遺物を採集し、住居跡内の施設ごとに集計し重量によって図化した。

ちなみに、第8号住居跡でも玉作関連遺物が数多く出土したが、時間的な制約から第4・6号住居跡同様の床面全面の土層の水洗選別は行えず、一部の土層の水洗選別を行った。しかしながら、同住居跡の床面の中でも入り口部から貯蔵穴周辺で微細な玉作関連遺物が目立って出土したので、できるだけ出土位置を図化し、出土状況が理解できるようにした。

第3章 遺構と遺物

遺跡内から検出された遺構は竪穴住居跡・土坑・焼土址・屋外埋設土器・火葬墓などが確認された。これらの遺構は縄文時代・古墳時代そして平安時代にわたるものである。各時代の遺構として、縄文時代では竪穴住居跡6軒や土坑38基、土器埋設遺構3基などが検出されている。古墳時代では竪穴住居跡が9軒、竪穴遺構1基が確認されている。竪穴住居跡のうち玉作工房跡として利用されたものが3軒と鍛冶工房跡として利用されたものが1軒検出され、専門的技術を持った工人集団が手工業生産を営んだ集落跡であることが窺われる。平安時代の遺構としては竪穴住居跡1軒と7基の火葬墓などが検出され、調査エリア一体は墓域として利用されていた様子が窺われる。

第1節 縄文時代

縄文時代の竪穴住居跡は、第7・9・12・13・15・16号住居跡の6軒が検出された。土坑も数多く確認されたが、定形的なものは陥穴のみであった。調査区の南側から西側に沿って分布しており、調査区の北側と東側には見られない。調査区の南側には台地が広がることから住居跡群はエリア外にも展開しているものと推測される。これらの遺構の多くは中期後半期のものである。

1. 竪穴住居跡（SI）

第7号住居跡〔SI-7〕（第5～13図 P L 4・37～40・52・54）

位 置 調査区中央南側の2B-26区付近に位置する。

重複関係 第47号土坑、第48号土坑と重複しており、本遺構が新しい。

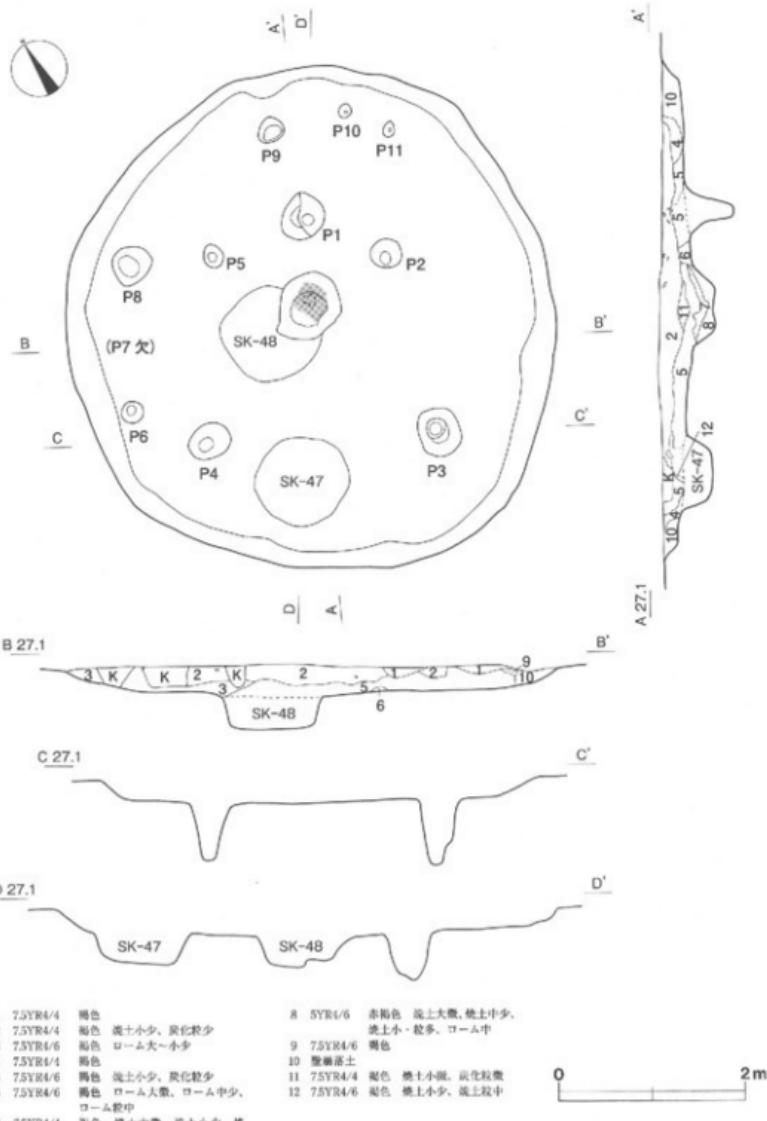
規 模 長径5.40m×短径5.20mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは22～28cmを測る。

壁 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦。特に踏み固められたところはない。中央に向かって緩やかに傾斜している。

炉 長径80cm×短径68cmの楕円形の地床炉。深さ24cm。住居の中央に位置する。炉床は焼けて赤変しており、底面は多少凸凹がみられる。第48号土坑を掘り込んで作られている。

柱 穴 全部で10ヶ所検出された。この内、主柱穴は住居内中央のP 1・P 3・P 4の3本と考えられ、径46～52cmで、深さは54～70cmである。支柱穴はP 2・P 5と考えられ、径26～36cmで、深さは23～41cmである。これらの柱穴によって五角形の柱組の構造が想定される。このほか、壁際にP 6～P 11（P 7は欠）の5本の柱穴が確認されているが、性格は不明である。



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-----|-------------|
| 1 7SYR4/4 | 褐色 | 8 SYR4/6 | 赤褐色 | 泥上大數、桃土中少。 |
| 2 7SYR4/4 | 褐色 | | | 泥上少・粒多。ローム中 |
| 3 7SYR4/6 | 褐色 | 9 7SYR4/6 | 褐色 | |
| 4 7SYR4/4 | 褐色 | 10 登録活土 | | |
| 5 7SYR4/6 | 褐色 | 11 7SYR4/4 | 褐色 | 桃土少數、炭化粒微 |
| 6 7SYR4/6 | 褐色 | | | |
| 7 7SYR4/4 | 褐色 | 12 7SYR4/4 | 褐色 | 桃土少、泥土中少。 |
| | 燒土大數、泥土少、燒 | | | |
| | 土粒中。ローム中少 | | | |

第5図 第7号住居跡

第7号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
径 (cm)	52	36	52	46	26	24	欠	44	30	16	18
深さ (cm)	54	23	70	60	41	19	欠	23	16	5	8

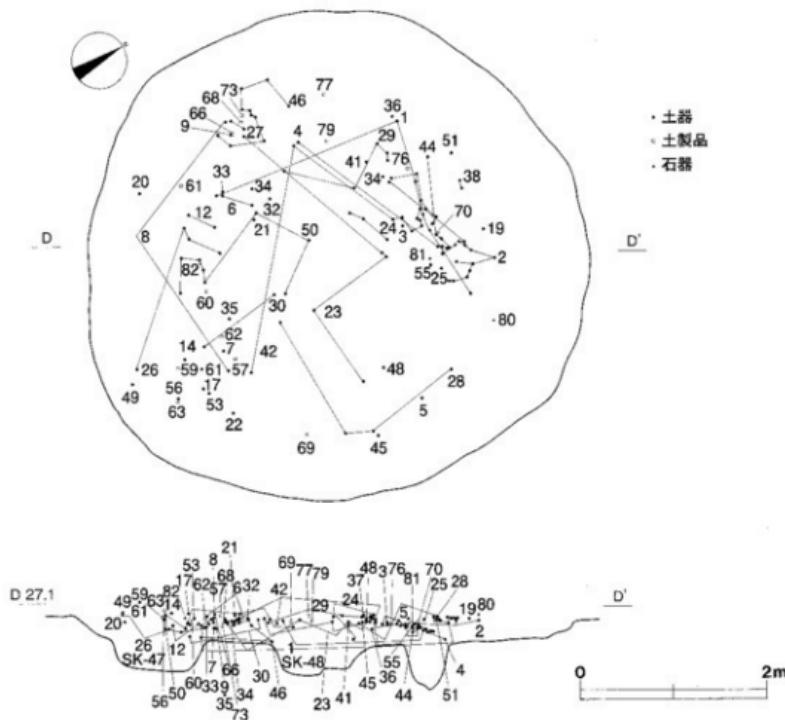
覆 土 覆土は12層から構成され、第2層には焼上・炭化粒が含まれ、土層の多くを占めている。第3層にはロームブロックやローム粒が含まれる。

遺物出土状況 多量の遺物がほぼ第2層中から出土している。これらの遺物は住居廃絶後の凹地に投棄されたものと考えられる。完形品は1点も出土せず、口径が復元できたものが8点みられた。土器の接合関係も見られ、第9・13号住居跡出土土器と接合したものがある。ごく小片であったため図示はしなかったが、第9号住居跡出土土器とは3点接合し、第13号住居跡出土土器とは1点接合した。この接合関係のある第13号住居跡出土土器は、同住居跡の炉内から小破片が出土したが、焼けてはいない。本住居の使用時に直接伴う遺物は認められない。

出土遺物 出土遺物は深鉢形土器がほとんどで、そのほかは6・11・41の鉢形土器が若干みられる程度である。深鉢形土器は器形がキャリバー形を呈するものが大半で、26~28のようなキャリバー形の退化したものや、2のような口縁が直立して立ち上がるるものも小数みられる。文様の特徴は、大多数のものが口唇部に幅の狭い無文帯を持つ。そして、1・6・7・9・11~14・26~28・42・44・50のように断面三角形の微隆起線によって円形・U字・逆U字状などの区画文が描かれるものや、10・30などの隆起線による区画文が描かれるものがある。また、4・19~22・31~35のように沈線によって区画文が描かれるものが見られる。肩部から底部の器形は特徴的で、42・44のように肩部下位で急激にすぼまるものが見られ、底部は42・44・46のように突出するものがみられ、肩径に比べかなり底径が小さい。

1は肩上半が大きく膨らみ、中位がすぼまる器形を呈している。文様帶も器形に呼応するよう二分され上半には抱球文が描かれる。4は4単位の小波状線で沈線によって区画されたS字状の渦巻文が横位に展開している。22は口縁部無文帯が波頂部に向かい狭くなり、円形区画文が波頂部下で展開しその末端は閉じている。12~18は口唇部に無文帯を持つものである。4・19~22・32は繩文地文の上に沈線により区画文を描き、その中を磨り消す。31・33~35は区画内に繩文が施文され、31・33・34は沈線による区画文施文後に繩文を充填している。26~28は同一個体と考えられる。10・30には2本組の隆起線が見られる。19には赤色顔料が塗られている。24には炭化物が著しく付着する。40は突起であり、口縁部に付いていたものと思われる。41は両耳鉢形土器の把手である。42~56は底部である。

土製品として土器片錐が17点(57~73)、有孔円盤が2点(74・75)、土製円盤が4点(76~79)出土している。土器片錐のほとんどのものは長軸方向の両端に切れ目が一对施されるが、72は平行して2カ所施されている。大きさは57~65などの小型のものから、66~73などの大型のも

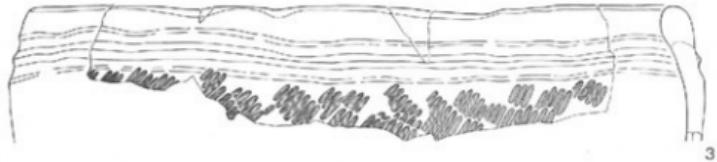
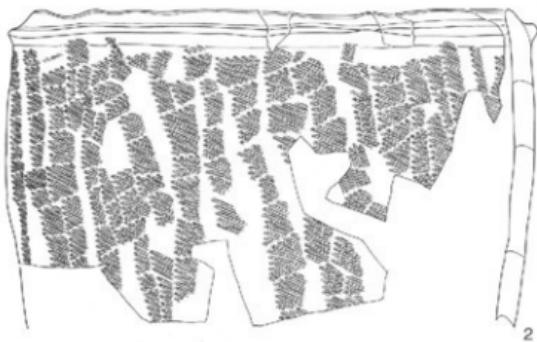
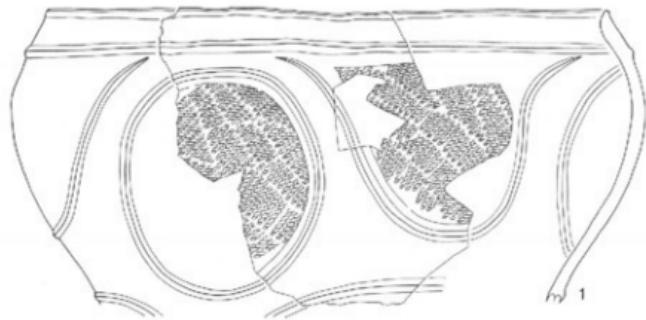


第6図 第7号住居跡遺物出土状況

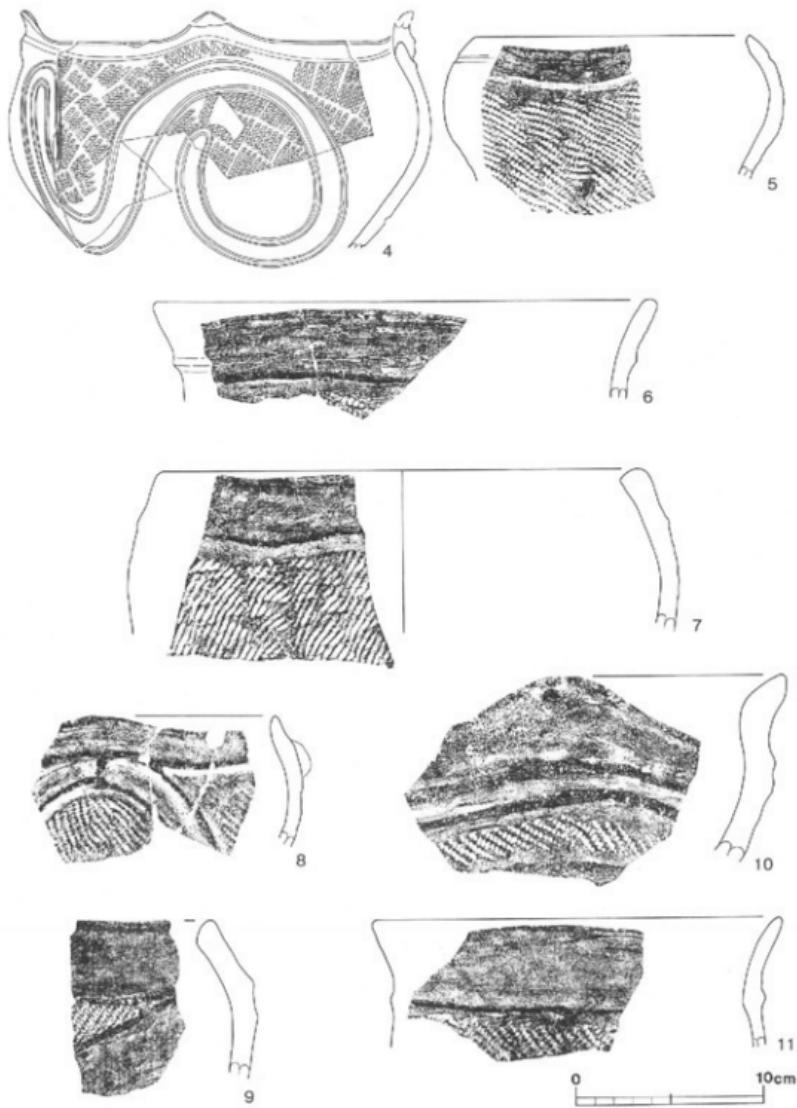
のが見られる。特に68などは大きく、長軸の長さが10cmを越える。74・75は有孔円盤の破片で内外の縫刃が接されている。

石器は80が敲き石、81は磨石類。82は磨製石斧である。82は定角式であり、刃部を欠損している。柄の部分が残存する。83は縦長剥片の腹面の片方の側縁に2次調整が加えられる。また、背面の先端にも調整が加えられ刃部を作り出している。このほかに、質の悪いチャート剥片が2点出土している。

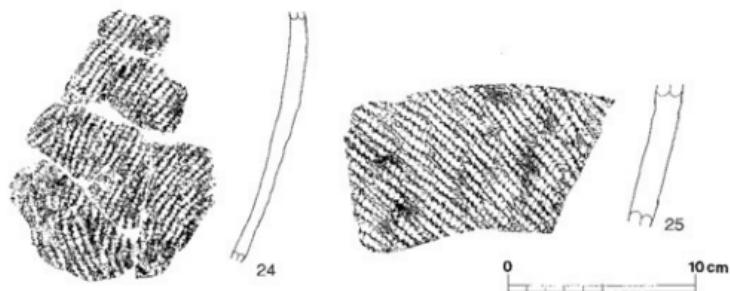
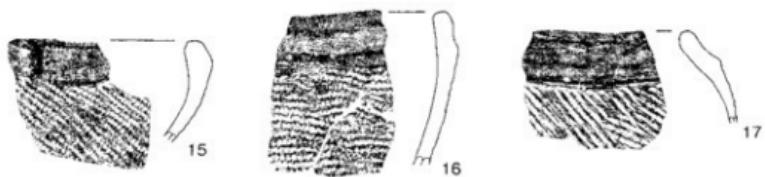
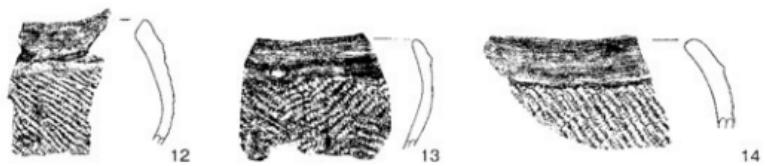
所見 本住居跡出土土器には、第9・13号住居跡出土土器と接合するものがあり、遺構間の関連が窺われる。本住居跡の時期については、出土遺物に中期後半の加曾利E3式や加曾利E4式土器が混在して見られるが、後者が主体となることから加曾利E4式期の所産と考えられる。



第7図 第7号住居跡出土遺物（1）

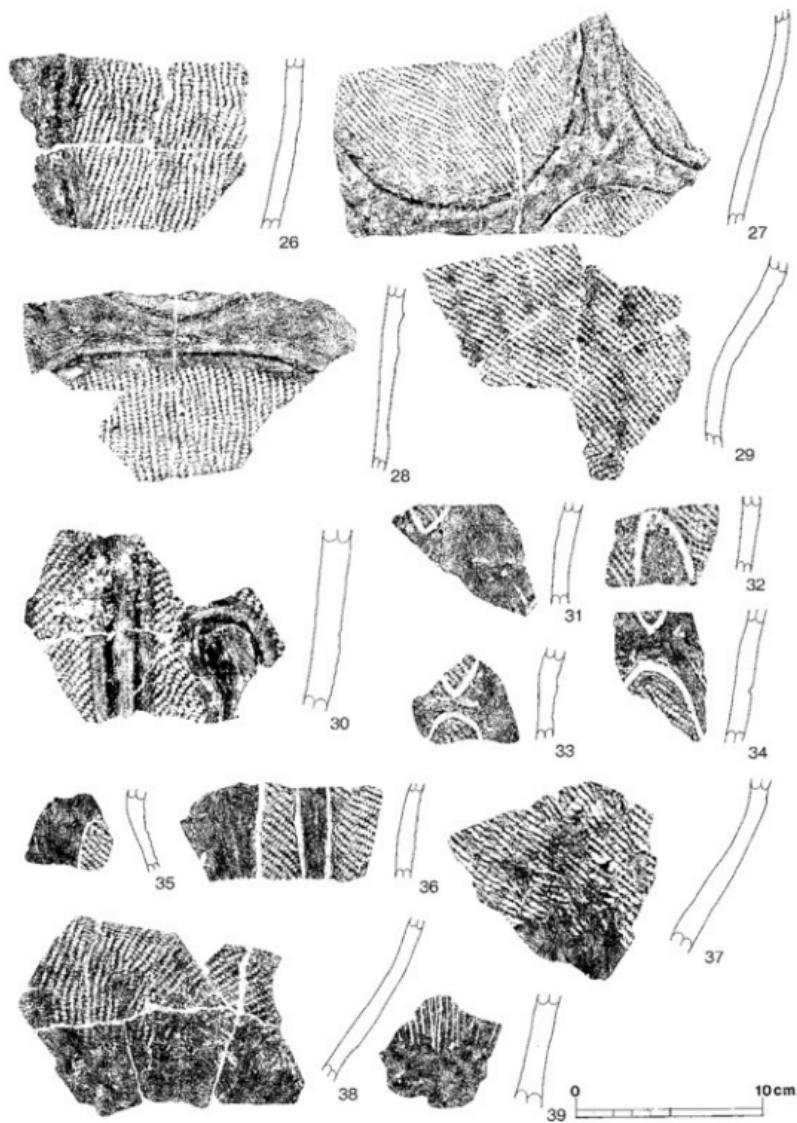


第8図 第7号住居跡出土遺物（2）



0 10 cm

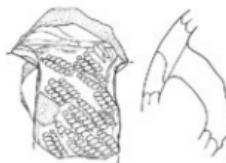
第9図 第7号住居跡出土遺物（3）



第10図 第7号住居跡出土遺物（4）



40



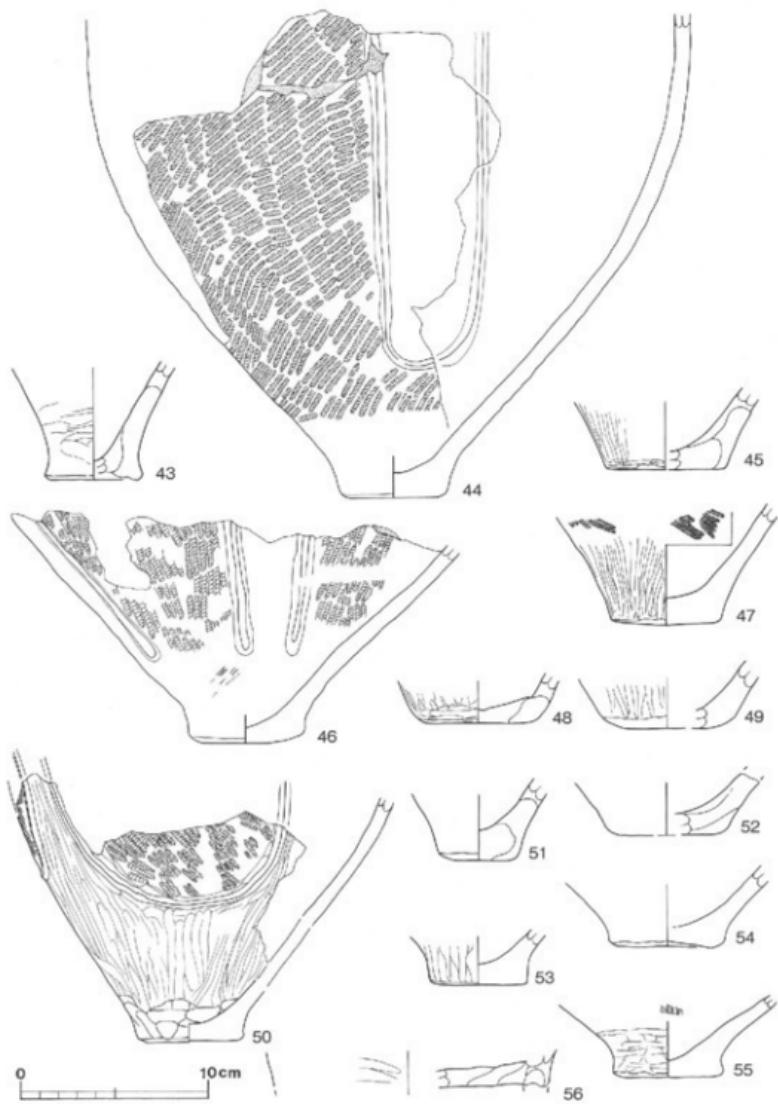
41



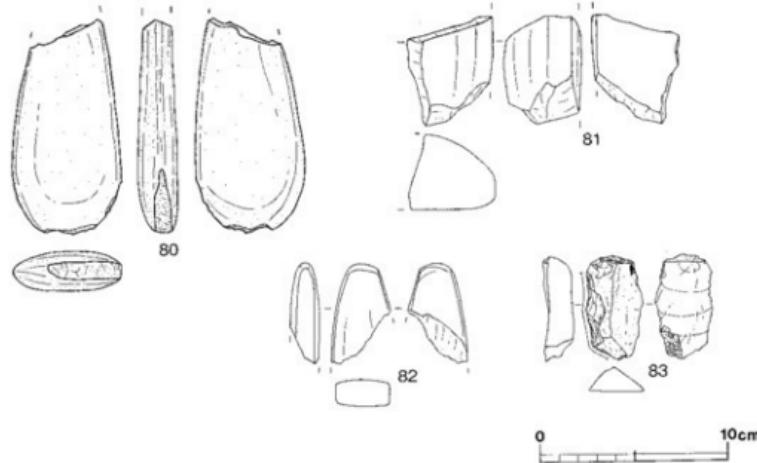
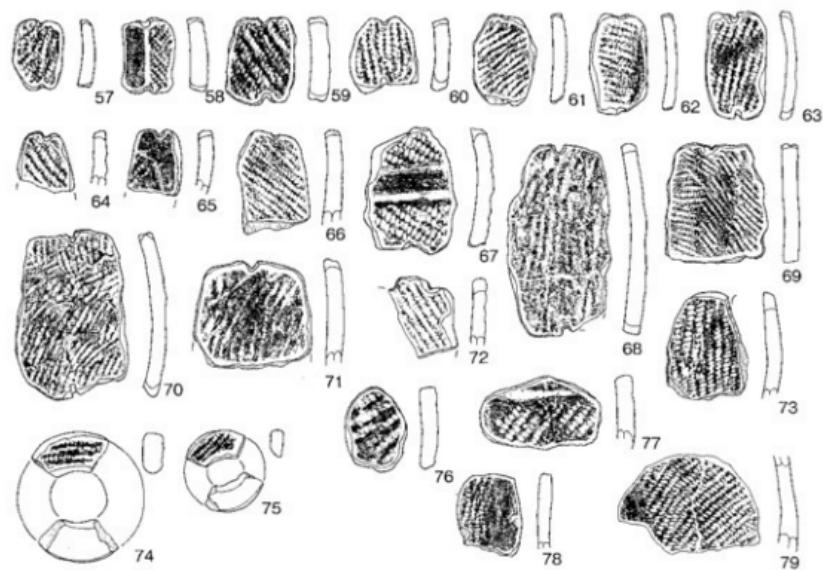
42



第11図 第7号住居跡出土遺物（5）



第12図 第7号住居跡出土遺物（6）



第13図 第7号住居跡出土遺物（7）

第7号住居跡出土土器

図版No.	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	漆鉢	口縁	A:(29.8) C:(15.9)	にぶい橙	石英・長石・ 金雲母○	平縁。キャリバー形を呈する。口縁部に微隆起 部により無文帯や円形・「U」字状区画文が描 かれる。区画内にRL縦文が施文。	No118
2	漆鉢	口縁～胴	A:(26.0) C:(20.0)	にぶい橙	石英・長石・ 砂粒△・赤 色粒△	平縁。胴部から口縁部にかけ直立する。口縁下 に1条の隆起線があり受け口状を呈する。胴部 には纏かなLR縦文と弱い輪廻転文。	No113
3	漆鉢	口縁	A:(34.6) C:(7.3)	橙	石英・長石 ○・雲母△	平縁。寸胴の形容形。口縁下に上上がりなぞられ る1条の微隆起線が盛り受け口状を呈する。以下はR I 縞文が全面 に輪廻転文される。	No124
4	漆鉢	口縁	A:(21.0) C:(12.6)	にぶい橙	長石・石英 ○・金雲母 △	4半径の波状縁でキャリバー形を呈する。口縁 部に無文帯を設け。地文RL縞文。沈離で「S」 字状区画文が描き、区画内は磨り消す。	No119
5	漆鉢	口縁	A:(14.7) C:(7.7)	淡黄	石英・長石・ 赤色粒△	平縁。キャリバー形を呈する。口縁下に1条の 沈離が盛り無文帯を作成。以下はLR縞文が報道 化物文付着	No120
6	鉢	口縁	A:(27.0) C:(5.4)	にぶい橙	石英・長石 ○	やや外傾する平縁の口縁部。1条の微隆起線が 盛り無文帯を作出し。以下にはLR縞文が施文さ れる。無文部は押されている。	No121
7	漆鉢	口縁	A:(25.5) C:(8.7)	にぶい橙	石英・長石 ○・赤色粒 △	平縁。キャリバー形を呈する。口縁部は肥厚し、 1条の微隆起線が盛り無文帯を作出する。胴部 はR I 縞文と弱い輪廻転文。	Noなし
11	鉢	口縁	A:(22.0) C:(6.9)	にぶい黄橙	石英・長石・ 雲母・赤色 粒△	やや外傾する平縁の口縁部。1条の微隆起線が 盛り輪の広い無文帯を作出し、以下にはLR縞文 が施文される。	No122
42	漆鉢	胴～底	B:(5.2) C:(17.7)	橙	長石・石英 ○・雲母○	底部が小さく、胴部が大きく聞く不安定な器形。 微隆起線による「U」字状区画文が5半径描文さ れる。区画内のみにRL縞文が施文。	No116 内面に黒色の 帯通る
44	漆鉢	胴～底	B:(5.7) C:(25.7)	明赤褐	石英・長石・ 金雲母○	底部が小さく、胴部が大きく聞く不安定な器形。 微隆起線による「U」字状区画文が施され、区 画外は無文で区画内はRL縞文施文。	No112
46	漆鉢	胴～底	B:(6.1) C:(10.1)	明赤褐	石英・長石 ○・雲母・ 赤色粒△	底部が小さく、胴部が大きくなる不安定な器形。 平行する微隆起線文と4半径底下。隆起線内は無 文となるほか、RL縞文施文。	No117
50	漆鉢	胴～底	B:(5.6) C:(12.5)	橙	石英・長石 △	底部から胴部への傾きは弱い。微隆起線による 「U」字状区画文が4半径施文され、区画内に 簡単LR縞文が施文。ハラミガキ。	No114 炭化物付着 内面煤付着

図版No.	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
43	漆鉢	底	B:(5.2) C:(6.3)	明赤褐	石英・長石 ○	無文。底面剥離。外側ナデ。	No135
45	漆鉢	底	B:(6.3) C:(4.4)	橙	石英・長石 △	無文。外側丁寧なミガキ。	No136
47	漆鉢	底	B:(5.8) C:(5.8)	橙	石英・長石 ○	単節LR。底面凸レンズ状。外側丁寧なミガキ。	No128
48	漆鉢	底	B:(6.2) C:(2.7)	橙	石英・砂粒 △	無文。外側丁寧なミガキ。	No131
49	漆鉢	底	B:(7.1) C:(2.7)	橙	石英・長石 ○・金雲母 ○	無文。底部無経済れ。	No133
51	漆鉢	底	B:(4.4) C:(3.6)	明褐色	石英・長石 ○	無文。底部剥離。	No137
52	漆鉢	底	B:(5.4) C:(5.2)	明赤褐	石英・長石・ 雲母○	無文。内面に赤色釉料残る。	No134
53	漆鉢	底	B:(5.3) C:(3.1)	橙	石英・長石 ○・砂粒○・ 赤色粒△	無文。外側ミガキ。	No130
54	漆鉢	底	B:(6.3) C:(3.5)	にぶい橙	石英・長石 ○・砂粒○	無文。やや上げ底。黒斑。	No138
55	漆鉢	底	B:(5.9) C:(4.0)	にぶい橙	石英・長石 ○・本色橙 △	単節RL。大きいくぐく。	No127
56	漆鉢	底	B:(14.2) C:(2.0)	にぶい黄橙	石英・長石・ 雲母○	無文。底径が大きい。上下に剥離痕あり。	No132

第7号住居跡出土土製品

図版No	種類	出土地点	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	周縁整形	備考
57	土器片鱗	SI-7	完形	3.8×2.65	0.75	9.0	全周磨り	切り目1対
58	土器片鱗	SI-7	完形	4.05×2.8	0.95	15.0	全周磨り	切り目1対
59	土器片鱗	SI-7	完形	4.65×3.6	0.95	23.0	全周磨り	切り目1対
60	土器片鱗	SI-7	完形	3.95×3.65	0.85	15.0	一部磨り	切り目1対
61	土器片鱗	SI-7	完形	4.85×3.4	1.6	75	全周磨り	切り目1対
62	土器片鱗	SI-7	完形	5.4×3.1	0.65	14.0	全周磨り	切り目1対
63	土器片鱗	SI-7	完形	5.75×3.25	0.6	17.0	全周磨り	切り目1対
64	土器片鱗	SI-7	2/3	3.15×2.95	0.8	9.0	全周磨り	切り目1ヶ
65	土器片鱗	SI-7	2/3	3.45×2.8	0.8	9.0	全周磨り	切り目1ヶ
66	土器片鱗	SI-7	一部欠	5.3×3.65	0.95	26.0	一部磨り	切り目1ヶ
67	土器片鱗	SI-7	完形	6.7×4.85	0.9	38.0	一部磨り	切り目上端1ヶ下端2ヶ
68	土器片鱗	SI-7	完形	10.2×5.6	0.95	61.0	一部磨り	切り目1対
69	土器片鱗	SI-7	3/4	6.4×5.45	0.85	42.0	一部磨り	切り目1ヶ
70	土器片鱗	SI-7	完形	8.8×6.0	0.85	69.0	一部磨り	切り目1対
71	土器片鱗	SI-7	1/2	5.8×6.3	0.85	39.0	全周磨り	切り目1ヶ
72	土器片鱗	SI-7	1/2	4.25×3.3	0.75	20.0	全周磨り	切り目上端2ヶ
73	土器片鱗	SI-7	1/4	5.8×4.4	0.8	24.0	全周磨り	切り目1ヶ
74	有孔円盤	SI-7	一部	2.75×3.05	1.1	10.0	全周磨り	裏面より穿孔→磨り
75	有孔円盤	SI-7	1/4	1.8×2.8	0.65	4.0	全周磨り	裏面より穿孔→磨り
76	円盤	SI-7	完形	4.5×3.3	0.85	13.0	全周磨り	楕円形
77	円盤	SI-7	1/2	3.3×6.5	0.95	24.0	打削	円形
78	円盤	SI-7	一部欠	4.3×3.5	0.7	13.1	全周磨り	楕円形
79	円盤	SI-7	1/2	5.2×7.6	0.9	40.1	打削	円形

第7号住居跡出土石器

図版No	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
80	覆土	敲き石	(11.4)	5.8	2.1	(200.4)	砂岩	石17 滑部折損
81	覆土	磨石類	(4.8)	(4.6)	4.0	(117.6)	砂岩	石18 破損後も使用
82	覆土	漆製石斧	(5.4)	(2.9)	1.5	(31.5)	漆レイ君	石19 定角式 滑部破片
83	覆土	剥片	5.6	3.0	1.3	25.6	チャート	石20 質の悪い素材

第9号住居跡〔SI-9〕(第14~20図 P L 5・41~43・52)

位置 調査区中央南側のV-25・26付近に位置する。

重複関係 本住居跡の北側に展開する第1号竪穴遺構と重複し、出土遺物から本遺構が新しい可能性がある。

規模 長径4.94m×短径4.56mの不整円形を呈し、確認面からの深さは8~28cmを測る。

壁 外傾して立ち上がる。

床 やや凸凹があるが全体的に平坦である。特に踏み固められたところはない。

炉 2ヶ所確認され、炉1は長径64cm×短径40cmの楕円形で、住居跡のほぼ中央に位置する。深さ20cm。炉床は焼けて赤変し凸凹がみられる。炉2は長径56cm×短径28cmで一部括れた楕円形を呈する。深さは6~10cmで、炉床は一部焼けて赤変している。位置は住居跡の北方壁際にある。

柱 穴 全部で10ヵ所確認される。これらの柱穴の中で比較的深く、主柱穴に相当するものはP1・P2・P4・P6・P7の5本であり、径28~48cm、深さ40~62cmである。支柱穴はP3・P5・P8・P9・P10の5本で径22~36cm、深さ10~26cmを測る。

第9号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
径(cm)	42	28	30	48	28	30	38	36	34	22
深さ(cm)	56	62	18	58	25	42	40	16	26	10

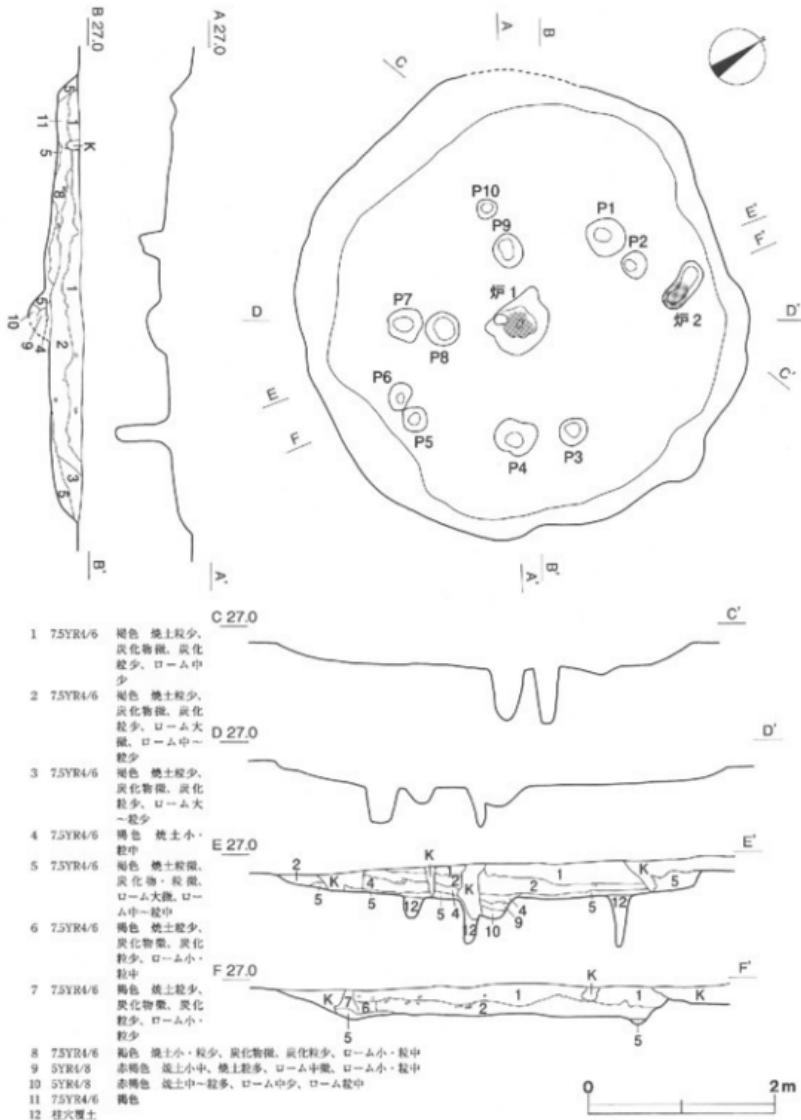
覆 土 覆土は12層から構成されている。遺物は覆土上層からのものが多い。

遺物出土状況 多量の遺物が出土した。ほとんどが床面から若干浮いた状態で出土し、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。完形品は小型深鉢1点のみで、他は破片で口徑を復元できたものが10点みられた。1の土器は住居跡内南側の狭い範囲で複数個体が接合している。7・27は住居跡内北側を中心に南北方向で接合している。39は第1号竪穴遺構出土土器と接合関係を持つが、本住居跡出土土器片が大半を占めている。住居の使用時に直接伴う遺物はみられない。第7号住居跡・第1号竪穴遺構出土土器と接合関係にある。

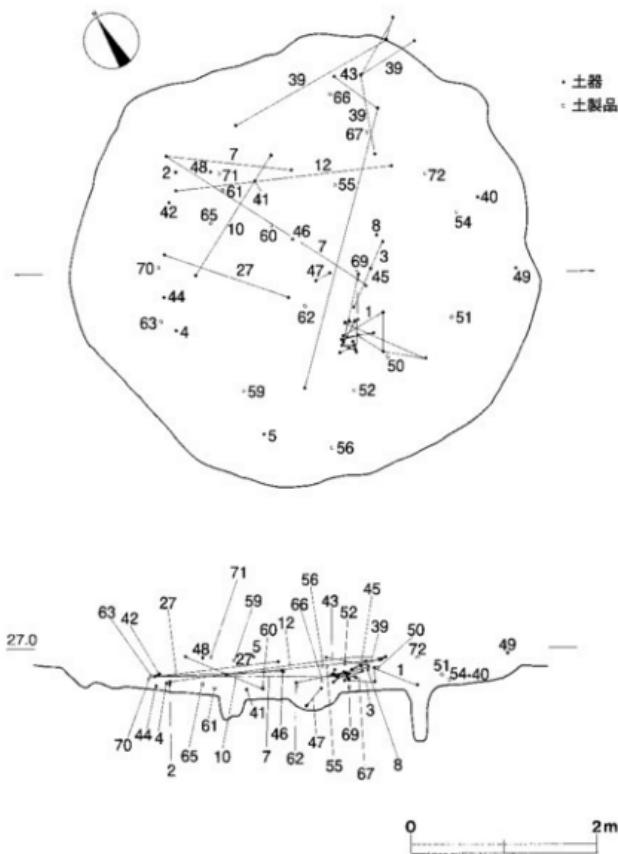
出土遺物 出土土器の大半は深鉢形土器が占め、4のような小型のものもみられる。その特徴は、1のようにキャリバー形の退化したような器形を呈するものも見られるが、3・4などのように頸部の括れが見られないものも存在する。底部は44~49などのように小さく突出したものが目立ち、外側が磨かれるものが多い。文様の特徴は、大多数が口唇部に幅の狭い無文帯を持つ。また、1・26のように断面三角形の微隆起線により円形・U字・逆U字状の区画文が描かれるものや、37のように沈線によって区画文が描かれるもの、27のように隆帯が貼付されるものも見られる。このほか、24のように特殊な器形を呈するものも見られる。

1は第7号住居跡1と同様の抱球文である。2の口縁部文様帶中、単位文となる「X」字状に盛り上がる突起は、1の口縁部文様帶と胴部文様帶を繋ぐ突起に類似する。12・13にも突起が付き、口縁部が緩い波状線となる。15・16は沈線や凹線により、口縁部の無文帯が作出される。18の口縁部には円形・楕円形の区画文による文様帶がみられる。21~23・28は2本組の隆起線で区画文を描き、20・26は微隆起線で区画文を描く。25の隆起線は断面半円形である。27は口縁部下に隆帯文が意匠的に貼り付けられ、大木式的な要素が窺える。39は垂下する条線文間に縄文が施文される例である。21・23・26・28~30・34の胎土には石英・長石とともに金雲母が含まれる。

土製品として土器片錐が20点(50~70)、有孔円盤が1点(72)、土製円盤が2点(71・73)出土している。土器片錐は50~62の小型のものと、63~70の大型のものがある。68は長軸9.65cmで最も大きい。67は土器の口縁部を利用している。本遺構で出土した土器片錐は縦長のものがほとんどであるが、53のみ横長のものとなる。有孔円盤とした72は、周縁は磨られており、裏面の中心に回転運動により磨られた凹みが見られる。土製円盤とした71は、周縁は磨られていないが、



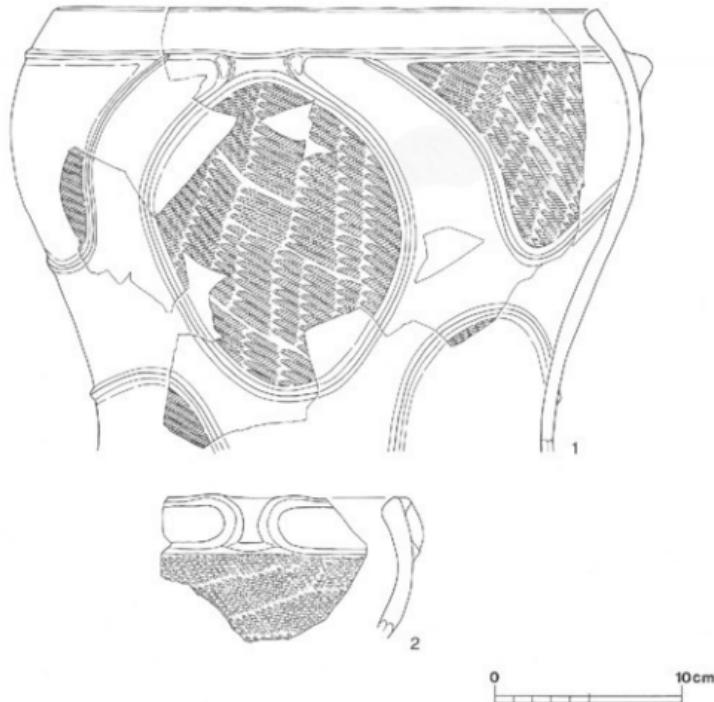
第14図 第9号住居跡



第15図 第9号住居跡遺物出土状況

73は周縁が磨かれている。

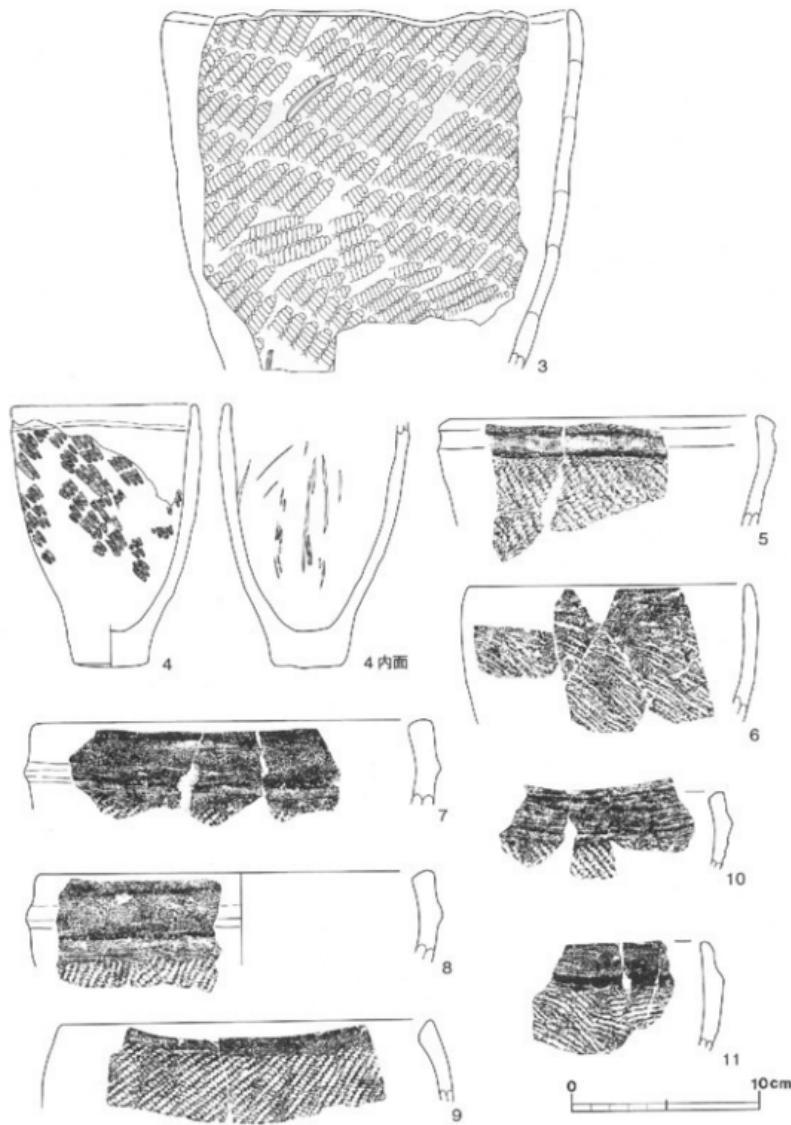
所 見 本住居跡の柱穴は2個一対になっており、住居の建て替えがあったものと考えられる。炉2についてはその確認された位置から、第1号竪穴造構にかかる可能性が考えられる。また、本住居跡出土土器には、第7号住居跡及び第1号竪穴造構と接合したものがあり、前者の状況は造構間の関連が窺われ、後者の状況は混入の可能性が考えられる。本住居跡の時期については、出土遺物に中期後半の加曾利E3式や加曾利E4式土器が混在して見られるが、後者が主体を占めることから、加曾利E4式期の所産と考えられる。



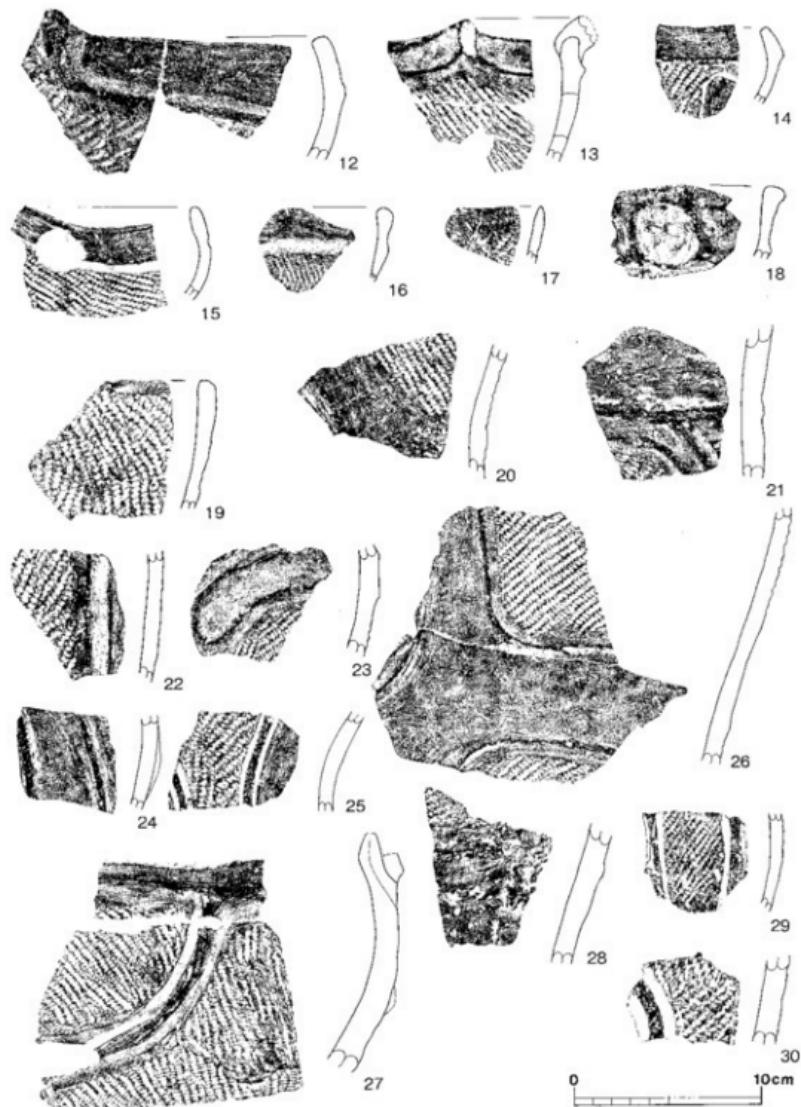
第16図 第9号住居跡出土遺物（1）

第9号住居跡出土土器

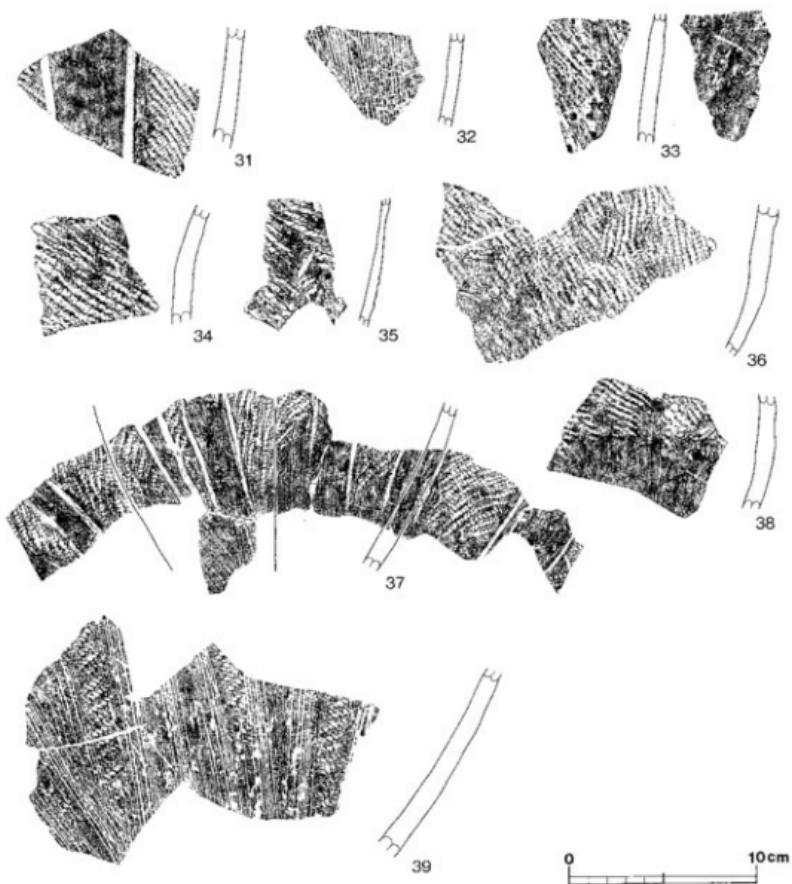
回収No	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁～胴	A : (28.8) C : (23.5)	浅黄褐	石英・長石 ○、金雲母 △	平縁。縦いキヤリバ一形を呈する。微縫起線による横凹部に無文帯や円形・「U」状区画文を描く。同区画内にはLR縦文が施文される。	No318 灰化物付着
2	深鉢	口縁	A : (29.0) C : (7.5)	橙	石英・長石、 金雲母○	平縁の口縁部で口唇部に微縫起線による横凹区画文が作出される。以下にはLR縦文が施文される。	No320
3	深鉢	口縁～胴	A : (21.2) C : (19.2)	橙	石英・長石、 雲母○	平縁。胴部から口縁部にかけ直立する。全面にためのLR縦文が施文。内面は丁寧にナデられる。土器断面に繪模板が観察される。	No319 灰化物付着
4	深鉢	口縁～底	A : (9.8) B : 40 C : 13.9	にぶい橙	石英・長石 ○、雲母△、 赤色粒	平縁の小底土器。剖面から口縁部にかけ直立する。口唇部下に沈没状の段差が温り、無文帯作成。以下にはLR縦文が織糸板施文。底部厚手。	No147 振口縁の可能性 もあり
5	深鉢	口縁	A : (16.5) C : (5.8)	にぶい黄橙	石英・長石 △	やや外傾する平縁の口縁部。口唇部下に凹窓が1条めぐる。以下にはLR縦文が織糸板施文される。	No164
6	深鉢	口縁	A : (15.0) C : (7.3)	黄灰	石英・長石 ○、砂粒○	平縁。胴部から口縁部にかけ直立する。全面にLI縦文が織糸板施文する。口唇部下は無文帯となる。内面は充て溝壁がなされる。	Noなし 灰化物付着



第17図 第9号住居跡出土遺物（2）

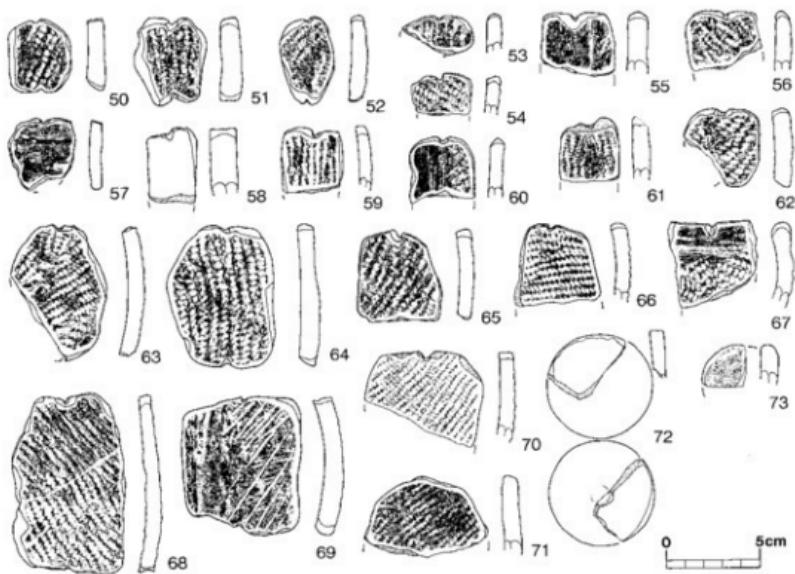
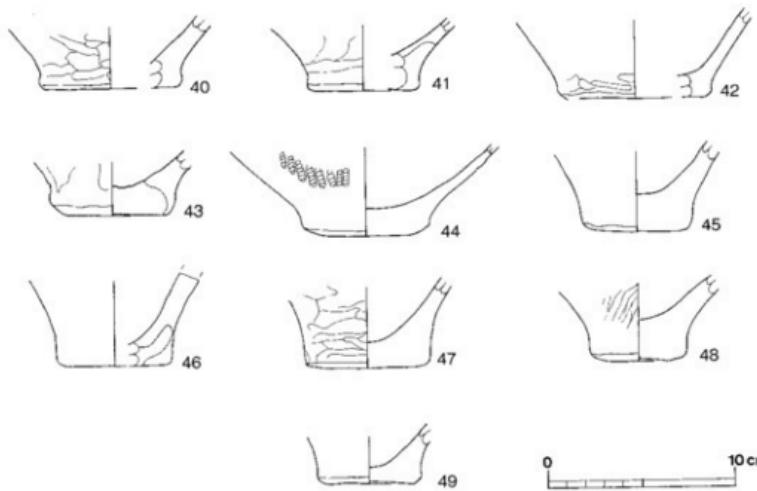


第18図 第9号住居跡出土遺物（3）



第19図 第9号住居跡出土遺物（4）

試験No	番種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
7	深鉢	口縁	A : (21.4) C : (4.9)	淡黄	石英・長石 ○、金雲母 △	平縁。やや内溝する口縁部を持つ。口唇部下に 微隆起部により無文帯を作出し、以下はRL綱文 が輻射状施文。	No165 炭化物付着
8	深鉢	口縁	A : (21.3) C : (4.8)	淡黄	石英・長石 ○、金雲母 △	平縁。やや内溝する口縁部を持つ。口唇部下に 微隆起部により無文帯を作出し、以下はRL綱文 が輻射状施文。	No171 No165と同一個 体
9	深鉢	口縁	A : (19.7) C : (4.4)	棕	石英・長石 ○、金雲母○	平縁。やや内溝する口縁部を持つ。口唇部下に 狭い無文帯を作出。以下はRL綱文軸施文。口唇 部は肥厚する。	No169



第20図 第9号住居跡出土遺物（5）

図版No	岩種	部位	法蓋 (cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
40	深鉢	底	B : (7.0) C : (3.3)	にぶい黄橙	白色粒○、赤色粒△	無文。外面ナゲ。	No183
41	深鉢	底	B : (6.0) C : (3.4)	橙	石英、長石△	無文。外面・底面削りの後ミガキ。	No181
42	深鉢	底	B : (7.3) C : (4.2)	にぶい赤褐	石英・長石・黃色粒△	無文。底面に筋状の注痕。	No184 赤色顔料付着
43	深鉢	底	B : (5.5) C : (2.85)	明赤褐	石英・長石○	無文。	No180 被熱赤化
44	鉢?	底	B : 6.8 C : (4.6)	黒褐	石英・長石・ 雲母○	單節RL。底面凸レンズ状。SI-7-24と同一個体か。 底部から大きく外側する。	No175 炭化物付着。
45	深鉢	底	B : 5.9 C : (4.2)	淡黄橙	石英・長石・ 砂粒○、黑色片△	無文。外外面がれる。	No177
46	深鉢	底	B : (6.2) C : (4.6)	にぶい橙	石英・長石・ 金丹石○	無文。底面擦れる。	No182
47	深鉢	底	B : 4.3 C : (4.2)	橙	石英・長石○	無文。底面凸レンズ状。外表面・底面は磨かれる。	No176 炭化物付着
48	深鉢	底	B : 5.2 C : (3.7)	にぶい橙	石英・長石○	無文。やや上打抜。底面に灰付着。	No178
49	深鉢	底	B : 5.5 C : (2.5)	橙	石英・長石○、黑色片△	無文。上げ底。器面削離。	No179

9号住居跡出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	周縁整形	備考
50	土器片鉢	SI-9	完形	3.9×3.4	1.0	180	全周磨り	切り目1対
51	土器片鉢	SI-9	完形	4.7×3.75	1.15	240	一部磨り	切り目1対
52	土器片鉢	SI-9	完形	4.7×2.75	0.9	130	全周磨り	切り目1対
53	土器片鉢	SI-9	一部欠	2.1×3.7	0.8	50	全周磨り	切り目1ヶ
54	土器片鉢	SI-9	1/2	2.2×3.25	0.75	80	全周磨り	切り目1ヶ
55	土器片鉢	SI-9	2/3	3.4×3.95	1.1	160	全周磨り	切り目1ヶ
56	土器片鉢	SI-9	2/3	3.15×4.0	0.8	120	一部磨り	切り目1ヶ
57	土器片鉢	SI-9	一部欠	3.75×3.6	0.7	120	一部磨り	切り目1ヶ
58	土器片鉢	SI-9	一部欠	4.0×2.7	1.45	220	全周磨り	切り目1ヶ
59	土器片鉢	SI-9	一部欠	3.5×3.3	0.7	120	全周磨り	切り目1ヶ
60	土器片鉢	SI-9	2/3	3.2×3.5	0.75	120	全周磨り	切り目1ヶ
61	土器片鉢	SI-9	2/3	3.4×3.2	0.95	120	全周磨り	切り目1ヶ
62	土器片鉢	SI-9	3/4	4.15×4.05	1.0	170	全周磨り	切り目1ヶ
63	土器片鉢	SI-9	3/4	7.3×4.95	0.9	390	全周磨り	切り目1ヶ
64	土器片鉢	SI-9	完形	7.6×5.7	1.05	540	全周磨り	切り目1対
65	土器片鉢	SI-9	完形	4.85×4.5	0.85	240	一部磨り	切り目1対
66	土器片鉢	SI-9	2/3	4.2×4.6	0.8	180	全周磨り	切り目上端3ヶ
67	土器片鉢	SI-9	2/3	4.5×4.65	1.0	250	無溝整	切り目1ヶ
68	土器片鉢	SI-9	光形	9.65×6.0	0.85	720	一部磨り	切り目1対
69	土器片鉢	SI-9	完形	7.45×6.45	1.05	720	全周磨り	切り目1対
70	土器片鉢	SI-9	1/2	4.75×6.3	0.85	300	全周磨り	切り目1ヶ
71	円盤	SI-9	1/2	4.3×6.65	0.9	250	打削	円形
72	有孔円盤	SI-9	1/4	3.2×3.7	0.75	100	全周磨り	裏面より穿孔 未貫通
73	円盤	SI-9	1/4	2.25×2.3	0.9	50	全周磨り	円形

第12号住居跡 [SI-12] (第21~24図 P L 6・44・45・52・54)

位置 N-23区付近に位置し、一部調査区外にかかる。

重複関係 なし。

規模 長径6.6m×短径6.24mの不整円形で、確認面からの深さは10~26cmである。現状で西側の壁はエリア外に張り出しているが、本来は円形に巡るものと考えられる。南北方向に長軸が存在するものと思われる。

壁 残りのよい所では外傾ぎみに立ち上がる。

床 特に踏み固められたところはなく、若干凸凹が見られるが全体的に平坦である。

炉 長軸1.22m×短軸0.8mの不整形で、深さ36cmを測る。炉床は焼けて赤変しており、やや凸凹がみられる。位置は住居のほぼ中央に位置する。

柱穴 全部で24ヵ所確認された。主柱穴と思われるものは10ヵ所を数え、この内P1・P6・P8は壁に沿っている。径は32~42cm、深さは31~48cmを測る。P9・P11・P12・P19・P20は炉の周囲を巡る。径は30~48cm、深さ34~58cmを測る。P23とP5は炉を挟んで対称の位置にあり、径32~38cm、深さ32~38cmを測る。支柱穴と考えられるものはP4・P10・P18・P22で、径22~38cm、深さ17.2~23.3cmを測り、その他のピットは性格不明である(木の根の搅乱がひどい)。主柱穴はおよそ五角形に配されており、一部2重になる所が見られる。

第12号住居跡ピット

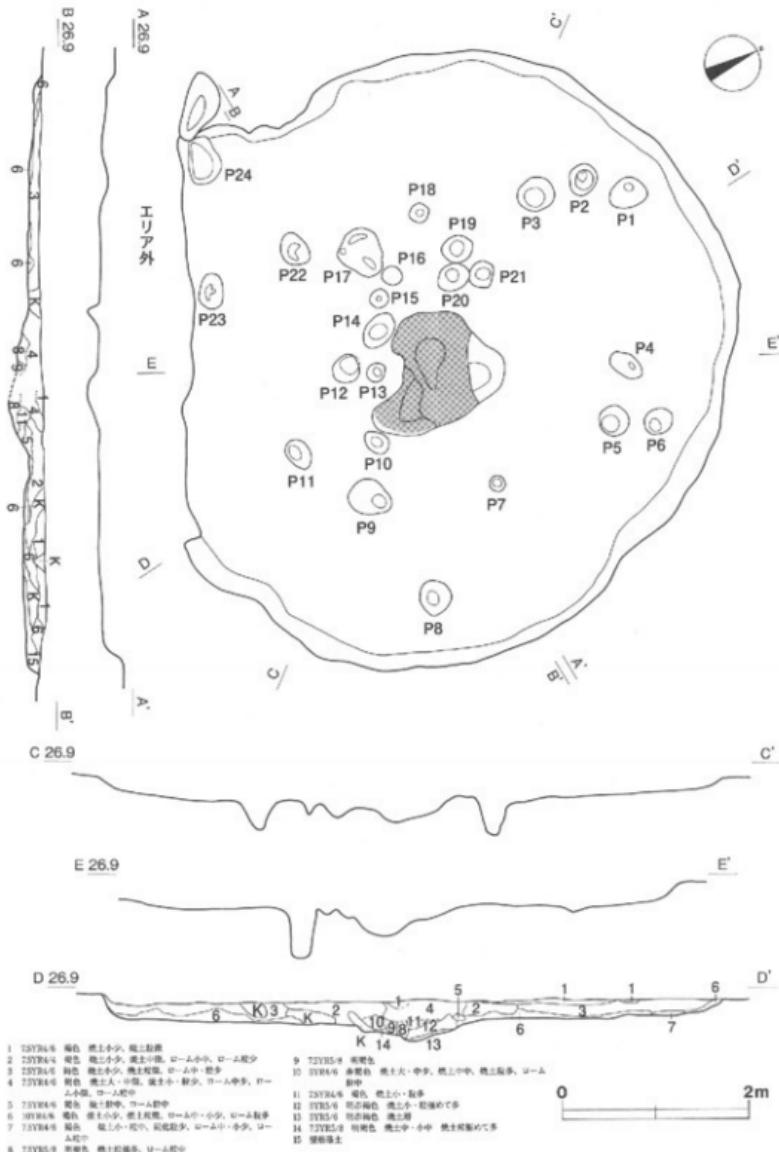
番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
径(cm)	42	36	40	38	32	32	16	38	48	28	34	30
深さ(cm)	48	15	13	20	35	36	12	31	34	23	30	38

番号	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24
径(cm)	20	42	20	20	44	22	36	36	30	36	38	50
深さ(cm)	10	15	14	-	17	17	38	43	14	19	34	12

覆土 覆土は15層から構成される。全体に褐色土の土層で、木の根による搅乱が多く入り込んでいる。炉上の4層にも大型の焼土ブロックも見られ、先の状況を反映している。覆土の下層にはローム粒が多く含まれている。

遺物出土状況 多くの遺物が出土した。ほとんど床面から浮いた状態で出土し、住居廃絶後、自然堆積の過程で投棄されたものと考えられる。完形品は1点もなく、口徑が復元できたものが4点、胴径が復元できたものが1点みられる。第15号住居跡出土遺物と接合関係にある遺物が1点出土した。

出土遺物 出土遺物は深鉢形土器が大半を占めるが、3の胴部が強く張り出し特殊な器形を呈するものや5・11・13などの鉢と考えられる器種もみられる。文様の特徴は、1・2のように沈線が両側に沿う隆起線により区画文が描かれるものや、4・8・14~17・26などの沈線によって区画文が描かれ区画内が磨り消されるものも見られる。底部は26のみで、不安定な小さな底部から直線的に外傾して立ち上がる特徴が見られる。



第21図 第12号住居跡

1は平縁の深鉢形土器で頸部の括れは緩い。口唇部に幅の狭い無文帯が設けられ、頸部までの間は沈線が両側に沿った隆起線によって帶状・渦巻き状の区画文が横位に展開する。区画内には繩文が施文される。2も平縁の深鉢形土器と思われ、口縁部が直立する。沈線が両側に沿った隆起線によって帶状の区画文が横位に展開し、区画内に節の細かな繩文が施文される。3は球形の器形で、器面は破壊のためか著しく剥離し文様は不鮮明であるが、およそ繩文を地文に上下方向に連繋する2本組の隆起線が見られる。4は平縁の深鉢形土器で、沈線によって区画された逆「U」字状の文様が横位に展開し、区画内は磨り消されている。4・8は接合しないが同一個体である。地文の繩文は口縁部近くが横回転施文であるが、ほかは縦回転施文も併用され、羽状構成を見せる部位もある。6は波状口縁の深鉢形土器で、口唇部に沿って太い沈線が引かれ、その中に連続刺突文がなされる。地文にはLr+1の附加条繩文が施文され、施文方向の変化により羽状構成をとる。6・14は緻密な胎土や地文の状況から同一個体と考えられる。13は頸部が括れる鉢形土器と考えられ、無文の口縁部が若干立ち上がると思われる。7・11・22・23は条線文の施文されるものである。7は楕円形の区画内に条線が充填される。25は繩文と条線文の併用例であり、内面に赤色顔料が残る。24・25は同一個体である。26は大型の深鉢形土器の底部である。26と15・16は同一個体であり、LRL複節繩文が縦回転施文される。

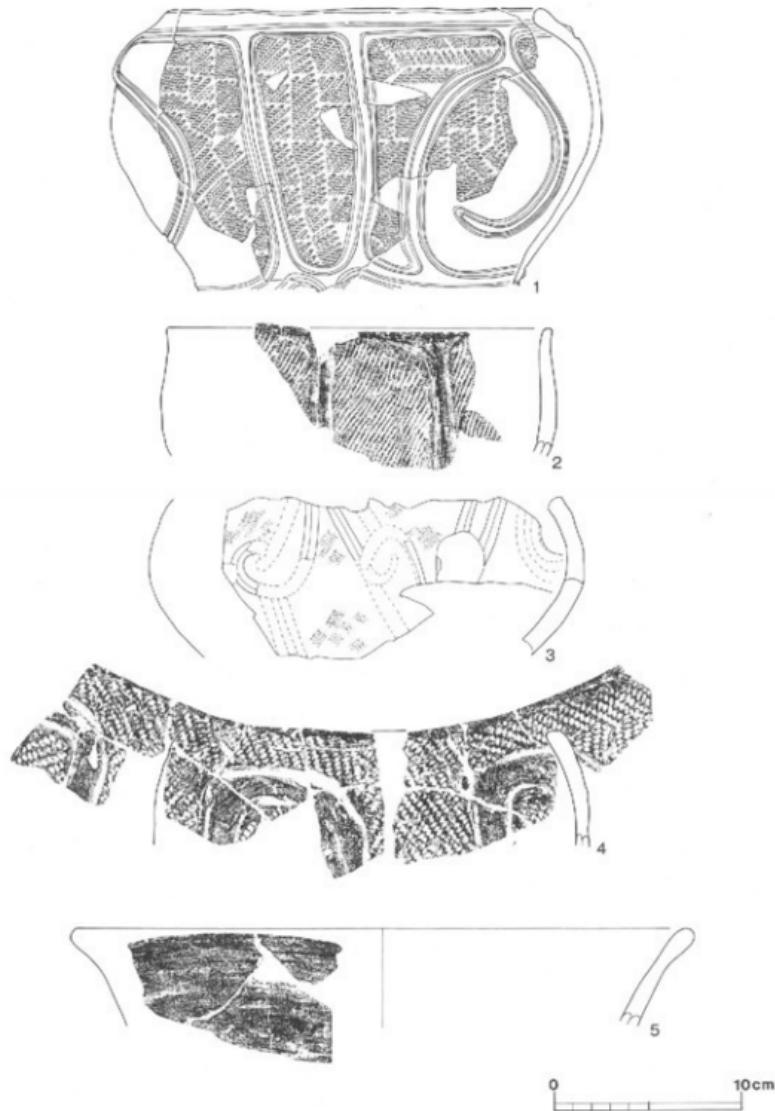
土製品として土器片錐が12点(27~38)出土している。小型のものが多く、37・38のみやや大きい。多くが長軸方向に一对の切れ目を施しているが、36のみ短軸方向に切れ目を施している。

石器は1点で、39の石鎌である。基部が破損している。腹面に2次調整が細かく施され、背面は先端と側縁にのみ行われる。本資料は蛍光X線分析の結果、神津島恩馳島群産と比定された。

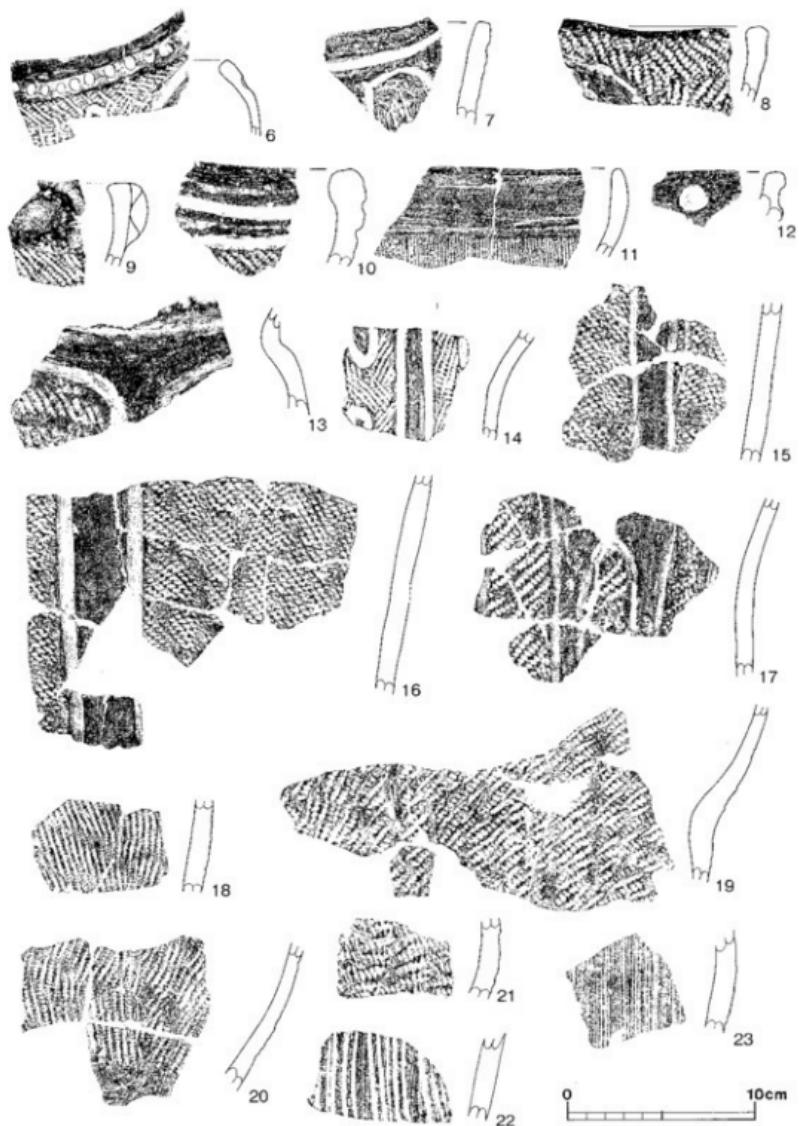
所 見 本住居跡は、今回の調査エリア内で確認された竪穴住居跡内で最も規模の大きなものといえる。また、本住居跡出土土器には、第15号住居跡出土のものと接合するものがあり、造構間の関連が窺われる。本住居跡の時期は、出土遺物に中期後半の加曾利E3式土器が見られることから同期の所産と考えられる。

第12号住居跡出土土器

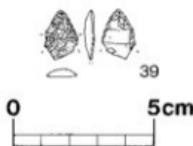
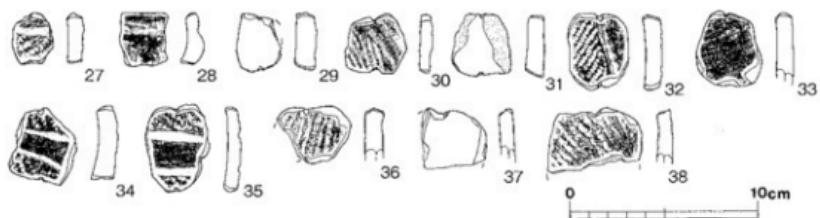
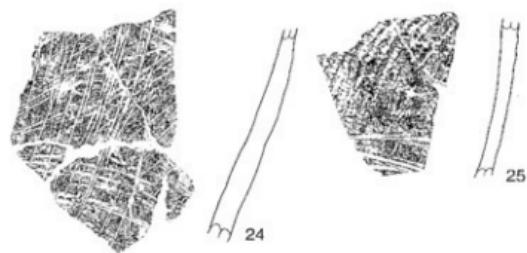
団体No.	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	番形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁	A:(19.8) C:(15.1)	にぶい■ ○、黒色片 ○	長石・石英△、黒色粒○	平縁。キャリバー形を呈する。隆起線により口縁部に無文帯を設け、渦巻き状などの区画文を施す。地文にはLRL繩文を施す。	No192
2	深鉢	口縁	A:(20.4) C:(6.8)	にぶい黄褐色 ○	長石・石英△	平縁。口縁部が直立し、口唇部がやや外反する。隆起線による「U」字状区画文が施され、区画内にはLR繩文が施文される。	Noなし
3	深鉢	口縁	C:(8.6)	灰黃	長石・石英△、黄色粒・赤色粒○	キャリバー形を呈する土器の口縁部と思われる。口唇部欠損。2本組の隆起線による渦巻状文が描かれる。地文には繩文施文。	No195 器面剥落
4	深鉢	口縁	A:(20.1) C:(6.2)	橙	長石・石英○	平縁。継ぐ内溝する口縁部。凹溝による「U」字状区画文が記され、区画内は磨り消され無文。区画文外は單脚L繩文、横回転繩文。	No342
5	鉢	口縁	A:(33.2) C:(5.2)	澄	長石・石英△	平縁。外縁する口縁部。口唇部は肥厚し丸味を持つ。内外面が無文である。内外面ともにナデ・ミガキが施される。	No197 赤色顔料付着か
26	深鉢	底	B:8.4 C:(13.6)	にぶい黄褐色 ○	石英・長石△	底面凸レンズ状で不安定。周縁へ大きく開く器形。平行する垂下沈縫部は無文となり、そのほかはLRL繩文が施文される。	No191 15・16と同一個体



第22図 第12号住居跡出土遺物（1）



第23図 第12号住居跡出土遺物（2）



第24図 第12号住居跡出土遺物（3）

第12号住居跡出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	周縁整形	備考
27	土器片鱗	SI-12	完形	27×2.2	0.85	6.0	一部磨り	切り目1対
28	土器片鱗	SI-12	完形	28×2.5	0.95	8.0	無溝整	切り目1対
29	土器片鱗	SI-12	一部欠	3.05×2.35	1.1	8.0	一部磨り	切り目1対
30	土器片鱗	SI-12	完形	3.2×3.2	0.7	8.0	一部磨り	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
31	土器片鱗	SI-12	完形	3.3×3.2	0.95	11.0	一部磨り	切り目1対
32	土器片鱗	SI-12	完形	4.15×3.3	0.95	17.0	全周磨り	切り目1対
33	土器片鱗	SI-12	完形	3.95×3.5	0.9	16.0	全周磨り	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
34	土器片鱗	SI-12	完形	3.95×3.4	1.1	17.0	一部磨り	切り目1対
35	土器片鱗	SI-12	完形	4.45×3.25	0.7	31.0	全周磨り	切り目3ヶ
36	土器片鱗	SI-12	一部欠	3.0×3.95	1.0	13.0	全周磨り	切り目1対
37	土器片鱗	SI-12	1/3	3.2×3.45	0.75	10.0	全周整形	切り目1ヶ
38	土器片鱗	SI-12	1/2	3.1×5.0	0.85	16.0	打削	切り目1ヶ

第12号住居跡出土石器

図版No	出土場所	各種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
39	壁上	石錐	(1.9)	(1.2)	3.0	(0.5)	黒曜石	石21 胸部折損 神津島思勝鳥群産

第13号住居跡 [SI-13] (第25~28図 P L 6・45・46・52~54)

位 置 調査区中央南側のZ-23区付近に位置する。

重複関係 第40・41号土坑及び第1号住居跡(占墳時代)と重複している。

規 模 長径5.84m×短径5.1mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10~30cmの深さを測る。

壁 遺存状況の良い所では外傾ぎみに立ち上がる。

床 全体的に平坦であり、特に踏み固められた所は見られない。

炉 2基確認されている。炉1は、住居跡のほぼ中心にあり、長径80cm×短径70cmの不整な円形を呈し、深さ32cmである。炉床は焼けて赤変硬化し、やや凸凹がみられる。炉2は長径(64)cm×短径54cmの不整な円形を呈し、深さ22cmを測る。炉床は焼けて赤変しており、やや凸凹がみられる。位置は、住居中央から南東にずれた所にある。炉2基近接して検出されているが、炉2は第41号土坑中に掘り込まれたものである。炉2の覆土上層にはハードロームブロック混じりの土層が覆っており、焼土の出土が散漫で炉1よりも先に造られたものと思われ、2基の炉は同時存在したものではないと考えられる。

柱 穴 主柱穴はP1・P2・P3・P4・P9と考えられ、住居の中央に五角形状に配される。これらピットの径は30~60cm、深さは24~90cmである。支柱穴と考えられるものは、P5・P6・P7・P8・P10であり、P10が壁際にある。径は20~30cm、深さ12~19cmを測る。P4については、底面が二段になり柱穴の重複状況が確認され、深い方が古く浅い方が新しい。

第13号住居跡ピット

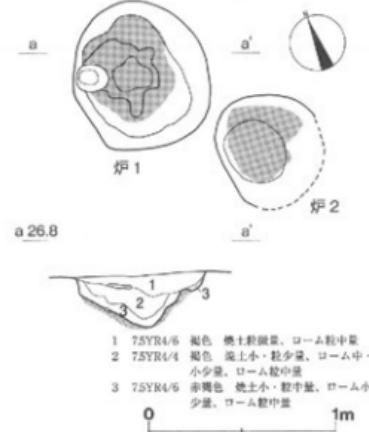
番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
径(cm)	50	54	40	60	20	28	24	30	30	28
深さ(cm)	36	74	24	90	16	12	—	15	50	19

覆 土 覆土は9層から構成される。

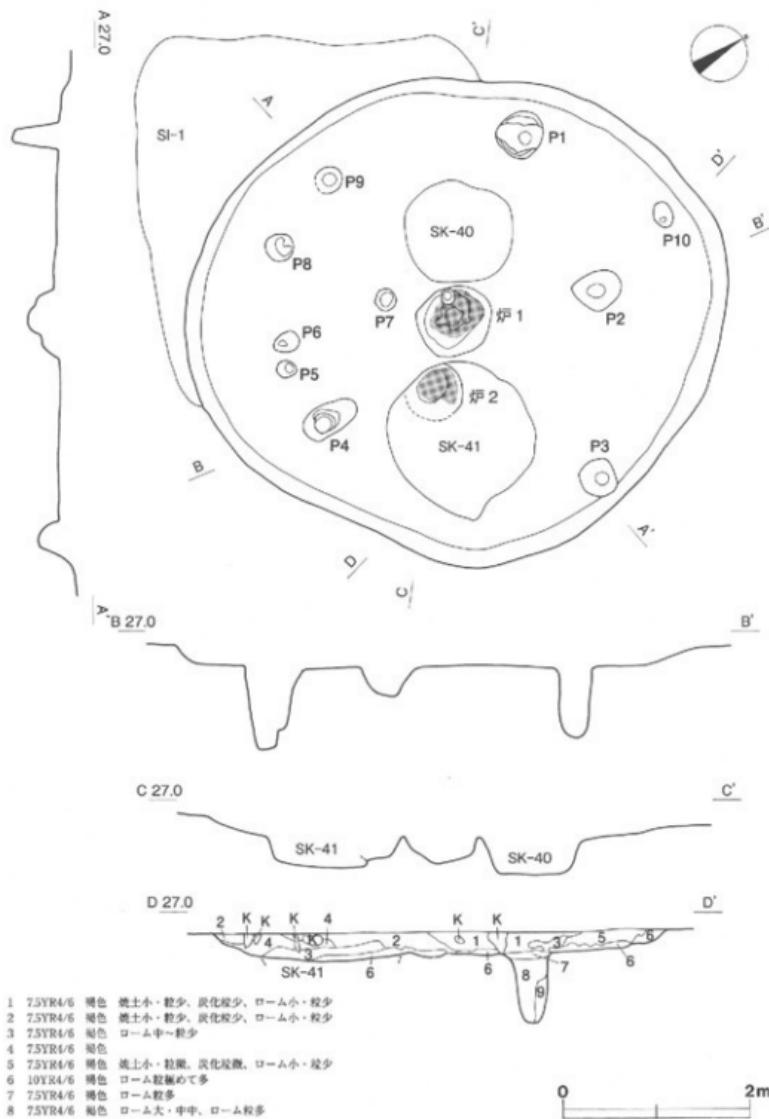
遺物出土状況 本住居跡及び第7号住居跡出土土器とは接合関係にある。遺物はほとんどが、住居廃絶後の過程で投棄されたものと考えられる。完形品は1点も出土せず、口径が復元できたものは1点見られる程度である。

出土遺物 出土遺物は全体的に少なく小片が多い。出土した土器のほとんどは深鉢形土器と思われる。底部は小さく不安定なものが出土している。

1~3・5・6は口唇部に無文帯を持ち、1~3には突起が付く。3は寸胴となる器形が考えられる。2は小型の土器で、口縁部に巡る1条の隆起線上に刺突文が施され、赤色顔料が付着してい



第25図 第13号住居跡炉



第26図 第13号住居跡

る。4は口縁部が頸部から大きく開く器形の深鉢形土器で、太目の隆起線による円形区画文などが口縁部文様帶として展開する。口唇部下にも縄文が施文される少ない例である。3・5・9・13は微隆起線によって区画文が描かれる。2・6・10~12は沈線によって区画文が描かれ、6・10・11は区画内が磨り消され、2・12は縄文が施文されている。底部は17・19などの底径の小さなものが目立つ。6・9・14の器面や15の内面には炭化物が付着している。

土製品として土器片錠が6点(20~25)、土製円盤が1点(26)出土している。

石器は3点出土している。27は凹み石、29は砥石、28は石鎌で先端を欠損する。基部は浅い抉りが入る。両面とも細かく2次調整が施される。

所見 本住居跡出土土器には、第7号住居跡出土のものと接合するものがあり遺構間の関連が疑われる。本住居跡の時期は、出土遺物が中期後半の加曾利E3式や加曾利E4式土器が混在することから同期の所産と考えられる。

第13号住居跡出土土器

図版No	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
2	深鉢	口縁	A:(12.7) C:(3.9)	にぶい赤褐色	石英・長石 ○、雲母△	平縁であるが一部に突起が付く。口唇下に浅縫 突起の施された隆起部が盛る。以下には比較によ る区画文が描かれ。区画内はLR縦文施文。	No203 赤色顔料付着

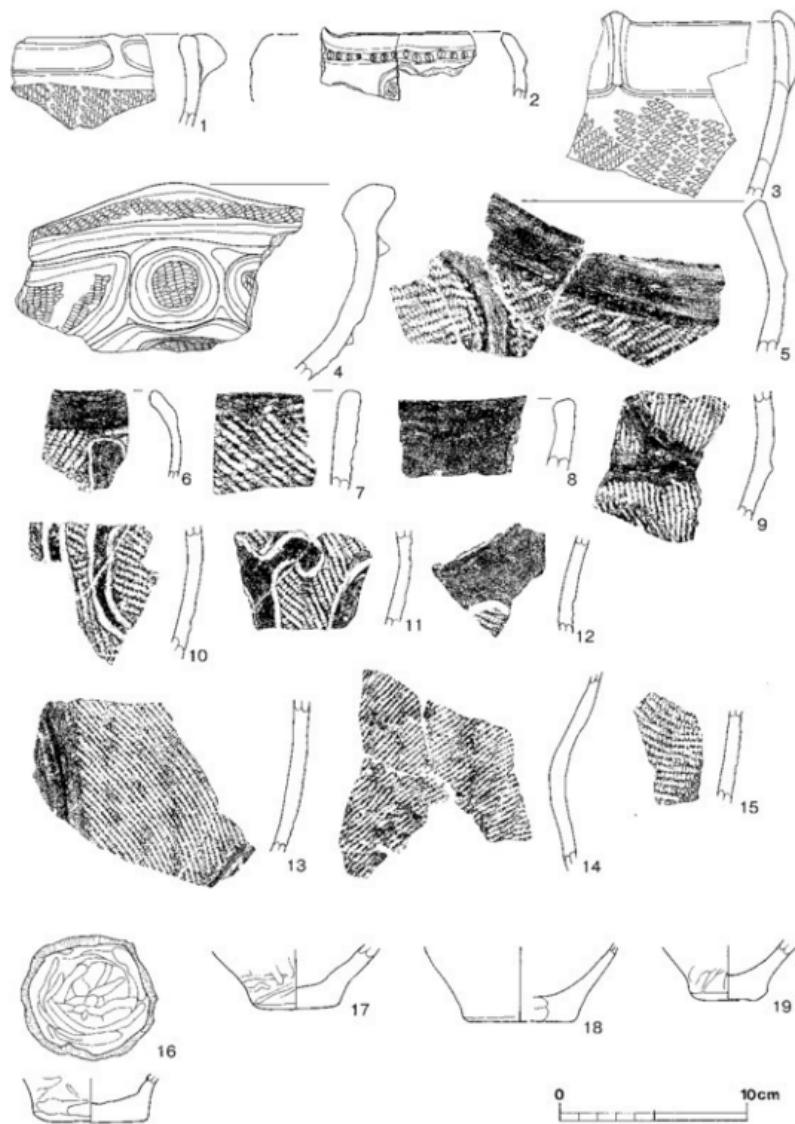
図版No	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
16	深鉢	底	B:6.0 C:(2.6)	にぶい橙	石英・長石 ○、赤色粒 △	無文。底部の縁はやや丸みを持ち、内外面はナ デラれている。	No204
17	深鉢	底	B:4.6 C:(3.2)	にぶい橙	石英・長石 ○、金星母 △	無文。外面ミガキがなされる。	No205
18	深鉢	底	B:6.0 C:(4.0)	にぶい黄褐色	石英・長石 ○	無文。表面荒れる。	No207
19	深鉢	底	B:4.2 C:(2.8)	にぶい黄褐色	石英・長石 ○	無文。周縁が遡れる。	No206

第13号住居跡出土土製品

図版No	種類	出土地点	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	周縁整形	備考
20	土器片錠	SI-13	完形	3.25×3.45	1.1	12.0	全周削り	切り目1ヶ
21	土器片錠	SI-13	2/3	2.85×4.0	0.8	13.0	全周削り	切り目1ヶ
22	土器片錠	SI-13	完形	5.5×4.2	1.15	84.0	一部削り	切り目3ヶ
23	土器片錠	SI-13	完形	5.9×4.0	0.95	32.0	一部削り	切り目1ヶ
24	土器片錠	SI-13	一部欠	7.85×5.85	1.0	54.0	一部削り	切り目1ヶ
25	土器片錠	SI-13	完形	7.8×6.65	1.0	60.0	全周削り	切り目1ヶ
26	円盤	SI-13	1/4	6.5×6.9	1.0	56.0	一部削り	円形

第13号住居跡出土石器

図版No	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
27	床土	凹み石	(13.0)	(5.2)	4.2	(540.1)	雲母片岩	石22 表面に凹みあり
28	覆土下位	石鎌	(2.9)	1.7	1.7	(14.0)	チャート	石24 衝撃剥離で先端折損
29	ピット5	砥石	13.5	10.6	10.6	1409.0	花崗岩	石23 表面に研磨面あり



第27図 第13号住居跡出土遺物（1）



第28図 第13号住居跡出土遺物（2）

第15号住居跡 [SI-15] (第29~31図 P L 7・46・53・54)

位置 調査区西側のL・M-16・17区に位置する。

重複関係 なし。

規模 長径4.9m×短径4.4mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは14~16cmを測る。

壁 遺存状況の良い所では外傾きみに立ち上がる。

床 全体的に平坦で、特に踏み固められた所は見られない。

炉 1基確認されているが、一度、途中まで埋まった後再び利用している（下方火床面を①、上方火床面を②とする）。長径80cm×短径68cmの不整楕円形を呈し、住居の長径上、中央からやや北側に寄る。深さは①が30cm、②が12cmである。炉床は①が焼けて赤変しており、やや凸凹がみられる。②は焼けて赤変が著しくハード化しており凸凹が著しい。

柱穴 柱穴は全部で17本確認され、径20~40cmのものが見られ、20cm代のものが多い。これらの柱穴の深さは11~39cmである、P1~P10・P12~P16の15本が径3mの円形に配され主柱穴と考えられる。P11・17は壁際で確認されたが、入り口に関わるものかどうかは不明である。P4・P5とP1・P15の間に1.5mの等間隔のすき間が見られる。P1・P2は斜めに穿たれている。

第15号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
径(cm)	30	24	26	32	30	24	24	22	20	30	26	34
深さ(cm)	39	30	22	18	29	17	36	11	35	30	27	30

番号	P13	P14	P15	P16	P17
径(cm)	24	24	24	28	40
深さ(cm)	18	20	19	35	18

そして、P16とP17を接続する溝(幅10~22cm、深さ5.5~11.1cm)が見られるが性格不明である。

覆土 覆土は18層から構成される。遺物は上・下層を問わず出土している。

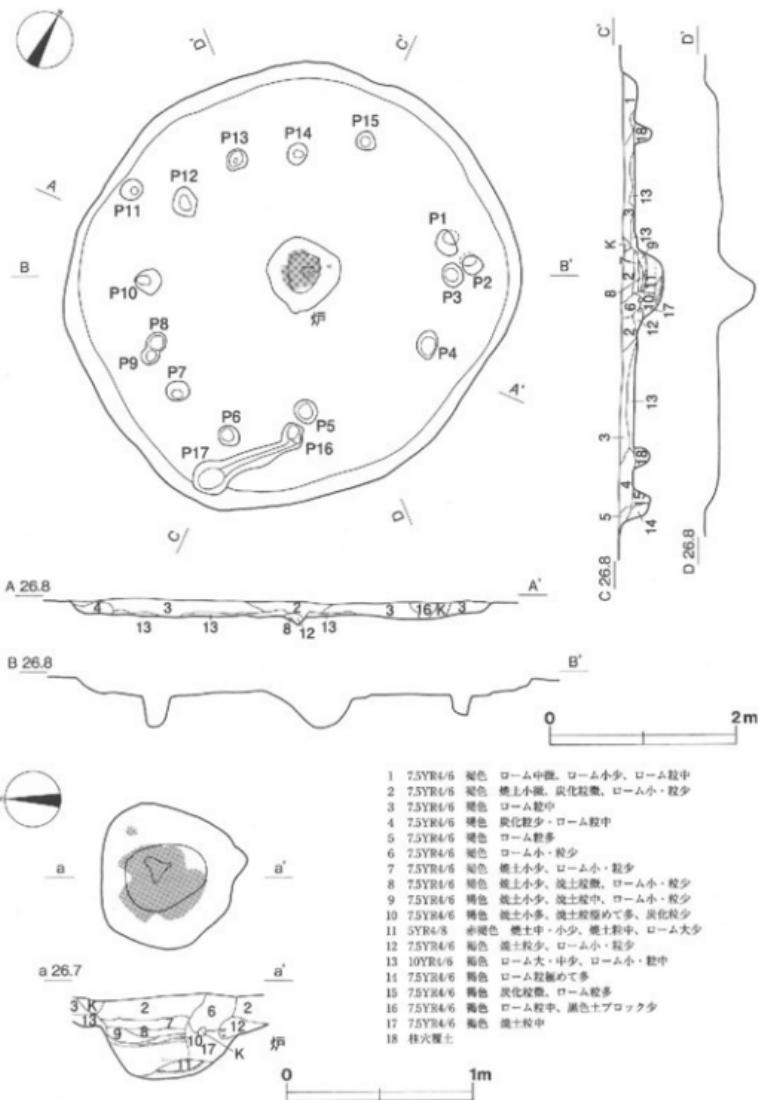
遺物出土状況 少量の遺物が出土した。床面から若干出土したほかは、大部分が床面から浮いた状態で出土した。炉内からも出土している。完形品は1点も出土せず、小破片ばかりで図示できたものはわずかである。このため出土遺物が住居の使用時に直接伴うかは不明である。

出土遺物 出土遺物は全体的に少ない。1は口唇部下に沈線を1条巡らせ無文帯を作り、口唇部が肥厚する。2は無文で鉢形土器の口縁部であろうか。3・4は2本組の隆起線が引かれ、区画文を描く。5は1条の隆起線が引かれる。6・7は沈線により無文帯と縄文帯を描く。8は条線文が施文される。9は無節L型が継回転施文される。

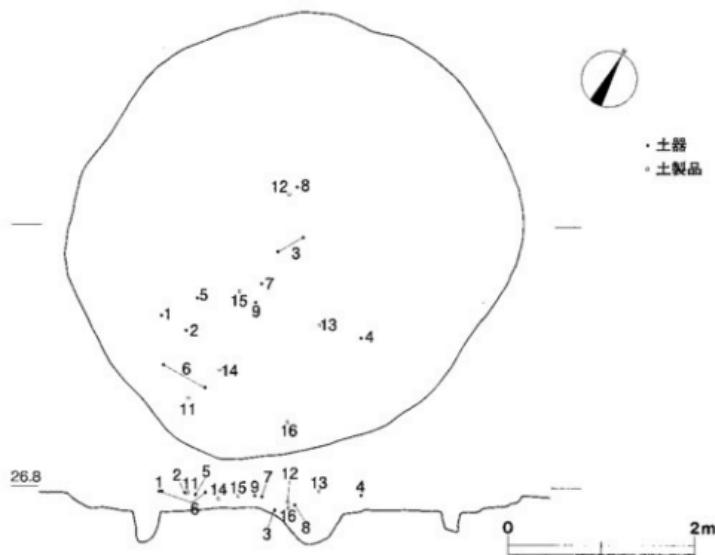
土製品として土器片錐が6点(11~16)出土している。

このほかに、黒曜石の剥片及び碎片が19点出土している。

所見 本住居跡出土土器には、第12号住居跡出土のものと接合するものがあり遺構間の関連が窺われる。本住居跡の時期は、出土遺物に中期後半の加曾利E3式土器が見られることから同期の所産と考えられる。



第29図 第15号住居跡・炉



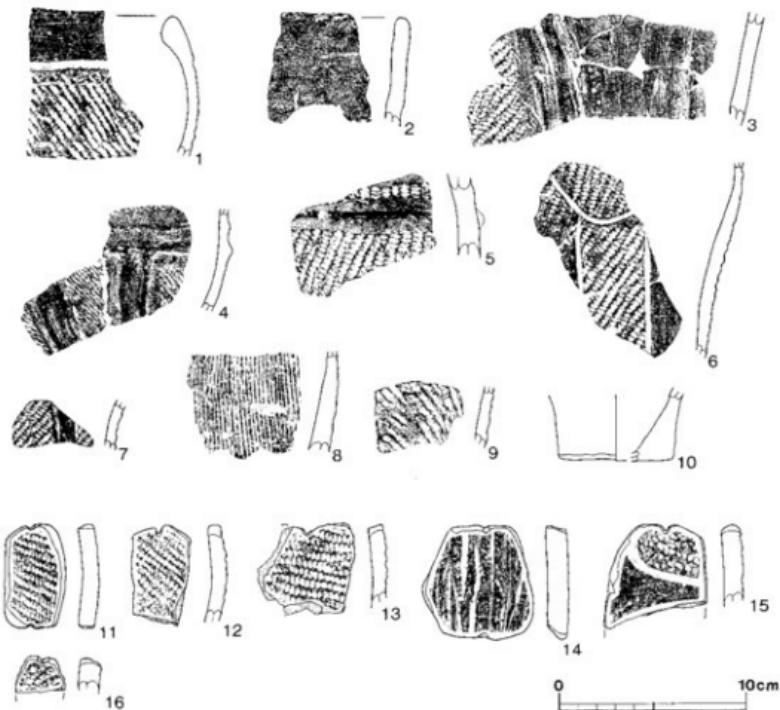
第30図 第15号住居跡遺物出土状況

第15号住居跡出土土器

回収No	器種	部位	法量(cm)	色調	動土	器形・文様の特徴	備考
10	深鉢	底	B : (6.2) C : (3.6)	褐	石英・長石 ○	氣文、器面荒れる。	No208

第15号住居跡出土土製品

回収No	種類	出土位置	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	周縁整形	備考
11	上器片鱗	SI-15	完形	555×3.25	0.9	24.0	全周磨り	切り目1対
12	土器片鱗	SI-15	一部欠	52×3.05	0.8	16.0	一部磨り	切り目1ヶ
13	上器片鱗	SI-15	一部欠	52×4.9	0.85	24.0	打削	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
14	土器片鱗	SI-15	完形	61×5.8	1.1	50.0	全周磨り	切り目1対
15	土器片鱗	SI-15	2/3	4.85×5.4	1.0	35.0	全周磨り	切り目1ヶ
16	土器片鱗	SI-15	1/2	19×2.6	1.2	6.0	全周磨り	切り目1ヶ



第31図 第15号住居跡出土遺物

第16号住居跡〔SI-16〕(第32~40図 P L 8・9・47~49・53・54)

位 置 調査区西端E・D-15~17区に位置する。

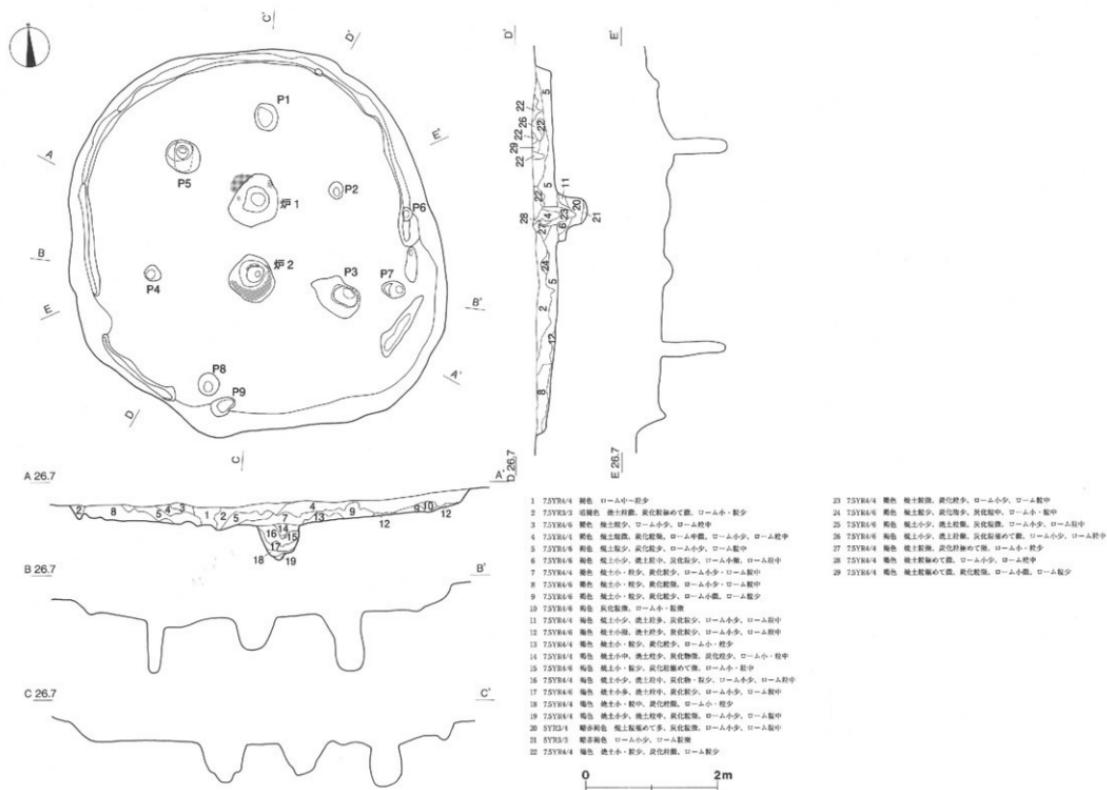
重複関係 なし。

規 模 長径(炉1・2上を通るライン) 6m×短径(長径と直交し、炉1・2の中間を通るライン) 5.64 mの楕円形で、南東側がやや張り出している。確認面からの深さは18~42cmを測る。

壁 遺存状況の良い所では外傾ぎみに立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、住居中央に向かって全体的に緩やかにくぼむ。特に踏み固められた所は見られない。南東側の床面には壁から離れて壁溝が確認され、住居空間の拡張を行った様な状況が窺われる。全体の形状からしても南東部壁が歪んでいる。

炉 炉1は長径80cm×短径66cmの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。炉の壁は一部のみが焼けて赤



第32図 第16号住居跡

変している。炉底面は平坦で焼けた様子がほとんどない。断面形態はバケツ形（炉壁が外傾ぎみに立ち上がる）を呈する。炉2は長径72cm×短径62cmの不整円形を呈し、深さは58cmを測る。底面に径30cm、深さ16cmの小ピットが中央からやや北東寄りに設けられている。断面形態はバケツ形（炉1によく似ている）を呈する。炉壁の南東側と中段のテラス部分の一部は焼土化し、赤変している。

本住居跡では炉が2基検出されており、ほかの住居の炉に比べ深く、円筒状を呈する。深鉢形土器が設置されていたことが想定される。炉1は焼けた面が散漫で、2基の炉が同時存在したとは思われず、時間差が感じられる。いずれの炉の覆土も焼土粒が多量に入るわけではなく、土器埋設炉の可能性の傍証となろう。

柱穴 主柱穴はP1・P2・P3・P4・P5・P8の6本からなり、径26~52cm、深さ61~118cmを測る。これらは六角形に配される。P6は周溝、P7は周溝の途切れ目、P9は壁際に配されるが性格不明である。

第16号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
径(cm)	42	28	40	26	52	20	40	34	40
深さ(cm)	65	99	91	80	118	30	-	61	16

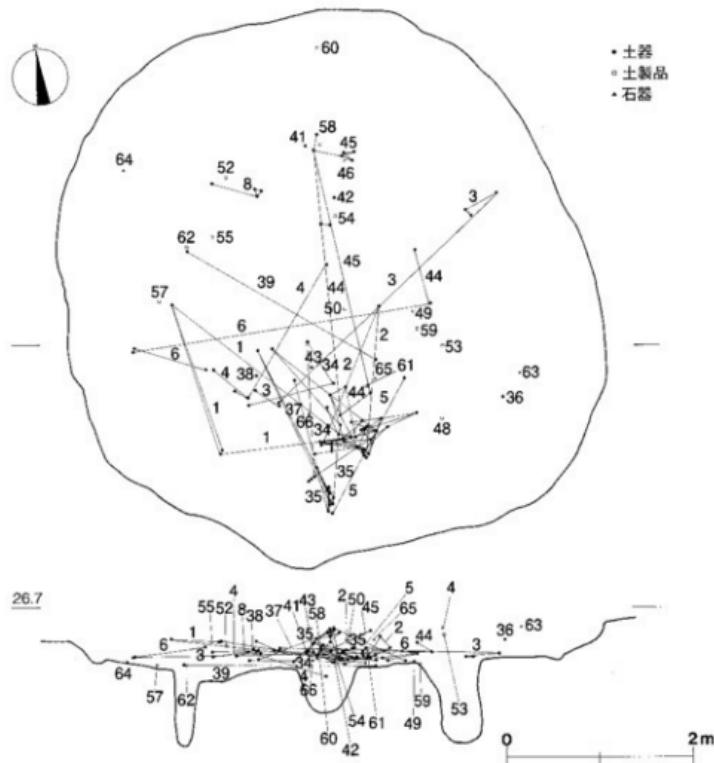
壁溝 住居の北側2/3を巡り、幅10~26cm、深さ4.5~15cmを測る。南東と南西側で4ヶ所切れ目があり、南東側は特に大きく途切れている。入り口でもあったのだろうか。また、若干ずれるがP7-P9を結ぶラインで壁溝が途切れていることも指摘できる。

覆土 覆土は29層で構成されている。遺物は上・下層を問わず出土している。

遺物出土状況 多量の遺物が出土し、ほとんどが床面から浮いた状態であり、堆積過程中に投棄されたものと思われる。完形品は1点もなく、底部を欠いた深鉢が1点、口径の復元できるものが10点みられる。

出土遺物 出土遺物は深鉢形土器がほとんどで24・25の特殊な器形を呈するものが若干みられる。深鉢形土器には1のように器形がキャリバー形を呈するものや、6のようにその退化した器形が窺えるもののほか、2・3・4のように口縁が短く内湾し胴部にかけて自然にすぼまるものもある。また、5・11のように口縁部が緩やかに内湾し胴部にかけてすぼまるものや、9のような口縁部が外傾するものもみられる。底部は概して小さいものが多く、37・41・45のような底部側縁が張り出すものもみられる。

1は胴部上半部分で、断面三角形の微隆起線によって渦巻文を隙間なく描き、下半に幅の狭い無文帯を垂下させる。頸部以下の無文部以外には区画内外に繩文が施文される。2・3~7・9は口縁部に沈線や凹線が1条巡り無文帯を形成し、地文には比較的多様な繩文が施文される。2



第33図 第16号住居跡遺物出土状況

は単節縄文の施文方向を変え部分的に羽状構成をとる。3には複節縄文と無節縄文が施文されて
いる。16の地文も複節R L Rである。12・13・15は口縁部に隆起線による区画文が横位に展開し、
区画内に縄文が施文されている。18～25は微隆起線によって区画文が描かれており、18～20などの
区画の幅の狭いものと、22～25の幅広のものが見られる。18・21には胎土に金雲母片が多く含
まれる。このほか、26～29のような沈線によって区画文が描かれるものが存在する。14は口唇端
部をつまみ上げ、これに沿いなでて無文帯を作り出し、波頂部から無文帯下まで微隆起線文を垂
下させる土器で、あまり類例を見ないものである。また、30のように縄文と条線文の併用例も見
られる。31は条線文のみが施文されるが、胎土の特徴から前期後半の土器の可能性が考えられる。
30・33の器面には炭化物が付着している。34～45は底部で、底面近くに弱い括れが見られ、外面
はなでや磨きのなされるものが多い。

土製品として土器片錐が10点（46～55）、有孔円盤が2点（56・57）、土製円盤が5点（58～62）出土している。

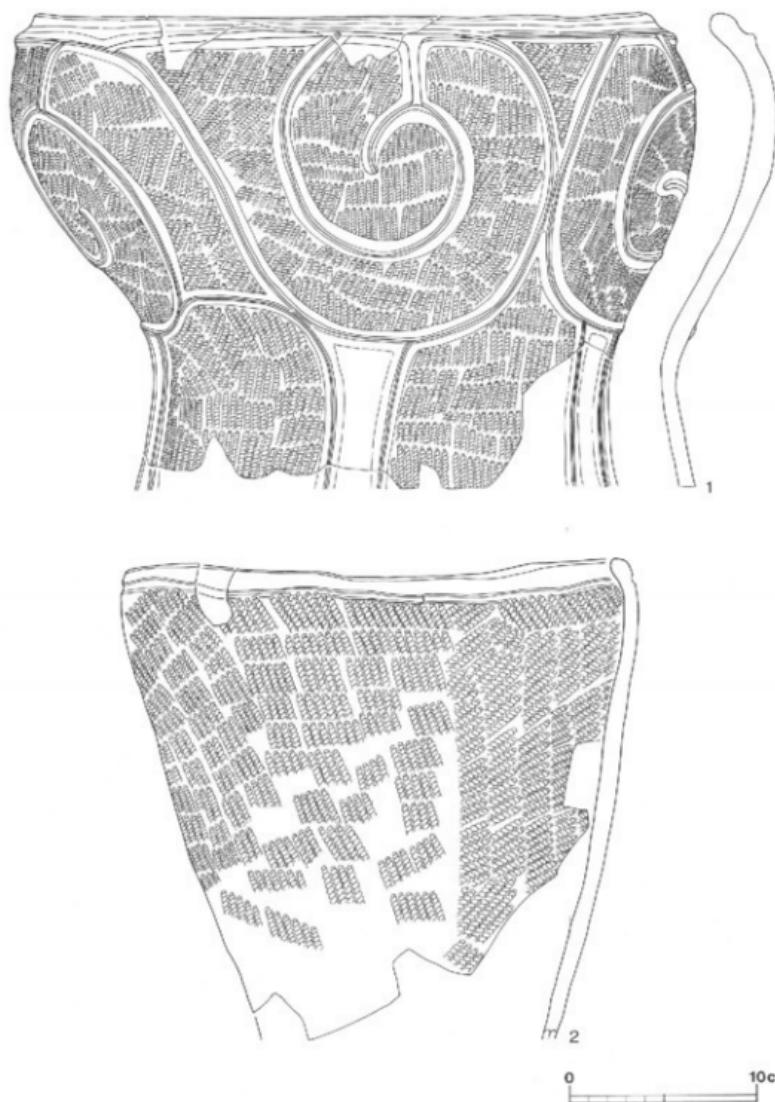
石器は5点である。63は両刃縫、64は敲き石、65は凹み石、66は石錐の完存品である。縦長剥片を用いて、両面に細かく2次調整を施している。つまみは三角形を呈する。67はスクレイパーで、剥片の2側縁に両面から2次調整を施し刃部をつけている。このほかに、黒曜石剥片2点、質の悪いチャート剥片2点等が出土している。

所 見 本住居跡の炉はほかの住居跡とは異なり、断面形態が特異であり、状況的にもいずれも土器埋設炉であった可能性が考えられる。しかしながら、埋設したと考えられる土器は確認されず、住居廃棄時に排除されてしまったものと思われる。また床面に住居拡張の痕跡が確認されている。これらのことから、本住居跡は住居内の設備や構造を変えながら使用された可能性が考えられる。しかしながら、柱構造は変化の様子が見られないことから、屋根構造などは同様であった可能性が指摘できる。

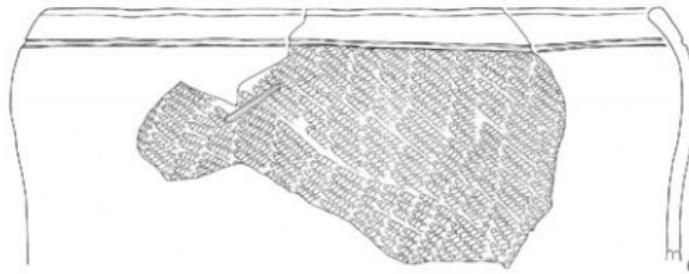
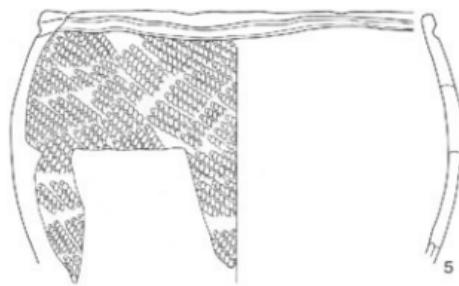
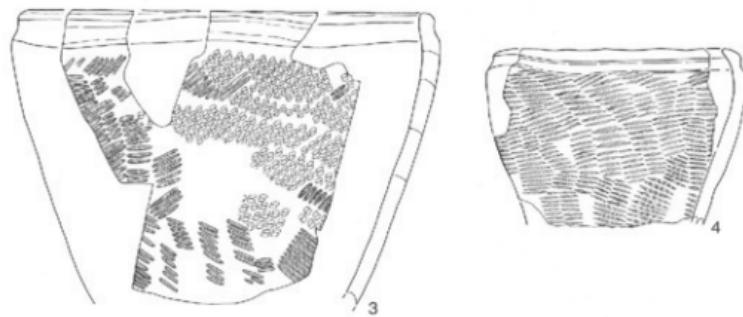
また、本住居跡出土土器には、第1号堅穴遺構出土のものと接合するものがあり、遺構間の関連が窺われる。本住居跡の時期は、出土遺物に中期後半の加曾利E3式土器が見られることから、同期の所産と考えられる。

第16号住居跡出土土器

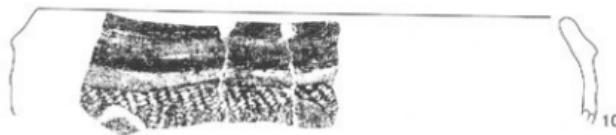
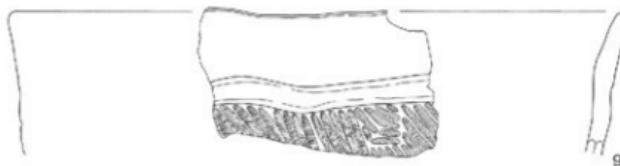
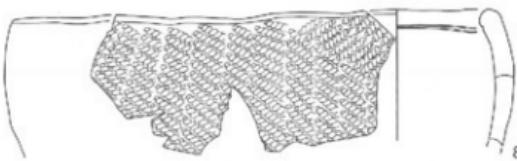
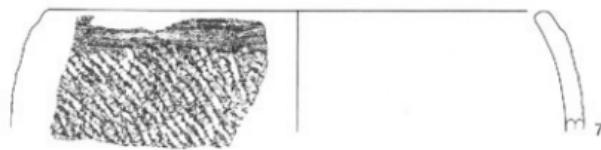
回取No	器種	部位	法量(cm)	色調	施土	跡形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁	A : (32.8) C : (25.3)	にぶい黄緑	石英・長石 ○、赤色粒△	平縁。キャリバー形を呈する。微隆起部による 跡形が口縁部に展開し、腹部以下は区画文が 求めし。区画内には無文となる。	No.335 炭化物付着
2	深鉢	口縁	A : 26.4 C : (25.7)	明黄褐	石英・長石 ○	平縁。肩部から外傾する器形。口唇部はやや内 湾し、凹縁が造る。以下にはRL複節縄文及び 施文され、一部羽形跡を呈する。	No.228 炭化物付着
3	深鉢	口縁	A : (22.0) C : (15.7)	橙	石英・長石、 砂粒○、金 雲母△	平縁。肩部から外傾する器形。口唇部はやや内 湾し、凹縁が造る。以下にはRL複節縄文及び 上部無地縄文が施文される。	No.211 炭化物付着
4	深鉢	口縁	A : (11.6) C : (9.3)	灰褐	石英・長石 ○	平縁で小型の土器。肩部から外傾する器形。口 唇部はやや内湾し、凹縁が造る。以下にはLR縄 文が施文される。	No.214 炭化物付着
5	深鉢	口縁	A : (21.9) C : (13.5)	にぶい黄緑	石英・長石 △	平縁。肩部から外傾する器形。口唇部には凹縫が 造る。以下にはRL縄文が施文される。	No.209 炭化物付着
6	深鉢	口縁	A : (32.8) C : (8.7)	にぶい褐	石英・長石、 赤色粒△	平縁。穂いキャリバー形となる。口唇部下には 沈縫が造る。弦文等が作出される。以下にはLR 縄文が施文される。	No.210 炭化物付着
7	深鉢	口縁	A : (26.8) C : (6.4)	にぶい黄橙	石英・長石、 黑色片○	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇部には 浅い凹縫が造る。以下にはRL縄文が施文される。	Noなし
8	深鉢	口縁	A : (25.5) C : (7.3)	浅黄	石英・長石 ○、砂粒、 赤色粒△	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇下より LH縄文が施文される。口縁内面の一部が沈縫狀 に凹む。凹縫が磨かれる。	No.213 炭化物付着
9	鉢	口縁	A : (32.5) C : (7.6)	橙	石英・長石 ○、砂粒、 赤色粒△	平縁。口縁部が直立する鉢と考えられる。口唇 部に幅の広い無文帯が作出され、凹縫が造る。 以下にはLR縄文が施文される。	No.232 炭化物付着
10	深鉢	口縁	A : (28.3) C : (5.7)	にぶい黄橙	石英・長石 ○	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇部下に 沈縫が造る。以下にはRL縄文を地文に、凹縫に よる「V」状文が描かれる。	Noなし
11	深鉢	口縁	A : (19.2) C : (7.7)	にぶい黄橙	石英・長石 ○	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇部下に 沈縫が造る。以下にはRL縄文を地文に、凹縫に よる「V」状文が描かれる。	Noなし 炭化物付着
34	深鉢	底	B : 5.8 C : (11.2)	橙	石英・長石 ○、雲母△	底部から外傾して立上がる。上位には單脚止塊 文が施文される。下位は無文でナデられる。底 部の器厚は薄手。	No.215
35	深鉢	底	B : 6.5 C : (10.0)	明赤褐	石英・長石 ○	底部から外傾して立上がる。上位にはRL縄文が 施文され、下位は無文である。下半浅い沈縫狀 の底縫、や上口底で、側縁はへラ削り。	No.216 内面に炭化物 付着



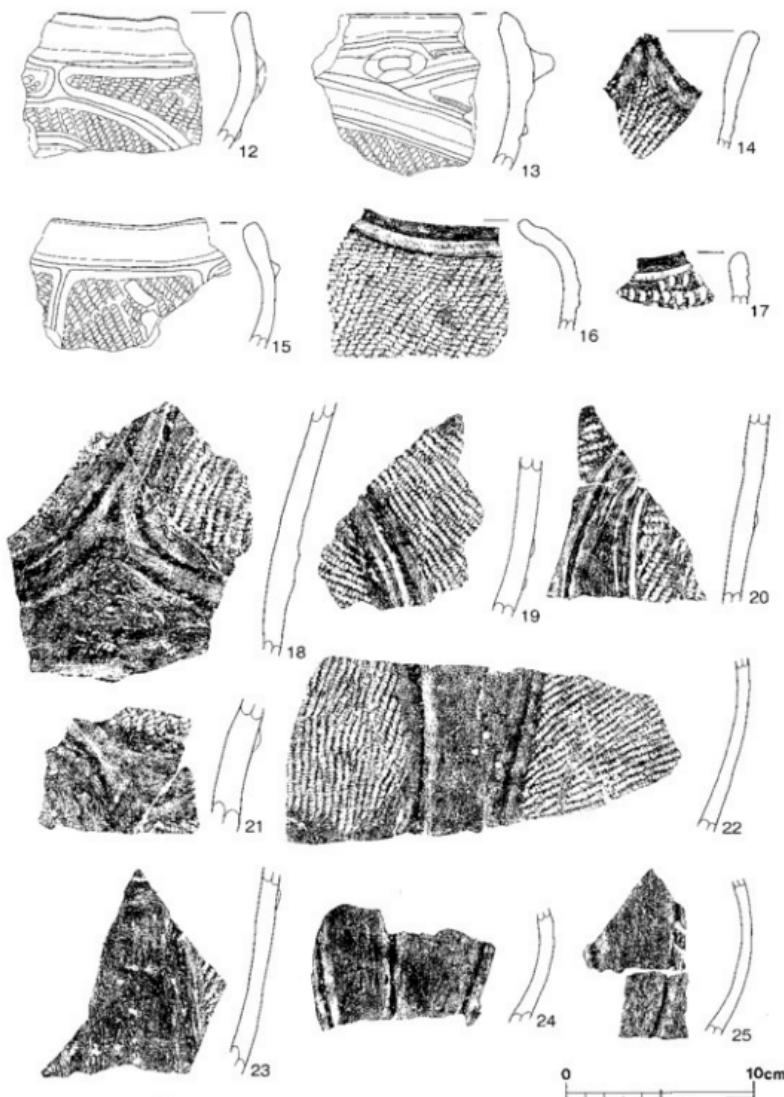
第34図 第16号住居跡出土遺物（1）



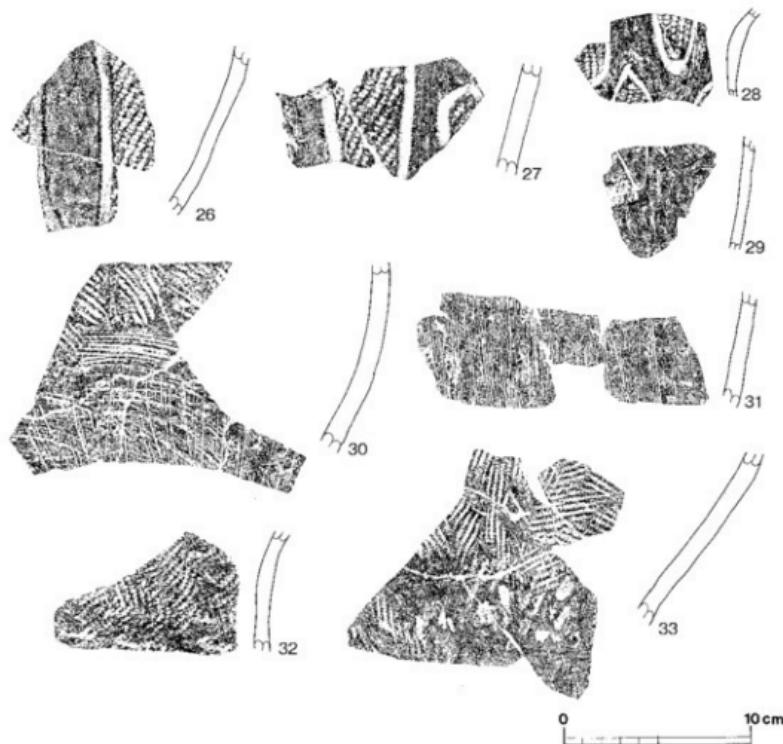
第35図 第16号住居跡出土物（2）



第36図 第16号住居跡出土遺物（3）

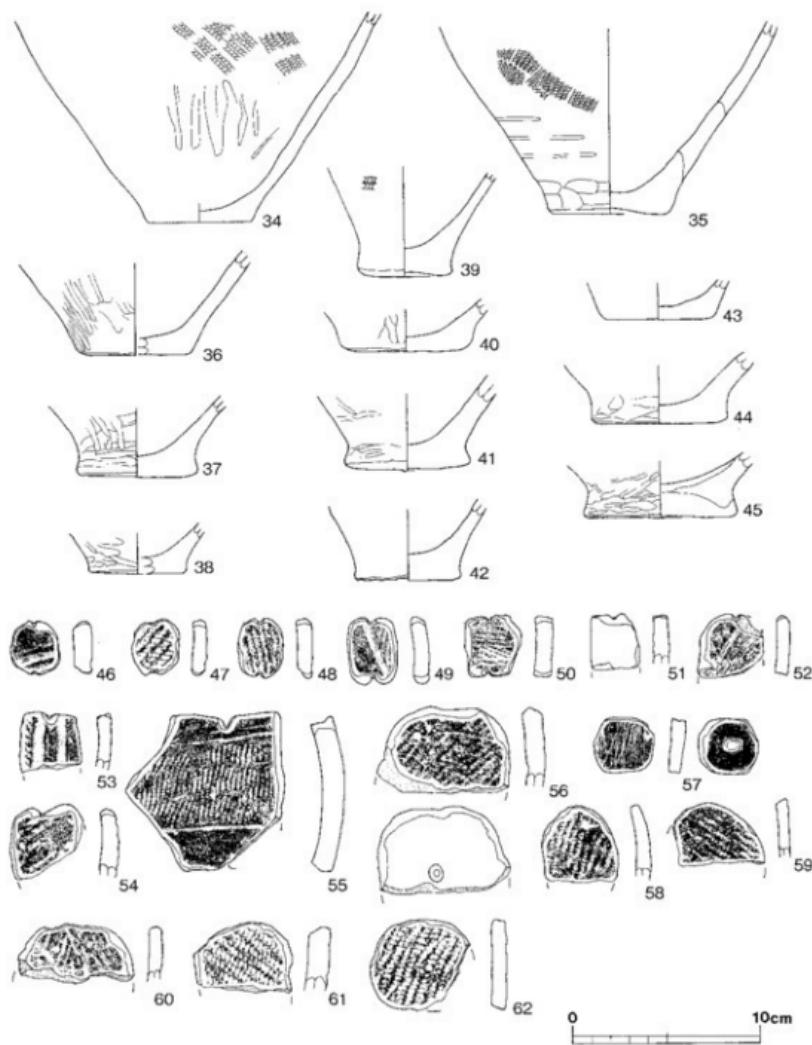


第37図 第16号住居跡出土遺物（4）

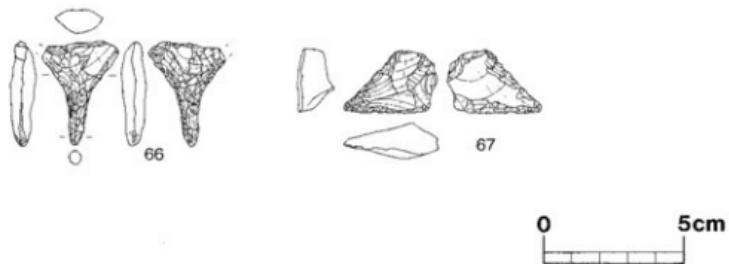
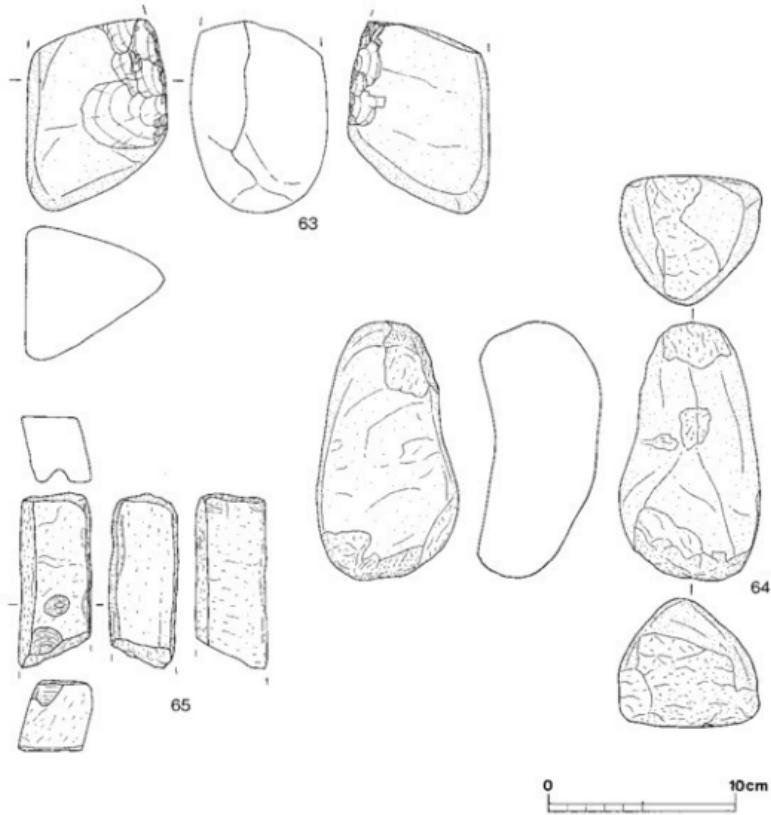


第38図 第16号住居跡出土遺物（5）

開底No	器種	部位	法量 (cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
36	深鉢	底	B : (6.1) C : (4.9)	緑	石英・長石 ○	無文。外面ヘラミガキ。	No.225
37	深鉢	底	B : (6.6) C : (3.8)	にぶい緑	砂粒○	無文。外面ヘラミガキ。底面ヘラ削りの後ナデ。側縁端部張る。内底丁寧なナデ。	No.223
38	深鉢	底	B : (5.2) C : (2.3)	緑	石英・長石 ○	無文。外面・底面ヘラナデ。	No.226
39	深鉢	底	B : 5.5 C : (5.8)	緑	石英・長石 ○	表面の一部に單斜LR。下半無文。やや上げ底。外腹ヘラナデ。	No.227
40	深鉢	底	B : 7.1 C : (2.2)	にぶい緑	石英・長石 ○	底面凸レンズ状。無文。底面に製作時の圧痕あり。内外面にヘラナデ。	No.219
41	深鉢	底	B : (6.7) C : (4.1)	緑	石英・長石 ○	底面凸レンズ状。無文。外腹ナデ。側縁端部張る。	No.222
42	深鉢	底	B : 5.7 C : (4.0)	緑	石英・長石 △	無文。器面荒れる。底面丁寧なナデ。	No.220
43	深鉢	底	B : (6.0) C : (2.1)	にぶい青緑 金雲母○		無文。底部側縁擦れる。底面丁寧なナデ。	No.224
44	深鉢	底	B : 7.3 C : (3.2)	緑	石英・長石 ○、赤色粒 △	無文。底面ヘラ削りの後ナデ。	No.218



第39図 第16号住居跡出土遺物（6）



第40図 第16号住居跡出土遺物（7）

図版No	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
45	深鉢	底	B : (8.3) C : (2.8)	黒 ○	石英・長石	無文。外腹・底面丁寧なミガキ。底部側縁強張る。	No217 炭化物付着

第16号住居跡出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	器形	備考
46	土器片錐	SI-16	完形	28×2.6	1.0	8.0	全周磨り	切り目1対
47	土器片錐	SI-16	完形	30×2.5	0.75	6.0	全周磨り	切り目1対
48	土器片錐	SI-16	完形	32×2.4	0.8	8.0	全周磨り	切り目1対
49	土器片錐	SI-16	完形	35.5×2.7	0.8	10.0	全周磨り	切り目1対
50	土器片錐	SI-16	一部欠	32.5×2.0	0.95	12.0	一部磨り	切り目1対
51	土器片錐	SI-16	2/3	29×2.65	0.85	8.0	打削	切り目1ヶ
52	土器片錐	SI-16	2/3	33×3.35	0.75	11.0	全周磨り	切り目1ヶ
53	土器片錐	SI-16	2/3	31×3.3	0.7	10.0	一部磨り	切り目1ヶ
54	土器片錐	SI-16	2/3	37×3.75	0.95	14.0	全周磨り	切り目1ヶ
55	土器片錐	SI-16	一部欠	8.4×8.5	1.25	99.5	無調整	切り目1対
56	有孔円盤	SI-16	1/2	4.6×7.1	1.05	40.0	全周磨り	裏面より穿孔 未貫通
57	有孔円盤	SI-16	完形	29.5×3.2	0.8	10.0	全周磨り	裏面より穿孔 未貫通
58	円盤	SI-16	2/3	41×4.0	0.8	13.0	全周磨り	楕円形
59	円盤	SI-16	1/3	32.5×4.6	0.6	10.0	全周磨り	楕円形
60	円盤	SI-16	1/2	31×4.1	0.7	12.0	一部磨り	円形
61	円盤	SI-16	1/2	37×5.25	1.15	28.0	一部磨り	楕円形
62	円盤	SI-16	一部欠	4.85×5.0	0.75	22.0	一部磨り	円形

第16号住居跡出土石器

図版No	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
63	覆土	両刃鏨	(2.9)	7.5	7.1	(680.0)	砂岩	右25 織打痕と研磨面あり
64	覆土	敲き石	13.6	7.6	6.8	850.0	石英斑岩	右26 被熱
65	覆土	臼み石	(9.4)	(3.0)	3.5	(205.0)	雲母片岩	右27 表面に凹み
66	覆土	石鍬	3.7	(2.7)	0.9	(5.0)	チャート	右28 先端に光沢のある使用痕
67	覆土	スクレーパー	3.3	2.2	1.3	7.3	チャート	右29 主要剥離面が残る

2. 壺穴遺構 (SX)

第1号壺穴遺構 [SX-1 (旧第10・11号住居跡)] (第41~44図 P L 9・49・50・53)

位 置 調査区中央南側のV-25・26付近に所在。

重複関係 第9号住居跡と重複し、新旧関係については明確ではないが、出土土器から本遺構が古いものと考えられる。

規 模 遺物出土位置からおよそ長径8m×短径5mの不整な梢円形と推定される。

壁 明確な立ち上がりが確認できなかった。遺物の垂直分布から10cm程度か。

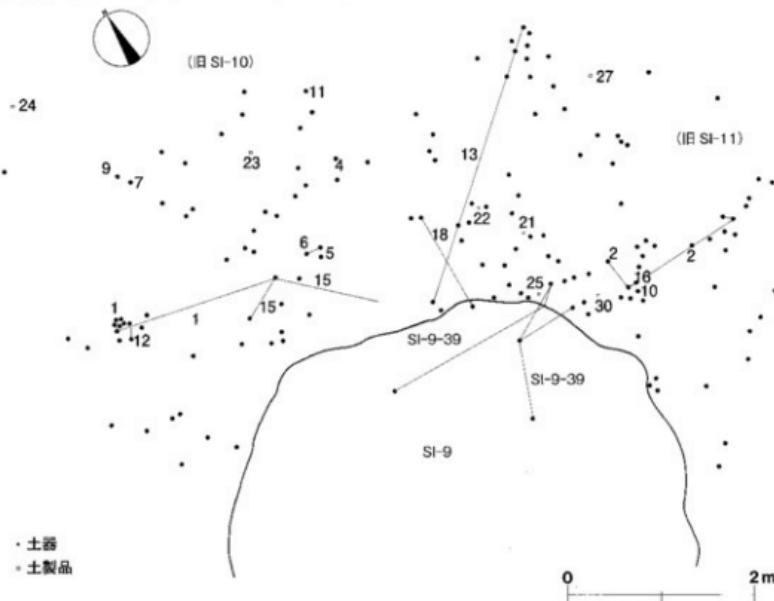
床 平坦であったが床面は明瞭でなく、特に踏み固められたところはない。

炉 明瞭なものは確認できなかったが、小規模な焼土の堆積が見られた。第9号住居跡内の炉2が本遺構にかかるかも知れない。

柱 穴 確認されていない。

覆 土 覆土は暗褐色土でローム層への変化が漸移的であった。遺物は暗褐色土から出土している。

遺物出土状況 比較的まとまって面的に遺物が出土し、およそ10cm幅の垂直分布を持つ。完形品



第41図 第1号壺穴遺構遺物出土状況

は見られないが1・2の大型土器の破片なども出土している。遺物の出土状況は大きく西側と東側のまとまりが見られる。そして、第16号住居跡出土土器と接合する破片も出土している。

出土遺物 1は口縁部に凹線による無文帯を持ち、胴部に下垂文が10単位描かれ、縄文帯と無文帯が交互施文される。5・6は鉢形土器の口縁部であり、6には粘土板を貼り付けた把手が付く。17は薄手で丁寧な作りの土器で、特殊な器形を呈し、第16号住居跡の24・25とも同一固体と考えられる。

2は大型の深鉢形土器の胴部破片であり、2本組の隆起線によって区画文が描かれ、隆起線間は無文となる。3の内面及び外面には炭化物が付着している。4は口縁部が直立するもので、縄文施文部分に赤色顔料らしいものが付着している。7は口縁部が波状となり、波頂部には穴が開き把手となる。12についても2本組の隆起線による文様が描かれる。

土製品として土器片錠が8点(20~27)出土している。

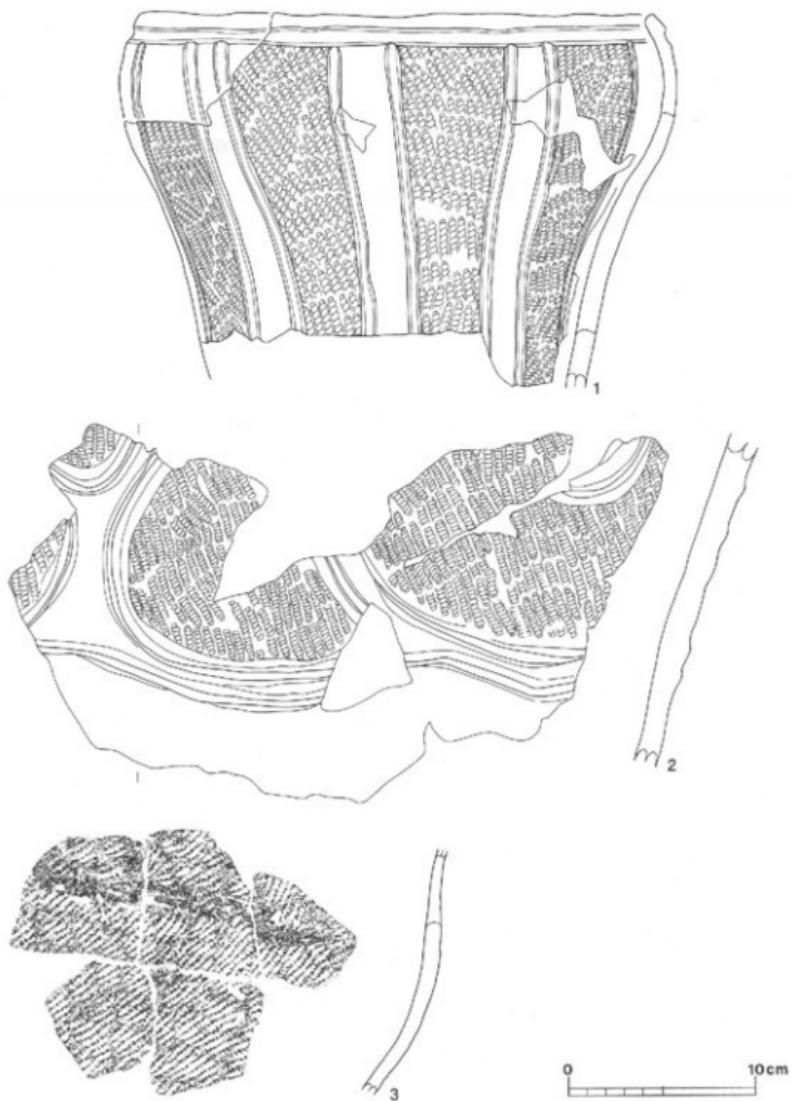
所 見 本遺構は当初第9号住居跡と重複する別な複数の住居跡(旧SI-10・11)として調査を開始したものである。しかしながら、明確な壁・床・柱穴などは確認できず平面形態が明瞭でなかったことから、現地調査では住居跡から除外され遺構平面図は作成していない。しかしながら、遺物が一定のまとまりで出土している状況があり、単なる包含層として括ることも妥当でないことが考えられることから、ローム層を明瞭に掘り込まない浅い皿状の遺構との解釈で竪穴遺構として扱った。1基の遺構として報告してはいるが、遺物の分布状況や出土土器から2基の遺構の重第1号竪穴遺構出土土器

実戦No.	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁	A:(27.3) C:(19.9)	にぶい黄緑	石英・長石・赤色粒△ 砂粒○	平縁。キャリバー形を呈する。口唇部下に凹線が巡り無文帯が作成され、以下には凹線が巡り無文帯と縄文帯の交互施文となる。	No196 炭化物付着
4	深鉢	口縁	A:(27.8) C:(9.0)	にぶい褐	石英・長石・砂粒○	平縁。口縁部が直立する器形。口唇下に幅の広い無文帯が作成され、隆起線が巡る。以下にはRIL施文が施文される。	No187 器面に赤色顔料付着

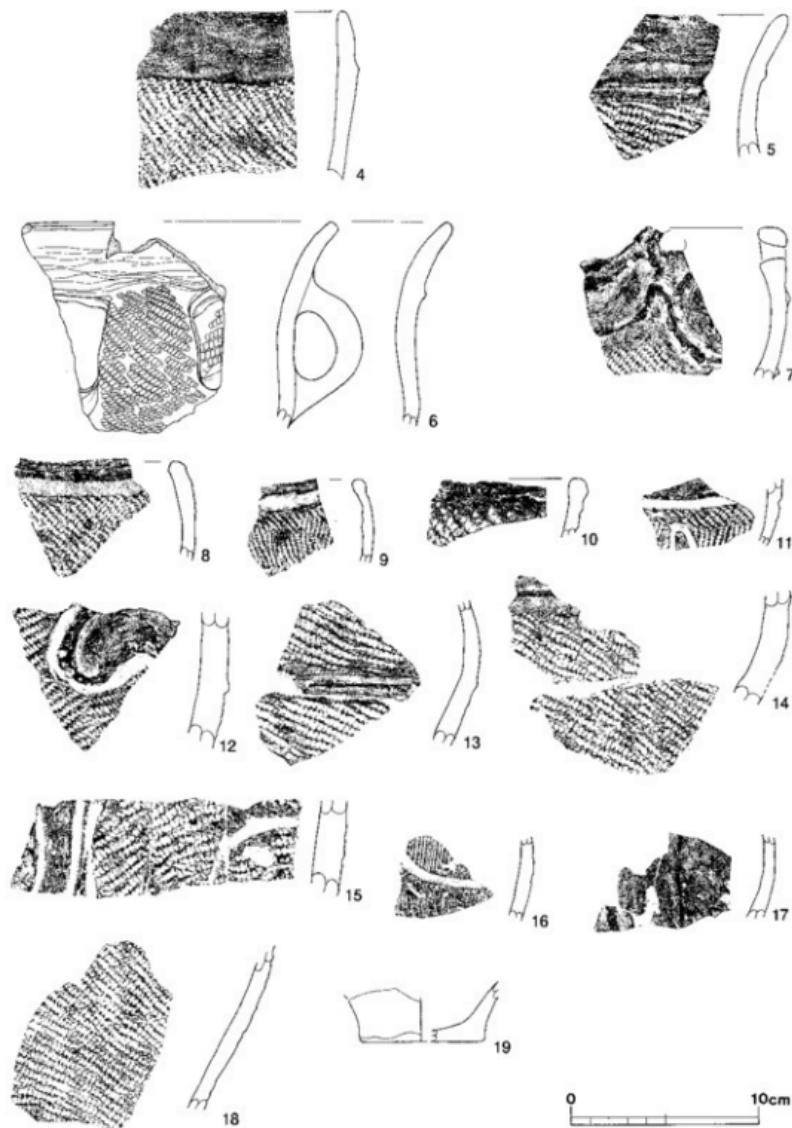
実戦No.	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
19	深鉢	底	B:(6.8) C:(2.8)	にぶい黄緑	石英・長石△	無文。器面荒れる。	No188

第1号竪穴遺構出土土製品

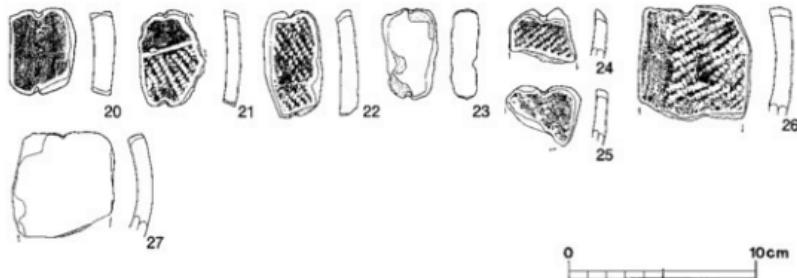
実戦No.	種類	出土位置	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	断縁整形	備考
20	土器片錠	SX-1	完形	4.55×3.5	1.1	23.0	全周断り	切り目1対
21	土器片錠	SX-1	一部欠	5.1×3.45	0.8	17.0	一部断り	切り目1対
22	土器片錠	SX-1	完形	5.6×3.1	0.95	23.0	全周断り	切り目1対
23	土器片錠	SX-1	完形	4.8×2.9	1.45	21.0	一部断り	切り目1対
24	土器片錠	SX-1	1/2	2.9×3.6	0.7	8.0	一部断り	打ち欠き1ヶ
25	土器片錠	SX-1	1/2	3.2×3.95	0.7	7.0	全周断り	切り目1ヶ
26	土器片錠	SX-1	一部欠	6.0×5.95	1.1	50.0	一部断り	切り目1ヶ
27	土器片錠	SX-1	一部欠	5.6×5.4	0.85	36.0	一部断り	切り目1ヶ



第42図 第1号竪穴造構出土遺物（1）



第43図 第1号竪穴遺構出土遺物（2）



第44図 第1号竪穴造構出土遺物（3）

複の可能性がある。本遺構出土土器には第16号住居跡出土のものと接合するものがあり、遺構間の関連が窺われる。本遺構の時期については、出土遺物が中期後半の加曾利E3式土器が見られることから同期の所産と考えられる。

3. 土坑（SK）

土坑は全部で38基検出された。分布は調査区中央から東側にまとまっている。ほとんどの土坑が詳細な時期が不明で、判明したものは第16・33・44・50・51号土坑の5基のみである。また、第28・31・32・33・34・35・36号土坑の7基は形態から陥し穴と考えられるものである。長軸方向は第34号土坑以外、北から西に15~30°程振れ比較的揃っており、大きな時期差はないものと思われる。これらの土坑の帰属時期については出土遺物が明確でないものが多いが、多くは中期のものと想定される。

第16号土坑〔SK-16〕（第49~51図 P L 12・50・53）

位 置 2G-25・26区に位置する。

規 模 長径195cm×短径165cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは63cmである。

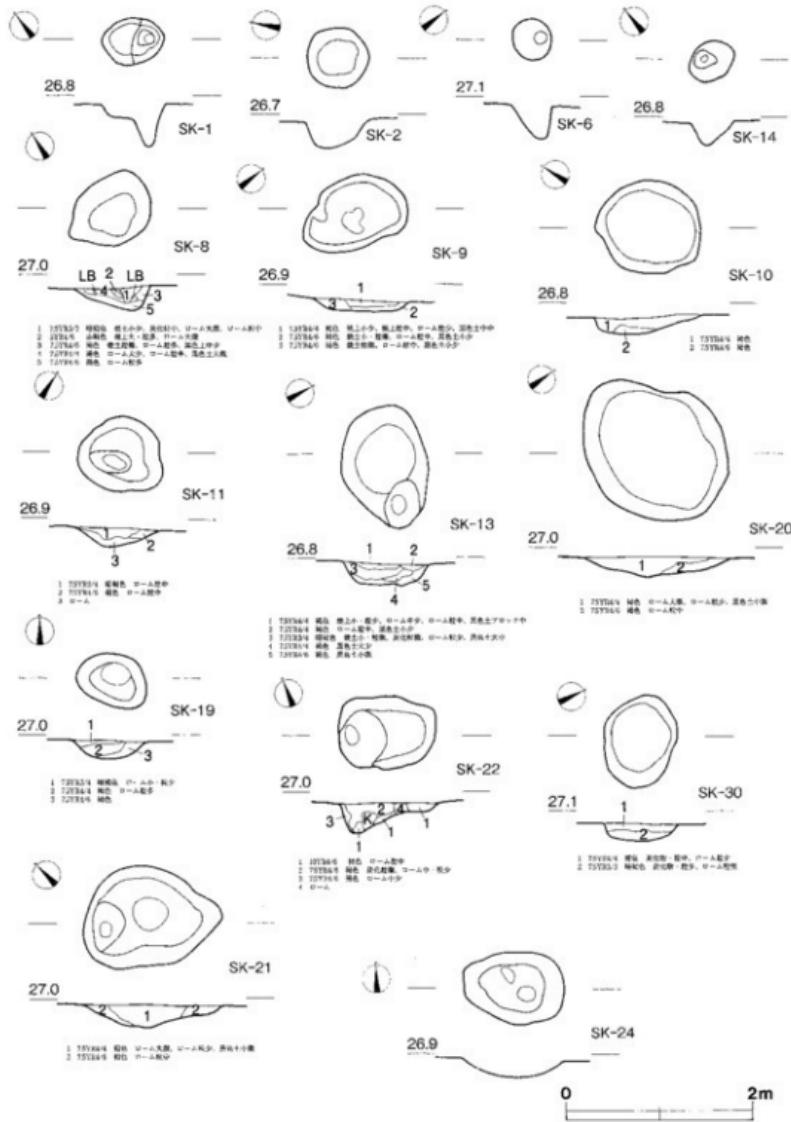
長径方向 N-3°-W

断面形態 壁は外傾し、底面は平坦である。

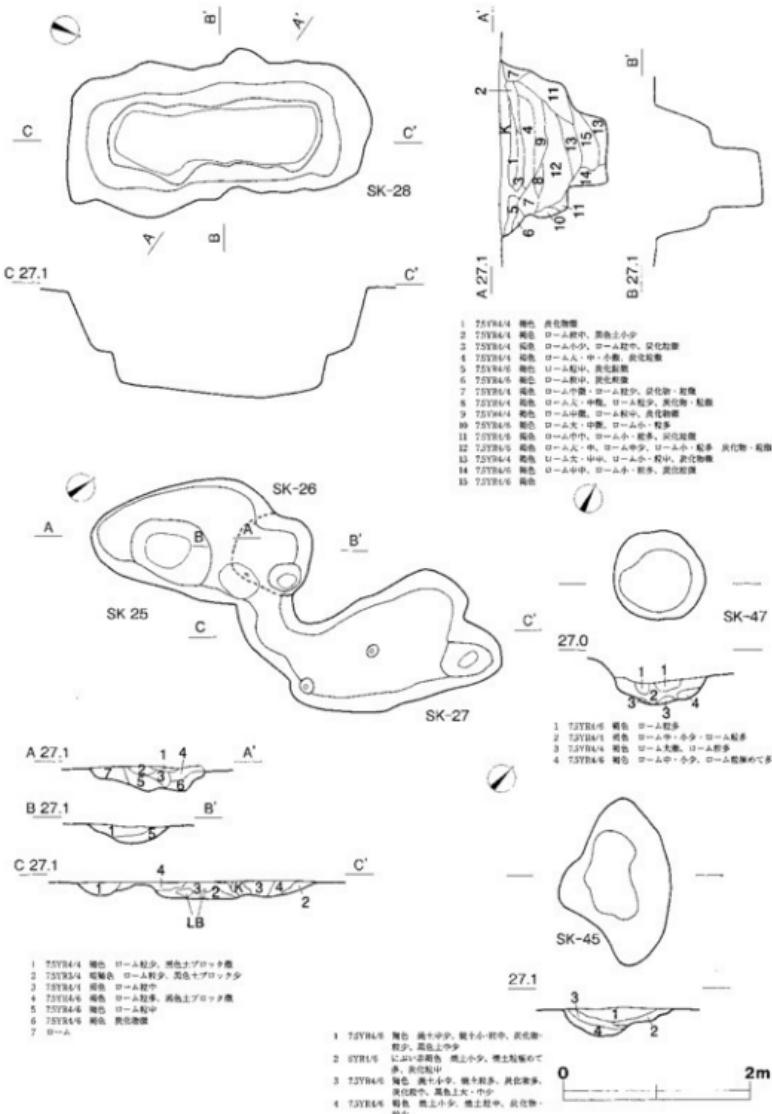
覆 土 自然堆積の状態を示し、遺物は覆土上層から出土している。

出土遺物 1~4は全て深鉢である。1は大型の深鉢形土器で逆U字状区画文を描く。2は口縁部に無文帯が区画されたものである。4は底部である。このほか土製品として土器片錐が1点(5)出土している。また、固化してはいないが軽石片が2点とチャート剥片が1点出土した。

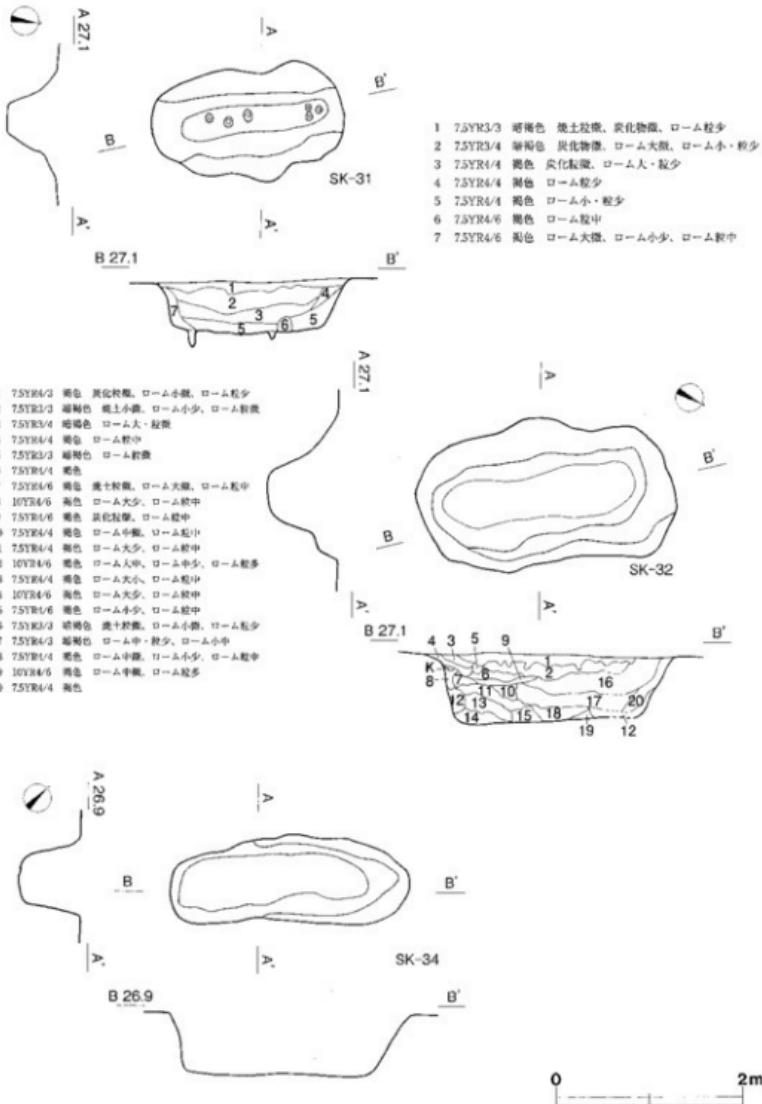
所 見 出土遺物から中期後半の加曾利E3式期の遺構と考えられる。



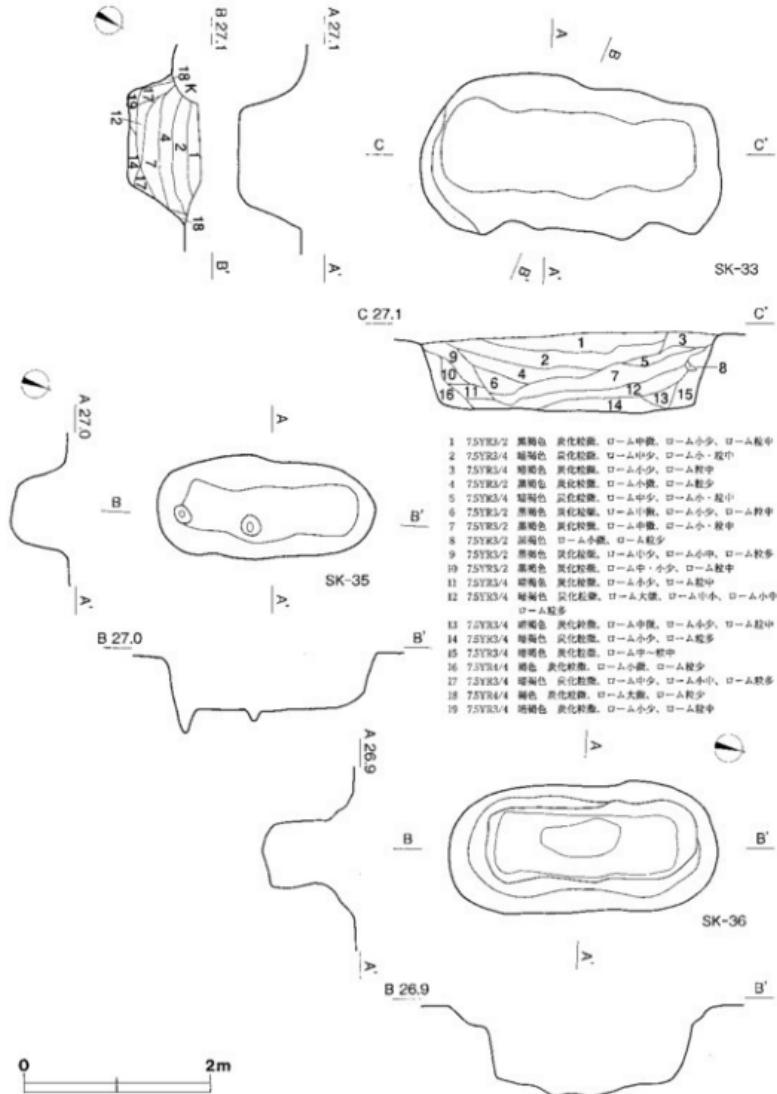
第45図 第1・2・6・8~11・13・14・19~22・24・30号土坑



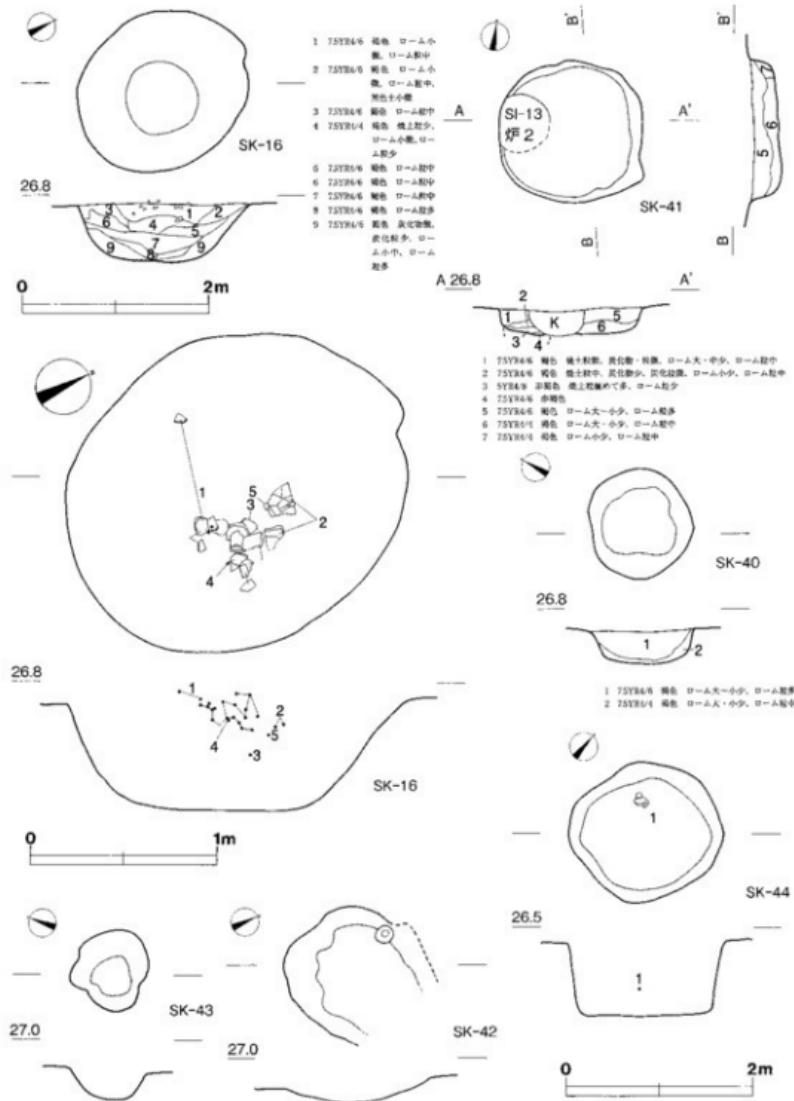
第46図 第25~28・45・47号土坑



第47図 第31・32・34号土坑



第48図 第33・35・36号土坑



第49図 第16・40~44号土坑

第16号土坑出土上器

図版No	器種	部位	法量 (cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	側	C : (38.3)	浅黄橙	石英・長石・雲母○△	大鉢上器の側部破片。2本筋の隆起線による区画文が施され、区画内はRL繩文を施す。区画間は無文帯となるが一部繩文帯。	No.270 炭化物付着
2	深鉢	口縁～側	A : (37.3) C : (21.3)	にぶい黄橙	石英・長石○、黒色片△	平縁。キャリパー測を呈する。口縁部下に円溝が2条通り無文帯が作出さ、以下には平縁RL繩文施文。口縁部が肥厚する。	No.271
4	深鉢	底	B : 6.6 C : (4.2)	にぶい黄橙	石英・長石○、赤色粒△	底面凸レンズ状となる不安定な底部で厚手。無文であるが内外面にミガキが施されている。	No.273

第16号土坑出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	周縁整形	備考
5	土器片錐	SK-16	一部欠	4.35×4.12	1.0	22.0	打制	切り目1封

第33号土坑 [SK-33] (第48・51図 P L 11・53)

位 置 Y・Z-27区に位置する。

規 模 長径3.20cm×短径165cmの長楕円形を呈し、確認面からの深さは83cmを測る。

長径方向 N-25°-W

断面形態 壁は外傾し、底面は平坦である。

覆 土 19層からなる。

出土遺物 土製品として土器片錐が1点(1)出土している。

所 見 形態的に階級穴と考えられ、第32号土坑と形態的に類似し近接して存在する。遺物として中期後半の土器片錐が出土しており、同期の遺構と考えられる。

第33号土坑出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	周縁整形	備考
1	土器片錐	SK-33	2/3	2.65×27	1.15	9.0	全周磨り	切り目1ヶ

第44号土坑 [SK-44] (第49・51図 P L 13・50・53)

位 置 C・D-13・14区に位置する。

規 模 長径166cm×短径150cmの円形を呈し、確認面から深さは38cmを測る。

長径方向 N-125°-W

断面形態 壁は外傾し、底面は平坦である。

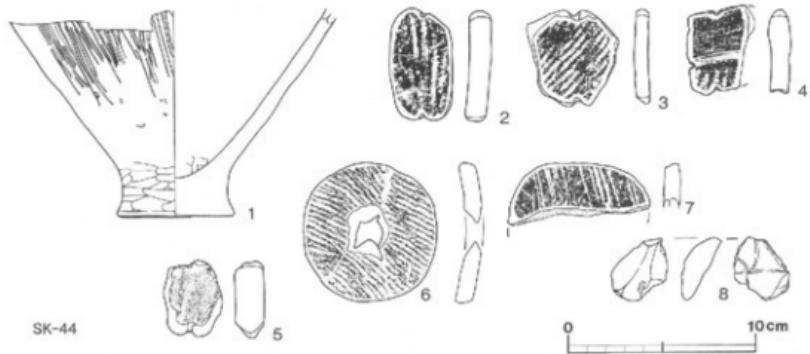
覆 土 覆土の下層から遺物が出土している。

出土遺物 1は深鉢の底部で、張り出るものである。底面は赤彩されている。このほか土製品として、土器片錐が4点(2~5)、有孔円盤が1点(6)、土製円盤1点(7)、焼成粘土塊(8)が出土している。

所 見 出土遺物から中期後半の加曾利E3式期の遺構と考えられる。



第50図 第16号土坑出土遺物（1）



第51図 第16(2)・33・44号土坑出土遺物

第44号土坑出土土器

図版No	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴～底	B:6.2 C:(11.0)	棕	石英・長石 ○	底盤は厚手で、腹部へ外傾する。肩部には縦な 參縫文が施文される。底部はナデられ、底面は ミガキが施される。	No278

第44号土坑出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	縁縫整形	備考
2	上器片縫	SK-44	完形	5.9×3.4	1.2	24.0	全周磨り	切り目1対
3	下器片縫	SK-44	完形	5.1×4.75	0.8	22.0	一部磨り	切り目1対
4	上器片縫	SK-44	一部欠	4.5×3.6	1.15	58.0	一部磨り	切り目3ヶ
5	下器片縫	SK-44	完形	4.1×3.05	1.6	20.0	打削	切り口上端2ヶ下端1ヶ
6	有孔刃盤	SK-44	完形	7.5×7.1	0.9	61.2	全周磨り	表面より空孔
7	円盤	SK-44	1/3	2.9×7.5	0.8	21.0	全周磨り	橢円形
8	焼成粘土塊	SK-44	完形	3.2×3.0	1.4	8.0	—	No280

第50号土坑〔SK-50〕(第52~54図 P L 13・51)

位 置 2E・2F-16・17区に位置する。

規 模 長径180cm×短径157cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは75cmを測る。

長径方向 N-95°-E

断面形態 壁は外傾し、底面は平坦である。

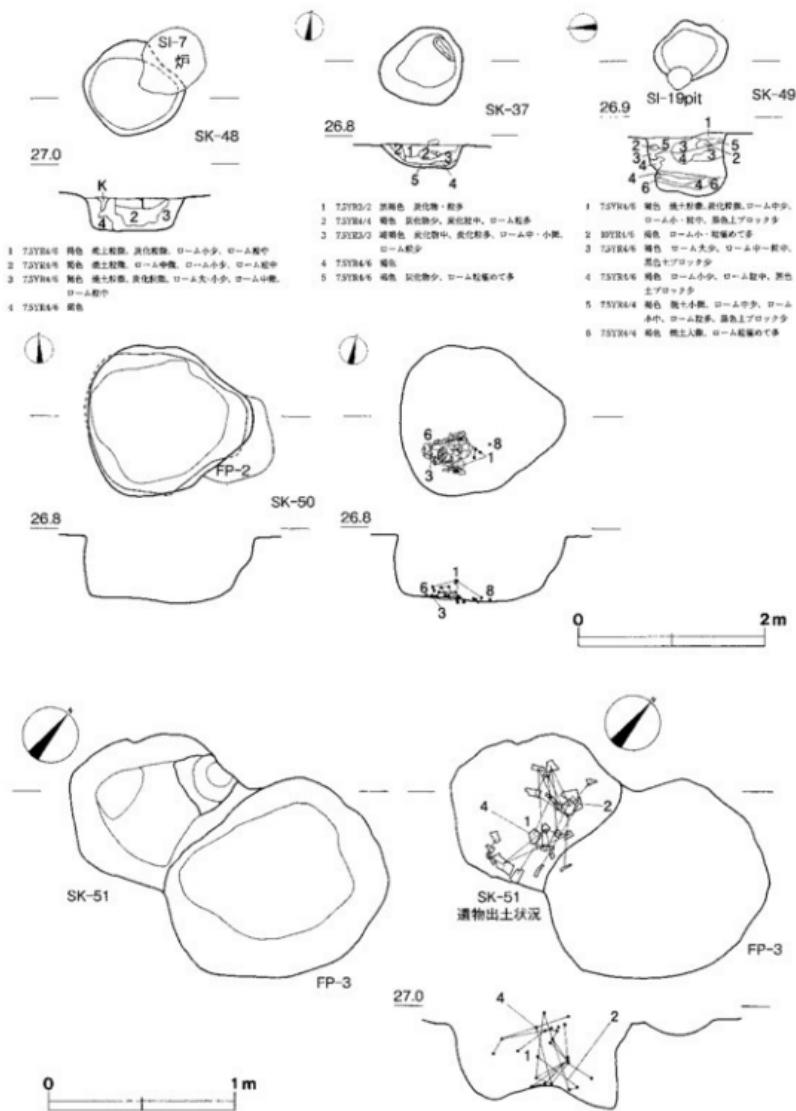
覆 土 遺物は覆土下層・底面から出土している。

出土遺物 前期末葉の土器が出土している。1は図上で口縁から底部にかけての器形が復元できたものでバケツ形を呈し、結節縄文が横位施文される。3は口唇に刻目が施され、いずれも結節縄文が横位施文される。

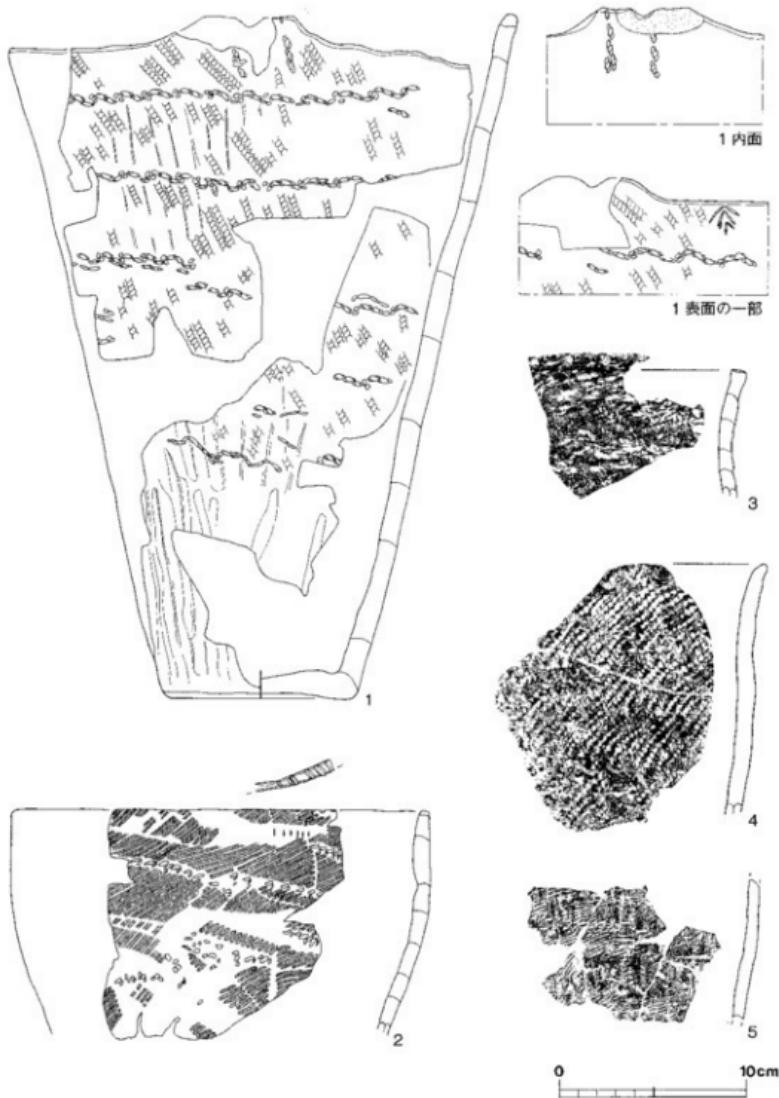
所 見 本遺構の時期は、出土遺物から前期末葉に属すると判断される。当地域においてこの時期の遺物は出土するものの、明確な遺構としては稀な存在である。遺構の形態としては後の時期に盛行する貯蔵穴を想起させる。

第50号土坑出土土器

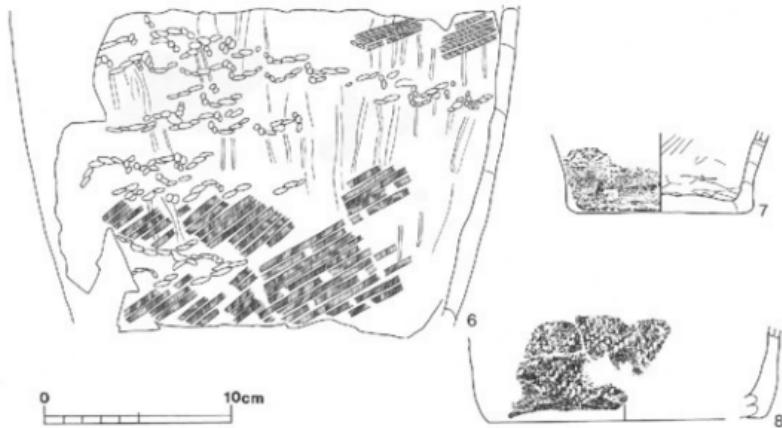
図版No	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁～底	A:(27.1) B:(9.7) C:(36.5)	浅黄棕	長石○、石英△、色粒△	波状縫。器形はやや外傾して圓く。RL結節縄文 が全周に施文される。底頂部表面に薄り、縄文 原体の側面研磨あり。口縁に意匠文あり。	No255・256・ 257の合成
2	深鉢	口縁～胴	A:(22.5) B:(12.3)	褐灰	石英・長石 ○	平縫。口近付近に跡み目を持ち立上る。口縁 部の一筋に刻み目を施す。順いLR結節縄文を横 位軸で全面に施す。	No251 5と同一個体
6	深鉢	胴	C:(16.6)	にぶい赤褐	石英・長石 △	やや外傾する胴部破片。ヘラ状工具による調整 後のLR結節縄文が全面に横位軸施文される。	No254
7	深鉢	底	B:(10.0) C:(4.5)	棕	石英・長石 ○	器面にLR結節縄文施文。底面ミガキ。	No253
8	深鉢	底	B:(14.9) C:(4.6)	にぶい赤褐	石英・長石 ○	器面にLR結節縄文が横位軸施文される。底面はミ ガキ。	No252 炭化物付着



第52図 第37・48~51号土坑



第53図 第50号土坑出土遺物（1）



第54図 第50号土坑出土遺物（2）

第51号土坑〔SK-51〕（第52・55図 P L14・50）

位 置 2 A - 15区に位置する。

規 模 長径90cm×短径70cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは45cmを測る。

長径方向 N - 15° - E

断面形態 壁は外傾し、底面は凸凹である。

覆 土 遺物は覆土・底面から出土している。

出土遺物 大型の深鉢で、キャリバー形を呈すると思われる。口縁部に微隆起線が巡り無文帯が区画される。土製品として土器片錐が2点（3・4）出土している

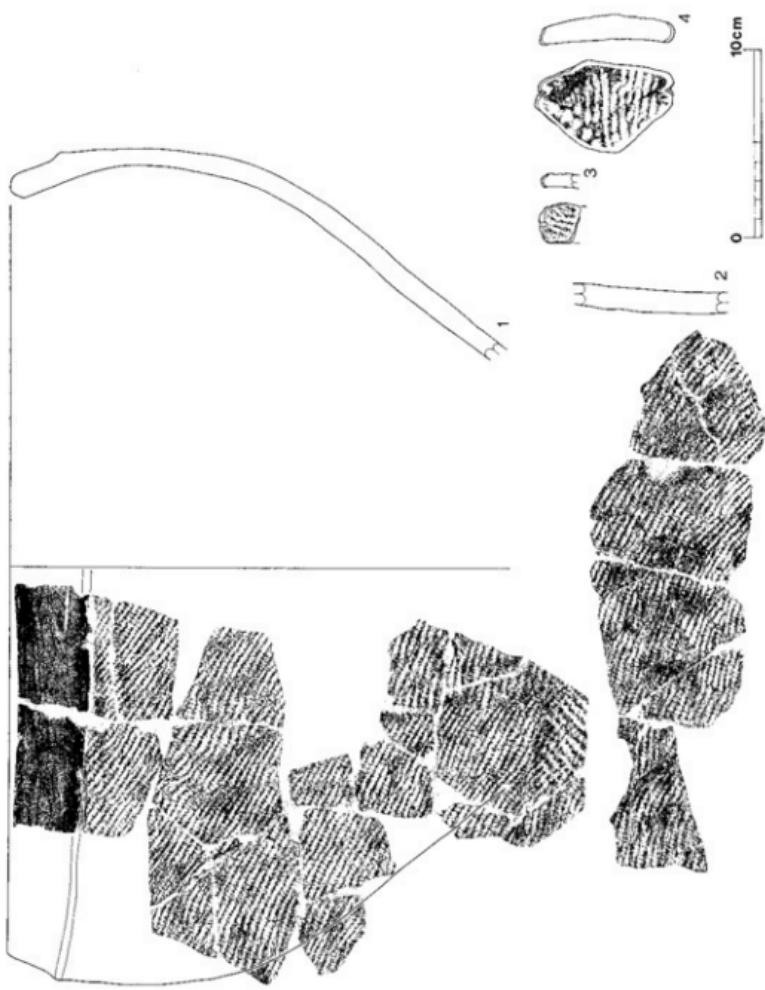
所 見 当初は土器埋設遺構として調査したが、遺物出土状況から土坑として扱った。出土遺物から中期後半の加曾利E 3式～E 4式期の遺構と考えられる。

第51号土坑出土土器

図版No	器種	部位	法量 (cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	鉢	口縁～胴	A : (41.8) C : (26.8)	灰褐色	石英・長石・ 金雲母等	底部から大きく開き、口縁部がやや肥厚し内削 する。口縁部下に隆起線が巡り無文帯となる。 以下には上部縁文が施文される。	Noなし

第51号土坑出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	周縁縁形	備考
3	土器片錐	MY-5	1/2	2.15×2.1	0.7	4.0	全周削り	切り目1ヶ
4	土器片錐	MY-5	完形	7.3×4.7	1.3	46.0	一部削り	切り目1対



第55図 第51号土坑出土遺物

4. 土器埋設遺構 (MY)

調査エリア内からは3基の土器埋設遺構が確認されている。これらの遺構はいずれも掘り込み内に土器を埋設したものである。そして、これらの遺構は今回の調査エリア内の北側に寄って確認された。遺存状況はいずれも良好ではない。

第2号土器埋設遺構 [MY-2] (第56・57図 P L 14)

位 置 2 G - 17区に位置する。

規 模 長径50cm × 短径45cmの円形を呈し、確認面からの深さは10cmを測る。

長径方向 N - 30° - W

断面形態 壁は外傾し、底面は平坦である。

出土状況 掘り方を埋め戻した後、掘り方の北西寄りに底面から2.5cm上（2層上面）の位置に、深鉢形土器底部が正位で確認された。本来土器の胴上部も存在したものと思われる。

出土遺物 2は深鉢の底部である。底部が突出した無文の土器で、底面が膨らみをもつ。外面の下部にヘラ削り調整が見られる。

所 見 出土遺物から中期後半の遺構と考えられる。

第3号土器埋設遺構 [MY-3] (第56・57図 P L 14)

位 置 Z - 12区に位置する。

規 模 長径 (50) cm × 短径38cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは9cmを測る。

長径方向 N - 45° - E

断面形態 壁は緩斜し、底面は皿状である。

出土状況 掘り方を埋め戻した後、土器より一回り大きな掘り込みを行い、深鉢形土器が正位の常態で据えられている。確認時では底部のみであったが、本来は一定の大きさのものであった可能性が高い。

出土遺物 1は深鉢形土器の底部で全面に縄文が施される。

所 見 出土遺物から中期後半の遺構と考えられる。

第4号土器埋設遺構 [MY-4] (第56・57図 P L 15)

位 置 2 C - 9区に位置する。

規 模 長径130cm × 短径100cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは5cmを測る。

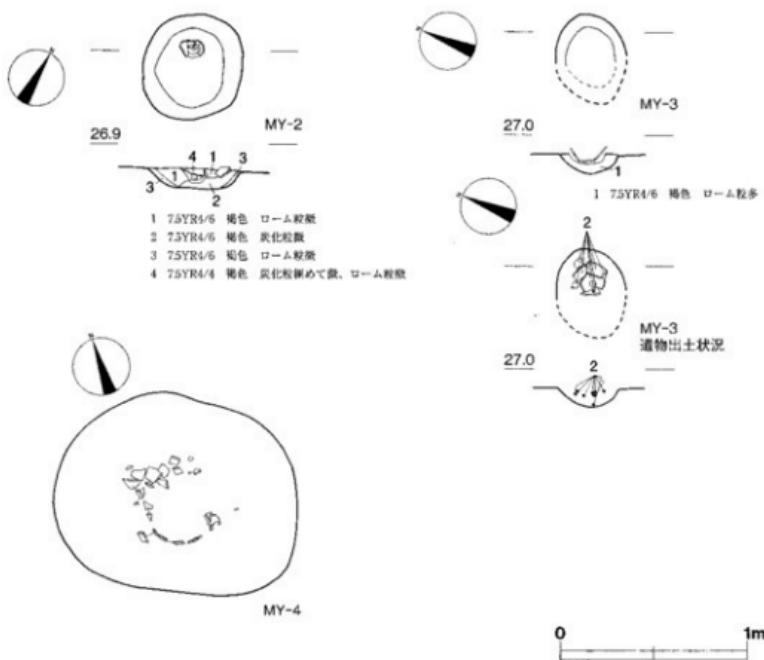
長径方向 N - 62° - W

断面形態 壁は緩く立ち上がり、底面は皿状である。

出土状況 深鉢形土器が細かく割れながらも、土器埋設の状況が理解できる。掘り方のほぼ中央に埋設されている。

出土遺物 大型土器の底部で無文である。網代痕が底面に認められる。時期は中期前半であると思われ、器種については浅鉢と考えられる。

所 見 出土遺物から中期前半の遺構と考えられる。



第56図 第2～4号土器埋設遺構

第2～4号土器埋設遺構出土土器

器種No	部位	法量 (cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴～底 B : 5.7 C : (17.5)	にぶい水緑	石英・長石・ 金雲母○	底部から外傾して立上がる。器面上にRL線文を複数有し、底部側縁でナデられ無文。底面は荒れる。	No.259 MY-3
2	深鉢	胴～底 B : 5.4 C : (13.8)	橙	石英・長石 ○	底部がやや丸め、胴部は外傾して開く。器面は無文で一部ミガキが施される。	No.258 MY-2 茶化程度
3	浅鉢	胴～底 B : (22.4) C : (16.5)	にぶい黄緑	石英・長石 ○	底径が大きく、著しく外傾する。器形はバケツ状を呈する。器面は無文。内面は丁寧にナデられている。底面には網代板が残る。	No.260・262 MY-4 網代板



第57図 第2～4号土器埋設構出土遺物

5. 集石 (SS)

集石は石が一定の範囲でまとまって確認されたものである。その遺構を構成する石はほとんどが円錐である。いずれの遺構も調査エリア内の北側で確認された。

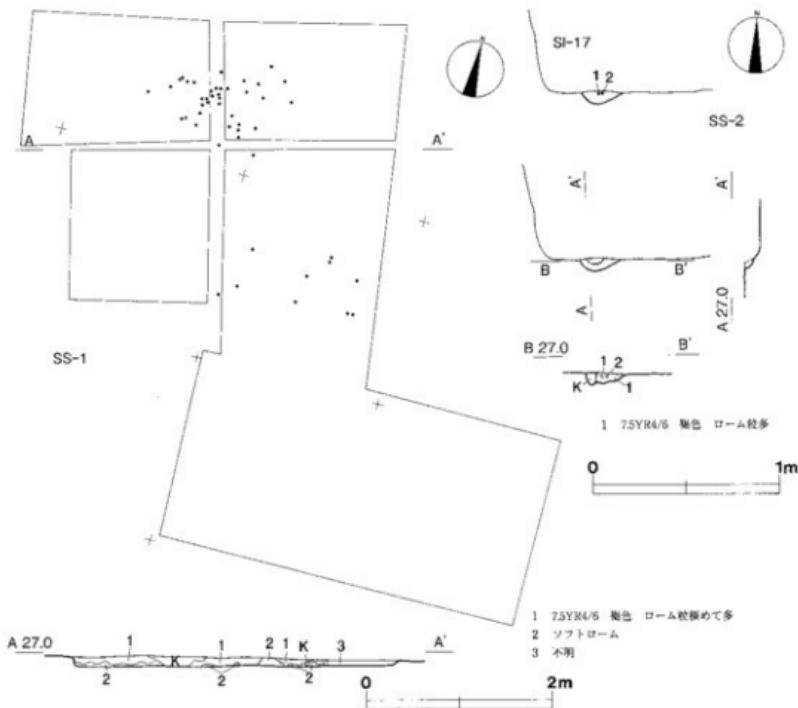
第1号集石 [SS-1] (第58図 P L15)

位置 2A・2B-3・4区に位置する。

重複関係 ほかの遺構との重複はない。

規模 およそ長径3m×短径1.5mに広がる。細かく見れば南北に2つのまとまりが確認できる。この集石に伴う掘り込みは確認できなかった。

出土遺物 集石は1・2層から出土し、レベル差はほとんどない。集石のまとまってみられる場所は2ヶ所あり、2A・2B-3区と2B-4区である。前者の方が分布を密にしまとまっている。後者は粗で数も少ない。



第58図 第1・2号集石・遺物出土状況

所見 集石の蹕はいずれも確認面で検出されたもので、集石下には掘り込みもなく、集石を構成する蹕自体に焼けた跡や使用痕跡なども認められないことから、この遺構の性格は不明である。遺構の時期は遺跡の状況より前期から中期と考えられる。

第2号集石〔SS-2〕(第58図)

位置 2A-8区に位置する。

重複関係 S I - 17と重複している。

規模 残存径は44cm、深さは13cmである。

出土遺物 覆土中から2点の蹕が出土している。

所見 この遺構は第17号住居跡の南壁で掘り込みの断面が確認されたものである。同住居跡内にも南側に寄って自然蹕が数点確認されており、本集石と関連のあるものと考えた。いわゆる集石土坑と呼ばれるものと同じと考えられる。遺構の時期は遺跡の状況より前期から中期と考えられる。

6. 焼土址(FP)(第59図 PL15・53)

焼土址は5基(FP-1~4・6)検出された。分布状況は第1~3号焼土址が比較的近寄っているが、全体的にまばらである。特に、第1・2号焼土址は第2号土器埋設遺構に近接して確認されている。そして、第2号焼土址は第50号土坑と重複し、第3号焼土址は第51号土坑と重複している。これらの重複関係は焼土址の方が新しい状況が確認されている。

これらの遺構は、焼土址と命名したものの、硬化した焼け面は確認されておらず焼土が覆土中から出土するだけであり、どちらかというと土坑に焼土が廃棄されたものと捉えた方が良いようと思われる。

出土遺物として第3・6号焼土址から土器片錐が1点ずつ出土している。

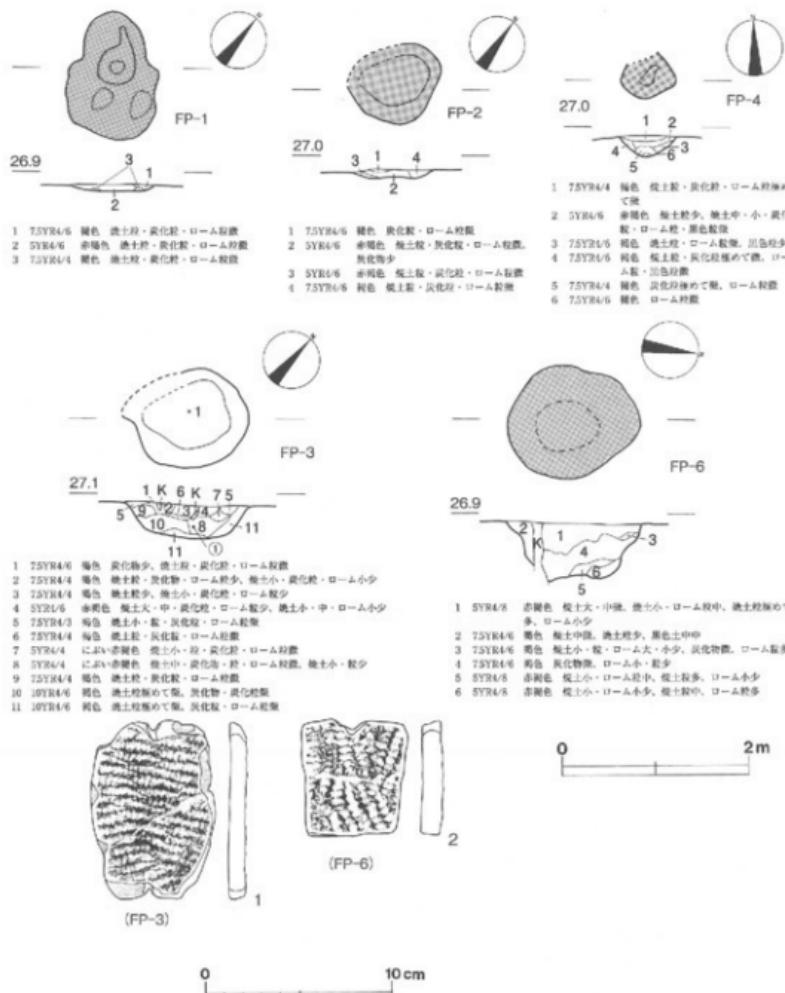
遺構の構築時期については、第3号焼土址が出土遺物から中期後半と考えられるが、他は時期判定となる遺物が見られず明確ではないが、およそ中期後半と想定される。

第3号焼土址出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	周縁整形	備考
1	土器片錐	FP-3	完形	95×6.6	0.9	80.0	全周削り	切り口1対

第6号焼土址出土土製品

図版No	種類	出土位置	残存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	周縁整形	備考
2	土器片錐	FP-6	完形	63×5.7	1.15	50.0	打削	打ち欠き1ヶ



第59図 第1~4・6号焼土址・出土遺物

7. 遺構外出土遺物

以下は遺構外から出土した遺物を a 土器、 b 土製品、 c 石器に分けて提示する。

a 土器（第60～67図）

各グリッドから出土した土器や時代が異なる遺構内から出土したものについて一括して時期ごとに図示した。時期は前期から後期まで及ぶが、主体は前期末葉と中期後半のものである。確認された遺構は中期後半のものがほとんどであるが、遺構外出土土器には前期末葉の土器が目立って出土しており、遺構はほとんど確認できなかったものの、この時期の生活の痕跡であることは明白である。

・前期

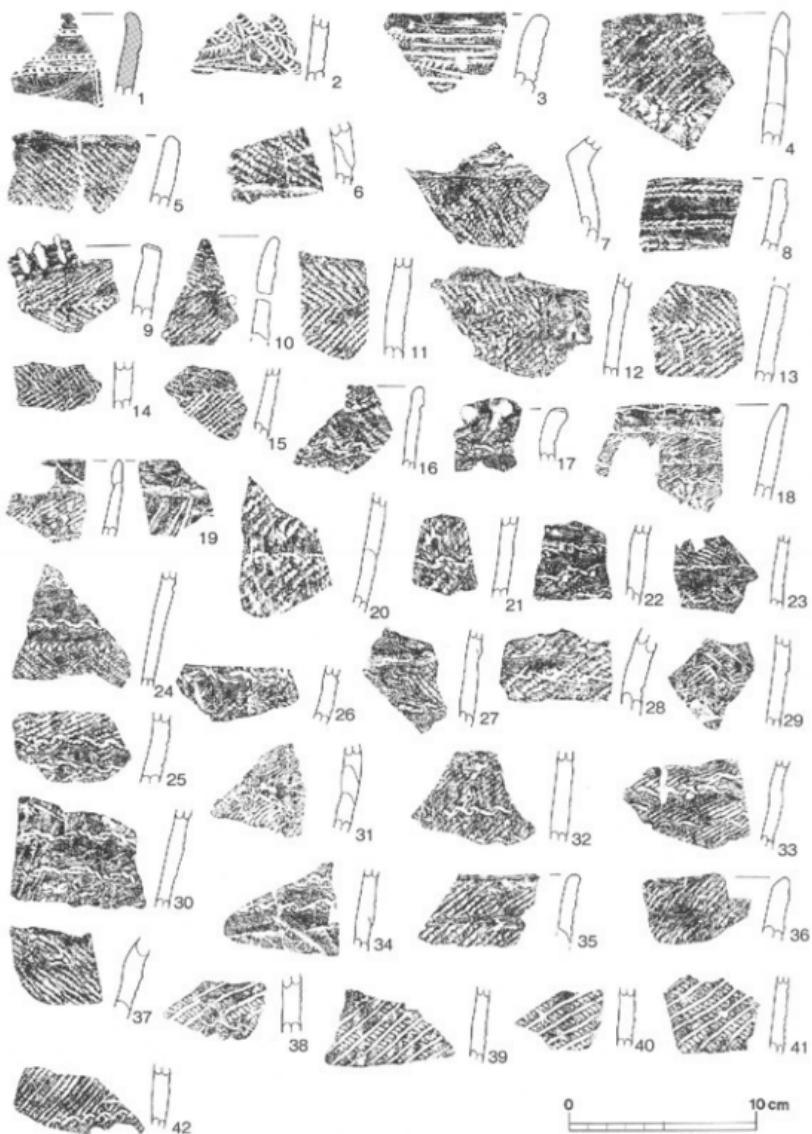
1・72は前期前半の土器でこの2点のみである。1は口縁部で72は底部である。いずれも胎土に纖維が混入する。1は半截竹管状工具による結節沈線や平行沈線で施文される。72はやや上げ底となる底部で、側面に幅広の押し引き文が巡る。

2・3・46～51・57～62・65は前期後半の上器で、浮島式土器や興津式土器の範疇やその影響のものと考えられる。2・3は口縁部または口縁部付近のものと考えられ、いずれにも幅広の半截竹管状工具による結節沈線が施文される。47～51は単沈線によって格子目状の沈線や雑な集合する沈線が描かれる。50・51は地文にRL繩文が施文されている。57～59は地文に貝殻波状文が施文されている。前期末葉段階の土器にも一部この文様が残ると考えられるが、ここで扱う。60は器面に半截竹状工具による変形爪形文が施文されている。61・62には口縁部に輪積痕が残る。65は集合沈線による区画文が描かれる。

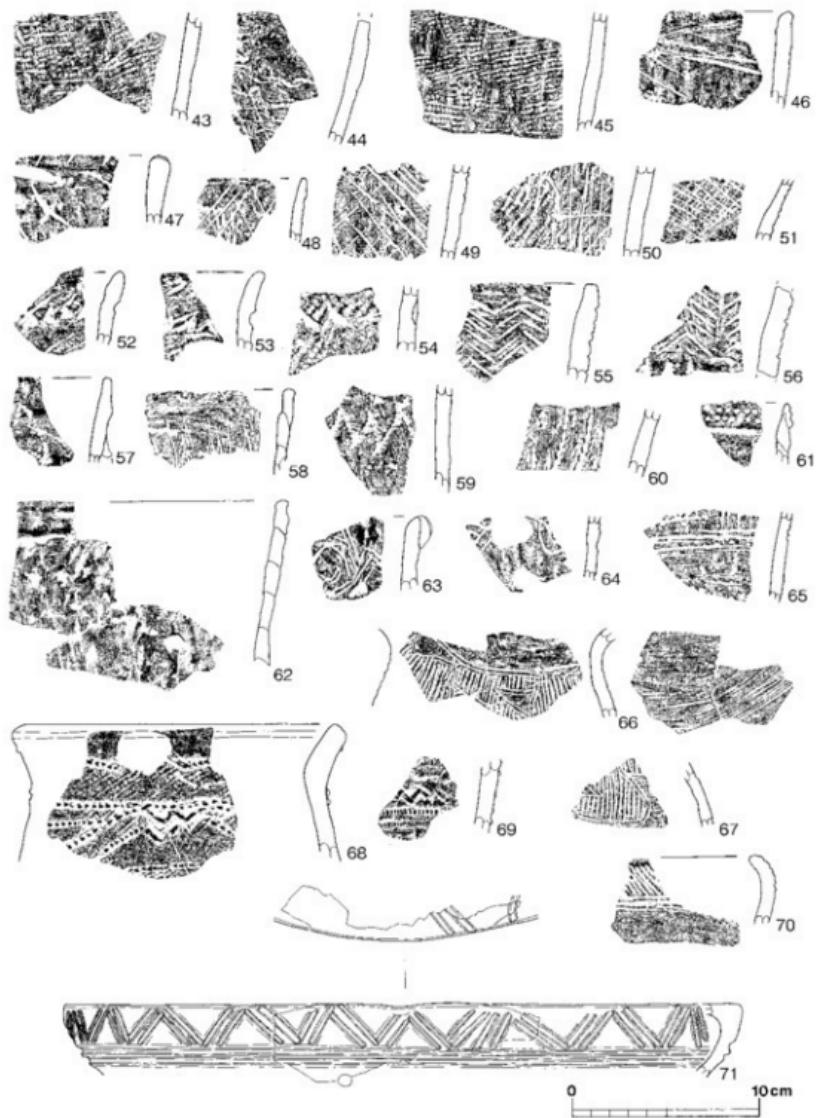
4～45・52～56・63・64・66～71・73～74は前期末葉の範疇の土器群と思われる。この中で主体を占めるのはS字状の結節繩文が横位回転施文される土器である。16～45にはS字状結節繩文が施文される土器、又は同施文が見られないが先の特徴を持つ土器と同一個体のものも含んでいる。これら以外に4～7のような結節の見られない横位回転繩文や、8の口縁部に繩文原体の側面圧痕が見られるもの、9～15の結束繩文による羽状繩文が施文されるものがある。また、これらの土器は沈線や隆起線などによる文様が描かれないことが特徴の1つとなっている。口縁部の残るものでは、4・19のように器面に輪積痕が残るものや、口唇部に刻み目が残るもの（9・17）、口唇部に結節繩文が施文されるもの（18）が見られる。この時期の土器の底部としては73・74などがあげられ、器面に結節繩文が横位施文されている。

75～79については前期後半から末葉のものとした方が妥当と思われる。

このほかにこの時期の本地域で主体的とならない土器として、十三菩提式や大木6式土器など



第60図 遺構外出土遺物（1）



第61図 遺構外出土遺物（2）

の他地域で盛行する土器文様が施された土器も出土している。52~54・63は口縁部の破片で縄文を地文に三角彫刻文が施文される。55・56は口縁部に連続する鋸歯状の沈線が巡り、頸部に凹凸文が巡る。63は突起の付く口縁部で、64同様に沈線による曲線文が描かれる。66・67は同様な施文の見られる土器で、沈線による幾何学的な区画文が描かれ、条線が充填される。68・69には半截竹管状工具によって押圧した浮線文などが貼付される。70は内溝する口縁部で沈線が巡り区画文となり、区画内に条線文が施文される。71は浅鉢で口縁部が大きく屈曲し口唇部に平端面を持つ。口縁部には2本1単位の鋸歯状文が展開する。一部焼成前の孔が開けられる。

・中期

80・81は中期初頭の五領ヶ台式土器の胴部破片で結節縄文が継回転される以外は無文である。82~86は中期前半の阿玉台式土器の破片で、口縁部文様帶の間隔が狭く、裏面に文様を持つものも見られることから比較的古手のものといえる。

87・88は中期中葉段階の土器の把手であろう。

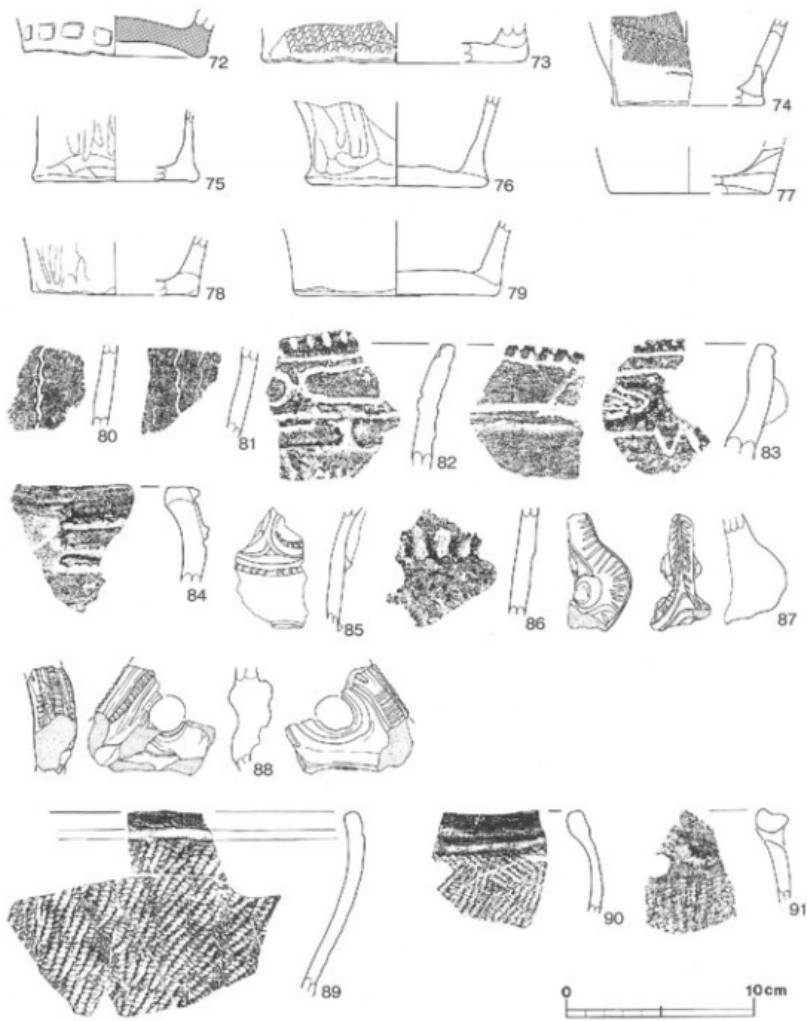
89~109は中期後半の土器で加曾利E式が主体となる。89・90には口唇部下に沈線などが巡り無文帯が形成され、縄文が地文となる。92は弱い波状縁で、沈線による区画文が見られ縄文が施文され、刺突文も見られる。93・94は縄文の地文のみが施文される。95は胴部破片で沈線による無文帯と縄文帯が交互に区画され、縄文帯部分に蛇行沈線が垂下する。96~98は条線文が施文される。99は無文、100には橋状の把手が付く。101~109は底部であり、101には垂下する沈線によって無文帯と縄文帯が交互に施文される。

・後期

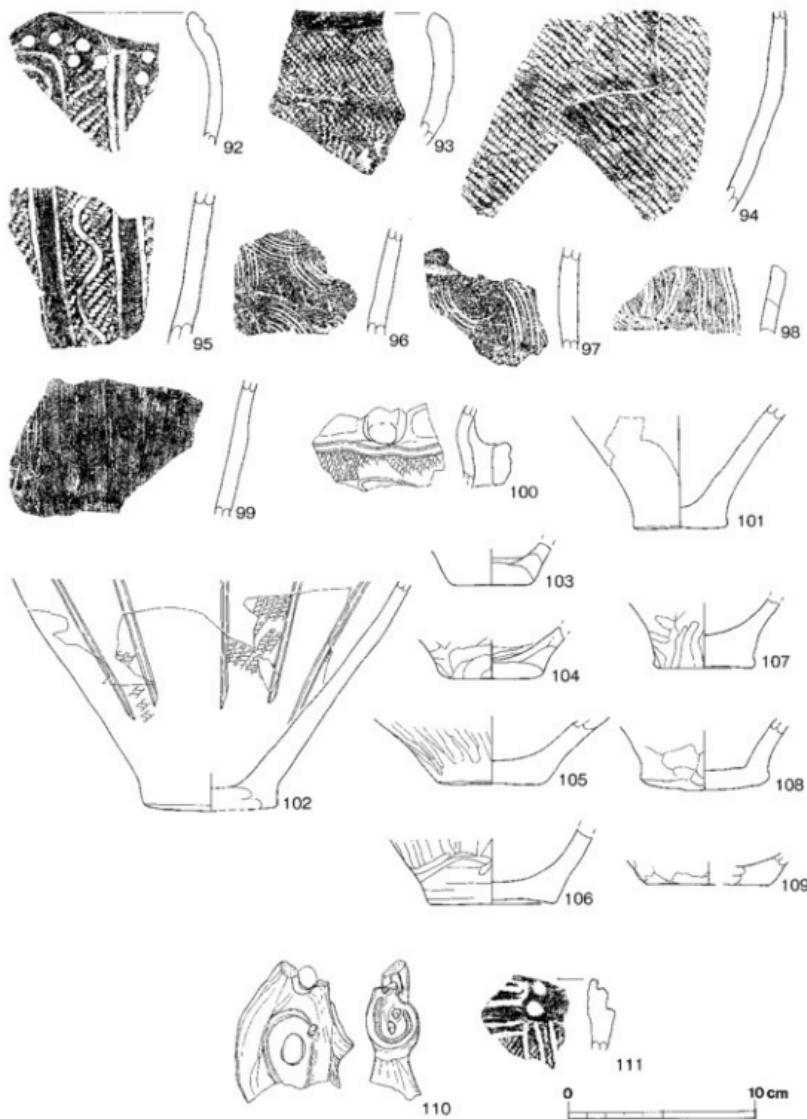
後期の土器は僅か出土しており、いずれも後期前半のものである。110・111がこれにあたる。110が称妙寺式土器の発達した把手、111は堀之内式土器の破片と考えられ、口縁部に盲孔や沈線文が施文される。

遺構外出土土器

図版No.	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
68	深鉢	口縁	A : (17.8) C : (7.3)	にせい褐色 ○、金雲母 ○	石英・長石 黒色粒○	半縁。頸部が弱く括れ内面に棱を持ち、口縁部はやや外張する。異色縄文を地文に、半截竹管状工具で押引きした斧縄文が施文される。	Noなし
71	浅鉢	口縁	A : (36.2) C : (4.1)	赤褐色	石英・長石 黒色粒○	口縁部が大きく屈曲し、口唇部に平端面を持つ。口縁部には2本1組の沈線による鋸歯状文・横縞文が施用し、口唇部の平端面も同様。	No.226 口縁部に赤褐色顔料付着
102	深鉢	底	B : (7.2) C : (12.1)	橙	石英・長石 ○	底部から頸部へ外傾する器形。底下する沈線により縦位置文が描かれ、無文帯と縄文帯が交互に廻回する。RL縄文が施文される。	No.263



第62図 遺構外出土遺物（3）



第63図 遺構外出土遺物（4）

b 土製品（第64図）

1~56が土器片錐、57~60が有孔円盤、61~65は土製円盤、66は焼成粘土塊である。土器片錐は56点出土しており、大きさによっておよそ3段階のものが見られ、1~12は小型であり多くは縦長のもので、11と12のみ横長となる。13~35・56は中型のもので多くが縦長で、56のみが横長となる。36~55はすべて縦長となる。大型のものはほど欠損しているものが多くなる。

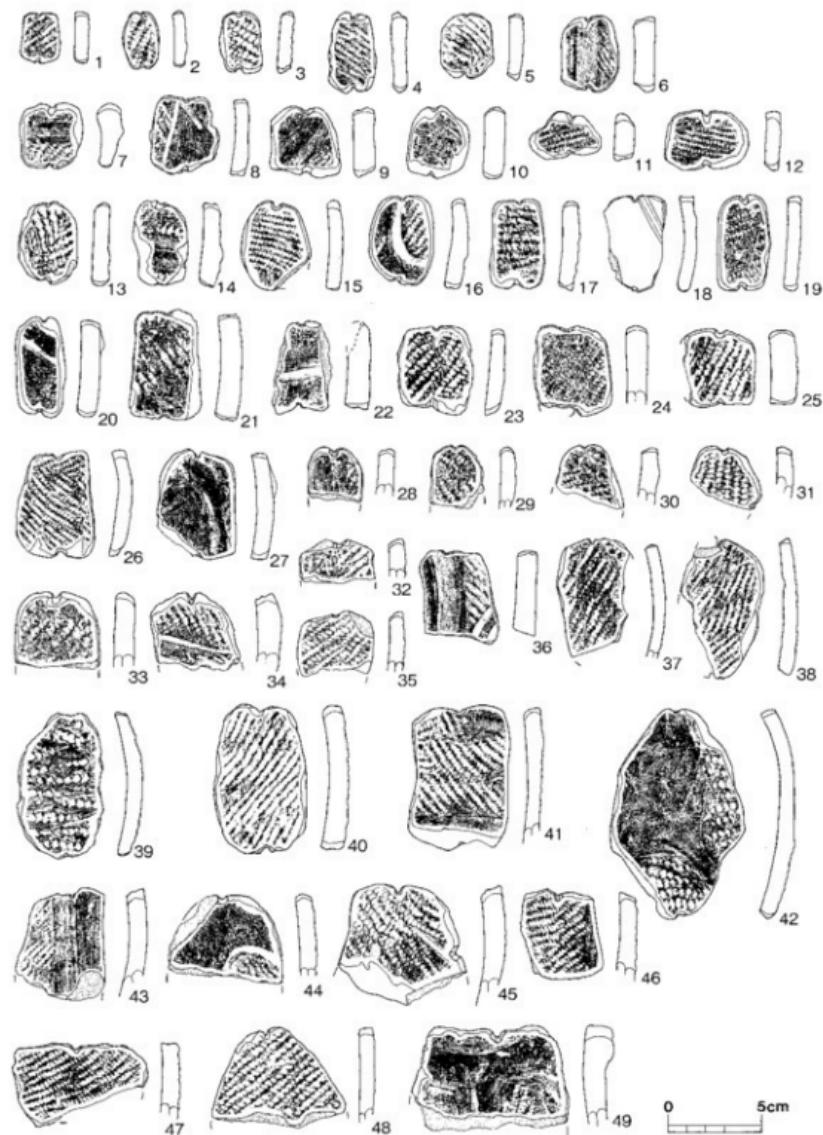
有孔円盤は4点出土している。いずれも中央部分と周辺部が丁寧に擦られており、特に中央部分裏面において継続的な回転運動による擦る行為の結果、孔が開くと考えられる。60は孔が開く前の段階のものと考えられ、貫通しない小さな孔が見られる。

土製円盤は5点出土しており、縁辺が明瞭に擦られたもの（61）や、縁辺が擦られてはいないが全体の形状が円形なものも含んでいる。

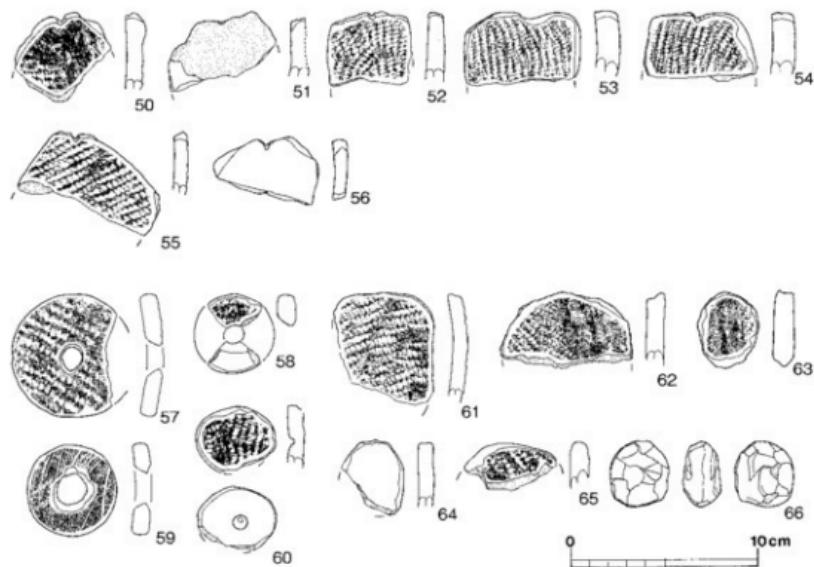
焼成粘土塊は1点（66）のみで、粘土を捏ねて作ったもので表面に指頭痕が残る。

遺構外出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	断縁形	備考
1	土器片錐	SH-1	完形	2.7×2.1	0.75	6.0	全周磨り	切り目1対
2	土器片錐	SD-1	完形	3.05×1.9	0.65	4.0	全周磨り	切り目1対
3	土器片錐	E-15	完形	3.35×2.2	0.8	8.0	全周磨り	切り目1対
4	土器片錐	SI-2	完形	4.3×2.55	0.85	12.0	全周磨り	切り目1対
5	土器片錐	SD-1	完形	3.5×2.8	0.7	10.0	全周磨り	切り目1対
6	土器片錐	SI-4	完形	4.1×3.05	1.2	17.0	全周磨り	切り目1対
7	土器片錐	エリア外	完形	3.5×3.35	1.25	14.0	全周磨り	切り目1対
8	土器片錐	ZJ-20	完形	4.15×3.7	0.8	16.0	一部磨り	切り目1対
9	土器片錐	SI-4	完形	3.75×3.8	1.15	19.0	一部磨り	切り目1対
10	土器片錐	R-22	完形	3.85×3.2	1.1	16.0	全周磨り	切り目1対
11	土器片錐	一透	完形	2.5×3.8	1.0	10.0	一部磨り	切り目1対
12	土器片錐	SI-6	完形	3.15×4.45	0.8	13.0	全周磨り	切り目1対
13	土器片錐	ZC-28	完形	4.5×3.15	0.95	18.0	全周磨り	切り目1対
14	土器片錐	ZJ-31	完形	4.5×2.95	1.15	17.0	全周磨り	切り目2対（十字）
15	土器片錐	SI-1	一部欠	4.8×3.7	0.7	15.0	全周磨り	切り目1対
16	土器片錐	SI-6	完形	4.8×3.5	1.0	20.0	全周磨り	切り目1対
17	土器片錐	20-30大	完形	4.75×2.9	0.95	19.0	全周磨り	切り目1対
18	土器片錐	ZD-19	完形	5.2×3.3	0.7	15.0	一部磨り	切り目1対
19	土器片錐	SI-6	完形	5.1×2.8	0.75	15.0	全周磨り	切り目1対
20	土器片錐	ZJ-20	完形	5.3×2.65	1.25	22.0	全周磨り	切り目1対
21	土器片錐	2A-15	完形	5.85×3.8	1.2	32.0	全周磨り	切り目1対
22	土器片錐	ZJ-20	完形	4.7×3.0	1.3	20.0	無調整	切り目1対
23	土器片錐	SI-1	完形	4.7×4.0	0.85	20.0	一部磨り	切り目1対
24	土器片錐	ZH-19	一部欠	4.7×4.1	1.1	27.0	一部磨り	切り目1対
25	土器片錐	一透	一部欠	4.2×3.85	1.4	31.0	全周磨り	切り目1対
26	土器片錐	ZB-27	完形	5.7×4.25	0.75	26.0	一部磨り	切り目1対
27	土器片錐	ZJ-31	一部欠	5.7×4.2	1.1	30.0	全周磨り	切り目1対
28	土器片錐	一透	2/3	2.8×2.9	0.95	10.0	全周磨り	切り目1ヶ



第64図 遺構外出土遺物（5）



第65図 遺構外出土遺物（6）

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	周縁形	備考
29	上器片鍛	SI-6	一部欠	3.4×2.8	0.75	8.0	全周磨り	切り目1ヶ
30	土器片鍛	2J-20大	2/3	3.0×3.45	1.0	120	全周磨り	切り目1ヶ
31	上器片鍛	SI-6	1/2	2.8×3.6	0.9	11.0	全周磨り	切り目2ヶ
32	土器片鍛	2J-20大	1/3	2.2×4.0	0.75	10.0	一部磨り	切り目1ヶ
33	上器片鍛	SI-12	2/3	4.0×4.6	1.05	24.0	全周磨り	切り目1ヶ
34	土器片鍛	2J-20大	2/3	4.1×4.5	1.3	28.0	全周磨り	切り目1ヶ
35	土器片鍛	2J-20大	2/3	3.1×4.05	0.8	15.0	全周磨り	切り目1ヶ
36	土器片鍛	2C-28	完形	4.6×3.95	1.25	29.0	全周磨り	切り目1対
37	土器片鍛	2J-25	3/4	5.95×3.65	0.7	22.0	一部磨り	切り目1対
38	土器片鍛	SI-5	3/4	7.35×4.45	0.85	28.0	全周磨り	切り目1ヶ
39	土器片鍛	2A-27	完形	7.8×4.6	0.8	38.0	一部磨り	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
40	土器片鍛	2J-20	完形	8.0×5.0	1.2	59.0	全周磨り	切り目1対
41	土器片鍛	E-16	一部欠	7.6×5.2	0.95	30.0	全周磨り	切り目1対
42	土器片鍛	SI-1	完形	11.3×7.2	1.05	88.0	一部磨り	切り目1対
43	土器片鍛	SI-1	一部欠	6.0×4.8	1.0	32.0	一部磨り	切り目1ヶ
44	上器片鍛	SI-6	1/2	4.5×6.1	0.95	32.0	一部磨り	切り目1ヶ
45	土器片鍛	V-21	2/3	6.4×6.8	1.15	50.0	全周磨り	切り目1ヶ
46	上器片鍛	2E-30	完形	4.8×4.15	1.0	25.0	一部磨り	切り目1対
47	土器片鍛	2J-31	3/4	4.3×7.2	1.0	31.0	打制	切り目1ヶ
48	土器片鍛	SD-1	1/2	5.4×7.2	0.8	33.0	全周磨り	切り目1ヶ
49	土器片鍛	2J-31	一部欠	5.55×8.25	1.55	36.0	一部磨り	切り目1ヶ

図版No.	性類	出土位置	残存	大きさ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	周縁整形	備考
50	土器片錐	ZJ-31	2/3	4.6×4.85	1.05	22.0	一部磨り	切り目1ヶ
51	土器片錐	K-19	1/2	3.1×5.35	1.0	15.0	一部磨り	切り目1ヶ
52	土器片錐	SI-6	2/3	3.8×4.95	1.0	23.0	一部磨り	切り目1ヶ
53	土器片錐	SI-6	1/2	3.85×6.25	1.2	38.0	全周磨り	打ち欠き1ヶ
54	土器片錐	T-20	2/3	3.7×6.0	1.15	32.0	全周磨り	切り目1ヶ
55	土器片錐	ZK-32大	1/3	3.95×7.4	0.7	28.0	一部磨り	切り目1ヶ
56	土器片錐	SI-17	完形	3.4×5.7	0.75	16.0	一部磨り	切り目1ヶ
57	有孔円盤	一話	3/4	6.6×5.6	0.9	35.4	全周磨り	裏面より穿孔→着り
58	有孔円盤	SI-1	一部	1.75×2.85	1.0	5.0	全周磨り	裏面より穿孔→着り
59	有孔円盤	-話	完形	4.5×4.8	0.9	21.3	全周磨り	表面より穿孔→着り
60	有孔円盤	SI-1	一部欠	3.35×4.25	0.85	15.0	全周磨り	裏面より穿孔→着り
61	円盤	SI-1	2/3	5.8×5.3	0.8	28.0	全周磨り	断丸方形
62	円盤	ZJ-20	1/2	4.1×7.05	0.95	31.0	打削	円形
63	円盤	SD-1	完形	4.1×3.3	1.1	15.0	打削	椭円形
64	円盤	SI-6	3/4	3.8×3.3	0.85	11.0	全周磨り	椭円形
65	円盤	一話	一部	2.5×4.9	1.0	11.0	全周磨り	円形
66	焼成粘土塊	ZJ-30	完形	3.4×3.1	2.0	13.3	—	Na311 椭円形

c 石器 (第66・67図 P L54)

1・2は旧石器時代の出土品で、1は打面が作り出された石核で、一部縦長剥片を剥離した様子が窺える。2は一部欠損するナイフ形石器で基部にプランティングが施される。

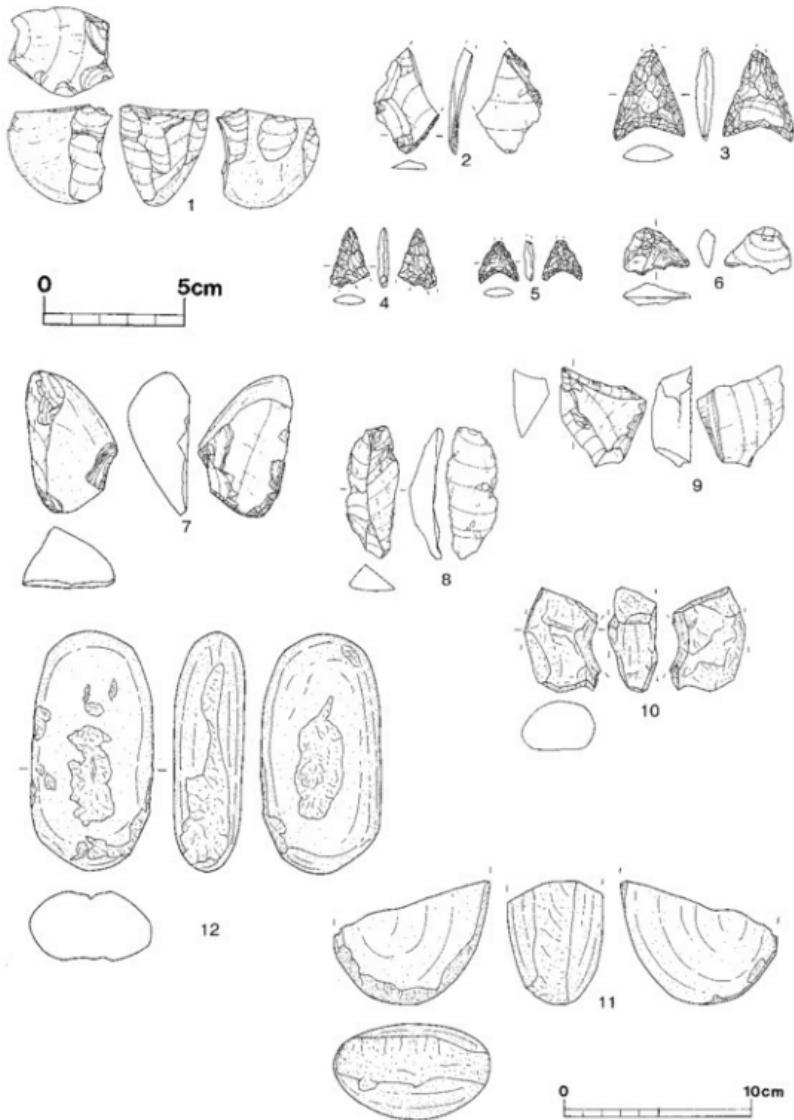
3~16は縄文時代のものと考えられる。3~5は石鎌で、4は基部を欠損しているが、いずれも基部に抉りが入る凹基鐵である。同図6・8・9は剥片、7は礫器、10は打製石斧の破片、11~16は磨石類としたもので、磨る・敲くなどの機能を兼ね備えている。

これらの資料のなかで黒曜石の蛍光X線分析を行った結果、5・6は諏訪星ヶ台群産に、8・9は神津島恩馳島群産に比定された。このほかに、写真のみ掲載した剥片4点(A~D)の同分析を行い、諏訪星ヶ台群産1点(A)と神津島恩馳島群産3点(B~D)の分析結果を得た。

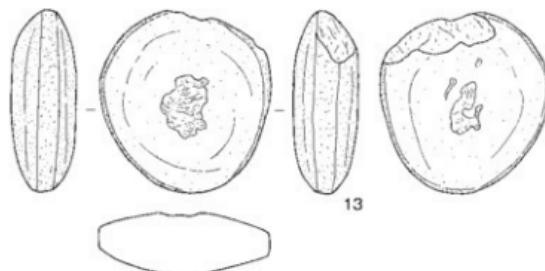
*黒曜石の蛍光X線分析は沼津工業高等専門学校 望月明彦氏にご協力頂いた。

遺構外出土石器

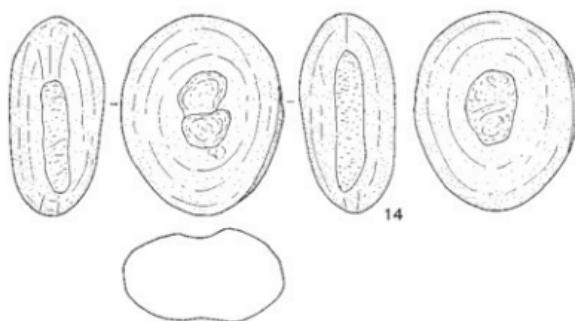
No.	出土場所	名種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
1	SI-9	石核	5.4	4.7	5.5	134.0	トロトロ石	石16 打石器
2	SI-15	ナイフ形石器	3.8	2.3	5.0	2.5	頁岩	石15 旧石器
3	X-30区	石鎌	(2.8)	2.5	0.6	(3.5)	安山岩	石3 凹基無基鐵 先端は使用時の折損
4	Z-5大区	石鎌	(1.9)	(1.3)	0.4	(0.8)	チャート	石2 凹基無基鐵 基部欠損
5	R-24区	石鎌	(1.0)	1.4	0.4	(0.5)	黒曜石	石1 凹基無基鐵 先端は使用時の折損
6	SD-1	剥片	1.6	2.4	0.6	1.7	黒曜石	石4
7	ZJ-31区	礫器	7.4	4.6	3.2	103.0	流紋岩	石5 磨面を残す 端部に細かな剥離
8	2D-19区	剥片	7.0	2.7	1.4	18.9	黒曜石	石6 斧長の剥片
9	2D-19区	剥片	4.6	4.5	2.1	38.0	黒曜石	石7
10	ZJ-25大区	打製石斧	(5.2)	(3.7)	2.5	(59.7)	安山岩	石8 滴れ部
11	ZJ-31区	磨石盤	(5.4)	(7.8)	5.1	(302.6)	砂岩	石9 侧面敲打痕 硬熱
12	ZJ-30大区	磨石盤	12.7	6.5	3.7	462.3	安山岩	石10 表面に向かって凹みあり



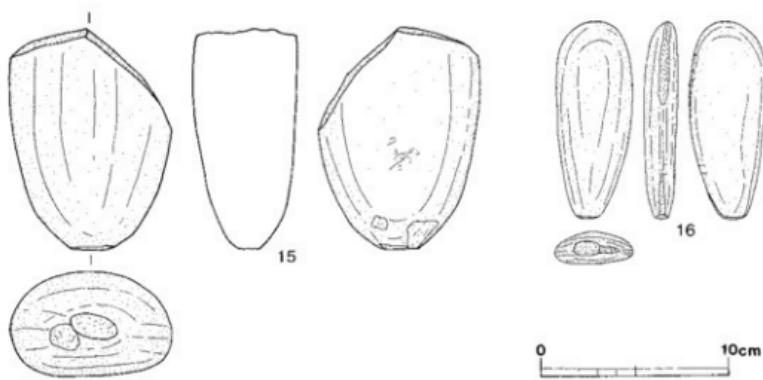
第66図 遺構外出土遺物（7）



13



14



15

16

第67図 遺構外出土遺物（8）

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
13	Z-A-21区	磨石類	9.3	9.0	3.4	413.2	安山岩	石11 表裏面に凹みあり
14	ZU-33大区	磨石類	10.6	8.8	4.8	610.8	安山岩	石12 表裏面に凹みあり
15	Z-15区	磨石類	11.8	8.4	5.6	827.9	砂岩	石13 磨部敲打痕 破損部も使用
16	E-19区	磨石類	10.4	4.1	1.8	111.1	砂岩	石14 磨部に研磨面あり

表1 積穴住居跡・豎穴遺構等一覧

名称	記号	位置(区)	長×短、深さ(cm)	平面形	主軸	炉漢さ	備考
第1号住居跡	SI-1	Z-23	390×390、10	方形	N-40°-E	0	古墳
第2号住居跡	SI-2	Y-20-21	310×310、15	方形	N-30°-E	僅か	古墳
第3号住居跡	SI-3	W-21-22北	580×580、32	方形	N-50°-W	3	古墳
第4号住居跡	SI-4	X-Y-Z-17-18他	410×400、25	方形	N-35°-E	5, 7	古墳
第5号住居跡	SI-5	Y-Z-25-26	180×170、28	方形	N-25°-E	僅か	古墳
第6号住居跡	SI-6	S-T-20-22	800×800、50	方形	N-32°-W	4	古墳
第7号住居跡	SI-7	ZB-26	540×520、28	円形	—	24	縄文
第8号住居跡	SI-8	X-15他	450×510、45	台形	N-70°-E	5	古墳
第9号住居跡	SI-9	V-25-26	494×456、28	不整円形	—	20, 10	縄文
欠番	欠番	—	—	—	—	—	第1号豎穴遺構
欠番	欠番	—	—	—	—	—	第1号豎穴遺構
第12号住居跡	SI-12	N-23	660×634、26	不整円形	—	36	縄文
第13号住居跡	SI-13	Z-23	584×510、30	椭円形	—	32, 22	縄文
欠番	欠番	—	—	—	—	—	第2号豎穴遺構
第15号住居跡	SI-15	L-M-16-17	490×440、16	円形	—	30 (12)	縄文
第16号住居跡	SI-16	E-D-15-17	600×564、42	椭円形	—	52, 58	縄文
第17号住居跡	SI-17	2A-2B-7-8	400×380、15	方形	N-5°-W	僅か	古墳
第18号住居跡	SI-18	Z-5-6	320×320、35	方形	N-32°-E	炉無	古墳
第19号住居跡	SI-19	3A-3B-1	340×340、50	方形	N-91°-W	炉無、カマド有	平安
第1号豎穴遺構	SX-1	V-25-26	800×500、10	不整形	—	不明	縄文 EHSI-10・11
第2号豎穴遺構	SX-2	Y-Z-13-14	240×230、8	椭丸形	N-20°-E	僅か	古墳 EHSI-14

表2 土坑一覧

開版No.	記号	位置(区)	長×短、深さ(cm)	平面形	主軸	備考
第45回	SK-1	2R-34	68×50、46	椭円形	N-40°-E	
第45回	SK-2	2R-33	45×45、30	円形	—	
	SK-3～5は欠番					
第45回	SK-6	2O-33	45×42、32	円形	N-65°-W	
	SK-7は欠番					
第45回	SK-8	2O-2P-30	97×70、22	不整円形	N-93°-W	燒土塊出土
第45回	SK-9	2O-2P-28	118×75、21	不整円形	N-25°-E	
第45回	SK-10	2N-2O-26-27	115×98、21	椭円形	N-20°-W	
第45回	SK-11	2L-2M-26-27	95×80、21	不整円形	N-60°-E	

回数	記号	位置(区)	長×短、深さ(cm)	平面形	主軸	備考
SK-12は欠番						
第45回	SK-13	2J-23	134×107. 62	不整形	N-67°-W	
第45回	SK-14	2H-23	54×30. 30	楕円形	N-75°-W	
SK-15は欠番						
第49回	SK-16	2G-25-26	195×165. 63	楕円形	N-3°-W	PL12・50・53 遺物掲載
SK-17~18は欠番						
第45回	SK-19	2C-24	80×55. 31	楕円形	N-60°-W	
第45回	SK-20	2C-23	175×145. 15	不整円形	N-90°-E	
第45回	SK-21	2B-23	150×108. 28	楕円形	N-55°-W	
第45回	SK-22	2B-22	105×75. 35	楕円形	N-65°-W	
SK-23は欠番						
第45回	SK-24	2O-29	105×75. 18	楕円形	N-75°-W	IIESK-34
第46回	SK-25	2A-34	(190)×130. 31	楕円形	N-30°-E	SK-26・27と重複
第46回	SK-26	2A-23-24	(83)×80. 34	楕円形	N-30°-E	SK-25・27と重複
第46回	SK-27	2A-23-23	(270)×135. 47	不整形	N-30°-E	SK-25・26と重複
第46回	SK-28	Z-A-26-27	320×140. 118	長楕円形	N-25°-W	PL10 陥し穴
SK-29は欠番						
第45回	SK-30	2D-18	108×95. 22	楕円形	N-30°-E	
第47回	SK-31	2B-2C-14-15	206×125. 57	長楕円形	N-20°-W	PL10 陥し穴
第47回	SK-32	2B-2C-17	270×155. 74	長楕円形	N-30°-W	PL10 陥し穴
第48回	SK-33	Y-Z-27	330×165. 83	長楕円形	N-25°-W	PL11・53 遺物掲載 陥し穴
第47回	SK-34	2A-11	255×100. 65	長楕円形	N-40°-E	陥し穴
第48回	SK-35	V-W-12-13	232×105. 70	長楕円形	N-15°-W	陥し穴
第48回	SK-36	S-15	285×130. 105	長楕円形	N-15°-W	PL11 陥し穴
第52回	SK-37	Q-14-15	110×85. 46	不整円形	N-70°-E	
SK-38~39は欠番						
第49回	SK-40	Z-23	115×115. 40	円形	—	PL12 SI-13と重複
第49回	SK-41	Z-23	150×150. 36	円形	—	SI-13と重複
第49回	SK-42	Z-22	150×(120). 17	不整円形	N-10°-W	
第49回	SK-43	Z-22	85×75. 31	不整円形	—	
第49回	SK-44	C-D-13-14	165×150. 38	円形	N-125°-W	PL13・50・53 遺物掲載
第46回	SK-45	T-20	180×120. 27	不整円形	N-40°-W	SI-6と重複 占墳時代以降
SK-46は欠番						
第45回	SK-47	2B-2C-27	103×105. 30	円形	—	SI-7と重複
第52回	SK-48	2B-26	110×105. 39	円形	—	SI-7と重複
第52回	SK-49	2B-1	70×65. 65	不整円形	N-20°-W	SI-19と重複 平安時代以降
第52回	SK-50	2E-2F-16-17	180×157. 75	不整円形	N-95°-E	PL13・51 HHMY-1 遺物掲載
第52回	SK-51	2A-15	90×70. 45	不整円形	N-15°-E	PL14・50 HHMY-5 遺物掲載

表3 焼土址一覧

回数	記号	位置(区)	長×短、深さ(cm)	平面形	主軸	備考
第59回	FP-1	2F-16	135×100. 18	不整円形	N-45°-W	
第59回	FP-2	2E-2F-16	130×90. 6	楕円形	N-65°-E	SK-6と重複
第59回	FP-3	2A-14	115×100. 30	不整円形	N-0°-W	SK-61と重複 遺物掲載
第59回	FP-4	W-18	50×40. 14	楕円形	N-30°-E	
	FP-5は欠番					

図版No	記号	位置(区)	長×短、深さ(cm)	平面形	主軸	備考
第59図	FP-6	F-G-18	140×120, 100	梢円形	N-10°-W	遺物掲載

表4 土器埋設遺構一覧

図版No	記号	位置(区)	長×短、深さ(cm)	平面形	主軸	備考
MY-1はSK-50に変更で欠番						
第56図	MY-2	2G-17	50×45, 10	円形	N-30°-W	PL14 遺物掲載
第56図	MY-3	Z-12	(50)×38, 9	梢円形	N-45°-E	PL14 遺物掲載
第56図	MY-4	2C-9	130×100, 5	梢円形	N-62°-W	PL15 遺物掲載
MY-5はSK-51に変更で欠番						

第2節 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡が9軒と竪穴遺構が1軒確認されている。いずれも古墳時代前期のものである。これらの中には鍛冶工房跡1軒と玉作工房跡が3軒含まれる。

1. 竪穴住居跡 (SI)

古墳時代の竪穴住居跡は、第1・2・3・4・5・6・8・17・18号住居跡であり合計9軒検出されている。調査エリア内の中央付近に南北方向に展開している。時期的にはいずれも古墳時代前期のものである。これらの住居跡の広がりは、本来調査エリアの南端よりも南方へ広がりを見せるものと考えられる。これらの内、第1号住居跡は鍛冶工房として利用され、第4・6・8号住居跡は玉作工房として利用されている。

第1号住居跡 [SI-1] (第68~73図 P L 16・17・55・56)

位 置 調査区中央南側Z-23区に位置する。

重複関係 第13号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

主 軸 N-40° - E。

規 模 3.9×3.9mの方形を呈する。確認面からの深さはおよそ10cmを測る。

床 床面の硬化した範囲は見られず、軟弱な感触を受ける。床面から鍛造剥片が出土した。

壁 緩く立ち上がる。

炉 住居跡の北北東側に1基確認された。火床面がやや赤変硬化している。

柱 穴 柱穴らしいものではなく、西隅に浅い凹みが見られた。床面中央のビット群は鍛冶作業に関連した施設である。

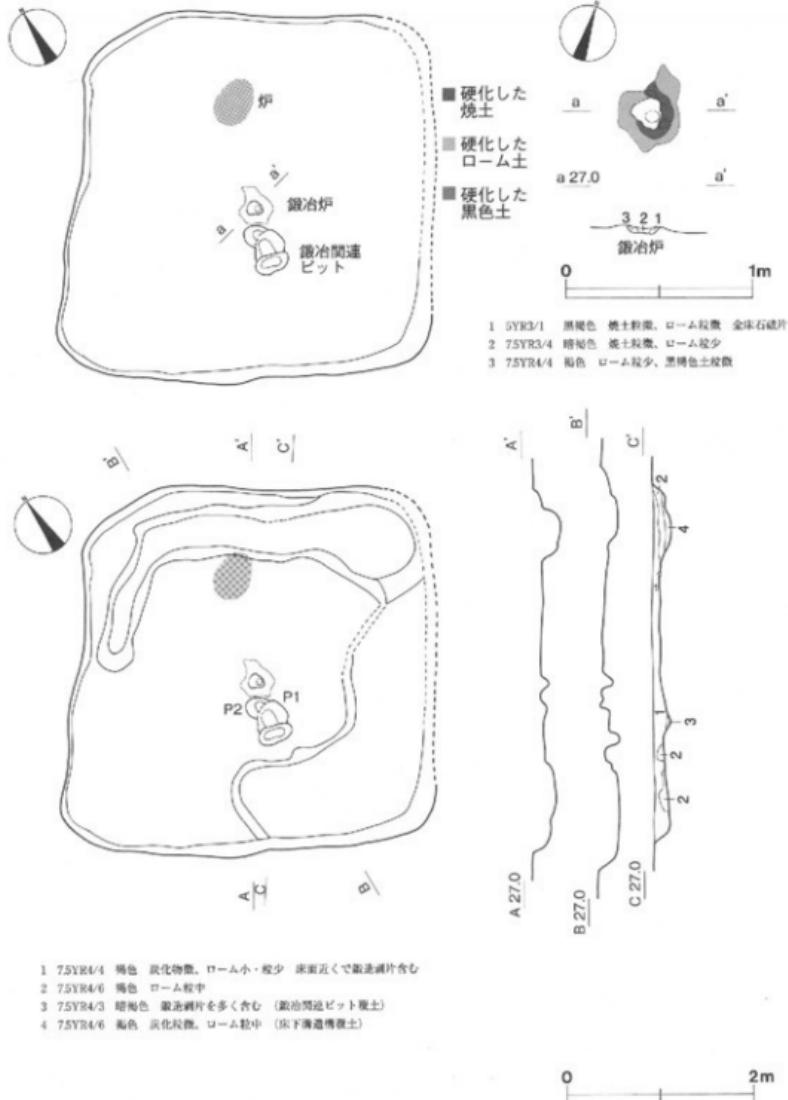
入口施設 よよぞ炉と対面する南東方向か。

貯藏穴 構築されていない。

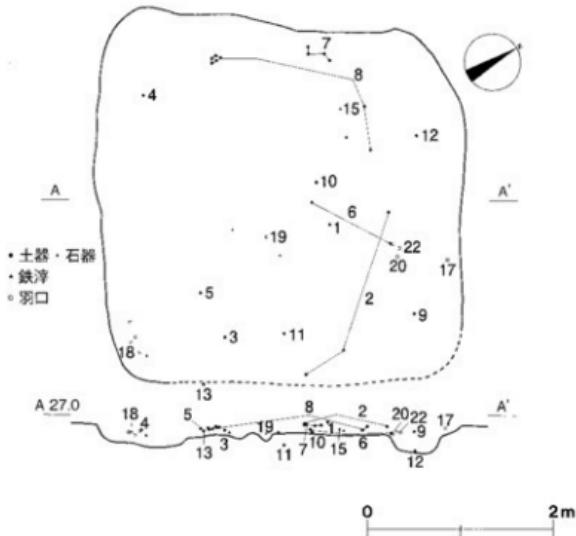
その他の施設 住居内の北隅から、東隅を経て、南隅にかけて床面下に溝状の落ち込みが検出された。この溝は壁溝とは異なる。溝の幅は北側で約45cmと狭く、南側では約100cmと幅が広がっている。深さは北側で約20cm、南側で約15cmを測る。この溝の覆土は褐色土からなり、住居内中央の溝に埋まれた部分はローム層の掘り残しである。床面には北側に炉が検出され、一部この溝上にかかることから、本住居跡使用時には埋められていることが理解できる。

覆 土 覆土は4層からなる。第1層は住居覆土であり、第2・4層は床面下の溝覆土に相当する。第3層はP 2の覆土の一部である。

遺物出土状況 出土遺物の多くは住居内東半からのものが多い。本住居跡の床面下に確認された



第68図 第1号住居跡・鍛冶炉・掘り方



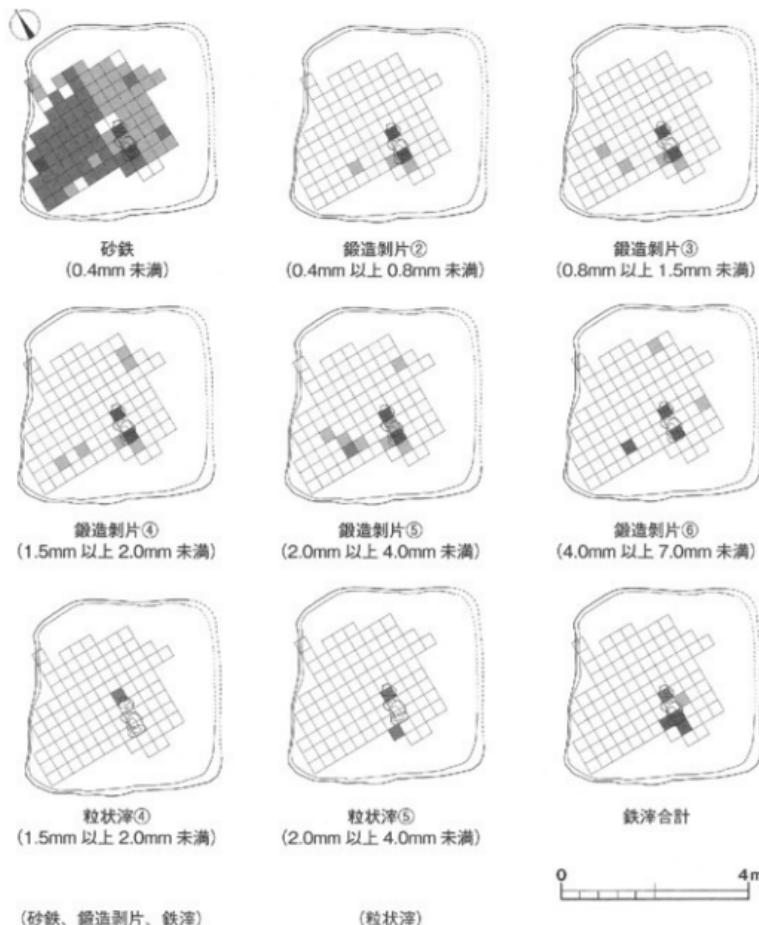
第69図 第1号住居跡遺物出土状況（1）

溝状の落ち込みと関連しているのであろうか。

出土遺物 出土遺物は土器類と石器、そして鍛冶関連遺物が出土している。土器類は1が壺、2～6が壺、7は壺、8は鉢、9は手づくね土器である。1・5は焼成後の穿孔が見られる。3・5・8は赤彩されている。14～22は鍛冶関連遺物である。10～13の石器については鍛冶関連遺物の可能性もあるが、本遺構が縄文時代の遺構と重複していることから、縄文時代の遺物が混入した可能性も考えられる。

鍛冶関連施設 鍛冶炉や複数の小ビットが中央付近の床面から検出された。鍛冶炉は長軸20cm・短軸15cm・深さ5cmの凹みからなる。炉の周囲には西側を除き幅約5cmの粘土が貼られ、この粘土が焼土化している。北側と東側の一部は黄褐色の焼土となっている。その外側は、長軸45cm・短軸35cmの不整規円形を呈するローム硬化面が巡っている。鍛冶炉内の覆土は、東側に第1層の金床石破片や鍛造剥片を少量含む黒褐色土が見られた。

鍛冶炉の南側には小ビットが2基接するように確認された。P1は平面形が長径42cm×35cmの橿円形で北側が浅く深さ10cmでテラス状となり、南側は深さ20cmとなる。P2は平面形が径20cmの円形と考えられ、深さ5cmであり、P1はP2の下を挟り込んでいる。覆土はそれぞれ黒褐色土で、P1の深い部分には鍛造剥片や金床石破片が多く含まれていた。



第70図 第1号住居跡遺物出土状況（2）

鍛冶関連遺物出土状況 鍛冶に関連した遺物は、鉄滓や籠の羽口、そして微細な鍛造剥片や粒状滓などがある。これらの遺物の取り上げにあたっては、通常の遺物の取り上げに加え、微細な遺物の取り上げを目的とした調査も行った。

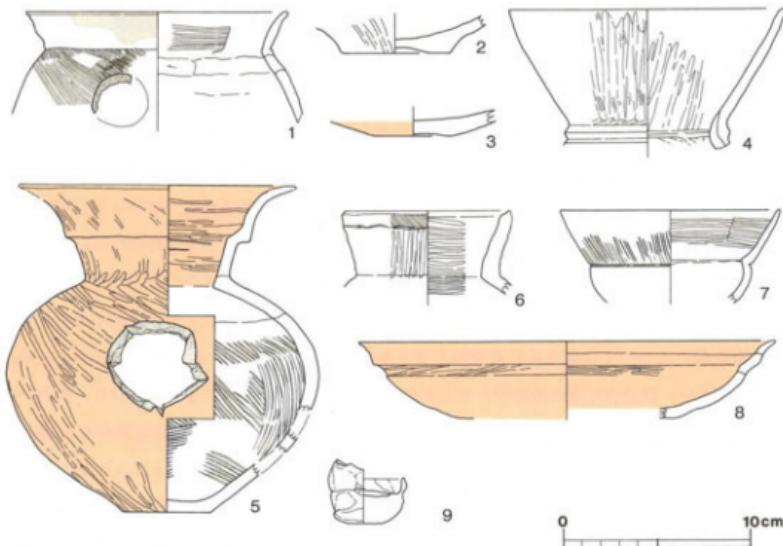
前者の遺物取り上げでは、籠の羽口片が住居内の南隅から4点まとめて出土している。鉄滓は床面の中央から北側に偏って出土している。

後者の調査では、床面の土を25cmメッシュごとに取り上げ水洗い選別し、一定の区分を用いて砂鉄・鍛造剥片・粒状滓・鉄滓ごとの集計（第2章第3節2遺構調査参照）を行った。それらの出土状況を図化したのが第70図である。それぞれの種別ごとの特徴は、まず砂鉄については、床面の東側で0.1g以上1.0g未満のものが多く、西側で1.0g以上3.0gのものが多い。その中でも目立つのは鍛冶炉部分とP1付近で、前者からは約48g、後者からは約11gもの砂鉄が出土している。鍛造剥片については基本的に鍛冶炉とP1からの出土が目立ち、その他の出土は0.1g未満のものが多い。鍛造剥片②は鍛冶炉とP1を含む床面南側にまとめて分布が見られ、鍛冶炉中から約8.5g、P1でも深い部分を中心に10.1gが出土した。鍛造剥片③は鍛冶炉から約13.2g、P1から約11.8g出土した。鍛造剥片④は鍛冶炉から9.2g、P1から約7.3g出土した。鍛造剥片⑤は鍛冶炉から約15.8g、P1から約10.3g出土した。鍛造剥片⑥は鍛冶炉から約3.0g、P1から約2.1g出土した。粒状滓は鍛冶炉とP1近辺の狭い範囲で粒状滓③・④・⑤が出土した（粒状滓③については鍛冶炉のみからの出土であり、分布図は作成していない）。いずれも鍛冶炉からの出土が目立ち、各々鍛冶炉から粒状滓③が9個、粒状滓④が3個、粒状滓⑤が5個出土した。鉄滓はP1付近からの出土が目立ち、P1からは鉄滓④が0.5g、鉄滓⑤が1.8g、鉄滓⑥が0.4g出土した。このほか、P1内からは砂岩製の金床石破片が出土している。

上記状況から、鍛冶炉から約50cm南に離れたP1については砂岩製の金床石を据えたピットと考えられる。そして、P1周辺からも比較的多く鍛造剥片などが出土している状況は、先のP1の性格を補完するものと思われる。

鍛冶関連遺物 鍛冶に関連した遺物は15の楕円形鉄滓や16の鉄塊系遺物、17～20・22の輪の羽口、そして21の金床石剥片や、微細な鍛造剥片や粒状滓が出土している。金床石は砂岩製のもので小さな破片しか見つかっておらず、本体はこの工房での鍛冶作業終了後工人によって持ち去られたものと考えられる。この破片には鍛造剥片が付着していた。17の羽口は器厚が厚いもので円柱状となり特徴的である。胎土には粗粒が混入している様子が窺える。

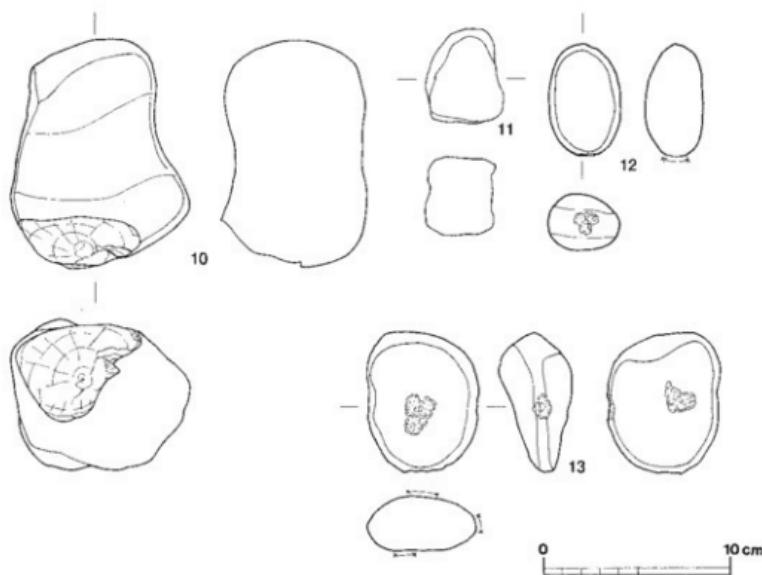
所見 本住居跡は鍛冶工房として利用されたもので、鍛冶炉や金床石を据えたと考えられる小ピット以外は通常の小規模な竪穴住居跡と同様な構造と考えられる。床面の硬化部は見られず、柱穴もないことから短期間の鍛冶作業を行うために作られた工房跡と考えられる。本遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと考えられる。



第71図 第1号住居跡出土遺物（1）

第1号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 度成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	A : 14.0 C : 5.9	覆土 20% 良好	長石○、石英○、雲母△、砂粒	にぶい橙	腹部外面ハケ調整、内面ヘラナデ。口縁部外面ナデ、内面は輪積痕、ハケ調整。口縁部内外面に環付着。胴部は焼成後穿孔か。	No.9
2	壺? 土師器	B : 5.8 C : 15	覆土 100% 普通	長石○、石英○、雲母△	橙 にぶい赤褐	底部。底面は上げ底。外面ヘラミガキ。内面ナデ。	No.12
3	壺 土師器	B : 4.2 C : 0.8	覆土下位 100% 普通	長石○、石英○、雲母○	橙	底部。底面はやや上げ底。内面ヘラナデ。	No.13 赤彩
4	壺 土師器	A : [14.8] C : (7.2)	覆土下位 25% 普通	長石○、石英○、雲母○	橙	颈部にタガ状の粘土縫が貼付され、口縁部が外傾する。外面は縱方向のヘラミガキ。	No.14
5	壺 土師器	A : 14.8 B : 4.6 C : 17.8	覆土 70% 普通	長石△、石英○	明赤褐 橙	二重口縁壺の頸部で、やや外傾する。口縁部は複合部で剥離したものと思われる。内面ヘラミガキ。胴部には焼成後の穿孔。	No.15 赤彩
6	壺 土師器	C : (3.6)	覆土下位 30% 普通	長石△、石英△	明褐	二重口縁壺の頸部で、やや外傾する。口縁部は複合部で剥離したものと思われる。内面ヘラミガキ。	No.11
7	壺 土師器	A : [11.8] C : (4.9)	覆土 30% 普通	長石○、石英○、雲母○	明赤褐	渦曲した頸部から頸部が屈曲し、口縁部が外傾して聞く。口縁部内外面ハケ調整。頸部外面にヘラで沈線を引く。	No.17
8	鉢 土師器	A : (22.4) C : (4.1)	覆土 30% 普通	長石○、石英○、雲母○	にぶい赤褐	底部から大きく聞く鉢で、口縁部は緩く屈曲する。内外面共に部分的なミガキ。内面赤彩。	No.16 赤彩



第72図 第1号住居跡出土遺物（2）

出土地番号	器種 種類	法量 (cm)	出土状況 残存率 度成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
9	手づくね 土師器	A : 3.5 B : 2.9 C : 3.4	覆上位 90% 普通	石英△	にぶい橙	底面がやや丸底で、腹部に輪積痕を残し、口縁部はいびつ。内面に指振痕。	No18

第1号住居跡出土石器

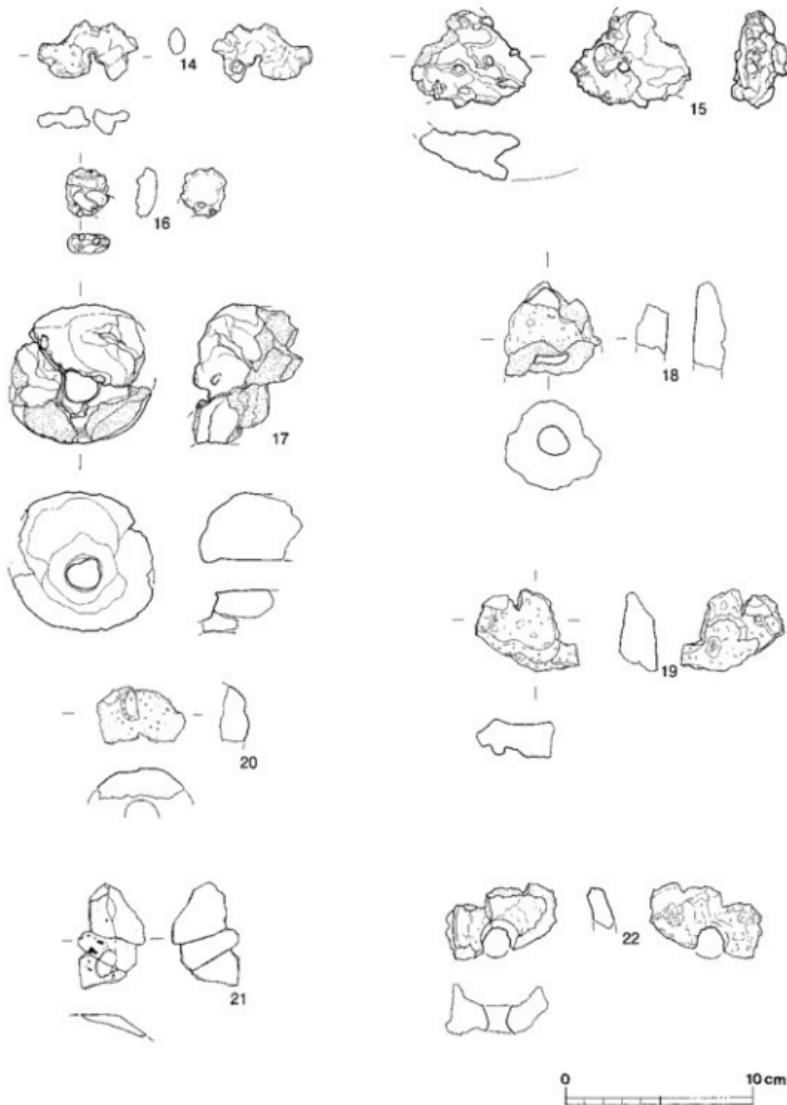
単位: cm・g

出土地番号	種類	部種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
10	石器	自然礫?	12.2	9.6	8.1	1240.0	砂岩	No358 刻離あり
11	石器	自然礫?	5.0	4.2	4.2	132.5	細雲母片岩	No359 風化著しい
12	石器	敲き石	6.0	3.8	3.0	96.0	安山岩	No360 床下西隣出土
13	石器	敲き石	7.5	6.0	2.9	211.4	花崗岩	No361 斧打痕4ヶ所

第1号住居跡出土鍛冶関連遺物

単位: cm・g

出土地番号	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	出土位置	備考
14	鍛冶関連遺物	鉄滓	3.2	5.3	1.4	21.1	4区覆土	No362
15	鍛冶関連遺物	硫形鉄滓	6.0	4.5	2.7	76.0	4区覆土下位	No363 分析試料
16	鍛冶関連遺物	鉄塊系遺物	2.5	2.0	1.0	10.0	4区覆土	No364 分析試料
17	鍛冶関連遺物	輪の羽口	7.5	6.8	5.3	161.0	覆土	No365 分析試料



第73図 第1号住居跡出土遺物（3）

単位: cm・g

同様No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	出土位置	備考
18	銅冶陶造物	輪の羽口	5.0	5.2	4.8	50.9	2区覆土下位	No.366
19	銅冶陶造物	輪の羽口	4.4	5.6	2.0	30.0	3区床面	No.367
20	銅冶陶造物	輪の羽口	3.1	4.7	1.6	10.8	4区床面	No.368
21	銅冶陶造物	金床石破片	5.3	3.5	0.5	10.0	銅冶陶ビット内	No.369 分析試料 砂岩質
22	銅冶陶造物	輪の羽口	4.0	6.0	2.7	21.0	1区床面	No.370

第2号住居跡〔SI-2〕(第74・75図 P L18・57・58)

位置 調査区中央Y-20・21区に確認された。

重複関係 なし。

主軸 N-30° - E。

規模 3.1×3.1mの方形を呈する。確認面からの深さはおよそ15cmを測る。

床 床面は全体的に平坦で、北西方向壁寄りから南東方向にかけて硬化面が見られる。北西方向壁際には、硬化した床面の高まりが見られ、住居入り口に関わる痕跡と考えられる。床面の東隅付近や西隅付近に焼土が見られた。

壁 外傾して立ち上がる。

炉 住居中央から南に寄って確認され、25×35cmの不整椭円形を呈し、僅かに凹んでいる。焼土は硬化していない。

柱 穴 住居内には柱穴らしきものは検出されていない。しかしながら住居跡の外側に3ヵ所のピットが確認されている。深さはP1が14.8cm、P2が66.7cm、P3が最深で71.3cmを測る。柱穴の可能性があるものかも知れない。

入口施設 西壁際の床面に40×20cmの楕円形の硬化した床面の高まりが見られ、入り口に関わるものと考えられる。

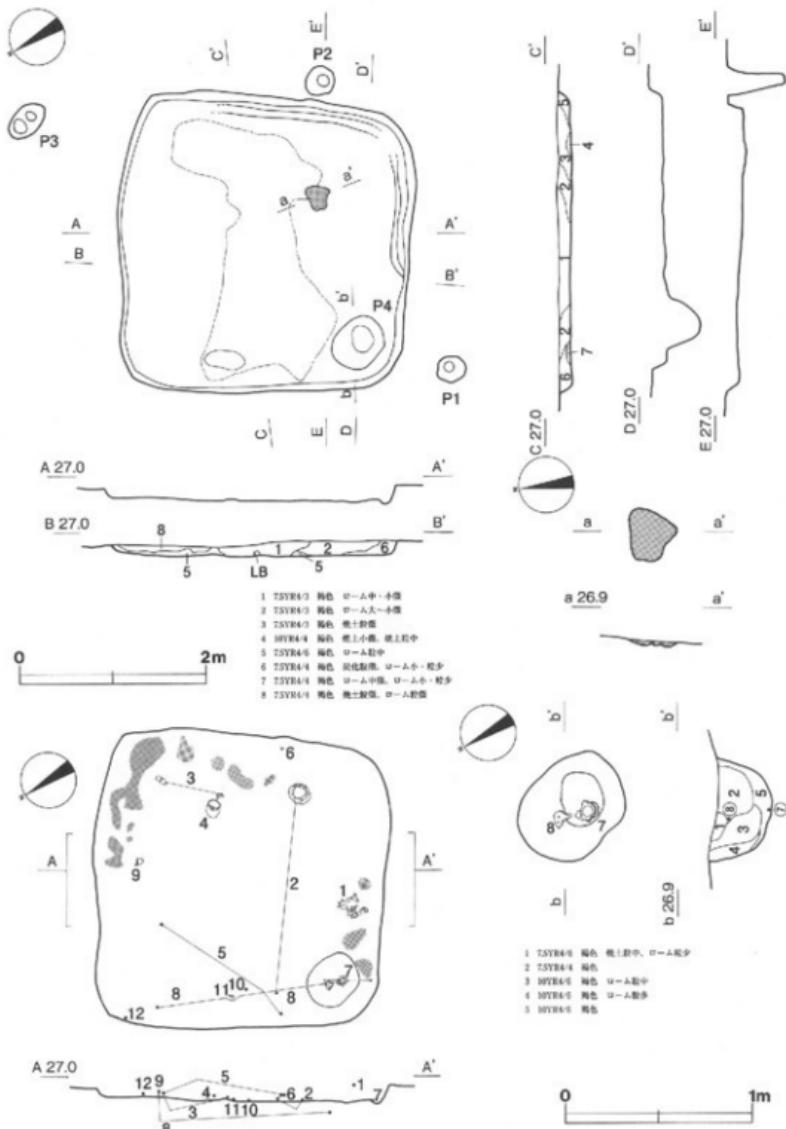
貯蔵穴 住居跡の西隅に構築されている。平面形が長径60×短径48cmの楕円形で、深さが最深部で約35cmを測る。底面は丸みを持つ。貯蔵穴の覆土は5層で構成される。

その他の施設 住居内の南隅付近には、極浅い壁溝が途切れながら確認された。深いところで約10cmであった。

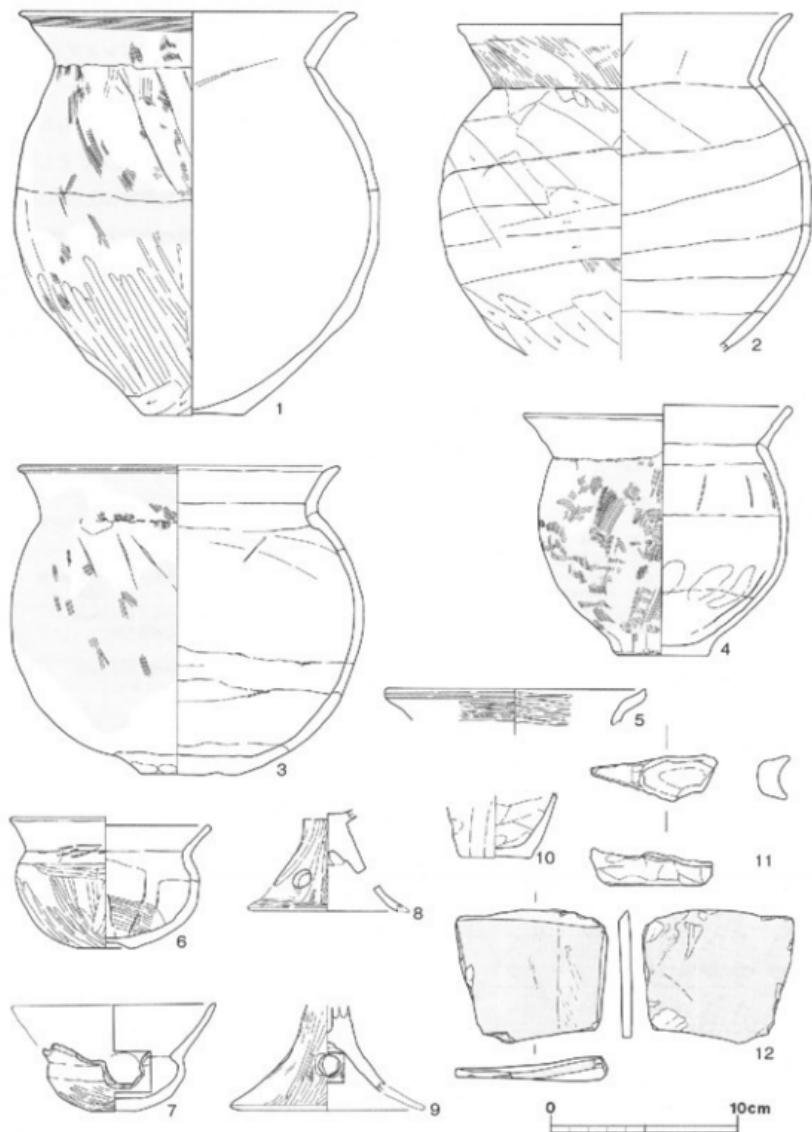
覆土 覆土は8層で構成されている。

遺物出土状況 1の土師器甕が細かく割れた状態で確認面近くから出土した他は、床面近くから出土している。接合関係にあるものの中には貯蔵穴内外で接合したもの(7・8)がある。このほか第6号住居跡出土土器と接合したものがある。

出土遺物 土師器や土製品、そして石製品が出土している。1~4は土師器甕である。5は端部をつまみ上げたような形態を持ち、内外面にミガキが施されている甕の口縁部か。6は椀である。7は壺で、胴部には丸く打ち欠いた様な痕跡をとどめている。8・9は高杯と思われるものである。



第74図 第2号住居跡・遺物出土状況



第75図 第2号住居跡出土遺物

8は坏部底面から脚部までの貫通痕は見られない。9は坏部底面方向から貫通はしないが孔が開けられている。10はミニチュア土器の底部である。11は土製品で、船形もしくは「レンゲ」の様な形態のものである。12は金属製品を砥いた扁平な砥石で、使い込んでいる。

所 見 本住居跡は古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。本住居跡は遺跡内で確認された同様な時期の住居跡の中で最小の規模のものと言える。そして、確認された多くの住居跡の入口施設が、南から東方向に向くのに対して、本住居跡は北西方向を向いているのが特徴と言える。また、本住居跡出土土器には、第6号住居跡出土のものと接合するものが見られ関連が窺われる。

第2号住居跡出土土器

回収No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率	粘土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	A : 18.0 B : 5.4 C : 21.5	覆土 95% 普通	長石△、石英○、雲母△	明赤褐色 にぶい赤褐色	口縁部外側ナデ。胴部外側上位ハケ調整・ヘラ削り。下部ヘラミガキ。底部調整ヘラ削り。 口縁部から脚部に炭化物付着。	No19 炭化物付着
2	壺 土師器	A : 17.9 C : (18.0)	覆土 70% 普通	長石○、石英○、雲母○	にぶい橙	縁刷から直線的に外傾する口縁部が付く。口縁部外側ハケ調整、脚部外側丸いかすかなハケ調整、内面に輪積痕残る。	No22
3	壺 土師器	A : 17.2 B : 5.0 C : 16.5	床面 95% 普通	長石○、石英○、雲母○	明赤褐色	上下にやや歪れた脚部で、頭部は括れ、口縁部は外反する。胴部外側はハケ調整・ヘラ削りの後ナデ。内向ナデ。	No20 炭化物付着
4	小型壺 土師器	A : 14.4 B : 4.8 C : 13.3	覆土下位 95% やや不良	長石○、石英○、雲母○	にぶい橙	頭部はくの字状。口縁部は外傾。胴部外側細かなハケ調整。胴部内面に輪積痕、指頭痕。口縁部外側ナデ。底面ヘラ削り。	No21 炭化物付着 輪積
5	壺 土師器	A : [14.0] C : (1.7)	覆土下位 30% 良好	長石△、石英△、雲母△	橙	口縁部破片で頭部から外反し、端部つまみ上げられる。内外面丁寧なヘラミガキ。口縁部下端二重口縁状となる。	No26
6	壺 土師器	A : [10.8] B : 2.6 C : 7.0	覆土 90% やや不良	長石○、石英○、雲母○、藤鉢	にぶい橙	頭部は扁平で、頭部は括れ、口縁部外側。頭部外側ハケ調整。底部は上げ底。外側ヘラミガキ。内面はハケ調整、ヘラナデ。	No27
7	壺 土師器	A : [10.9] B : 2.4 C : 5.7	鉛灰穴底 60% やや不良	長石○、石英○、雲母○	橙	頭部は扁平で頭部は括れ、口縁部は外傾する。底部は平底。外側ヘラミガキ。頭部は焼成後穿孔の痕跡か。	No25
8	高壺 土師器	B : [8.6] C : (5.1)	鉛灰穴 80% 良好	長石△、石英△	橙	高壺の脚部でハの字状に開く。外側はハケ調整の上にヘラミガキ。内面はナデ。透かし孔3ヶ所。	No24
9	高壺 土師器	B : [10.4] C : (5.6)	覆土下位 70% 普通	長石○、石英○、雲母○	にぶい赤褐色	高壺の脚部でハの字状に開く。外側丁寧なヘラミガキ。透かし孔3ヶ所。上端に未貫通孔あり。底熱。	No23
10	ミニチュア 土師器	B : 3.7 C : (3.3)	床面 90% 普通	長石○、石英○、砂粒	にぶい橙	胴部が外傾して立上る底部。底面は平底でヘラ削り。内面ヘラナデ。絞然。	No28

第2号住居跡出土土製品

単位: cm・g

回収No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
11	土製品	舟形土製品	6.7	2.3	19.0	床面	部分	No328

第2号住居跡出土石製品

単位: cm・g

回収No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	材質	備考	
12	石製品	砥石	7.1	8.0	0.55	74.7	無灰岩	No374

第3号住居跡〔SI-3〕(第76~78図 PL19・58)

位置 調査区中央のW-21・22、X-21・22・23、Y-22区に確認された。

重複関係 なし。

主軸 N-50° - W。

規模 5.8×5.8mの方形であるが、北西側の一辺は5.5mである。確認面からの深さはおよそ32cmを測る。

床 全体に平坦で、硬化面は見られなかった。P1とP4の内側に地山掘り残しによる扁平な高まりが2ヶ所確認された。

壁 外傾して立ち上がる。

炉 長軸85×短軸80cmの不整梢円形を呈する。最深部で3cmを測る。炉内から小さな円錐(小砂利)が多く出土している。

柱穴 P1~P4が主柱穴である。深さはP1が50cm、P2が8cm、P3が42cm、P4は28cmで一定ではない。その他は、P7・P8があるが小規模なものである。

入口施設 P5が入り口ピットであろう。深さは21cmである。

貯蔵穴 住居跡内の南隅に確認される。P6が位置的に貯蔵穴と考えられる。平面形は長径45×短径35cmである。深さは43cmである。

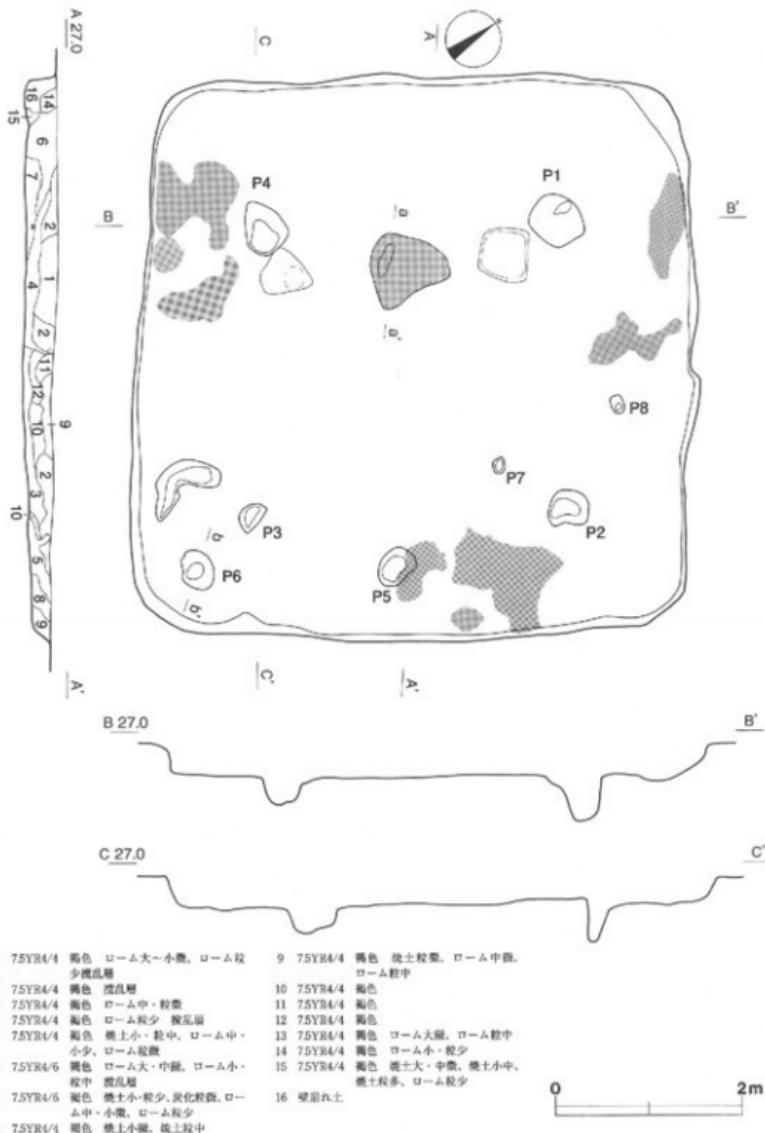
その他の施設 P1とP4の内側に地山掘り残しによる扁平な高まりが2ヶ所確認された。P1の南側のものが50×50cmの方形のもので、P4の東側のものは一辺50cmの三角形に近い形状のものである。この高まりは高さ約3cmで、中央部分が一番高くなっている。その他に、貯蔵穴の北側に「く」の字状の落ち込みが確認された。

覆土 覆土の上層には、壁に沿って面的に焼土の堆積が3ヶ所見られた。この焼土は厚さ5cm程度のもので、非常に硬く焼きしまったものである。

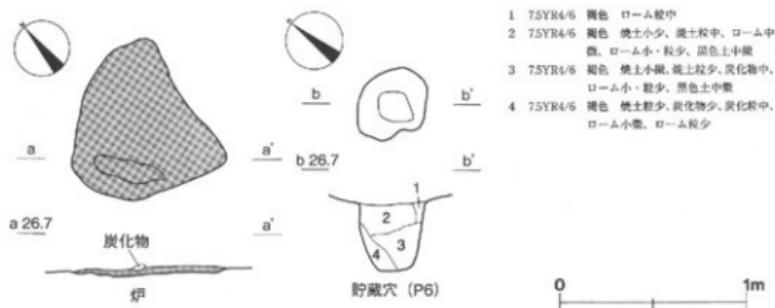
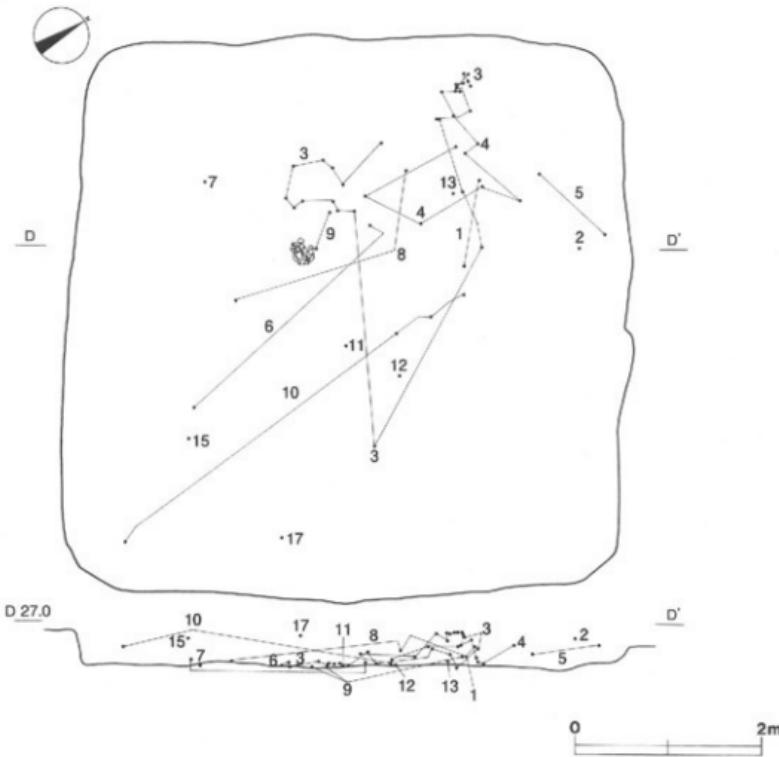
遺物出土状況 全体の傾向として、北隅から南側へ拡散するように出土している。北隅には壺が多く、南側には器台・高坏がまとまって出土している。第5・6号住居跡出土土器と接合しているものがある。14の土器片を転用した砥石は貯蔵穴から出土した。

出土遺物 土師器・石製品・鉄製品が出土している。1~8は壺である。9は壺の口縁部である。11は器台、10・12は高坏、13は壺と思われる。14は土師器を転用した砥石、15は砥石である。16は棒状の鉄製品である。断面は方形で、上端はさびが広がっている。

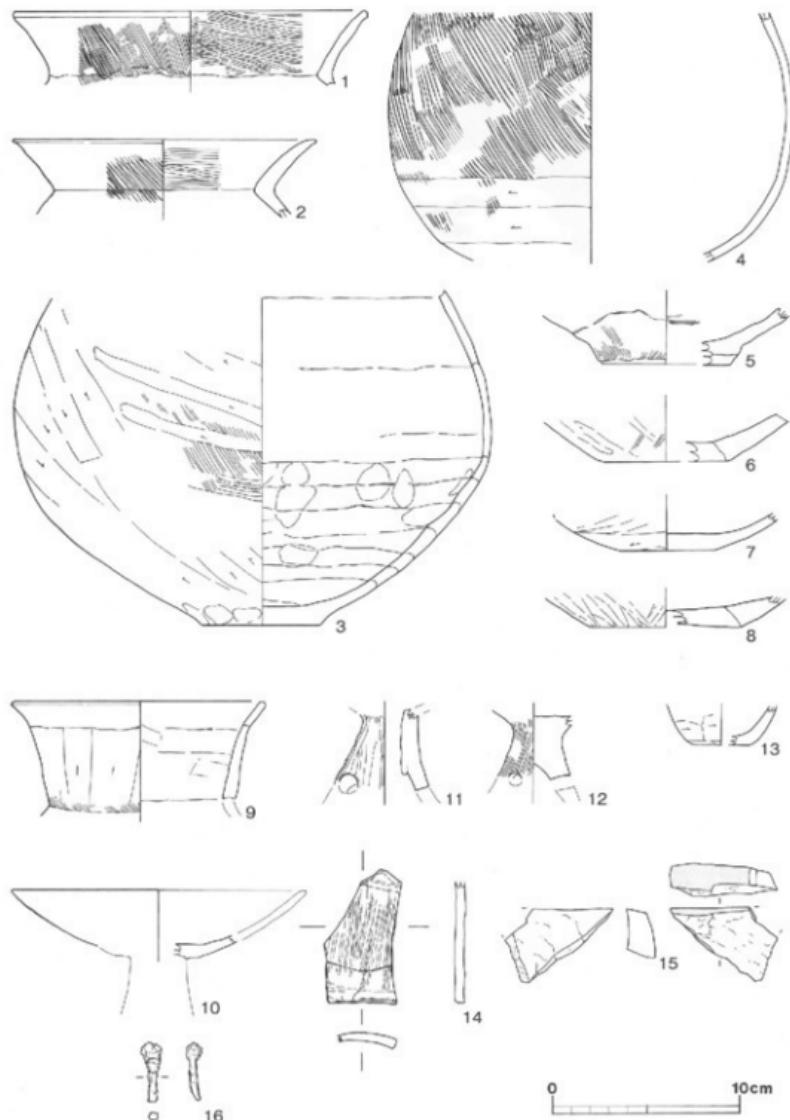
所見 覆土中から出土した焼土は、他の住居跡から出土した焼土と質的に異なる様子が窺われる。P1とP4の内側に確認された、地山掘り残しによる扁平な高まりは特徴的である。本住居跡出土土器には、第5・6号住居跡出土のものと接合するものがあり関連が窺われる。床面より出土した遺物から、古墳時代前期中葉から後半(4世紀中葉から後半)のものと考えられる。



第76図 第3号住居跡



第77図 第3号住居跡遺物出土状況・炉・貯蔵穴



第78図 第3号住居跡出土遺物

第3号住居跡出土土器

回収No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	黏土	色調	彫形・法量の特徴	備考
1	甕 土器器	A : [19.0] C : (3.9)	覆土 20% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	に赤い模 様	甕の口縁部。器部は括れ口縁部は外傾する。内 外面にハケ調整。	No37
2	甕 土器器	A : 16.4 C : (4.0)	覆土 10% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	に赤い模 様	甕の口縁部。器部は括れ口縁部は外傾する。内 外面にハケ調整。外面端付着。	No40
3	甕又は 土器器	B : 6.3 C : (17.9)	覆土下位 60% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	に赤い模 様	削部下位に最大径を持ち、底面は平底。外側は ハケ調整の上にヘラナデ。内面は輪積状、指痕 痕が残る。外面被熱赤化。	No32
4	甕 土器器	C : (13.2)	覆土下位 40% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	に赤い模 様	下部の側面で上位はハケ調整、下位はヘラナ デ。底部外面は被熱赤化。側面に炭化物付着。	No33
5	甕 土器器	B : (7.0) C : (2.6)	P1 50% 普通	長石△、石 英△、雲母 △、赤色粒 ○	に赤い模 様	甕底部破片。底面に厚みを持ち、強く外傾する。 内外面ハケ調整の後ナデ。被熱赤化。	No36
6	甕 土器器	B : [6.7] C : (2.1)	覆土下 50% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	に赤い模 様	甕底部破片。底面から強く外傾する。外側はハ ケ調整の痕跡とヘラミガキが見られる。底面と内 面にはナデ。被熱赤化。	No38
7	甕 土器器	B : (4.8) C : (1.7)	底面 60% 普通	長石○、石 英○、砂粒 ○	に赤い模 様	甕底部破片。底面から強く外傾する。器壁は薄 い。底部舞舞、底面・内面ヘラ削りの後ナデ。 外側は被熱赤化し一部謫付着。	No39
8	甕 土器器	A : (8.0) C : (1.5)	床面 30% やや不良	長石○、石 英○、雲母 △	に赤い模 様	甕底部破片。底面から強く外傾する。底面はヘ ラ削り。外側はヘラミガキ。内面はナデされている が剥離し見える。	No35
9	甕 土器器	A : (13.8) C : (6.1)	床面 90% 良好	長石○、石 英○、雲母 △	に赤い模 様	甕部が直立気味で口縁部がやや外傾。口縁部 面取り、外側ハケ調整・ヘラ削りの後ナデ・ヘ ラミガキ。内面ハケ調整・ヘラ削りの後ナデ。	No34
10	高环 土器器	A : [15.8] C : (3.7)	床面 60% やや不良	長石○、石 英○、雲母 △、砂粒○	模様	高环の环部破片で脚部は欠損する。僅かに内側 して立ち上がる。内外面ともにナデされているが、 全体的に見れている。	No29
11	器台 土器器	C : (4.2)	覆土下位 90% 普通	長石○、石 英○、雲母 △、砂粒○	に赤い模 様	器台脚部破片。ハの字状に聞く脚部で、环部底 面に貫通孔が開き、透かし孔が3ヶ所見られる。 外側ヘラミガキ。内面ナデ。	No41
12	高环 土器器	C : (3.5)	床面 90% やや不良	長石○、石 英△、雲母 ○、砂粒○	に赤い模 様	高环脚部片。环部の底部が僅か残り、脚部は3ヶ 所に穿たれた透かし孔部分で破損。外側にハケ 調整が見られるが、全体的に壊れている。	No30
13	罐? 土器器	B : [2.8] C : (2.1)	覆土下位 50% 良好	長石・石英、 雲母・砂粒 △	に赤い模 様	平底の底部から外傾して立上がる。外側はヘラ 削りの後、丁寧なナデ・ミガキ。内面はナデ。 若壁は薄い	No42

第3号住居跡出土土製品

単位: cm² g

回収No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
14	土製品	軸用紙石	7	3.7	0.5	18.5	土器器	No43 窓置穴出土

第3号住居跡出土上石製品

単位: cm² g

回収No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
15	石製品	砾石	5.7	4.0	1.5	30.0	石英	No371 2片接合

第3号住居跡出土鉄製品

単位: cm² g

回収No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
16	鉄製品	棒状鉄製品	2.5	0.4	1.5	0.6	鉄	No372

第4号住居跡 [SI-4] (第79~90図 P L 20・21・59~61)

位 置 調査区中央のX・Y・Z-17・18、Y-19区に確認された。

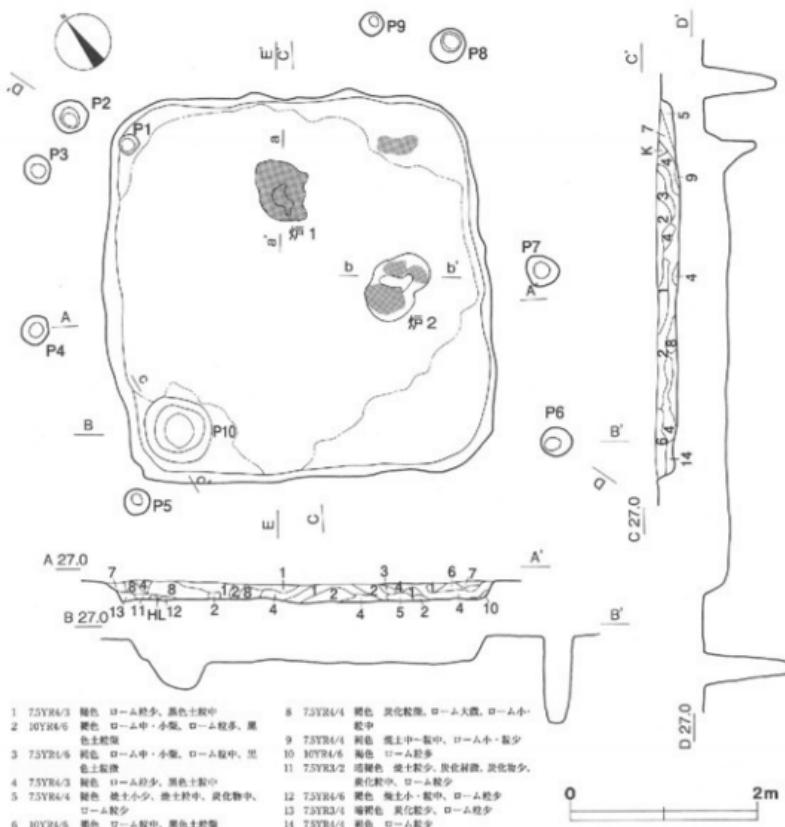
重複関係 なし。

主 軸 N-35°-E。

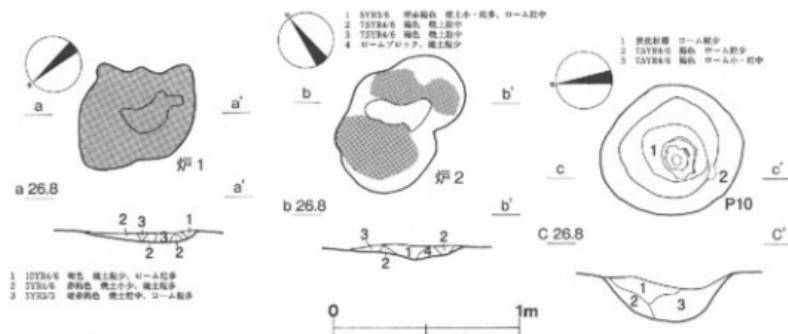
規 模 4.1×4.0mの方形を呈する。確認面からの深さはおよそ25cmを測る。

床 平面形と同様な形状を持ち、東西南北の隅付近以外は硬化している。東隅の床面は一部焼け、焼土化していた。床面には炉が2ヶ所確認された。また西隅には貯蔵穴が1ヶ所確認された。

壁 床面から外傾して立ち上がる。北西隅のみ傾斜が緩い。



第79図 第4号住居跡



第80図 第4号住居跡・炉・貯蔵穴

炉 2カ所確認された。炉1は住居内の中央から北壁よりに検出され、平面形は不整橢円形（長径72×短径60cm）で、深さは最深部で5cmを測る。底面はわずかに凹み、皿状をなす。炉2は床面中央の南東よりに検出され、長径80×50cmの不整橢円形を呈する。底面は皿状をなし、最深部は約7cmを測る。中央部分には焼土が見られなかった。この2つの炉には時期差が存在するものと考えられる。

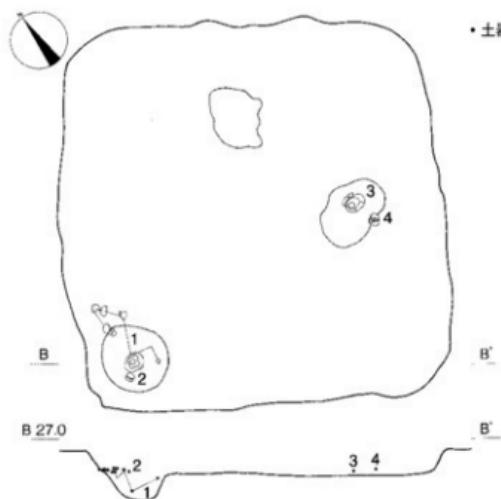
柱 穴 住居内にはP1の1カ所のみが確認された。この他、住居外の周囲にP2～P9が確認さ



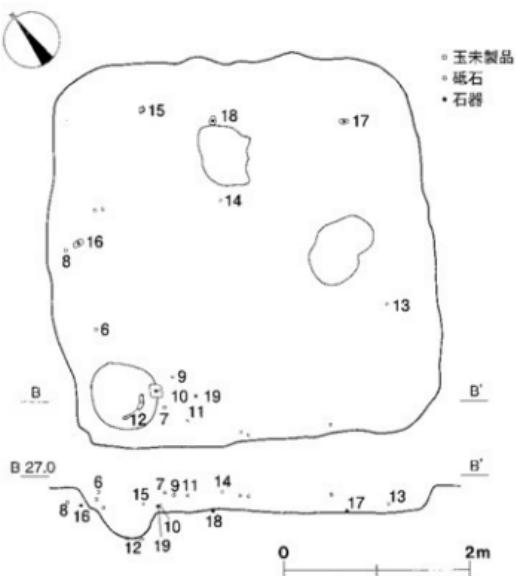
第81図 第4号住居跡炭化材等出土状況

れた。各ピットの深さはP1が33.1cmであった。住居外のピットはP2が77.0cm、P3が23.1cm、P4が7.9cm、P5が15.7cm、P6が92.4cm、P7が15.1cm、P8が70.8cm、P9が14.6cmでありばらつきが見られ、柱穴になるか不明である。

貯蔵穴 貯蔵穴は住居内の西隅にある。形状は円形で、規模は直径約75cmを測り、深さは最深部で約30cmを測る。覆土は3層からなる。貯蔵穴内やその周辺からの玉作関連遺物の出土が目立ち、貯蔵穴が玉作作業と関わる箇所である



第82図 第4号住居跡遺物出土状況（1）



第83図 第4号住居跡遺物出土状況（2）

と考えられる。

・土器　入口施設　床面の硬化面が南南西壁から広がりを見せており、炉の状況、そしてピットや貯蔵穴の位置から、同所に本住居の入口が想定される。

覆土　14層の土層からなる。東壁から炉付近にかけ人為的なローム層の堆積が見られた。

遺物出土状況　住居の北北東壁から北西壁にかけて、壁際には炭化物が見られた。土器は貯蔵穴及びその周辺、また炉2の上に3・4が伏せた状況で出土している。

出土遺物　土器や玉作関連遺物が出土している。1～3は壺で、4は器台である。5はその痕跡から鐵製品用の砥石と考えられる。

玉作関連遺物出土状況　メノウ製の玉未製品が貯蔵穴周辺を中心に出土している。貯蔵穴底面から内磨き砥石(12)が出土し、その上縁から台石と考えられるもの(19)が出土している。工具と考えられる敲き石など(16～18)は住居北側の床面近くを中心に出土している。砥石の中には、第90図2・3のように第6号住居跡出土のものと接合しているものがある。また、メノウ製未製品の中には第90図1のような第8号住居跡出土遺物と



土層サンプル採取区



メノウ材出土状況



片岩材出土状況



小円礫出土状況

- 10g 以上
- 5g 以上 10g 未満
- 0.1g 以上 5g 未満
- 0.1g 未満

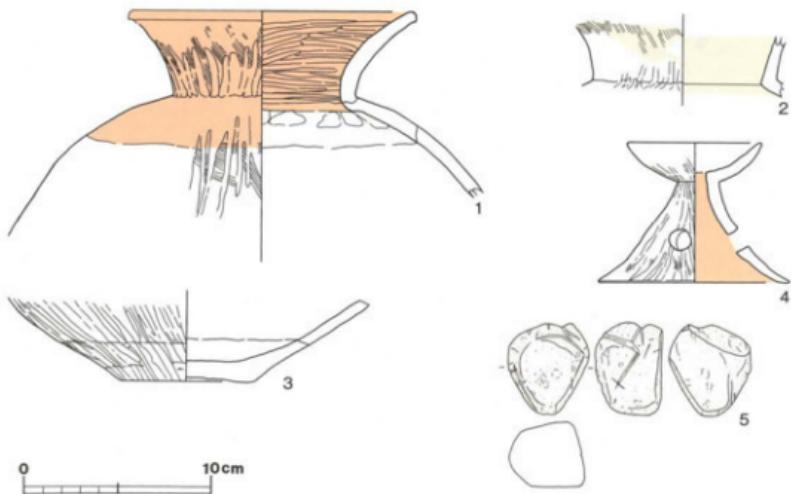


第84図 第4号住居跡遺物出土状況（3）

接合するものがある。このことから、本住居跡と第6・8号住居跡との関連性が窺われ、道具が形を変えて継続的に使用されていることが理解できる。

床面上や貯蔵穴覆土の水洗い選別（第2章第3節2遺構調査参照）の結果では、メノウと片岩の微細剥片などが採集された。メノウ製微細剥片は貯蔵穴のみから0.2g採集され、片岩製微細剥片は貯蔵穴内（1.3g）と壁際（1.5g）に見られた。このほか、小円礫が貯蔵穴内外から採集されている。全体的に見れば、微細な玉作関連遺物の出土は僅かである。

玉作関連遺物 本住居跡からメノウ製勾玉未製品（6～11）や砥石（12～15）、石製の工具（16



第85図 第4号住居跡出土遺物（1）

第4号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	A : [15.4] C : (9.9)	貯蔵穴内他 80% 普通	雲母△、長 石・石英○	にぶい黄橙	壺の颈部上半～口縁部。颈部が屈曲し、口縁部 が外反する。外面はハケ調整の後、ナデ・ヘラ ミガキ。口縁部の破面崩れ。炭化物付着。	No46 赤彩
2	壺 土師器	C : (3.1)	貯蔵穴 100% やや不良	長石○、石 英○、雲母 ○	橙 にぶい黄橙	壺の颈部で意図的に削られ、上下端の破面は全 体的に削れており、転用されたものと思われる。 炭化物が内外面や破面にも付着。	No44
3	壺 土師器	B : 7.0 C : 4.2	炉上 100% 普通	長石△、石 英△、雲母 △	にぶい橙	壺の底部。輪横部で意図的に削られいる。外面 ヘラミガキ。内面は剥離が見られ荒れている。 环状の器形を意識した転用品。	No45
4	器台 土師器	A : 7.2 B : 9.8 C : 7.5	炉上 90% やや不良	長石△、石 英△、雲母 △	橙	环部径は脚部径よりも小さく、全体の高さの 1/3を占める。外面はヘラミガキがなされるが、 全体に被熱赤色で剥離が見られる。	No47 脚部内面に赤 彩残存か

第4号住居跡出土土石製品

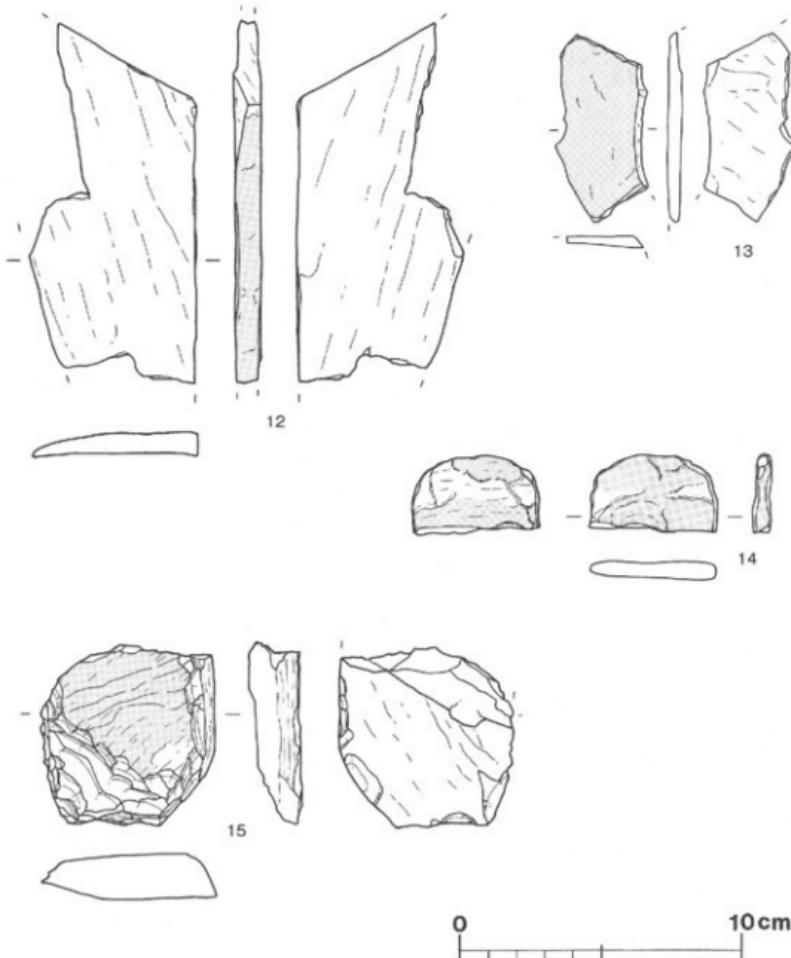
単位: cm · g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
5	石製品	砥石	4.9	4.1	3.45	11.8	軽石	玉102 床直

~19) が出土している。6~8は荒削工程、9は形削工程、10·11は側面打裂工程と考えられる。6の表裏面と下側面に自然面が見られ、左右の両側面が打割される。7は表面の稜部分には細かな剥離が見られ、一部摺理面が残る。裏面のほとんどと側面の一部は自然面である。8の下側面に自然面が残る。9には左側面のみが打割された明確な剥離面が残る。10の上側面の一部と裏面に自然面が残り、下側面を除き細かな剥離が見られる。下側面は左側面からの力によって破損したものと思われる。表面の上部に研磨面が若干見られる。11の上下側面には自然面が残る。本資



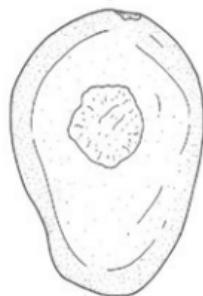
第86図 第4号住居跡出土遺物（2）



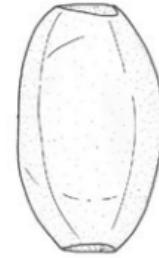
第87図 第4号住居跡出土遺物（3）

料は第8号住居跡出土資料（第126図26）と接合する（第90図1）。本来は直方体の個体が中央で半分に欠損してしまったものである。

片岩製の砥石には12の内磨き砥石や、13・15のような平砥石、そして内磨き兼平砥石とされる14がある。14は第6号住居跡出土資料（第117図96）と接合する（第90図2）。15についても第6号住居跡出土資料（第116図87・88）と接合する。



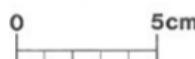
16



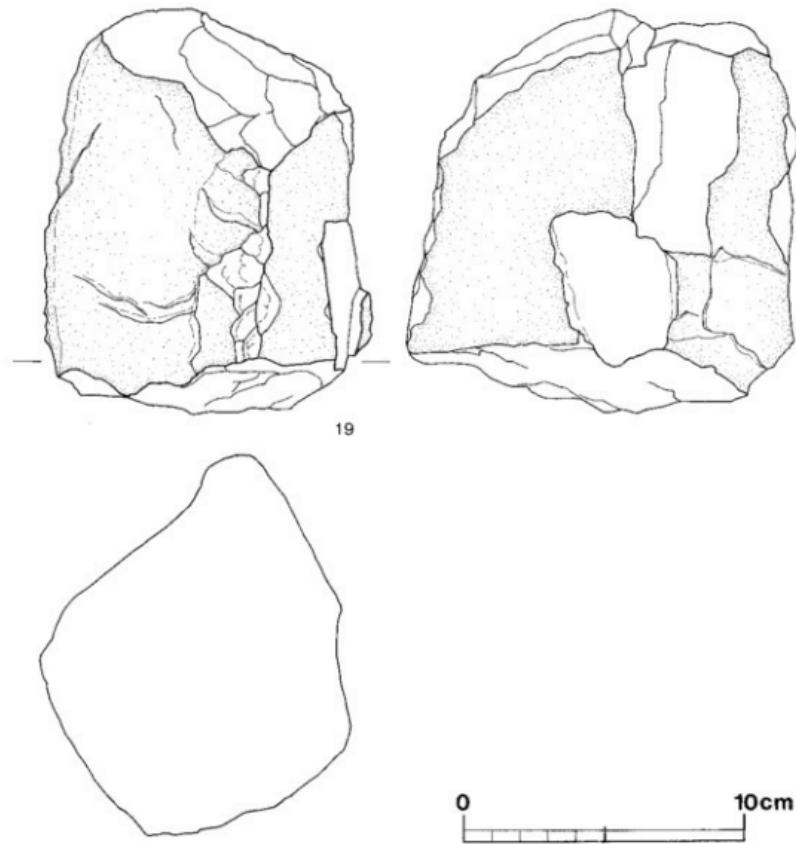
17



18



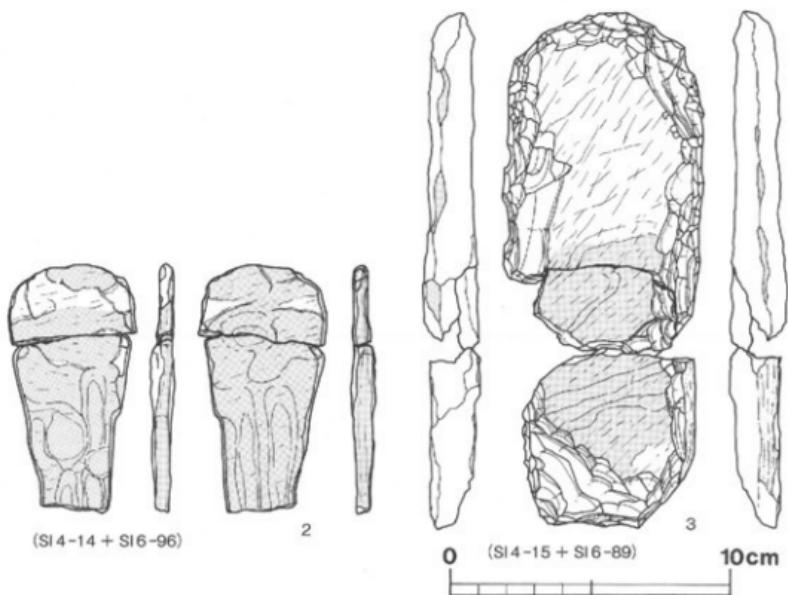
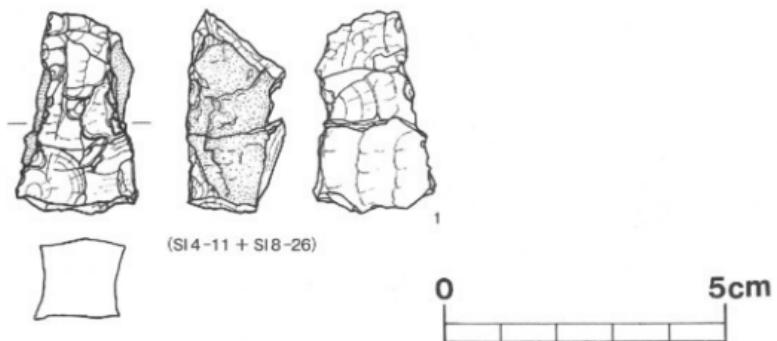
第88図 第4号住居跡出土遺物（4）



第89図 第4号住居跡出土遺物（5）

その他の工具としては、16～18の敲き石の類や19の台石と考えられるものが出土している。所見 本住居跡は玉作工房として利用されたものと考えられ、貯蔵穴を中心に作業が行なわれた可能性が考えられる。しかしながら、微細な玉作関連遺物の出土状況はほかの工房跡の状況と異なる。また、未製品の出土状況からメノウ製勾玉の荒削工程を中心に形削・側面打裂工程の資料が出土している。そして、本住居跡出土の玉作関連遺物の中には第6・8号住居跡出土のものと接合するものがあり関連が窺われる。

本住居跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと考えられる。



第90図 第4号住居跡ほか接合資料

第4号住居跡出土玉作関連遺物

図版No	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
6	勾玉茎割工程	3.50	1.95	1.00	8.38	メノウ	玉3
7	勾玉茎割工程	2.30	1.80	1.10	6.38	メノウ	玉6
8	勾玉茎割工程	2.20	1.65	1.75	7.21	メノウ	玉2
9	勾玉形崩工程	2.95	1.80	1.00	6.81	メノウ	玉1
10	勾玉鏡面打裂工程	2.65	2.10	1.40	12.17	メノウ	玉5
11	勾玉鏡面打裂工程	2.20	1.90	1.40	7.68	メノウ	玉4 SI-8(26)と接合
12	内磨研石	12.10	5.90	0.85	82.93	片岩	玉9 野戸穴内出土
13	平砥石	6.50	3.10	0.50	12.63	片岩	玉8
14	内磨研石兼平砥石	2.80	4.45	0.60	12.20	片岩	玉7 SI-6(96)と接合
15	平砥石	6.35	6.10	1.55	84.00	片岩	玉10 SI-6(87)他と接合
16	敲き石	10.40	5.40	4.80	437.47	チャート	玉14 端部敲打 無然
17	敲き石及び砕石	8.80	5.20	3.10	224.03	砂岩	玉13 内端部敲打痕 炭化物付着
18	凹み石	10.20	6.80	4.70	395.95	石英斑岩	玉12 烧熱炭化物付着
19	台石	14.70	12.40	10.90	2520.23	花崗岩	玉15 貯藏穴脇出土

第4号住居跡はか玉作関連遺物接合資料

単位: cm・g

図版No	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
1	勾玉側面打裂工程	3.65	2.20	1.45	16.24	メノウ	SI-4(11)+SI-8(26)
2	内磨兼平砥石	8.70	4.50	0.90	43.00	片岩	SI-4(14)+SI-6(96)
3	内磨兼平砥石	18.10	7.10	2.00	308.90	片岩	SI-4(15)+SI-6(89)

第5号住居跡【SI-5】(第91~94図 PL 22・62)

位置 調査区中央南側のY・Z-25・26区に確認された。

重複関係 なし。

主軸 炉が未確認で不明と言わざるを得ないが、およそN-25°-Eか。

規模 長軸1.8×1.7mの正方形に近い形状。深さは、床面下の溝状の落ち込み底面で確認面からの深さは26~28cmを測る。

床 床面は平坦であったが、床面全体にわたり幅50cm前後の溝状の落ち込みが見られた。また床面の硬化した部分は見られず、南側に深さ4cmの浅いピットがあるのみである。

壁 壁は緩くなだらかに立ち上がる。

炉 住居の覆土中に焼土のまとまった堆積は見られたが、炉らしいものは確認できなかった。

柱穴 床面には浅いピット1つのが確認された。柱穴とは見なし難い。

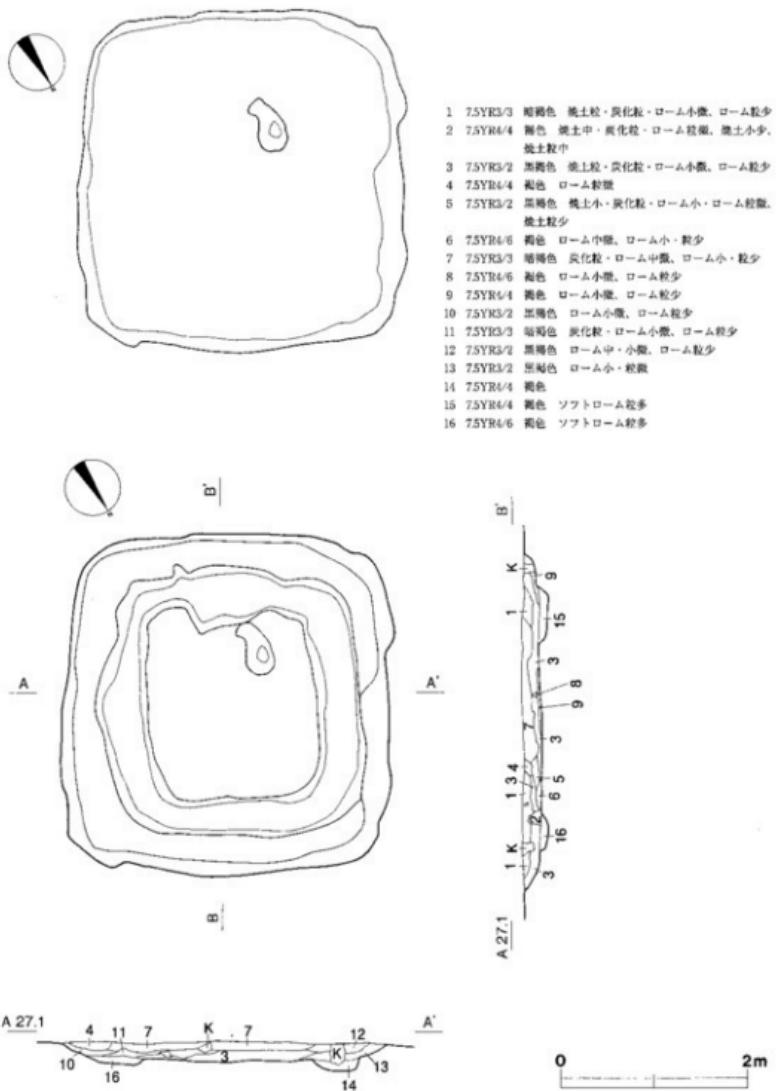
入口施設 入り口ピットや入り口部の床の硬化面などは確認されていない。

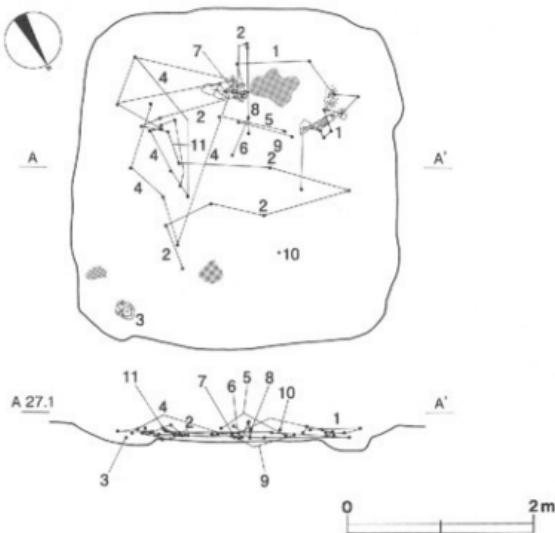
貯蔵穴 ない。

その他の施設 床面下に方形に巡る溝状の落ち込みが確認された。第1号住居跡床面下に確認されたものと同様のものといえる。

覆土 本住居跡の覆土は16層からなり、一部に焼土・炭化物が入り込む。

遺物出土状況 出土遺物は、住居跡内南側を中心に出土している。3の土師器壺は正位の状態で





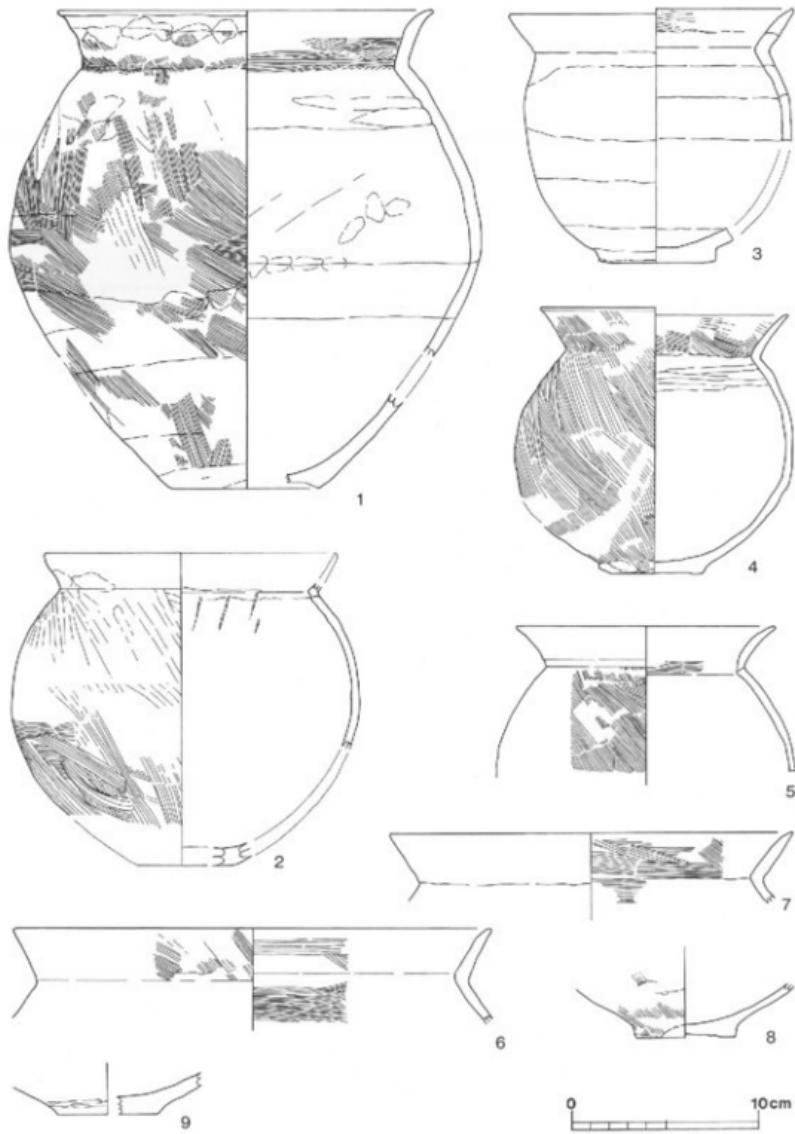
第92図 第5号住居跡遺物出土状況

出土した。床面下の溝状の落ち込みからの遺物の出土はほとんどない。本住居跡出土土器には、第3号住居跡出土のものと接合しているものがある。

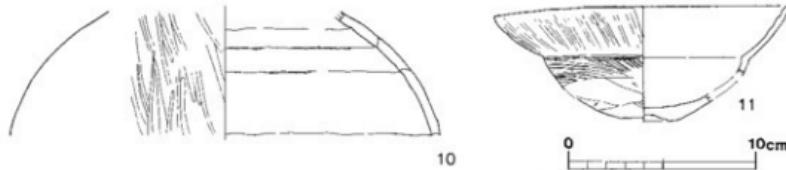
出土遺物 出土遺物は土師器壺がまとまって出土した。1～9は壺であり、10は壺、11は鉢である。壺には1・6・7のような大型のものや、2～5のような小型のものが見られる。3は特徴的な作りの壺で、内外面に輪積痕が残る。また、出土状況も他の土器と異なり、住居跡の東隅で潰れた

第5号住居跡出土土器

器種 種類	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・法華の特徴	備考
1 壺 土師器	A : [20.0] B : [7.8] C : 25.5		覆土上位 60% 普通	長石○、石英○、雲母△	明黄褐	頭部が壊れ口縁部が外傾し、口縁部が外反。頭部内外面や外面の頭部中央付近にハケ調整が目立つ。頭部中央に最大径を持ち、作りは荒い。	No58 炭化物付着
2 小型壺 土師器	A : [14.4] B : [5.2] C : [16.7]		覆土 40% 雪透	長石△、石英○、雲母△	棕	球根形の要で、器厚は全体的に薄い。頭部は括れ、口縁部が僅か外傾する。外側の腹上半は丁寧なヘラナギ。腹下半は細かなハケ調整。	No59
3 小型壺 土師器	A : [15.3] B : 6.3 C : 13.5		覆土下位 50 % やや不良	長石△、石英△、雲母△	棕	口縁部に最大径を持つ小型壺。内外面に輪積痕が残る。器面は内外面共に被熱によって荒れており、調整も不明瞭。底面に木薙痕。	No56
4 小型壺 土師器	A : [13.2] B : 4.9 C : 14.2		覆土 70% 普通	長石○、石英○、雲母△	明赤褐	球根形の要。頭部は括れ、口縁部が外傾する。外面全体や口縁部内面に細かなハケ調整。底面はナメ。	No57 剥離付着
5 壺 土師器	A : [13.8] C : (7.8)		覆土下位 10% やや不良	長石○、石英○、雲母△	にぶい棕	頭部は括れ、口縁部が外反する。器面は荒れている。頭部外面に細かなハケ調整。	No51



第93図 第5号住居跡出土遺物（1）



第94図 第5号住居跡出土遺物（2）

回収No	器種 埋蔵	法量(cm)	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
6	壺 十輪器	A : [25.6] C : (4.8)	覆土下位 10% やや不良	長石○、石英○	橙	腹部が活れ口縁部が外傾する。口縁部内外面にハケ調整。腹部内面に微弱なハケ調整。全体的に被熱により荒れる。	No55
7	壺 土師器	B : [21.6] C : (3.5)	覆土 30% やや不良	長石△、石英△、雲母△	橙	頭部が活れ、口縁部が外傾する。口縁部内面にハケ調整。全体的に被熱により荒れる。	No54 炭化物付着
8	壺 土師器	B : 5.4 C : (2.6)	覆土下位 80% 普通	長石○、石英△、雲母△	にぶい赤褐色 にぶい程度	壺の底部。やや上げ底となる。外面にハケ調整。内面はナデられ煤付着。外面被熱し赤化。	No52
9	壺 土師器	B : [5.2] C : (2.8)	覆土 30% 普通	長石△、石英△、雲母○	にぶい褐色	壺の底部破片。外面・底面ナデ。内面は一部ミガキ。	No53
10	壺 土師器	C : (6.6)	覆土 30% 良好	長石△、石英△、雲母△ 胎土織密	にぶい程度	腹部破片。外面には丁寧なヘラミガキ。内面には輪模痕が残り、ミガキが施される。	No50
11	鉢 土師器	A : [16.9] B : 25 C : 6.1	覆土下位 70% やや不良	長石○、石英○、雲母△	にぶい赤褐色	小さな上げ底の底部から腹部が開く。大きな口縁部は内面に旋を持ち外傾する。腹部外面は粗いハケ調査。口縁部は丁寧なヘラナデ。	No60

状態で出土した。

所 見 本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。住居として基本的な施設である炉が存在せず、小型の住居のためか柱穴も存在しないことが特徴と言える。本住居跡出土土器には、第3号住居跡出土のものと接合するものがあり関連が窺われる。

第6号住居跡 [SI-6] (第95~117図 P L23~25・62~70)

位 置 調査区中央南側のT・S-20・21・22から確認された。

重複関係 東側の壁の一部が第45号土坑と重複し、本住居跡が古い。

主 軸 N-52° -W。

規 模 およそ8.0×8.0mの方形を呈し、調査区内の古墳時代前期の住居跡の中では一番規模の大きなものである。確認面からの深さはおよそ50cmを測る。

床 床面には中央部分と南端の部分を除き、ベッド状造構が壁から1~2mの幅で作られている。この他、壁際には壁溝が巡り、入り口部分からP2・P1に通じて間仕切り溝が確認された。床面の硬化面は入り口部分のP5・P6周辺に見られ、またベッド状造構の内側にも見られた。特にP5の北西側には貼り床が確認された。

壁 部分的に壁の崩落が見られるが、多くは急激に立ち上がっている。壁際には全周して壁溝が確認された。壁溝の幅は約30cmで、深さ約15cmを測る。その土層の状況を見ると…様に、壁際はロームブロックの混入が少量で色調が濃く、住居中央側はロームブロックの混入が多いことが観察された。このことから壁際には板状の壁構築材が巡っていた可能性が想定される。

炉 P1・P4を結ぶラインより南東側でややP4側に寄っている位置に確認された。規模は長軸90cm・短軸75cm・深さは4cmを測る。炉の覆土には径2~5mm程度の小円礫(砂利)が多量に含まれていた。

柱 穴 P1~P4が主柱穴で、それぞれの上面径は1.0~1.3mを測る円形である。深さはいずれも90~95cm程度である。いずれも底面の幅は狭く上部ほど広がりを見せることと、土層の堆積状況から、柱の抜き取りが行われた可能性が考えられる。この中でP3のみが上面径が小さく、南側にテラス状の部分が見られた。P4の第6層の下位から第110図45のミニチュア土器が出土した。

貯蔵穴 P6が貯蔵穴に相当する。住居内の南東隅にP3と接して確認された。長軸1.1×0.8m・深さ40cmを測る。覆土は6層(第9・10・21・23~25層)からなり、第24層は埋め戻されたような土層で、第25層は水中で泥が沈殿したようなきめの細かい土層である。

入口施設 P5が入り口施設に相当し、南東方向に向かって斜めに穿たれている。上面径は30cm・深さ24cm・傾斜角は60°を示す。同ピット周辺に硬化面が見られた。

その他の施設 間仕切り溝が確認され、住居内の南東壁からP2・P1へとクランク状に折れ曲って作られている。P1側は浅く、南東壁側は深さを増す。入り口ピット周辺に小さなピットが9ヵ所確認された。

覆 土 覆土は22層から構成され、第1層から第4層は暗褐色を呈し、下層の土層とは区別される。

遺物出土状況 多くの遺物は北西壁・南壁際にまとまって出土している。同所の間での遺物の接

合関係が多く見られた。本住居跡出土土器には、第2・3号住居跡出土土器と接合したものがある。また、本住居跡出土玉作関連遺物には、第4号住居跡のものと接合したものがある。

出土遺物 出土遺物には土師器と土玉、そして玉作関連遺物が出土している。土師器には1~18の甕、19~26・28の壺があり、29~32の小型鉢、27・33・35・36の壠、34の椀、37~43の器台、45のミニチュア土器、46~49の手づくね土器が出土している。これらの中で特徴的なものに、甕では5や8があり、「S」字状口縁甕を意識したような口縁部断面形態を見せる。また、26は大型壺の口縁部であり、断面形も特徴的であるのと同時に側面に棒状浮文が貼付されている。出土土器の全体的な傾向として、甕や器台が比較的まとまって出土している。そして、これらの土師器の中で、21の壺、30・32の小型鉢、33・36の壠、40・42の器台、45のミニチュア土器には赤色顔料が塗布されている。

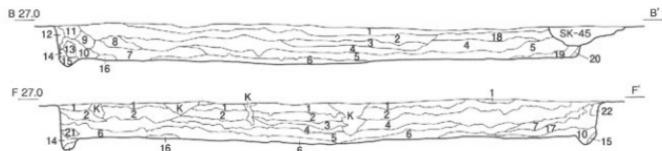
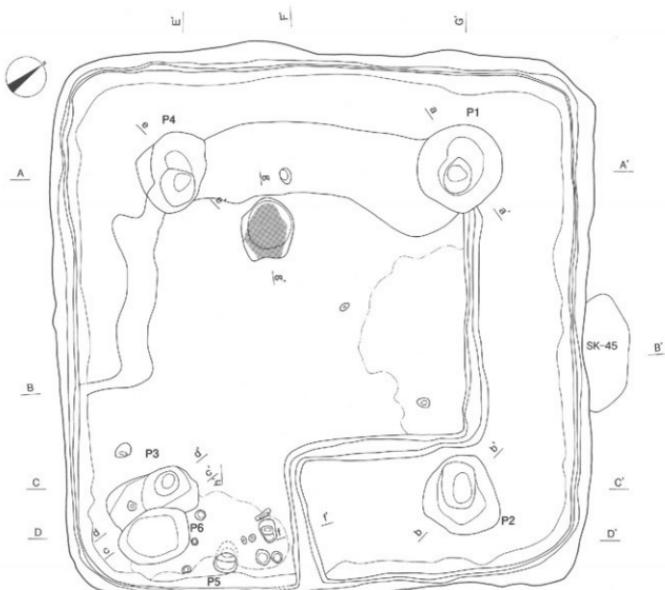
出土した土師器の中には意図的に穿孔されたものがあり、12・13・15の甕や21の壺が該当する。いずれも焼成後の穿孔であり、12は底部に見られ、13・15・21は胴部に穿孔が見られる。12や21の穿孔方法は、断面形が丸い棒状のもので打ち抜いた様な状況である。また、13・15は少しづつ打ち割りながら破碎し、およそ円形の大きめの孔を開けた様に思える。

土製品としては50・51の土玉がある。

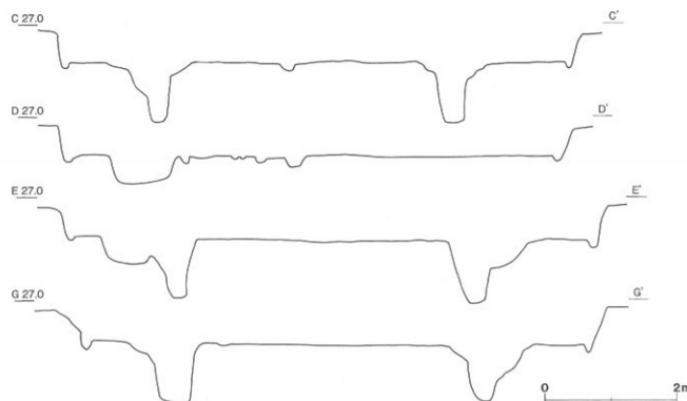
玉作関連遺物出土状況 玉作関連遺物の出土位置を図化したものが第98図である。住居内の入り口ピットや貯蔵穴が見られる床面南東側を中心に出土していることが分かる。

今回の調査に当たっては、床面に25cm方眼（約1000区画）を設定し、各方眼からサンプルした土を水洗い選別し、玉作関連の微細な遺物の採集に努めた（第2章第3節2遺構調査参照）。その結果は、玉素材としてメノウ・滑石・緑色凝灰岩・琥珀の微細剥片などが出土しており、これらが玉製品の材料として用いられていたことが分かる。以下は微細な玉作関連遺物の種別ごとにその出土状況の特徴について述べる。メノウについては、間仕切り溝の西側の入り口ピットから貯蔵穴にかけ濃密に分布が見られる。1区画での最高重量は4.9gであり、細かく見れば貯蔵穴周辺よりも入り口ピット周辺の方がやや多い傾向が見られる。その他の床面ではほとんど出土していない。住居内施設ごとのメノウの出土状況は、最も多く出土したのが貯蔵穴で24.7gであった。琥珀は間仕切り溝西側と床面東側に散発的に出土している様子が窺え、ほとんどの採集区は0.1g以下であったが北西の採集区のみ0.2g出土した。住居内施設ごとの琥珀の出土状況は、最も多く出土したのはやはり貯蔵穴でおよそ0.2gであった。緑色凝灰岩は入り口ピット周辺の限定された区画のみで確認され、最も多い区画で0.3gの出土であり、ほかは0.1g未満であった。滑石は2ヶ所の採集区のみから出土しており、いずれも0.2gであった。住居内施設ごとの滑石の出土状況で、最も多く出土したのはやはり貯蔵穴でおよそ0.2gであった。

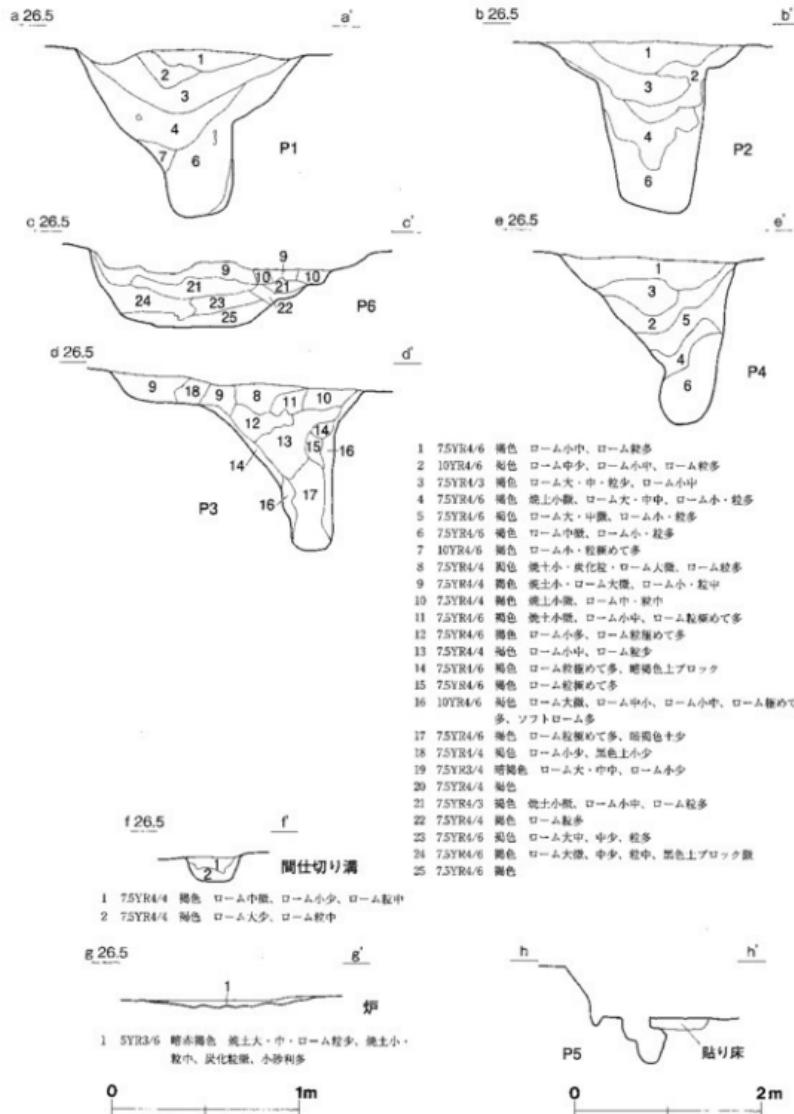
これらの玉材料と言える微細資料以外に、玉作関連遺物として玉作用砥石の材料である片岩の



- 1 7SYR3/3 緑褐色 ローム中・小・粒少 黒色ブロック夾 牛牛
 2 7SYR3/2 緑褐色 地上紅葉、ローム中少、ローム小・粒少
 3 7SYR2/2 緑褐色
 4 7SYR2/1 緑褐色 地上土・粒少、ローム少
 5 7SYR4/4 褐色 地上土・粒少、ローム中少、ローム粒少
 6 7SYR4/6 褐色 ローム少、ローム中少、ローム小・粒少
 7 7SYR4/4 褐色 ローム大・中・小・粒少 ロームブロック多
 8 7SYR4/6 褐色 地上土・粒少、ローム中少
 9 7SYR4/4 褐色 ローム中・小粒、ローム粒少
 10 7SYR3/3 緑褐色 ローム粒少
 11 7SYR3/3 緑褐色
 12 7SYR3/3 緑褐色 ローム大・小・粒少
 13 7SYR3/2 緑褐色 ローム中・粒少
- 14 SYR3/4 墓赤褐色
 15 7SYR4/6 褐色 ローム少、ローム粒中
 16 7SYR4/6 褐色 ローム大・中・小少、ローム粒中
 17 7SYR4/6 褐色 地上土・粒少
 18 7SYR3/3 緑褐色 ローム少、ローム中
 19 7SYR4/6 褐色 地上土・黄化物・炭化物・ローム少、地土小・ローム粒多
 20 7SYR4/6 褐色 黄化物・ローム少、ローム粒中
 21 7SYR4/6 褐色 ローム少、ローム小・粒少
 22 7SYR4/6 褐色 ソフトコームブロック



第95図 第6号住居跡



第96図 第6号住居跡柱穴等土層

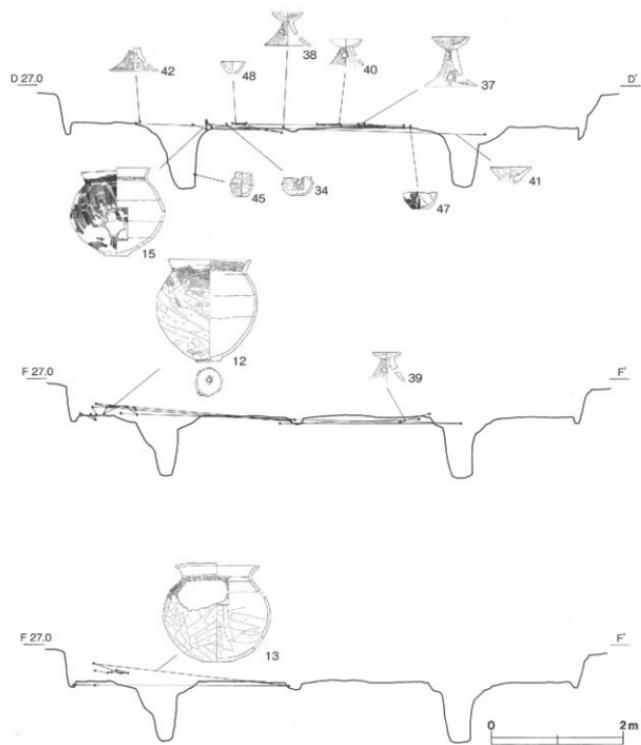
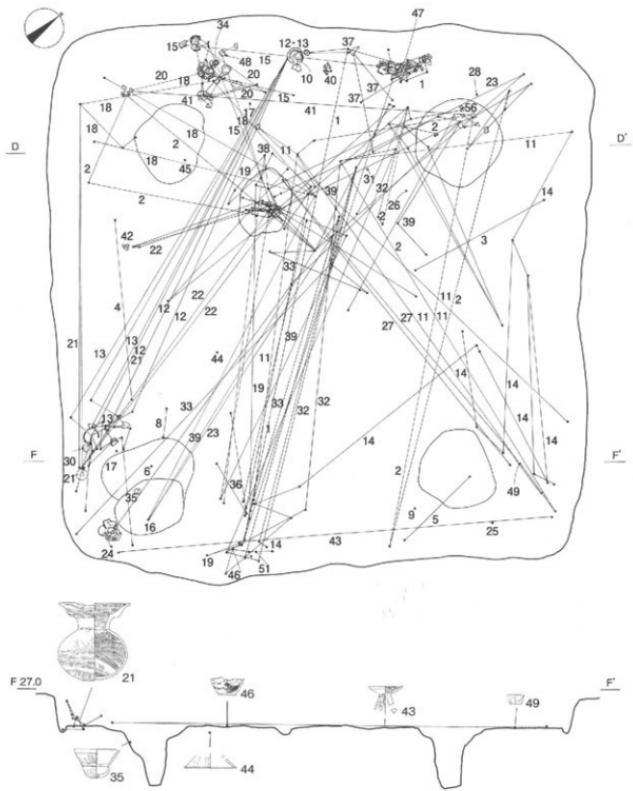
微細剥片が多数出土している。この出土状況はメノウの微細剥片分布状況に類似し、間仕切り溝の西から貯蔵穴の間に集中している。1区画での最高重量は15.1gで入り口ピット周辺部であり、貯蔵穴周辺は比較的少ない。住居跡内施設ごとの出土状況では、貯蔵穴から20.1g出土しているが、その他のピットではほとんどが1.0g未満である。

このほか玉作関連遺物とは言えないが、微細な資料で小円碟や小土器片が出土しており、小円碟（砂利）については炉跡や入り口付近からの出土が目立った。住居跡内施設ごとの出土状況では炉跡から57.9g出土し、意図的に持ち込まれたものと考えられる。小土器片については入り口付近にも多く見られるものの、住居内全体に分布している様子が窺える。

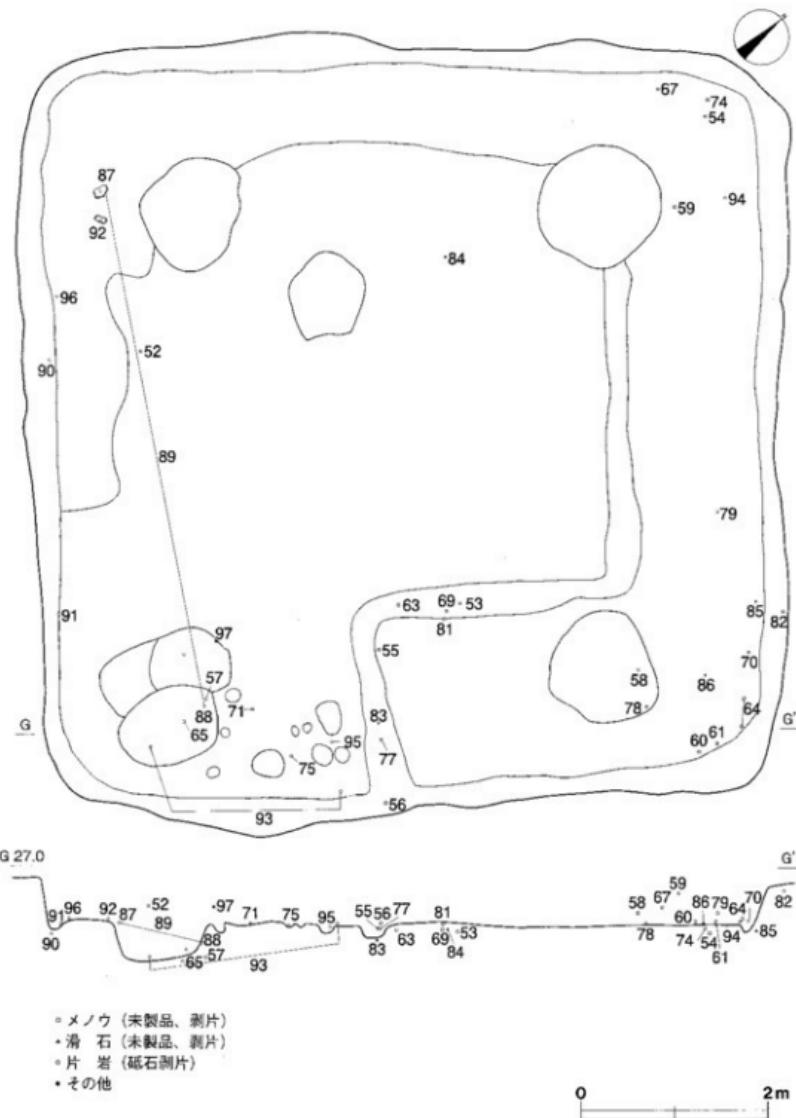
本住居跡での玉作では、特にメノウ材の使用頻度が高く、滑石や緑色凝灰岩、琥珀の出土は極僅かであった。このことから、メノウ製勾玉製作を主に行なっていた様子が窺われる。また、住居内における玉作作業の中心的な場所は、玉作関連遺物の出土状況から入り口部分から貯蔵穴周辺が想定される。また、本住居跡出土の玉作関連の砥石の中には、第4号住居跡出土のものと接合したもの（89・96）があり、同住居跡との関連が窺われる。これらの砥石の接合状況は、砥石が使用時の折損などで形を変えながらも用いられ続けた様子が窺える。

玉作関連遺物 玉作関連遺物には、玉の未製品や材料、そして玉作の道具が出土している。材料として把握されるのはメノウ・滑石・緑色凝灰岩・琥珀である。玉未製品を工程ごとに分類すれば、メノウ製としては、採集原石（52）、荒割工程（53）、形割工程（54～58）、側面打裂工程（59～65）（59・61は形割工程とすることも可能）、研磨工程（66～73・75・76）、穿孔工程（74）のものが出土している。

52の採集原石の形状は一様に厚さ1cm程度の平たい板状のもので、表面には荒れた自然面が見られる。側面の大部分には剥離面風の自然面が見られ、人為的な剥離面とは異なり滑らかで光沢を持つ。53は板状原石を長方形の形態を意識して打割している。上側面と左側面が明確な剥離面となっている。54～56・58は直方体を意識して打割され、表面-側面の角度が直角に近い。56の上・右側面には明確な剥離面が見られるが、その他は自然面と思われる。54・55・57・58の裏面に自然面が残り、表面は結晶質面となる。55と58は同一母岩と思われる。59～65は側面打裂工程のものと思われ、その多くが半円形やC字状の形態を意識して加工されている。59・61は半円形を意識した形態で、59の右側面は直線的に打割され、表面と側面の角度も直角に近い。60も59同様の直線的な打削が見られ、その他の側面等に細かな押圧剥離が施されている。その結果、表面の自然面が少なくなり、勾玉の腹に相当する分部はより押圧剥離が集中する。製作上の安定性確保のためか裏面は全体が自然面のままである。63はC字状の形態を意識して剥離がなされ、表面には自然面や結晶質面が残らない。上端が欠損したものと思われる。64は扁平なC字状を呈し、勾玉の形態を明瞭に理解することができる。腹部分の抉りを入れる作業で欠損してしまったものであろう。やはり表面には自然面や結晶質面が残らず、裏面には押圧剥離による自然面の切



第97図 第6号住居跡遺物出土状況（1）



第98図 第6住居跡遺物出土状況（2）

土層サンプル採集区



メノウ材出土状況



- 4.0g 以上
- 1.0g 以上 4.0g 未満
- 0.2g 以上 1.0g 未満
- 0.2g 未満



第99図 第6号住居跡遺物出土状況（3）

琥珀材出土状況



緑色凝灰岩材出土状況



- 4.0g 以上
- 1.0g 以上 4.0g 未満
- 0.2g 以上 1.0g 未満
- 0.2g 未満

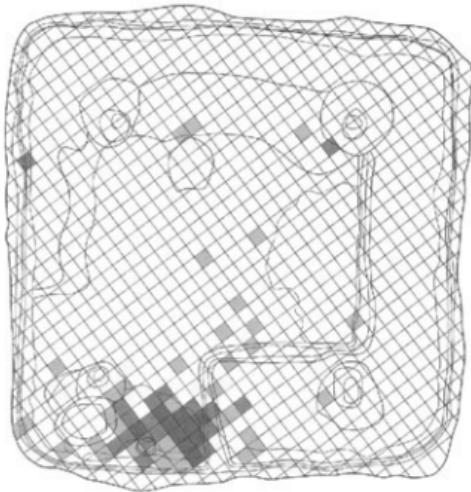


第100図 第6号住居跡遺物出土状況（4）

滑石材出土状況



片岩材出土状況

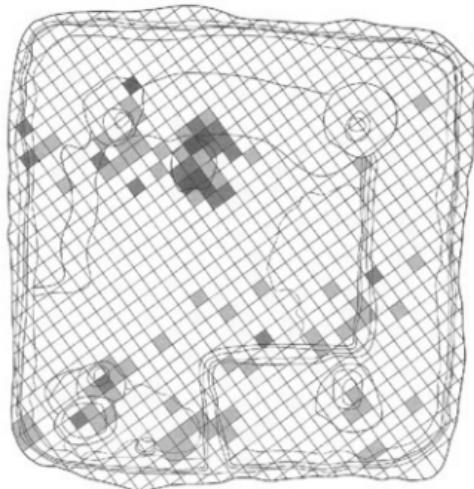


- 4.0g 以上
- 1.0g 以上 4.0g 未満
- 0.2g 以上 1.0g 未満
- 0.2g 未満

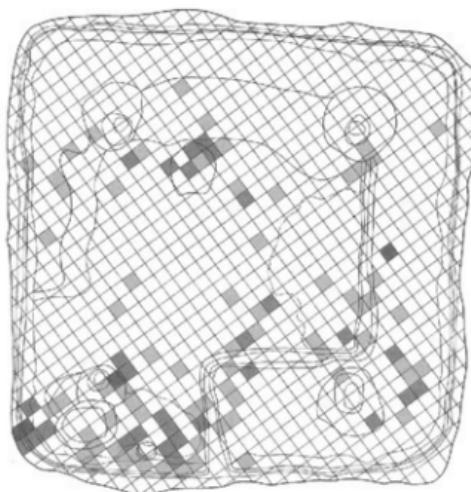
0 2m

第101図 第6号住居跡遺物出土状況（5）

小円礫出土状況



小土器片出土状況



- 4.0g 以上
- 1.0g 以上 4.0g 未満
- 0.2g 以上 1.0g 未満
- 0.2g 未満



第102図 第6号住居跡遺物出土状況（6）

メノウ材出土状況



琥珀材出土状況



- 10.0g 以上
- 5.0g 以上 10.0g 未満
- 1.0g 以上 5.0g 未満
- 1.0g 未満



第103図 第6号住居跡遺物出土状況（7）

滑石材出土状況

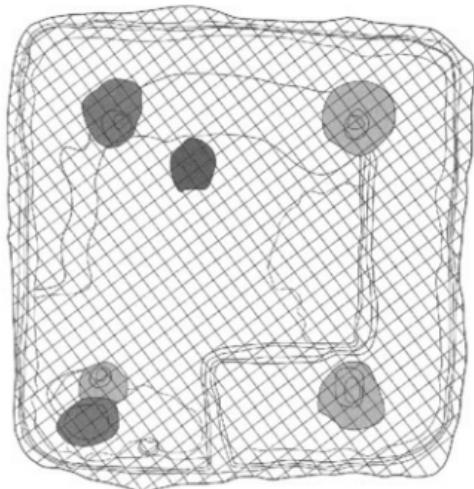


片岩材出土状況

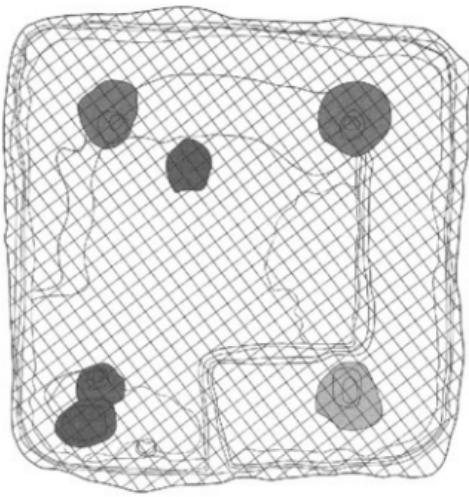


第104図 第6号住居跡遺物出土状況（8）

小円礫出土状況



小土器片出土状況



- 10.0g 以上
- 5.0g 以上 10.0g 未満
- 1.0g 以上 5.0g 未満
- 1.0g 未満



第105図 第6号住居跡遺物出土状況（9）

除がなされ始めている。65は裏面に自然面が残り、側面の一方が直線的で他方が曲線的となる。表面には上下端からの大きな剥離や細かな剥離が見られ、前者により破損したものと思われる。曲線的な側面の一部に研磨痕が残る。66~73・75・76は研磨工程のもので、およそ半円形またはC字状の形態のものである。66は表面の押圧剥離がなされた後に研磨を行い、裏面は一部研磨面が見られるが大部分は自然面である。腹部には表裏面方向から抉りを意識した押圧剥離が集中している。67・68は表裏両方又は表裏一方と側面の一部にも研磨痕が残る。67は右側面に剥離が見られ、68は上端の剥離で欠損したものと思われる。69・70には表裏と背部に研磨痕が残り（69の腹部側面の一部も研磨）、70の腹部は押圧剥離による抉りが始められ、69の腹部は抉りが進んでいる。71は表面にのみ研磨痕が残り、右側面で欠損している。72も表裏面と背部に研磨がなされ、腹部の抉り作業中に折損したものであろう。73は仕上げ研磨工程のもので、穿孔がなされた後の腹部の研磨作業中に折損したものであろう。本資料から窺える勾玉の形態は、「C」字状というより「コ」字状に近い。74は穿孔途上で薄く剥離したものと考えられ、穿孔の口径は73に比べ細くて一定であるのが特徴的である。75・76も仕上げ研磨工程のもので、腹部の研磨がなされた折損品である。76の断面形は角が取れ丸みを持つ。このほか、77~82はメノウ材の剥片である。

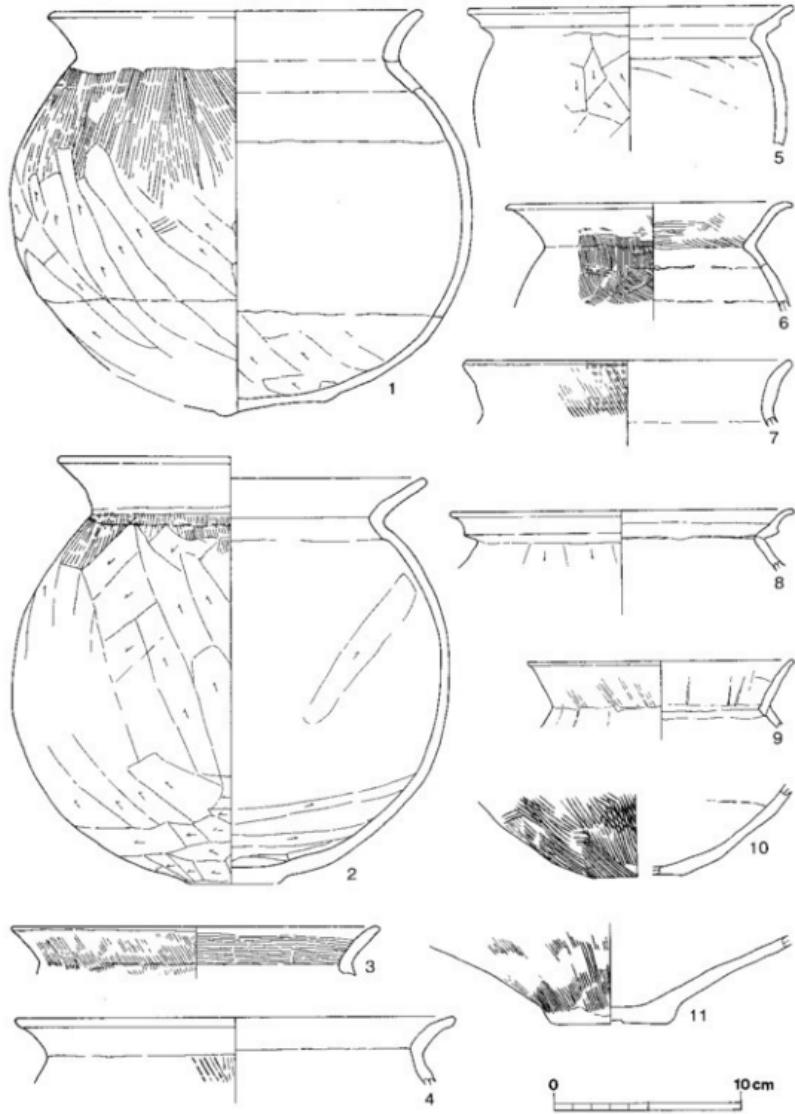
滑石製玉類では研磨工程（83・84）、穿孔工程（85）、完成品（86）が出土している。

83・84が勾玉の研磨工程のもので、小型のものである。欠損品ではないが製作を中止し廃棄されたものである。85は管玉の穿孔工程のもので、穿孔途中で作業をやめてしまったものである。86は管玉の完成品であるが、未製品との形態差が大きく、一連の玉作業で製作されたものかは不明である。

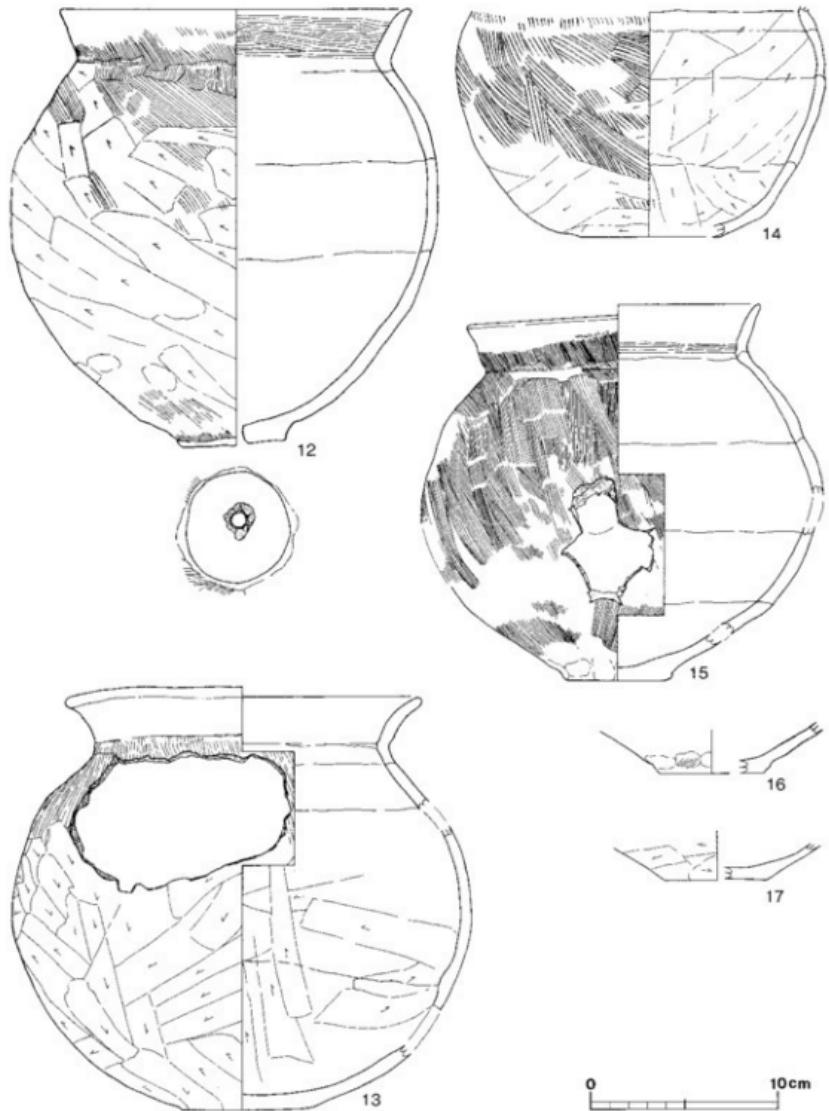
このほか、水洗い選別で緑色凝灰岩や琥珀の微細剥片が採集されている。これらの石材を用いて製作された玉類がいかなるものかは明確にし得ないが、およそ緑色凝灰岩製管玉と琥珀製勾玉が想定される。

玉作関連道具の出土品としては、87~96の片岩製の砥石が出土し、92・93は内磨砥石、95などは平砥石、87・90・91・94・96は内磨兼平砥石といえる。意外と砥石は内磨き・平砥石と用途を限定せず用いている様子が窺える。97は石英製の不明石器である。片岩製の砥石の石材は大きく2種類に分けられ、やや青みがかる色調の87・88・91~93・95・96とやや黄みがかり砂質感のある90・94である。

所 見 本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。名称としては住居跡としているが、その中で行われていた行為を考えれば、玉作工房と位置付けられよう。玉の種類としてメノウ製勾玉を中心滑石製の勾玉・管玉なども製作されたものと考えられる。そして、メノウ製勾玉の製作工程の中でも側面打裂工程や研磨工程の資料が目立って出土し、道具類については敲き石などが見られず、砥石のみの出土であることが



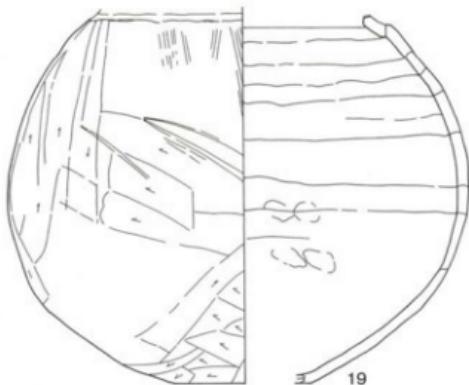
第106図 第6号住居跡出土遺物（1）



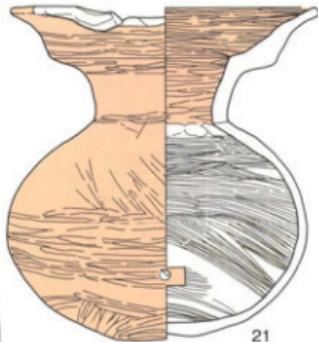
第107図 第6号住居跡出土遺物（2）



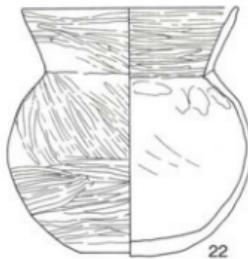
18



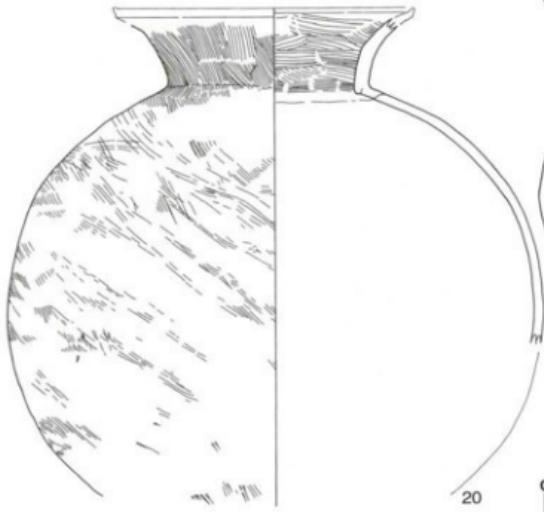
19



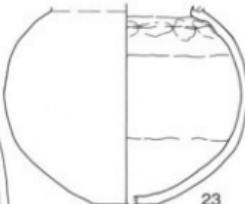
21



22



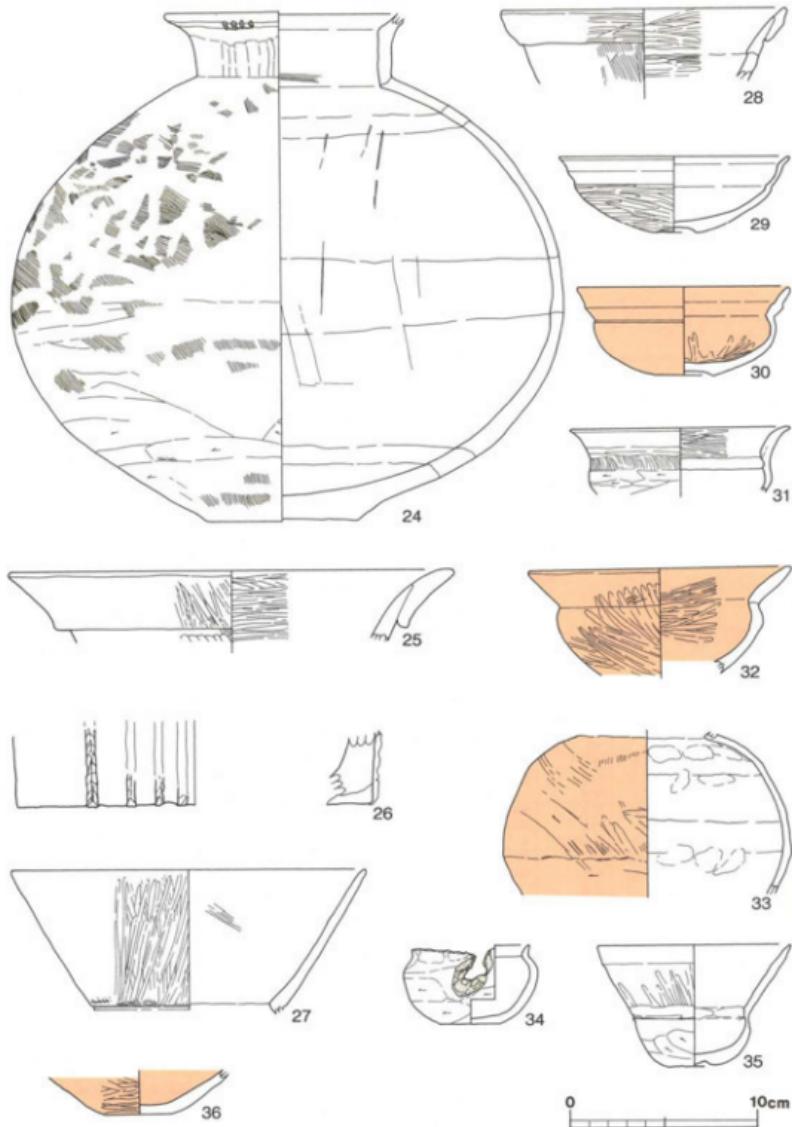
20



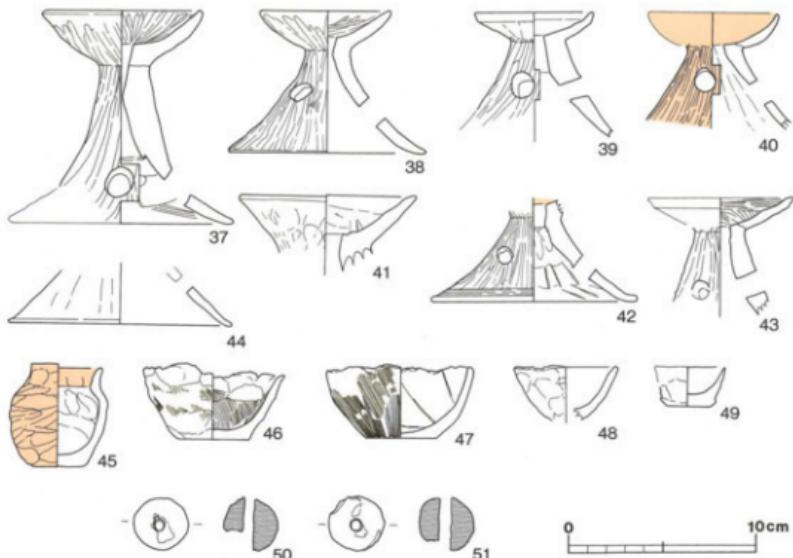
23



第108図 第6号住居跡出土遺物（3）



第109図 第6号住居跡出土遺物（4）



第110図 第6号住居跡出土遺物（5）

第6号住居跡出土遺物

図版No	器種 種類	法量(cm)	出土位置 残存率 度	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A : [20.0] B : [5.0] C : 21.6	覆土。 90% △	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙 褐灰	上にやや塗れた球形の胴部で頭部が緩く括れ。口縁部がやや外反。口唇部は丸い。胴上位はハケ調整。下位はハラ削り。口縁部ナデ。	No63 胴部煤付着。
2	甕 土師器	A : [19.7] B : 4.8 C : 21.8	覆土。 70% △ やや不良	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙	球形の胴部で頭部が括れ。口縁部が外傾する。口唇部は丸い。胴上位はハケ調整の後ナデ。下位、底面はハラ削り。口縁部はナデ。	No65 被熱
3	甕 土師器	A : [19.6] B : 4.8 C : [2.6]	覆土。 30% △ 普通	長石○、雲 母△	褐灰 にぶい赤褐	甕の口縁部破片。掠れた頭部から口縁部が外傾し、口縁部がやや外反する。内外面共にハケ調整。	No79
4	甕 土師器	A : [23.6] C : (3.5)	覆土。 10% △ 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙 灰褐	頭部が緩く括れ口縁部が外反。口縁部は丸い。内外面ナデ。	No82 外面煤付着
5	甕 土師器	A : [17.5] C : (7.4)	覆土下位 30% △ 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙	丸い胴部から頭部が括れ。口縁部は中程に段を持って端部が延びる。胴部外面はハケ調整とハラ削り。	No74
6	甕 土師器	A : [14.8] C : (5.8)	覆土下位 30% △ 良好	長石○、石 英○	にぶい橙	頭部が屈曲し口縁部が外傾する。口唇部はやや外反する。胴部外面ハケ調整。口縁部外面ナデ。胴部内面に輪積み痕あり。	No78
7	甕 土師器	A : [17.6] C : (3.3)	覆土。 20% △ 普通	雲母△、乳 白色粒	にぶい橙 橙	やや外反する口縁部破片。頭部にハケ調整。口縁部はナデ。	No81 炭化物付着
8	甕 土師器	A : [18.4] C : (3.0)	覆土。 20% △ 普通	長石○、石 英○、雲母 △	褐灰 にぶい黄橙	甕の口縁部破片。頭部が屈曲し口縁部は中程に段を持って端部が外反する。S字状口縁を意識したものか。器厚は薄く、作りはシャープ。	No75
9	甕 土師器	A : [14.2] C : (3.5)	覆土。 30% △ 良好	長石○、石 英○、雲母 △	褐灰 にぶい赤褐	甕の口縁部破片。頭部で屈曲し、口縁部が外傾する。口唇部はやや外反する。内外面共にナデ。頭部内面に輪積み痕あり。被熱を受ける。	No80 SI3土器と接合

回収No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存 状況	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
10	壺 土器部	B : [4.8] C : (4.3)	覆土下位 30% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	褐灰 にぶい黄褐色	平底の底面から確く聞く。縁はハケ調整が外側 と底面に見られ、内面はナデられる。	No77 炭化物付着
11	壺 土器部	B : 5.8 C : (4.2)	床面 80% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	にぶい褐 にぶい黄褐色	底面は厚手で中央がやや凹み、肩部へ大きくな く、外側にはハケ調整が見られ、内面は剥離し 欠けている。	No72
12	壺 土器部	A : 18.8 B : 5.7 C : 23.5	床面 80% 普通	長石○、石 英○	にぶい黄褐色	球形の胴部から腹部が緩く括れ。口縁部が外側 に傾き、肩部は内側へ反り、外部胴部中央位を中心へ て削り、肩上位及び口縁部内側はハケ調整。	No64 底面に焼成後 の穿孔
13	壺 土器部	A : 19.1 B : 7.0 C : 22.1	床面 95% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙	上下にやや削られた球形の胴部で、頸部は緩く括 れ口縁部がやや外反。口縁部は丸い、肩上位 にはハケ調整。下位はハラ削り、口縁部ナデ。	No66 肩部焼 成後穿孔。外 面削付着。
14	壺 土器部	B : [7.4] C : (12.0)	覆土 50% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい褐	口径が遙かに大きな壺で、颈部が丸い。底 面もほかの壺に比べ大きい。外側にはハケ調整 やハラ削り。肩上位及び口縁部内側はハケ調整。	No68 SF3上部と接合 炭化物付着
15	壺 土器部	A : [15.7] B : 4.8 C : 20.1	覆土下位 70% 普通	砂粒△、雲 母△、白色 針状物質	にぶい赤褐色	胴部半位で最大径を持つ。颈部は緩く括れ。口 縁部は外側する。肩部下半は被熱赤化し器口が 丸い。胴部上半から腹部はハケ調整。	No69 肩部焼成後穿 孔か
16	壺 土器部	B : [5.5] C : (2.3)	防塵袋 40% 普通	長石△、石 英△	褐灰 橙	要の底部破片。内外面ナデ。	No83
17	壺 土器部	B : [5.6] C : (1.8)	覆土 25% 普通	長石△、石 英○	にぶい赤褐色	要の底部破片。ヘラ削りされた平底の底面から 胴部が外側する。胴部もヘラ削り。内面はナデ。	No73
18	壺 土器部	C : (6.6)	覆土 25% 良好	長石△、石 英△、雲母 △、砂粒	にぶい赤褐色	頭部が削り口縁部が外側する。頭部は被熱化で 削離する。外側はハケ調整、肩部ヘラナデ。内 面無底部ハケ調整。	No76 被熱化
19	壺 土器部	B : [7.5] C : (20.0)	内部にはか 50% やや小見	長石○、石 英○	澄 明赤褐色	球形の胴部で、頭部から口縁部は直角、外側に は餘分なハラ削りが全体に施され、一部ハケ調整 も見られる。	No67 被熱し荒れる
20	壺 土器部	A : [17.2] C : (25.1)	覆土下位 60% 普通	長石○、石 英○、赤色 鉱物	橙	胴部半位で最大径を持つ。頸部が括れ口縁部が 外側する。口縁部は彫み上げられる。削離は ハケ調整の後ナデ。口縁部内外面はハケ調整。	No85
21	壺 土器部	A : [16.4] B : 4.4 C : 17.4	床面 90% 普通	石英△、小 石、白色針 状物質△、 密密	にぶい橙	球形で肩部から腹部が括れ直立し、口縁部は 2重式口縁。底面はやや上げ瓶、外側や口縁 部の内面はヘラミガキ。胴部内面はハケ調整。	No84 赤彩 剥部下位に焼 成後穿孔
22	壺 土器部	A : [11.6] B : [5.2] C : 13.0	内部にはか 60% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙	底面は丸に近く、胴部は球形で頭部が括れ、 口縁部が外側する。外側と口縁部内面は豊かなハ ラミガキなされる。胴部内面は無底部。	No71
23	壺 土器部	B : [5.4] C : (10.5)	床面 25% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい赤褐色	頭部は球形で、底面は平底。頭部は削離する。外 面ナデ、内面ヘラナデ。33辺に削離する。	No70
24	壺 土器部	B : 8.0 C : (27.2)	覆土下位 5% 普通	長石△、石 英△、雲母 △	にぶい黄褐色	上下に削られた頭部で、頭部は削離直立し、口縁 部が外側する。口縁部は重口縁で、口縫に削 離が付く。外側にはハケ調整の後ヘラナデ。	No86
25	壺 土器部	A : [23.8] C : (3.8)	覆土下位 10% 良好	長石△、石 英△、赤色 鉱物	にぶい赤褐色	折返し口縁部の口縁部破片。口縁部下端に段を 持つ、内外面共に丁寧なヘラミガキが施される。	No89
26	壺 土器部	C : (4.5)	覆土 10% 普通	長石△、石 英△、雲母 △、灰白色 鉱物	橙	二重口縁部の口縁部破片。刻みが付く4条の棒 状浮出が添付される。非常に厚手の口縁部である。	No88
27	壺 土器部	A : [19.0] C : (7.5)	床面 20% 普通	長石○、石 英○、雲母 △、赤色鉱 物	橙 にぶい橙	切口の口縁部破片。外側ハケ調整の後ヘラミガキ。 内面ナデ。	No102
28	壺 土器部	A : [15.4] C : (3.8)	覆土 5% 普通	長石○、石 英△、雲母 △、赤色鉱 物	にぶい橙	折返し口縁部の口縁部破片。外側にハケ調整、 内面にはハケ調整の後ヘラミガキ。	No87
29	小型杯 土器部	A : [12.3] B : 2.1 C : (4.1)	覆土下位 80% 普通	長石△、石 英○、赤色 鉱物	にぶい黄褐色 にぶい橙	底面は上げ瓶で、頭部が大きく聞く。頭部内面 に段を持ち、口縁部は段を持って外側する。器 厚は薄い。外側部内面は工事なヘラミガキ。	No100
30	小型杯 土器部	A : [11.4] B : 3.6 C : 4.7	覆土 95% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	赤 橙	上下に削れた頭部から頭部が括れ、内面に段を 持つ。口縁部には段を持つ。外側はナデられ、 内面はナデの後底面に丁寧なヘラミガキ。	No98 全面に赤彩
31	小型杯 土器部	A : [11.8] C : (3.5)	覆土下位 20% 普通	長石△、石 英○、雲母△、 灰白色 鉱物	にぶい橙	内削離された頭部から腹部が緩く括れ、口縁部が外 側する。頭部外側にハケ調整が残る。口縁部は ナデの後ミガキ。頭部はヘラ削り。	No101
32	小型杯 土器部	A : [14.2] C : (5.6)	覆土下位 30% 普通	長石△、石 英○、雲母△、 灰白色 鉱物	赤	頭部で緩く括れ、口縁部が外側する。内外面共 にヘラミガキが密になされる。内外面に剥離見 られる。	No103 内外面赤彩

国版No	器種 種類	法量(cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
33	埴 土師器	C : (8.5)	覆土下 25% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	明赤橙 橙	やや上下に潰れた頭部で、下位に最大径を持つ。 外面ハケ調整の後ヘラミガキ。内面ナデ。	No162 外面赤彩痕残 る
34	輪 土師器	A : 6.3 B : 32 C : 42	覆土下位 95% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい赤褐 にぶい褐	平底で下位に潰れた頭部に、頭高が切れ、無い △縫合が描み上げられる。底面と頭部下半はヘ ラ削り。頭部の一辺に焼成後の穿孔か。	No109
35	埴 土師器	A : 10.4 B : 25 C : 65	P 3 内 100% 普通	長石△、石 英△、雲母 △	橙	扁平な頭部に大きな口縫合が外側する。頭部内 面には縫合を持つ。底面はやや上げ底。环部はヘ ラ削りの後ナデ、口縫合外側にはヘラミガキ。	No99
36	埴 土師器	B : (3.6) C : (2.0)	覆土下位 30% 普通	長石△、石 英△、雲母 △、赤色斑 縫合	明赤褐	平底の底部から腰く立てる。内外面共にヘラ ミガキが施される。	No105 全面に赤彩
37	器台 土師器	A : [8.6] B : [12.0] C : 11.4	覆土下位 90% 良好	長石○、石 英○、雲母 △、小石	にぶい橙	全形が理解できる器台。頭部に最大径を持ち、 脚部が長い。环部底面に1孔と脚部底に4孔の 穿孔が開く。全体にヘラミガキ。	No91
38	器台 土師器	A : 6.6 B : (10.6) C : 7.6	覆土下位 95% 良好	石英△、赤 色粒	にぶい赤褐	脚部底の一部が欠けるのみ。环部底面に1孔と 脚部に3孔(かし孔)が開く。环部外面と脚部 外側は丁寧なヘラミガキ。脚部内面ナデ。	No90
39	器台 土師器	A : [6.4] C : (6.6)	内にか 80% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○、小石	にぶい赤褐	頭部に最大径を持つ。环部は小さい。筆かし 孔で2孔。环部底面に1孔、脚部に3孔の穿孔が 開く。外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	No96
40	器台 土師器	A : [6.7] C : (6.2)	覆土下位 70% 普通	長石△、石 英△、雲母 △	にぶい赤褐	环部の口縫合部は外反する。脚部の擦は欠損する。 环部底面に透かし1孔、脚部に3孔(かし)孔開く。 外側は丁寧なヘラミガキ。内面はナデ。	No92 环部外側・ 脚部外側ナデ
41	器台 土師器	A : 9.6 C : (4.0)	床面 100% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい赤褐	粗製品の器台の环部か。全体に荒い作りで、脚部は 太く短い。外側には△を調節残り、内面はナデ。 环部底面に透かし1孔、孔開く。	No93
42	器台 土師器	B : 11.0 C : (5.4)	覆土下位 95% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	明赤褐 橙	器台の脚部。据の一部が割れ。脚部は縮く広が る。环部底面に1孔と脚部に3孔の透かし孔が 開く。外側ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	No94 环部内面ナデ
43	器台 土師器	A : (7.8) C : (6.3)	覆土下位 80% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	橙	环部の口縫合部は外傾し、口唇部が立上がる。脚 部の擦は欠損。环部底面に透かし1孔、脚部 に3孔開く。外側はヘラミガキ。	No95
44	器台また は高环 土師器	B : (12.0) C : (2.7)	床面 20% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	にぶい橙	脚部の破片で極く開く。透かし孔が1孔見られ る。外側はヘラミガキ。	No97
45	ミニチュ ア土師器	A : 3.8 B : 2.8 C : 5.5	P 4 内 100% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	赤褐	頭部上位に最大径を持つ。頭部が切れ、口縫合部 が立ち上がる。脚部には指痕板が各所に残り、 全体にいびつな。	No110 外側と口縫 部内面に赤彩
46	手づくね 土師器	A : 7.5 B : 37 C : 38	床面 100% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	にぶい橙	平底から口縫部へ外傾する。口縫部は描 み上げられる。外面指痕板や窓いナデ。内面は ハケ調整が残る。	No111
47	手づくね 土師器	A : [7.5] B : 3.8 C : 38	床面 95% 普通	長石○、石 英△、雲母 △	にぶい黄橙 にぶい橙	平底から口縫部に向かう外傾し、口縫部は描 み上げられる。外側には繊細なハケ調整。内面は はヘラナデ。底面ナデ。	No106
48	手づくね 土師器	A : (5.6) C : (2.9)	覆土下位 30% 普通	飛行○、石 英△、雲母 △	にぶい赤褐	底面の形態は不明。底部付近から外傾して口縫 部が立ち上がる。口縫部は描み上げられている。 外側に指痕板あり。	No108 黒色の付着物 あり
49	手づくね 土師器	A : [3.8] B : 2.2 C : (2.1)	覆土下位 60% 普通	長石△、石 英△	にぶい黄橙	底部から外傾して頭部が立上がる。外側に指 痕板残る。	No107

第6号住居跡出土土製品

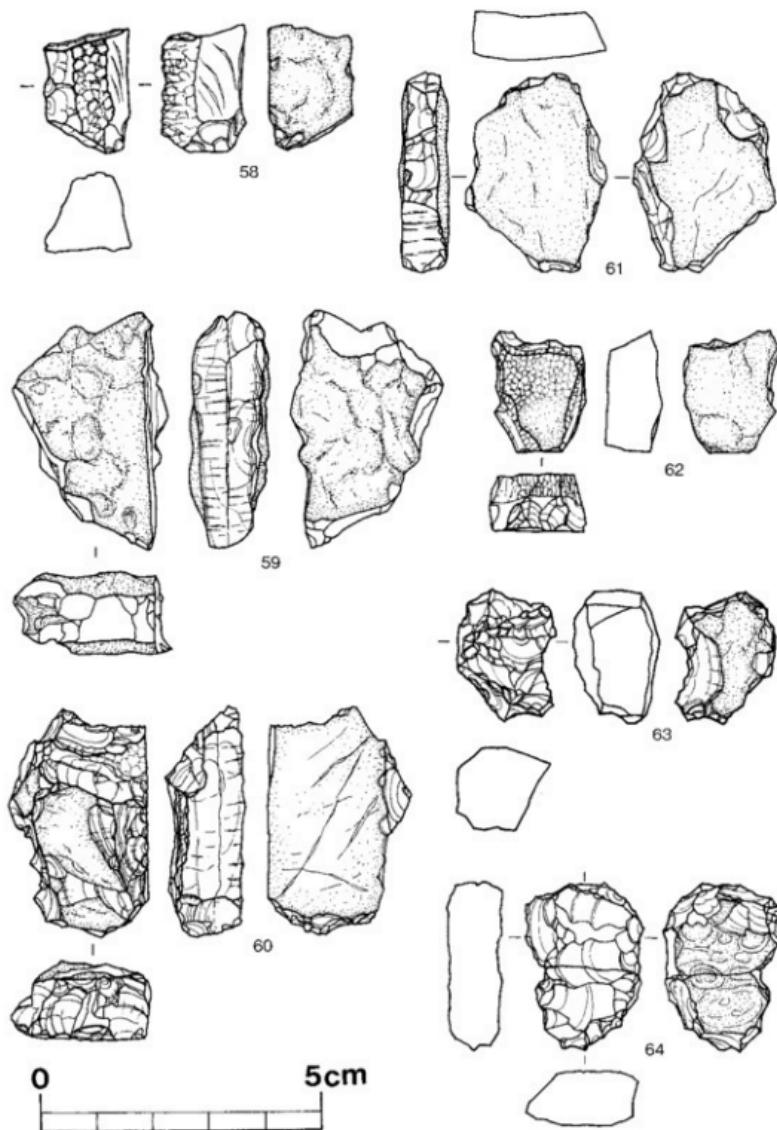
単位: cm・g

国版No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
50	土製品	土玉	2.7	2.9	17.9	北隅	90%	No320
51	土製品	土玉	2.7	2.9	19.6	入り口付近	完形	No321

特徴的である。このことは、遺跡内で同時に複数存在する玉作工房で異なる工程の作業を行っていた可能性を示唆するものともいえる。また、特筆すべきは本住居跡出土の砥石が第4号住居跡出土砥石と接合しており、造構間の関連が窺える。同様に、本住居跡出土土器には第2・3号住居跡のものと接合したものが見られた。そして、出土土器には比較的多くの穿孔されたものが見られ特徴的である。



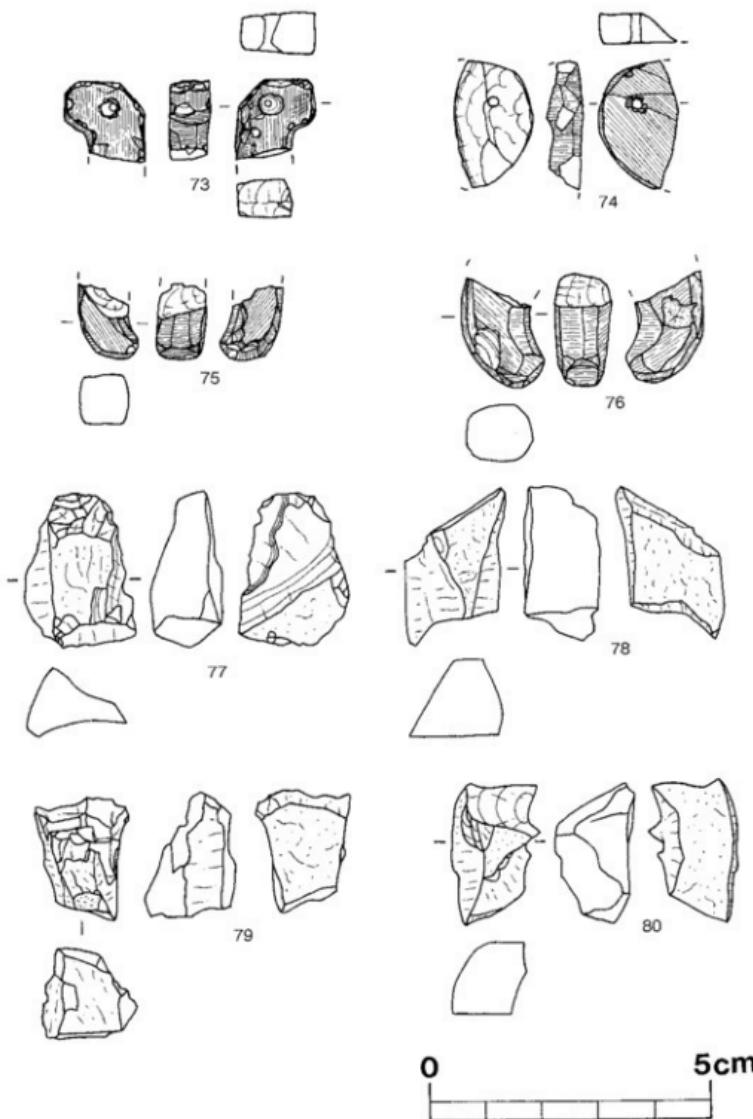
第111図 第6号住居跡出土遺物（6）



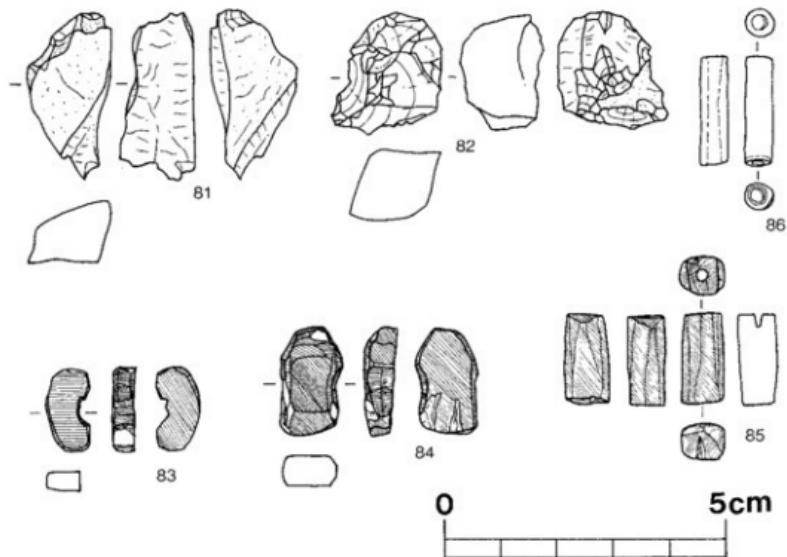
第112図 第6号住居跡出土物（7）



第113図 第6号住居跡出土遺物（8）



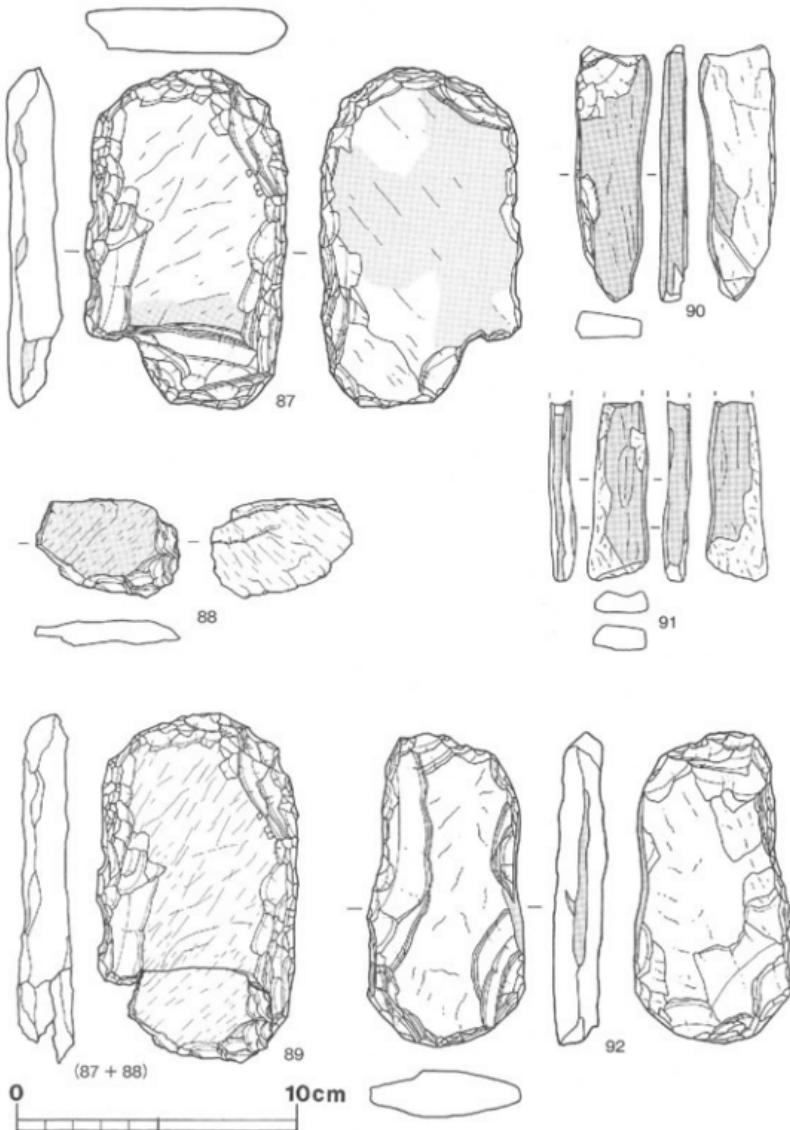
第114図 第6号住居跡出土遺物（9）



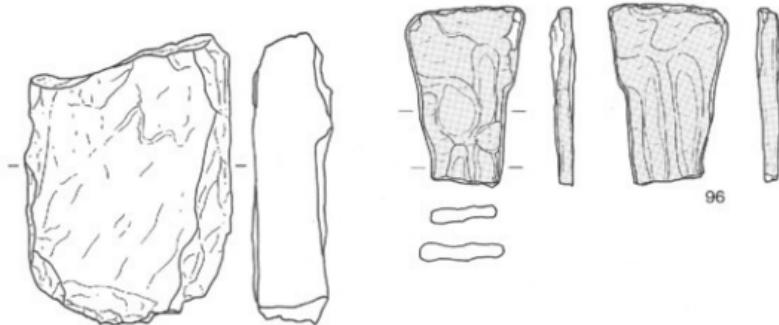
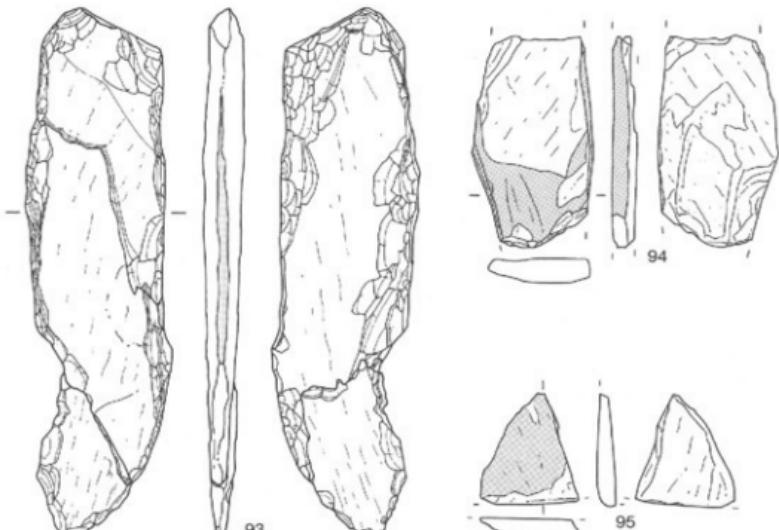
第115図 第6号住居跡出土遺物（10）

第6号住居跡出土玉作関連遺物

図版No	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
52	勾玉採集原石	4.10	3.90	1.30	22.35	メノウ	玉23
53	勾玉荒削工程	2.90	2.40	1.00	9.51	メノウ	玉21 扱り、打削
54	勾玉形削工程	1.60	1.20	1.10	3.25	メノウ	玉43
55	勾玉形削工程	1.60	1.50	1.60	5.78	メノウ	玉42
56	勾玉形削工程	2.50	1.60	1.30	7.62	メノウ	玉32
57	勾玉形削工程	2.90	2.30	1.20	10.43	メノウ	玉49
58	勾玉形削工程	2.20	1.50	1.50	5.82	メノウ	玉39
59	勾玉側面打製工程	4.20	2.60	1.45	17.71	メノウ	玉34 形削工程でも可
60	勾玉側面打製工程	3.75	2.50	1.40	17.29	メノウ	玉24
61	勾玉側面打製工程	3.50	2.40	0.80	10.06	メノウ	玉35 形削工程でも可
62	勾玉側面打製工程	2.10	1.60	1.00	5.11	メノウ	玉38
63	勾玉側面打製工程	2.20	1.70	1.50	7.21	メノウ	玉40
64	勾玉側面打製工程	3.00	2.10	1.00	5.03	メノウ	玉22
65	勾玉側面打製工程	2.50	2.50	2.30	8.43	メノウ	玉25 一部研磨
66	勾玉研磨工程	3.20	1.80	1.10	4.66	メノウ	玉45 2面研磨
67	勾玉研磨工程	2.00	1.40	1.10	4.63	メノウ	玉16 打削、扱り
68	勾玉研磨工程	1.60	1.80	1.40	8.13	メノウ	玉46 2面研磨
69	勾玉研磨工程	1.95	1.10	0.70	3.28	メノウ	玉30 打削、扱り
70	勾玉研磨工程	2.70	1.80	1.10	8.94	メノウ	玉37
71	勾玉研磨工程	1.90	1.00	0.95	1.75	メノウ	玉17



第116図 第6号住居跡出土遺物 (11)



第117図 第6号住居跡出土遺物 (12)

図版No	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
72	勾玉研磨工程	1.50	1.45	0.80	2.65	メノウ	玉18
73	勾玉仕上げ研磨工程	1.95	1.10	0.70	2.11	メノウ	玉20 空孔
74	勾玉穿孔工程	2.25	1.40	0.60	2.21	メノウ	玉26 穿孔
75	勾玉仕上げ研磨工程	1.30	0.90	0.90	1.39	メノウ	玉36
76	勾玉仕上げ研磨工程	1.35	1.40	0.70	3.03	メノウ	玉20
77	剥片	2.20	1.90	1.30	6.69	メノウ	玉41
78	剥片	2.10	1.70	1.30	6.23	メノウ	玉31
79	剥片	2.15	1.70	1.60	4.56	メノウ	玉50
80	剥片	2.50	1.50	1.30	5.03	メノウ	玉27
81	剥片	2.00	1.70	1.25	5.78	メノウ	玉33
82	剥片	3.00	1.50	1.30	5.39	メノウ	玉44
83	勾玉研磨工程	1.50	0.75	0.35	0.86	滑石	玉28
84	勾玉研磨工程	1.90	1.10	0.50	2.20	滑石	玉29
85	碧玉穿孔工程	1.60	0.75	0.80	1.69	滑石	玉47
86	碧玉完成品	1.95	0.50	0.50	0.84	滑石	玉48
87	内磨兼半砥石	12.00	7.20	1.80	208.70	片岩	玉57 SI-4 (15) 他と接合
88	半砥石	5.10	3.40	0.85	16.40	片岩	玉60 SI-4 (15) 他と接合
89	内磨兼半砥石	12.50	7.20	1.85	224.90	片岩	玉57+玉60
90	内磨兼半砥石	8.70	2.70	0.90	30.06	片岩	玉52
91	内磨兼半砥石	6.10	2.10	0.90	15.77	片岩	玉54
92	内磨砥石	11.00	5.50	1.80	143.08	片岩	玉58
93	内磨砥石	18.60	4.95	1.40	144.58	片岩	玉56
94	内磨兼半砥石	7.45	4.30	0.90	35.31	片岩	玉55
95	半砥石	3.90	3.40	0.65	8.54	片岩	玉51
96	内磨兼半砥石	6.30	4.20	0.90	30.80	片岩	玉53 SI-4 (14) と接合
97	不明石器	9.60	7.20	2.80	238.90	石英	玉59

第8号住居跡〔SI-8〕(第118~134図 P L 26~28・70~75)

位 置 調査区中央のX-15区、W-15・16区から確認された。

重複関係 なし。

主 軸 N-70° - E。

規 模 南壁4.5m、東壁4.5m、西壁5.0m、北壁5.1mの台形を呈する。深さは確認面からおよそ45cmを測る。

床 住居の北隅から東隅、そして南隅にかけてベッド状遺構が存在する。幅はおよそ1mを測り、高さは5cm前後である。その末端は北壁で炉に向かってスロープ状に落ち、南側では貯蔵穴に接続している。床面の硬化範囲はP5の存在する入り口施設周辺とベッド状遺構北側のスロープ状に落ちる部分に認められ、踏み締められていた。また壁際には壁溝が巡っている。その壁溝と接して炉と対面するように間仕切り溝が設けられている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。壁に沿って壁溝が巡り、幅12cm・深さ10cmを測る。

炉 P1・P4の中間よりP4側に寄って作られている。直径約90cm・深さ5cm。炉覆土上層は炭化物を多量に含む黒褐色土を呈している。

柱 穴 主柱穴はP1~P4の4本である。上面径は10~25cmと小さい柱穴である。それぞれが直角に配置されておらず、住居平面形に符合して柱穴の配置も崩れている。

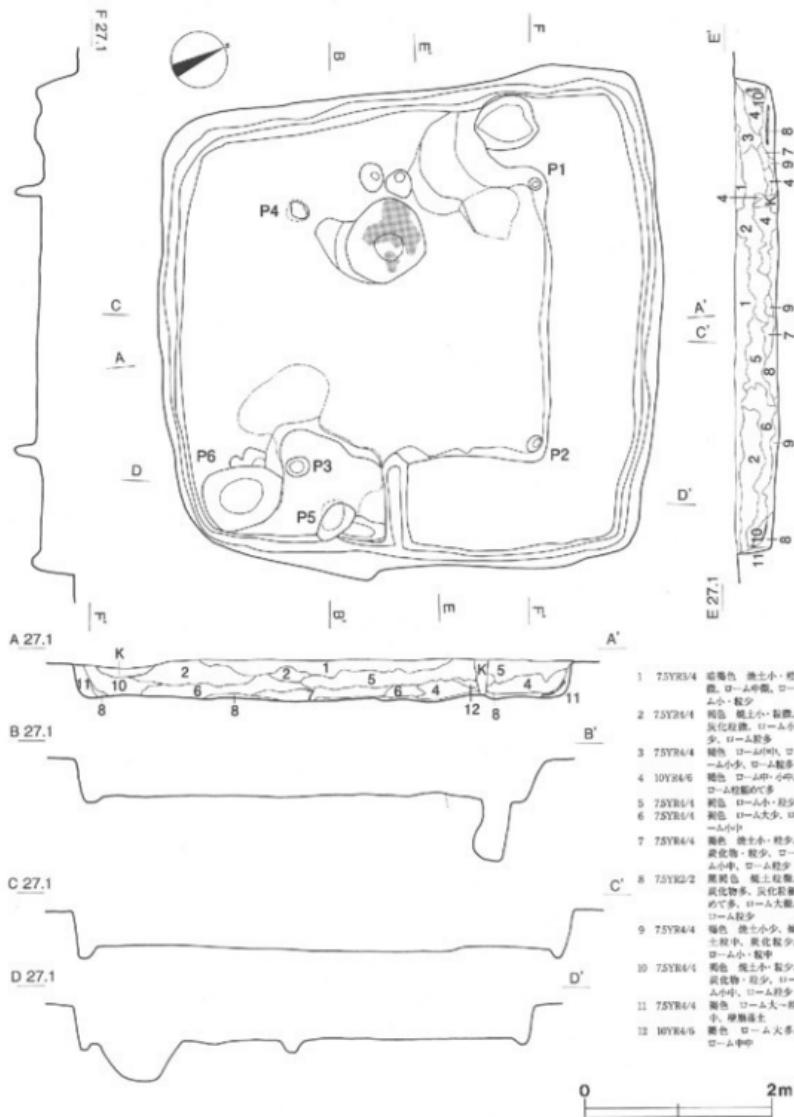
貯蔵穴 住居内の南隅に設けられており、長軸84×短軸62cmの楕円形を呈する。貯蔵穴の外側から落ち込むように焼土の堆積が見られた。覆土は8層に分層され、第4・5・7層に（特に第5層には多量に）焼土や焼土粒が含まれ、赤化した土師器片も混入している。

入口施設 P5が入り口ピットに相当し、南東側に傾いて穿たれている。平面形は長径45cm×短径25cmの楕円形を呈している。

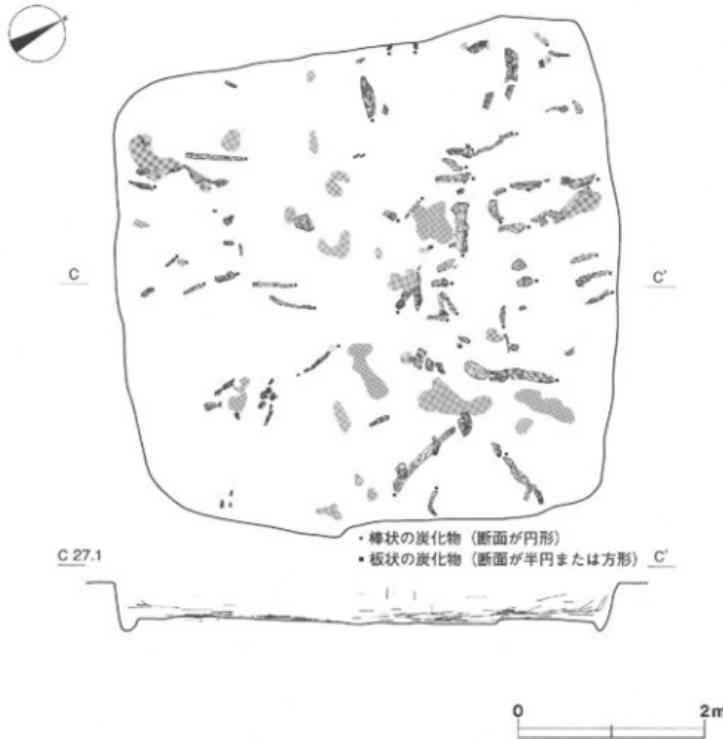
その他の施設 間仕切り溝は壁溝に接続し長さ1mにわたり確認され、幅20cm・深さ15cmを測る。ベッド状遺構の北端には径60cm・深さ10cmの皿状の土坑が確認された。覆土は非常にしまっていた。底面から風化の激しい板状の軟質砂岩が出土した。

覆 土 覆土は12層からなる。上層の第2~4層はローム粒子を非常に多量に含む。最下層の第8層は黒褐色を呈し、炭化物粒を多量に含む層である。第11層はローム粒が多く含まれ、壁が崩れたものと考えられる。

遺物出土状況 住居内の遺物として土器や多量の炭化材、そして玉作関連遺物がある。出土土器で接合するものは、住居内西側から南側にかけての壁寄りに確認された。完形に近い土器も出土している。住居内の北側から東側にかけては接合関係のみられるものはない。1の土師器壺はその場で細かく割れていた。炭化材の多くはいずれも底面近くから出土しているが、壁近くでは壁に寄りかかるように傾斜して出土している。住居跡中央付近のものは床面との間の間層が薄く、



第118図 第8号住居跡

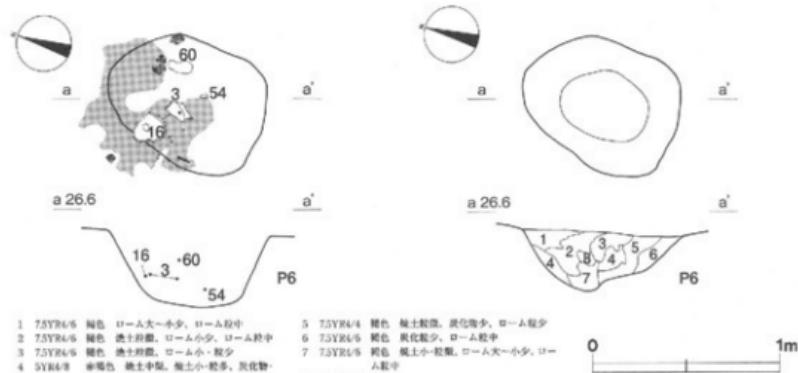
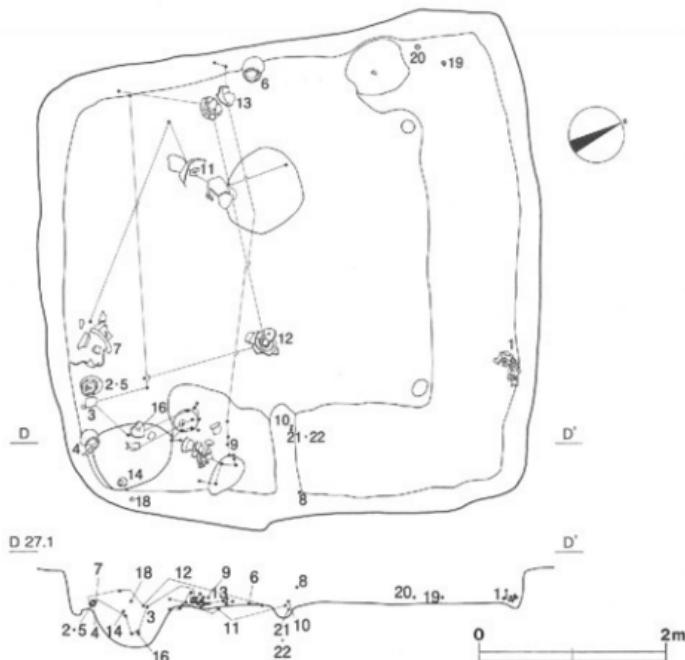


第119図 第8号住居跡炭化材出土状況

壁際では厚い。炭化材の形態は断面形が半円または方形の板状のものと、断面形が円形の棒状のものが見られた。炭化材の出土状況には一定の規則性が窺われ、住居跡内の屋根材などの構造を一定反映した出土状況といえる。

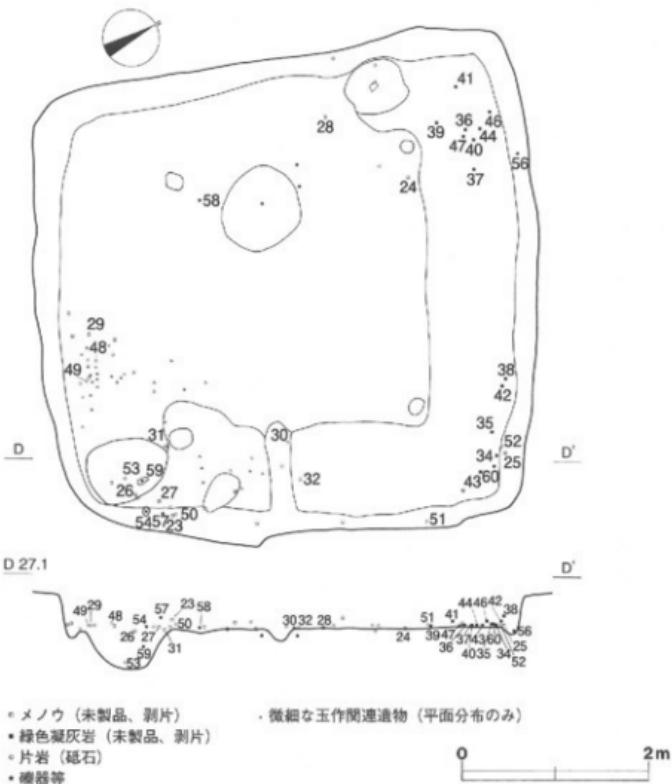
出土遺物 出土遺物は土師器・石製品・玉作関連遺物が出土している。1～9は土師器壺である。3は底部に焼成後の穿孔がなされている。10は大型の口径が広い特徴的な鉢である。11～14は土師器壺で頸部に粘土紐によるタガが巡る、12は赤彩され胴部下位が穿孔されている。15は土師器壺である。16は小型壺である。17～20は手づくね土器である。21・22は砥石で刃物の類を研いだものと思われ、21の縁辺は剥離している。

玉作関連遺物出土状況 玉作関連遺物はメノウ・緑色凝灰岩製木製品・片岩製紙石やメノウ・琥珀・



1 7.5YR 6/6 黄色 ローム大~小少、ローム粒中
2 7.5YR 4/6 黄色 粘土斑點、ローム少、ローム粒中
3 7.5YR 6/6 黄色 粘土斑點、ローム少、粒少
4 5YR 6/8 非褐色、粘土中間、粘土少~中多、灰化物、
5 7.5YR 4/4 黄色 粘土散混、灰化物少、ローム粒少
6 7.5YR 4/5 黄色 灰化物少、ローム粒中
7 7.5YR 4/5 黄色 粘土少~粒聚、ローム大~小少、ローム粒少

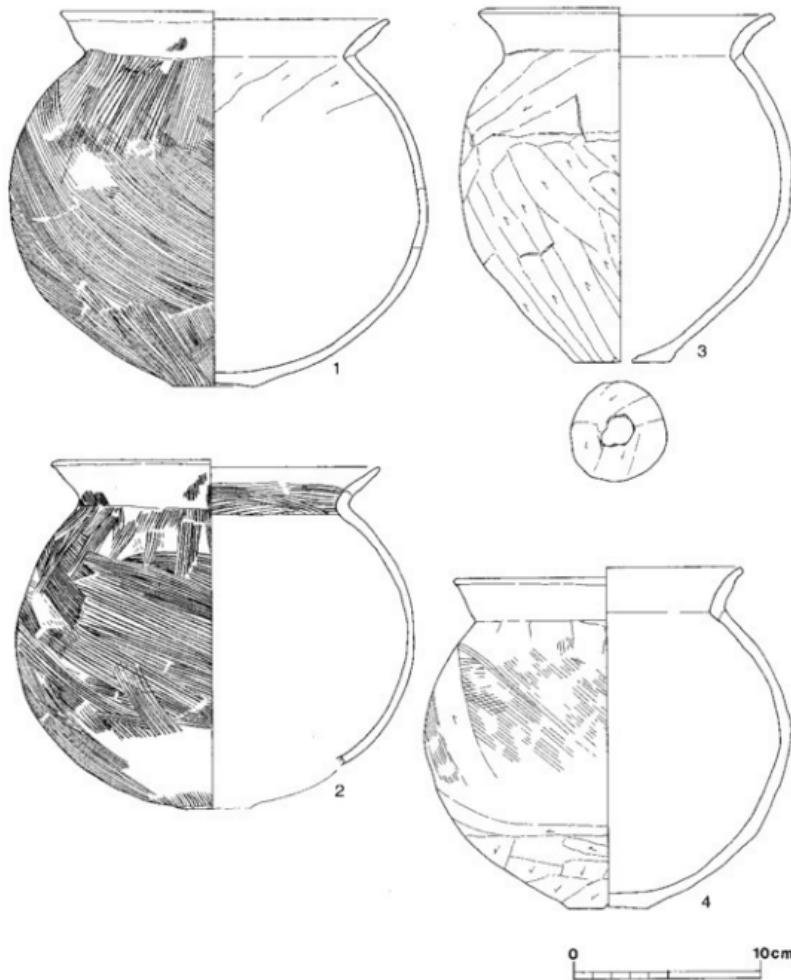
第120図 第8号住跡遺物出土状況(1)・貯蔵穴



第121図 第8号住居跡遺物出土状況（2）

砥石の微細剥片が出土した。メノウ製未製品や微細剥片及び片岩製砥石微細剥片は間仕切り溝の西端から貯蔵穴の西側にわたり多く見られた。特に貯蔵穴の西側で集中する様子が窺える。そして、緑色凝灰岩（凝灰岩）製の玉未製品や剥片は住居内北側から東側壁寄りのベッド状構造上でまとまって出土している。これらの緑色凝灰岩の未製品や剥片の中で接合するものは見られない。そして、それに伴って同石材の微細剥片は出土しておらず、メノウ製勾玉の状況とは異なる。また本住居跡出土のメノウ製勾玉の側面打製工程の資料（26）が第4号住居跡のものと接合しており関連が窺われる。

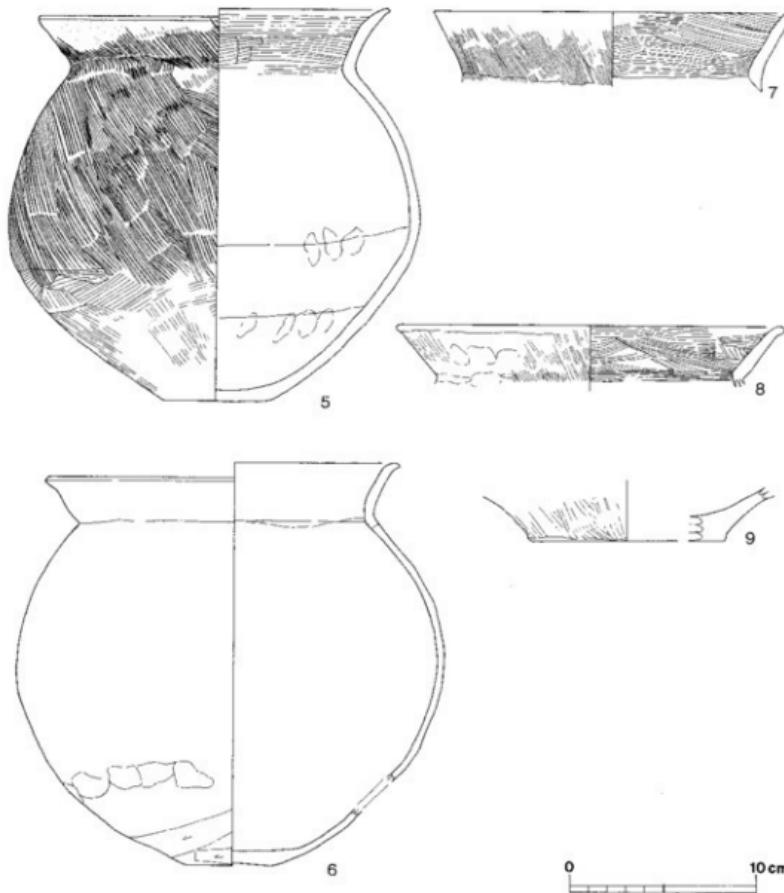
本住居跡については、時間的な制約で床面上覆土の水洗い選別調査を一部しか実施していないが、玉作作業の中核的な空間は、玉素材及び片岩製砥石の微細剥片の出土状況などから入り口ピット付近から貯蔵穴とその周辺付近と考えられる。



第122図 第8号住居跡出土遺物（1）

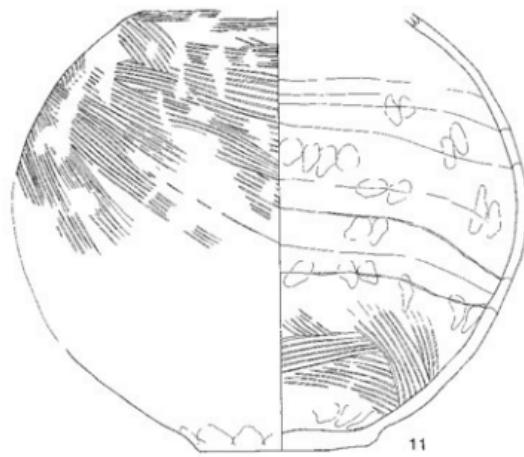
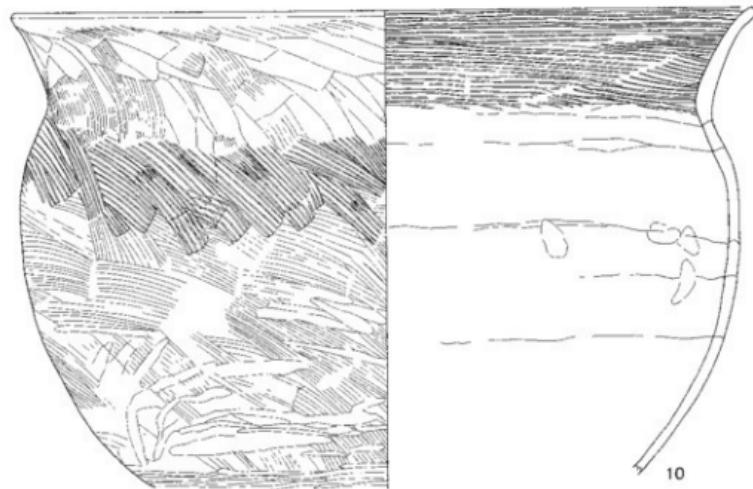
玉作関連遺物 玉類の材料としては、メノウ・緑色凝灰岩・琥珀などが確認できた。メノウは勾玉を製作したものと考えられ、荒削工程（23）、形割工程（24・25・28）、側面打裂工程（26・27・30）、研磨工程（29）のものが出土しており、このほかに剥片が出土している。

23は荒削工程のもので、腹部側を意識したと考えられる直線的な打割が見られる以外には、表

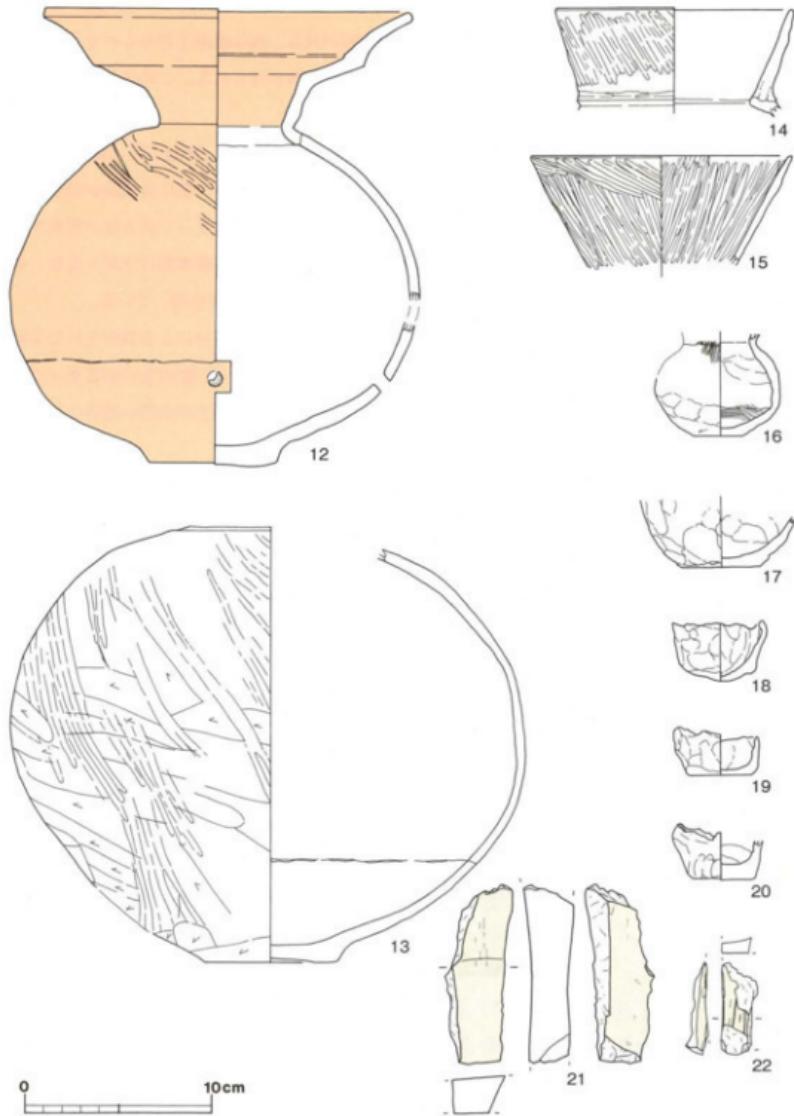


第123図 第8号住居跡出土遺物（2）

裏の自然面や側面に人为的でない光沢を持つ剥離面が見られる。24は本来自然面の見られる部分が表裏面となるものであり、剥離面の見られる部分が側面となるべきものである。およそ半円形を意識した形態ではあるが厚みがないことから、上端からの力で薄く剥離してしまった資料と考えられる。28は勾玉の腹部に相当する部分に直線的な打割がなされ、背部には丸みが残る。26は第4号住居跡出土資料と接合するもので、側面や表裏縁辺に押圧剥離がなされる。27は裏面にの



第124図 第8号住居跡出土遺物（3）



第125図 第8号住居跡出土遺物（4）

み自然面が残り、本来はC字状を呈するものと思われる。腹部に抉りのための押圧剥離が集中している。30の表面には結晶質面が残り、裏面には自然面が残る。29は研磨工程のもので、表面に結晶質面が残り、裏面には自然面が残る。背部の一部に研磨痕が見られる。このほかの31～33は剥片である。

緑色凝灰岩（凝灰岩）剥片については管玉を製作したものと考えられ、荒削工程（34）、側面打列工程（37・40）のものが出土し、このほかは剥片である。34は側面の一部に自然面が残り、直方体を意識した形態となっている。37は自然面が残っておらず、剥離によって直方体が形成されている。40は押圧剥離が見られ側面打裂工程の資料と考えられ、基部の断面形は方形となる。その他の35・36・38・39・41～47は剥片と考えられ、多くは部分的に自然面を残している。

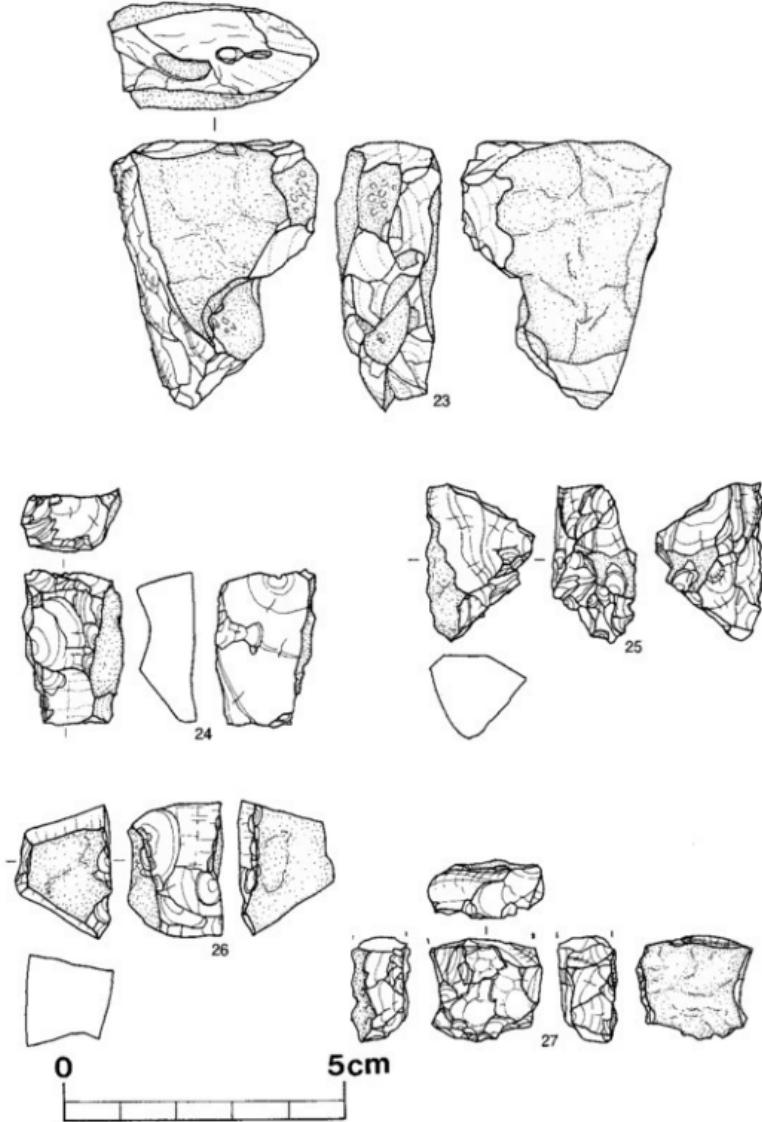
微細な剥片からは、琥珀を材料とした玉類の製作も考えられる。同石材による製作された玉類の種類については勾玉が想定される。そして、微細剥片についてはメノウ製のものが目立って出土したが、緑色凝灰岩（凝灰岩）のものは肉眼では確認できず、一部覆土の水洗い選別の結果でも確認できなかった。

玉作の道具類として片岩製などの砥石や敲き石などが出土している。砥石には51の内磨砥石、48～50の内磨砥石兼平砥石、52の筋砥石、53平砥石兼筋砥石兼敲き石、54の筋砥石兼敲き石、55の平砥石兼敲き石がある。この砥石の石材の大多数は片岩で、青みがかったものである。51は角砾凝灰岩製で、52は非常に軟質の凝灰岩製のものである。53は厚さが一定の平たい襍を用いたもので表裏は平砥石として、側面中央には溝が見られ筋砥石として、上下端部には敲打痕が見られ敲き石として用いられたことが観察される。54はやや軟質の砂岩襍の表面・側面に筋が見られ筋砥石として用いられた後、側面全体を敲くための道具として用いている。55の平砥石兼敲き石は石英製のもので湾曲した平坦な砥面が特徴的であり、玉製品の砥石というよりは鉄製品の砥石かもしれない。縁辺に敲打痕が残る。56は敲き石である。そのほかの57～60は使用痕が明確でない自然襍であり、敲打用の道具として用いるつもりで持ち込んだのかもしれない。この中で59については他の石に比べ大きく、貯蔵穴に落ち込むよう出土しており、貯蔵穴の蓋にかかる重石の可能性も否定できない。

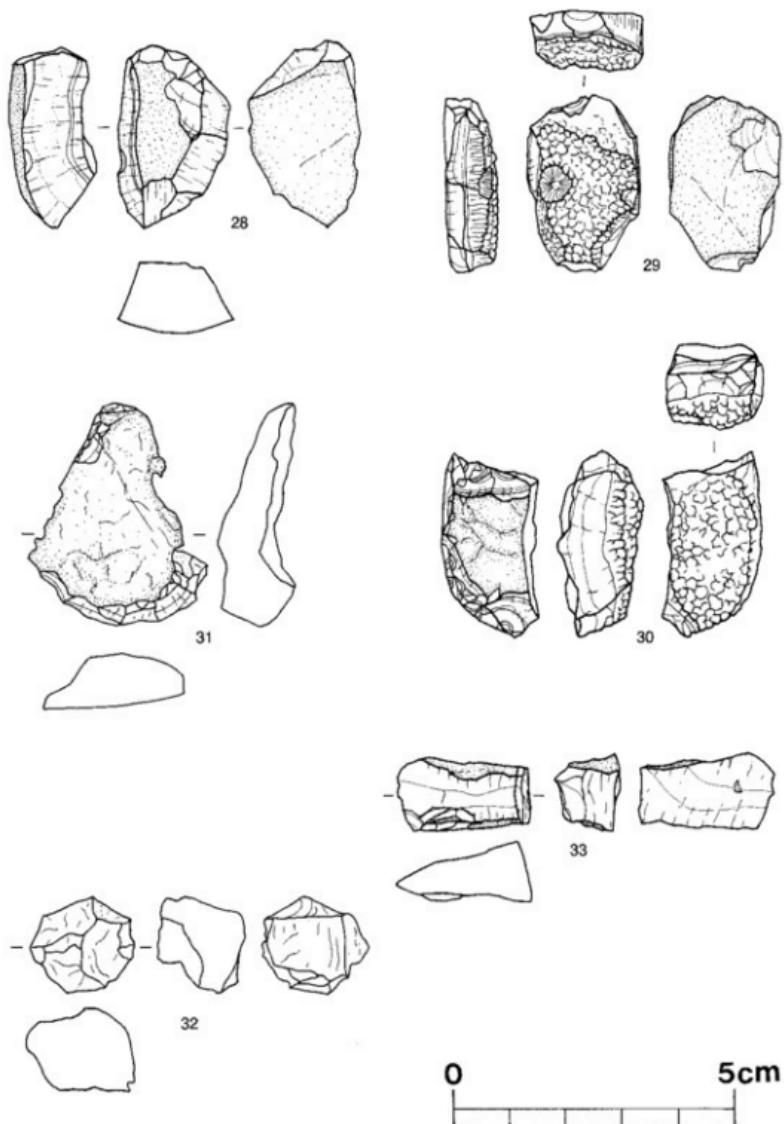
所見 本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。名称としては住居跡としているが、その内で行われた行為を考えれば、玉作工房と位置付けられよう。玉の種類としてメノウ製勾玉、緑色凝灰岩（凝灰岩）製管玉などを中心に製作したものと考えられるが、緑色凝灰岩の素材についてはその状況から一定割られたものが持ち込まれている可能性がある。本住居跡出土遺物に第4号住居跡出土遺物と接合するものがあり、その関連が窺われる。そして、出土土器には穿孔されたものが見られ特徴的である。また、本住居は焼失住居であり炭化材出土状況から屋根構造が残る状況で焼失し、燃焼途中で土が投入されているようである。

第8号住居跡出土土器

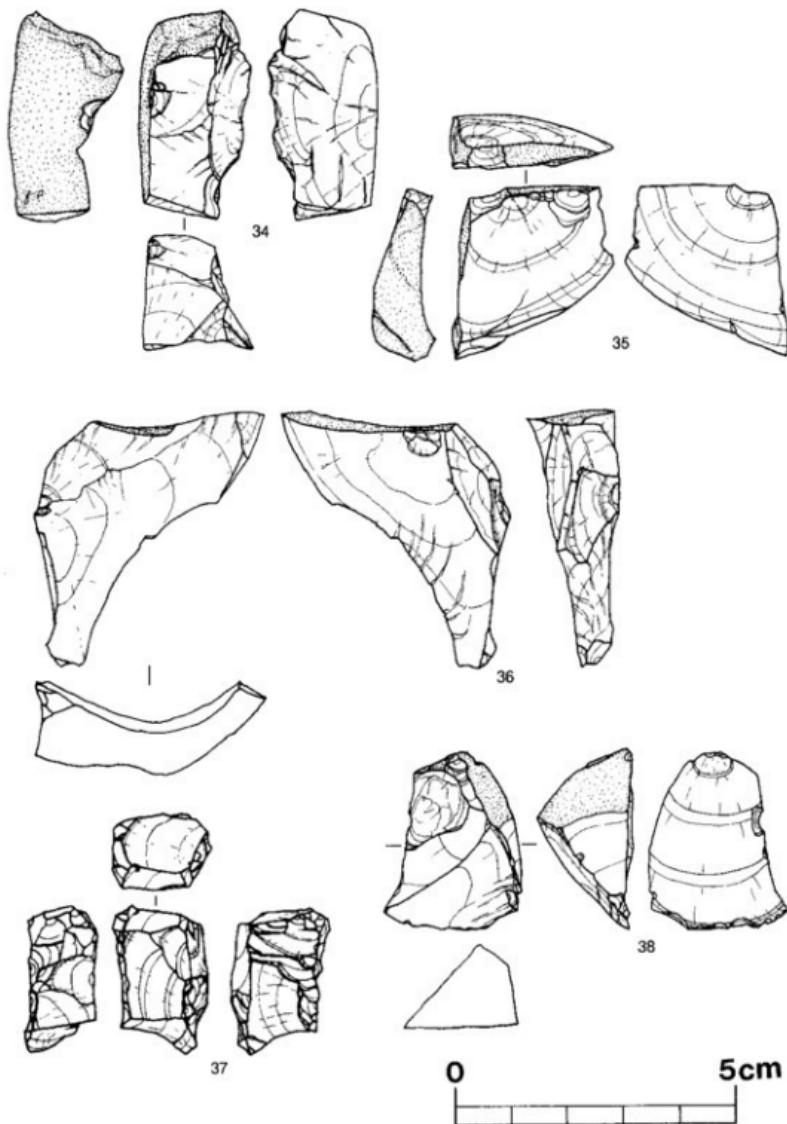
図版No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存 率 度	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土器器	A : 17.6 B : 4.4 C : 20.0	覆土下位 70% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙	球形の胴部で頸部が細長く、口縁部が外傾する。胴部外面や底面は明瞭なハケ調整がなされる。胴部下半は被熱化。焼付着。	No142
2	甕 土器器	A : 17.5 B : 3.8 C : 18.6	覆土下位 90% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい褐 褐	球形の胴部で頸部が細長く、口縁部が外傾する。胴部外面や底面は明瞭なハケ調整がなされる。胴部内面もハケ調整。全体に被熱化。	No144
3	甕 土器器	A : 15.9 B : 4.9 C : 18.9	貯藏穴付 80% 良好	長石○、石 英○、雲母 ×	明赤褐	頸部は屈曲。口縁部はやや外反。胴部下半がすぼまる。胴部外面はヘラ削り、口縁部内外面はナダ。全体に被熱化。焼付着。底部穿孔。	No145
4	甕 土器器	A : 24.4 B : 4.2 C : 19.6	覆土下位 80% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい赤褐	胴部中位に最大径を持つ。頸部は屈曲し、口縁部は外傾。胴部上位と底面はヘラ削り、胴部上半はハケ調整の後ナダ。口縁部内外面ナダ。	No143
5	甕 土器器	A : 18.8 B : 5.6 C : 21.0	覆土下位 80% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい褐	球形の胴部で中位に最大径を持つ。頸部は挿れ、口縁部は外傾、底面は外反。胴部外面にハケ調整が明瞭。底部付近は不明瞭。	No150
6	甕 土器器	A : 18.9 B : 4.6 C : 21.5	床面 80% 良好	長石△、石 英△、雲母 ×	にぶい赤褐	球形の胴部で頸部が挿れ、口縁部が外傾し、底面が外反。胴部外面ヘラ削りの後ナダ。底面ヘラ削り。口縁部内外面はナダ。被熱化。	No141
7	甕 土器器	A : [19.2] C : (42)	覆土下位 40% 良好	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい橙	口縁部破片で頸部が挿れ。内外面面かなハケ調整。一部擦痕。	No146
8	甕 土器器	A : [20.8] C : (2.1)	覆土 30% 普通	長石○、石 英○、雲母 △、砂粒	橙	口縁部破片で頸部が挿れ、口縁部は外傾し埋没はやや外反する。内外面ハケ調整。器面被熱化。	No147
9	甕 土器器	B : [10.6] C : (2.4)	覆土 30% 普通	長石△、石 英△、雲母 ○、赤色粒	にぶい赤褐 黒	底面に厚みを持ち外傾する。外面ハケ調整の後ナダ。底面には小素模が残る。	No148
10	大型甕 土器器	A : [39.8] C : (25.3)	覆土下位 70% やや不良	長石△、石 英△、雲母 △、赤色粒	燈	底面欠損。頸部は丸く、頸部は緩く透け。口縁部は外傾する。外面と口縁部内面はハケ調整され、胴部下半と口縁部はハケ調整の後ナダ。	No149
11	壺 土器器	B : 9.2 C : (23.3)	覆土下位 70% やや不良	長石○、石 英○、雲母 △、砂粒	にぶい黄褐	球形の胴部。外面の胴部上半は粗いハケ調整がなされ、下半はヘラ削りの後ナダ。ミガキがなされる。底面はヘラ削り。内面は洞開状。	No153
12	壺 土器器	A : 19.6 B : 6.8 C : 24.5	底面付 80% やや不良	長石△、石 英△、雲母 △、軽質の 陶土	にぶい赤褐 にぶい橙	胴部下位に最大径を持ち、頸部はほぼ直立し、口縁部は直口縁。内外面ともに剥離が著しい。胴部下位に空孔。外面と口縁部内面本剥。	No151
13	壺 土器器	B : 7.2 C : (23.2)	覆土下位 70% 普通	長石△、石 英△、雲母 △	にぶい褐	胴部中位に最大径を持ち、球形。頸部は接合部で剥離。頸部と底面外側はヘラ削りの後まだらにヘリガキを施す。	No154
14	壺 土器器	A : [12.8] C : (5.4)	貯藏穴 100% 良好	長石○、石 英○、雲母 ×	にぶい橙 にぶい黄褐	豊の口縁部。頸部から直立気味に外傾する。頸部には粘土が巻かれる。外審密なヘリガキ。内面にはナダ。	No152
15	壺 土器器	A : [14.0] C : (5.8)	覆土 40% 良好	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい黄褐	外傾しながら開く形の口縁部。器壁は一定で薄く、直で丁寧なヘラ削りが施されている。	No156
16	小型收 土器器	B : 2.4 C : (5.5)	貯藏穴内 90% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙	丸い頸部から頸部が細長くなる。ややいびつで、胴部下半には街頭窓が多く残る。胴部上半は薄かれ。内面には輪積軸やハケ調整が見られる。	No157
17	手づくね 土器器	B : 4.0 C : (3.6)	覆土 100% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい黄褐 にぶい褐	底部から開く形で器壁は薄い。底部は平底。外面には指痕窓が多く残り難な作りである反面、内面はナダがられ難な作りではない。	No158
18	手づくね 土器器	A : 4.8 B : 3.8 C : 3.2	覆土 95% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい黄褐	底部は平底ではなく、口縁部もいびつに揃み上げられている。内面に指頭板が目立つ。	No161
19	手づくね 土器器	A : 4.5 B : 3.2 C : 2.6	覆土下位 90% やや不良	長石△、石 英△、雲母 △	にぶい赤褐	底部は平底。口縁部はいびつに揃み上げられる。内外面に指頭板が目立つ。胎土が赤・白色粘土によりマーブリング状となり特徴的。	No160
20	手づくね 土器器	B : 3.3 C : 2.9	覆土下位 80% 普通	長石○、石 英○、雲母 △	にぶい橙	底部は平底である。口縁部はいびつに揃み上げられる。内外面に指頭板が目立つ。	No159



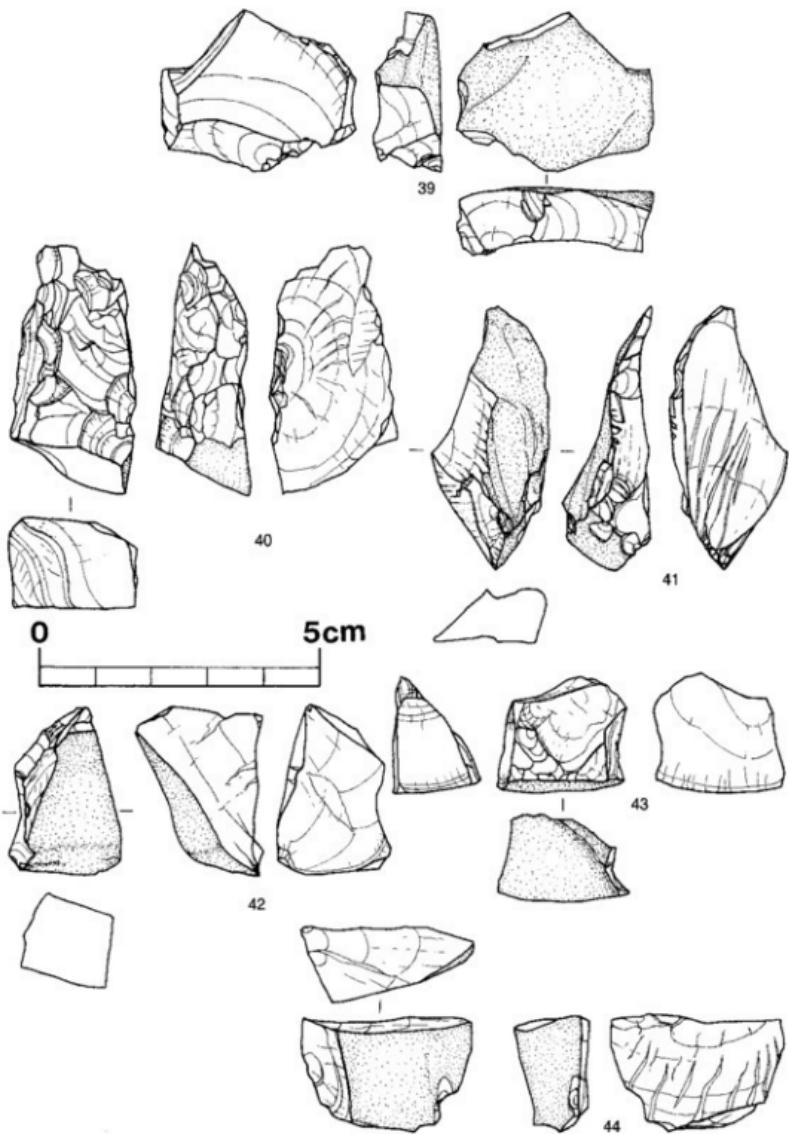
第126図 第8号住居跡出土遺物（5）



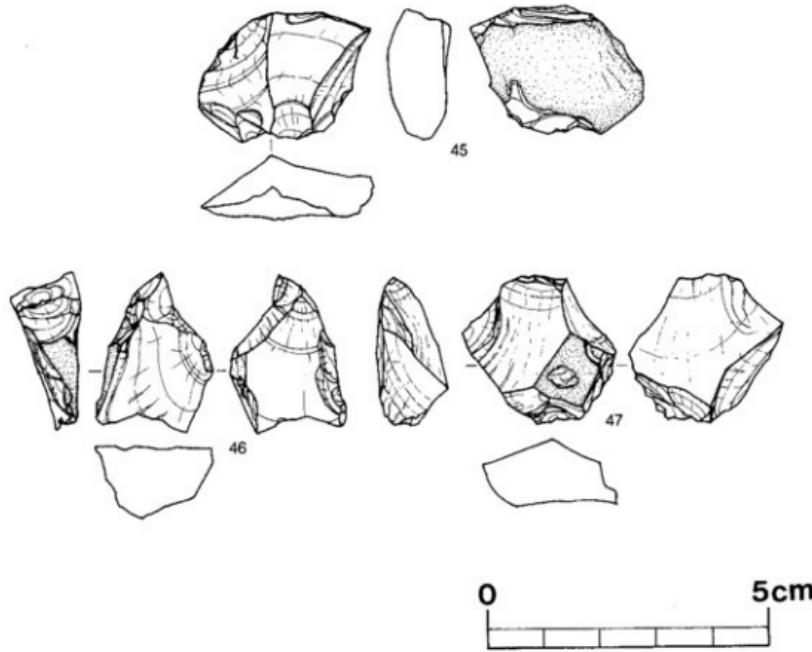
第127図 第8号住居跡出土遺物（6）



第128図 第8号住居跡出土遺物（7）



第129図 第8号住居跡出土遺物（8）



第130図 第8号住居跡出土遺物（9）

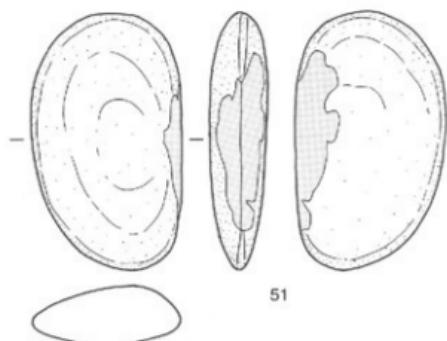
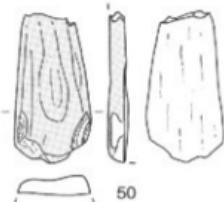
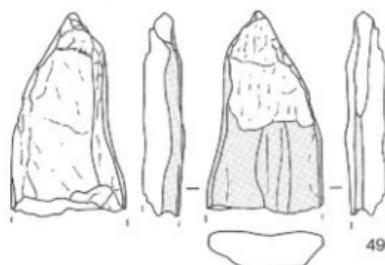
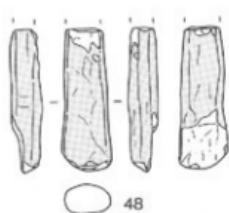
第8号住居跡出土石製品

単位：cm・g

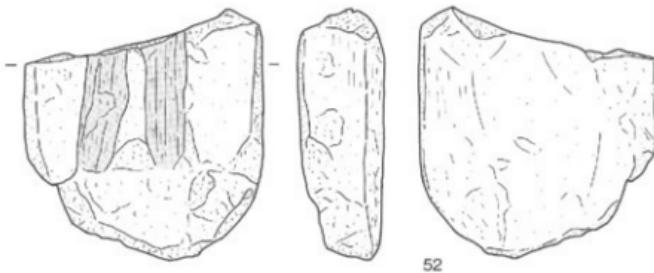
図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
21	石製品	砾石	10.15	3.4	1.95	108.0	凝灰岩	卡94
22	石製品	砾石	18.3	8.9	3.65	682.0	凝灰岩	玉95

第8号住居跡出土玉作関連遺物

図版No	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
23	勾玉荒削工程	3.75	4.75	1.90	31.20	メノウ	玉80
24	勾玉形削工程	2.80	1.75	1.10	6.59	メノウ	玉82
25	勾玉形削工程	2.80	1.95	1.50	7.04	メノウ	玉78
26	勾玉側面打製工程	2.40	1.75	1.65	8.56	メノウ	玉83 SI-4(11)と接合
27	勾玉側面打製工程	2.05	1.85	1.20	4.79	メノウ	玉65
28	勾玉形削工程	3.30	2.10	1.20	8.96	メノウ	玉79
29	勾玉琢磨工程	3.10	2.00	1.00	8.07	メノウ	玉62
30	勾玉側面打製工程	3.30	1.75	1.50	10.25	メノウ	玉61
31	剥片	3.90	3.20	1.10	11.18	メノウ	玉84
32	剥片	1.75	1.90	1.45	4.60	メノウ	玉83

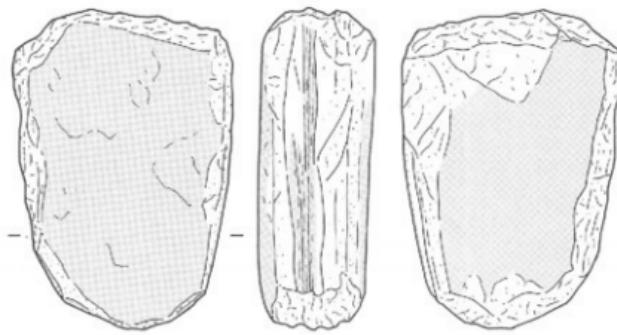


0 10 cm



52

第131図 第8号住居跡出土遺物 (10)



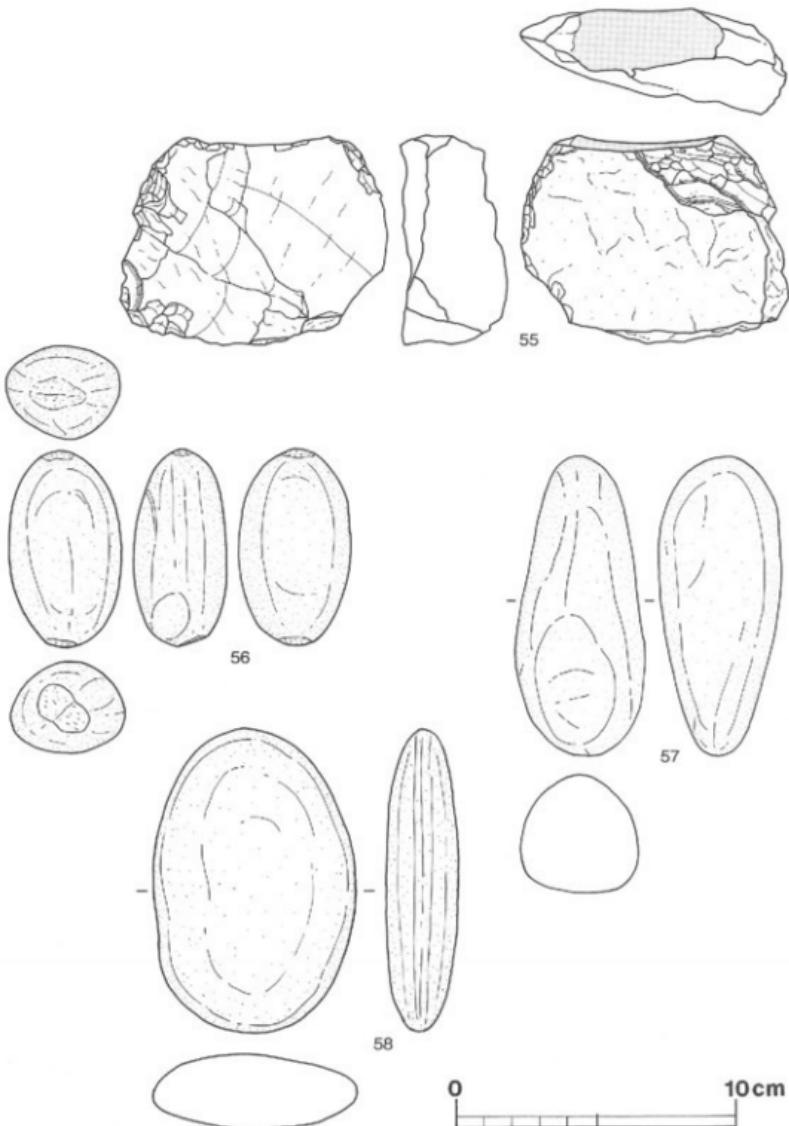
53



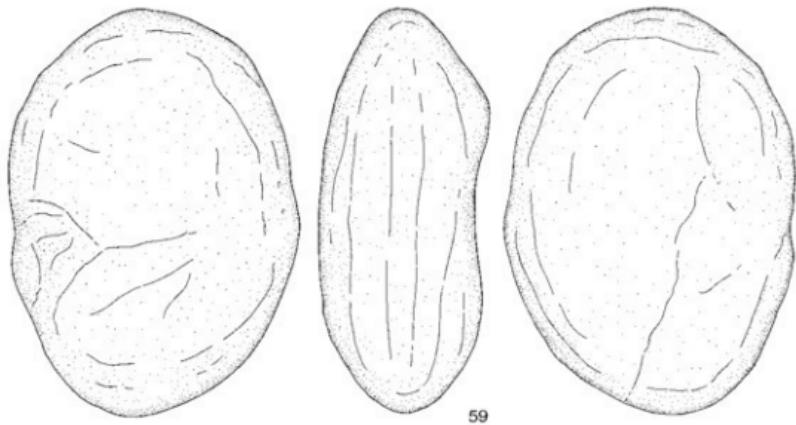
54



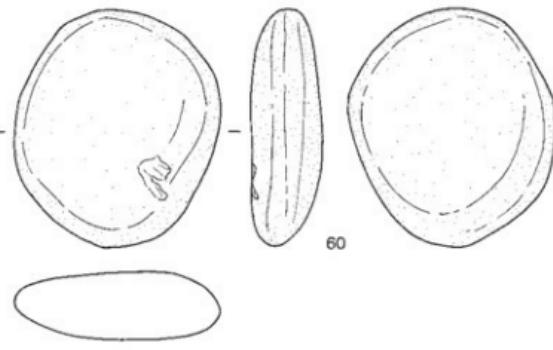
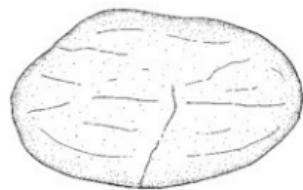
第132図 第8号住居跡出土遺物 (11)



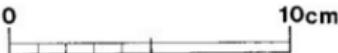
第133図 第8号住居跡出土遺物 (12)



59



60



第134図 第8号住居跡出土遺物（13）

図版No	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
33	剥片	1.40	2.40	1.10	293	メノウ	玉81
34	管玉剝削工程	3.75	2.00	2.00	692	緑色凝灰岩	玉66
35	剥片	3.10	2.95	1.05	8.50	緑色凝灰岩	玉73
36	剥片	4.50	4.40	1.40	14.45	緑色凝灰岩	玉72
37	管玉側面打製工程	2.60	1.85	1.35	13.84	緑色凝灰岩	玉67
38	側片	3.20	2.35	1.50	9.20	凝灰岩	玉69
39	剥片	2.80	3.50	1.20	10.82	緑色凝灰岩	玉76
40	管玉側面打製工程	4.40	2.30	1.60	7.15	緑色凝灰岩	玉71
41	剥片	4.70	2.10	1.00	9.80	凝灰岩	玉74
42	剥片	3.00	2.00	1.70	11.78	緑色凝灰岩	玉75
43	剥片	2.10	2.35	1.60	7.48	凝灰岩	玉63
44	剥片	5.10	3.05	1.35	7.48	緑色凝灰岩	玉64
45	剥片	2.40	3.15	1.20	8.49	緑色凝灰岩	玉77
46	剥片	2.75	2.10	1.25	4.25	緑色凝灰岩	玉70
47	剥片	2.60	2.75	1.10	7.40	緑色凝灰岩	玉68
48	内磨素平砥石	5.10	1.70	1.10	13.27	片岩	玉88
49	内磨素平砥石	6.95	4.10	1.40	49.68	片岩	玉86
50	内磨素平砥石	5.20	2.70	0.70	12.23	片岩	玉87
51	内磨砥石	9.10	5.30	2.05	147.53	角礫凝灰岩	玉89
52	筋砥石	8.00	8.50	3.10	113.00	凝灰岩	玉90 軟質
53	平砥石兼磨砥石兼敲き石	11.10	7.80	4.10	550.45	凝灰岩	玉91
54	筋砥石兼敲き石	9.30	8.55	5.10	509.07	砂岩	4.92
55	平砥石兼敲き石	9.20	6.90	3.50	310.70	石英	玉96 玉73と接合
56	敲き石	7.00	4.00	3.30	134.25	砂岩	4.97 楔部敲打
57	自然理	10.10	4.60	4.40	277.05	砂岩	玉99 披熱
58	自然理	10.80	7.20	2.60	302.24	砂岩	4.100
59	自然理	10.20	6.30	4.50	1,233.34	石英斑岩	玉101 斧轍穴内 披熱
60	自然理	8.40	7.30	2.50	206.79	砂岩	玉98 披熱片面

第17号住居跡〔SI-17〕(第135図 P L75)

位 置 調査区北側の2A・2B-7・8区に確認される。

重複関係 第2号集石と重複している。本住居跡が新しい。

主 軸 N-5° - W。

規 模 長軸4.0×短軸3.8mのほぼ正方形を呈し、深さは確認面からおよそ15cmを測る。

床 床は全体に平坦であるが、北西隅に床の一部に円形の盛り上がりが見られた。径40cm・高さは5cmである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

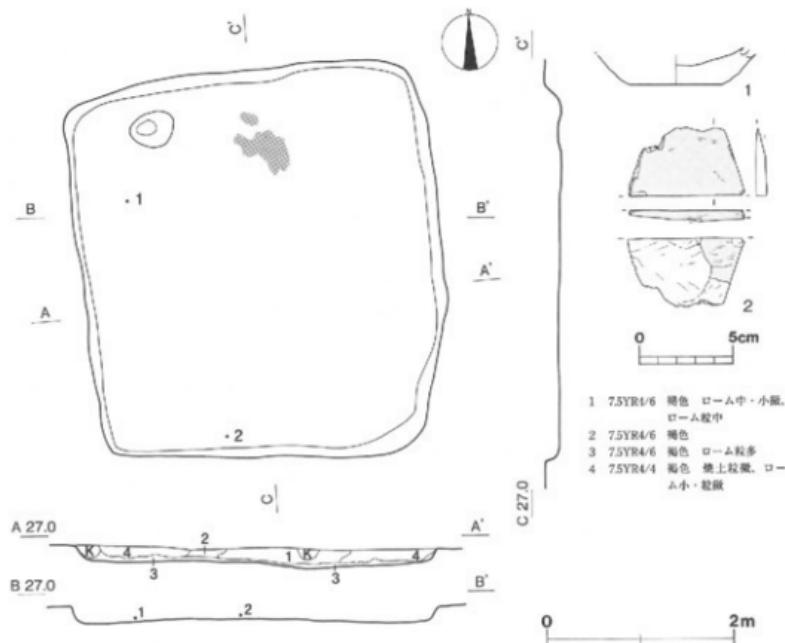
炉 北側に長軸70×短軸50cmの不整形の炉が確認された。掘り込みがほとんどない。

柱 穴 ない。

入口施設 北西壁隅近くの床面に円形の高まりが存在し、入り口に関わる施設とも考えることができる。

貯藏穴 なし。

覆 土 4層から構成される。



第135図 第17号住居跡・出土遺物

遺物出土状況 小破片が散発的に出土した。第2号集石とかかわると思われる自然礫が数点出土している。

出土遺物 出土遺物は土師器壺小破片が少量出土しているが、微小なためほとんど図化していない。1は壺底部破片である。2は砥石破片で、刃物などの鉄製品を砥ぐためのものと思われる。

所見 本住居跡は出土遺物や、遺構配置状況から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。出土遺物は近接して存在する第18号住居跡同様に非常に少ない。住居内の施設から見て、機能的に住居として使用されたかは疑問なところがある。

第17号住居跡出土土器

調査No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存 率 成	胎土	色調	型形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	B: 5.0 C: (1.6) 普通	覆土下位 80%	長石△、石 英△、雲母 △	にふい赤褐色	壺の底部破片。外面はナデ、内面は剥離している。被熱によって焼れている。	No.230

第17号住居跡出土石製品

単位: cm · g

調査No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
2	石製品	砥石	2.5	0.4	1.5	0.6	凝灰岩	No.43

第18号住居跡 [SI-18] (第136・137図 P L29・75)

位置 調査区北側のZ-5・6区から確認された。

重複関係 なし。

主軸 北東壁際の土壇状の高まりを入り口に関係する施設と考え、N-38°-Eと推定。

規模 一辺がほぼ3.2mの正方形を呈し、確認面からの深さはおよそ35cmを測る。

床 住居内の中央に径40cm・深さ5cmの浅いピットが確認され、その周囲のみが硬化している。

北東壁に接して土壇状の高まりがあり、高さ9cmを測る。

壁 住居の北隅は緩く立ち上がるが、他はほぼ垂直に立ち上がる。

炉 なし。

柱穴 P1からP5まで確認された。柱穴らしいものはP2で深さ107cmを測る。他のピットはいずれも10cm以内の深さのものであり、柱穴と呼ぶには規模が小さい。

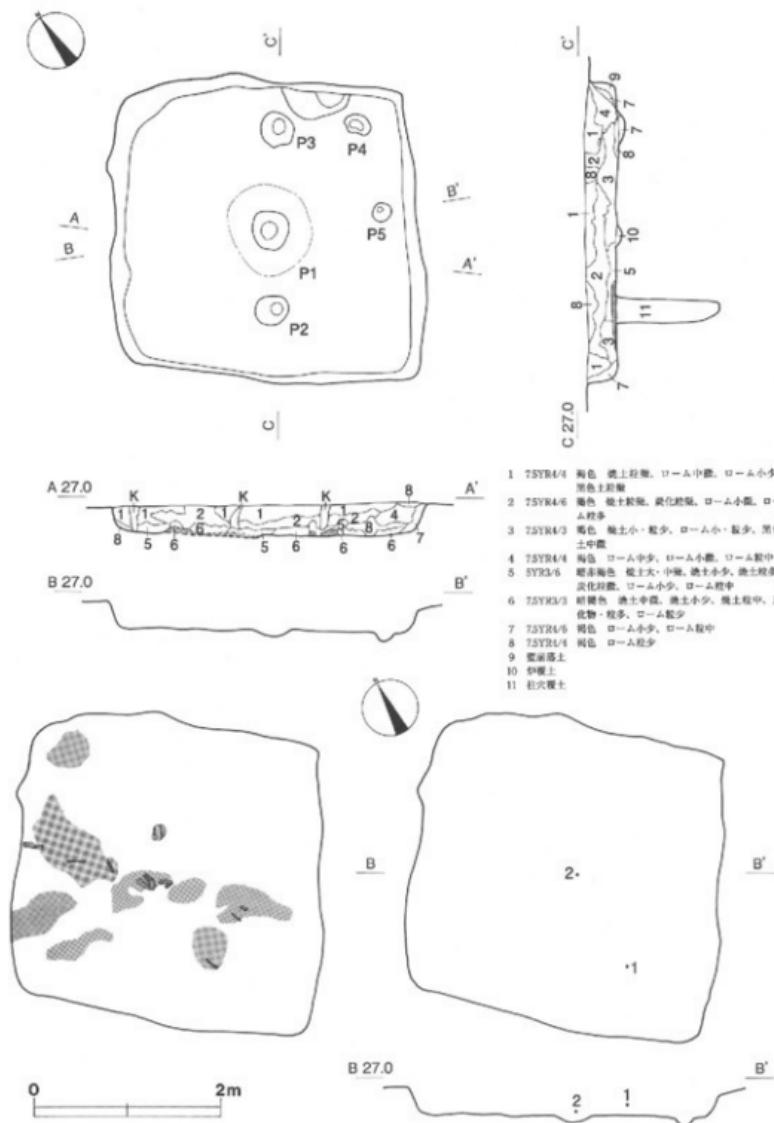
入口施設 北東壁際に半円形の土壇状の高まりが存在し、入り口に関わる施設と考えることもある。

貯蔵穴 なし。

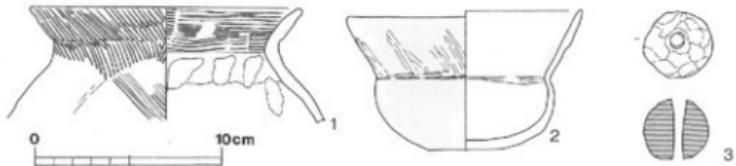
覆土 北西壁から南東壁にかけての床面上に焼土の分布が見られる。焼土の分布に伴って炭化物が出土している。覆土上層にはローム粒が多く含まれる傾向が見られた。

遺物出土状況 少数の土器片が散発的に出土している。

出土遺物 土師器と土製品が出土している。1は土師器壺であり、2は土師器壺である。2は外



第136図 第18号住居跡・遺物出土状況



第137図 第18号住居跡出土遺物

面に炭化物が付着している。3は土玉である。

所 見 本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。出土遺物は近接して存在する第17号住居跡同様に非常に少ない。住居内の施設から見て、機能的に住居として使用されたかは疑問なところがある。焼土の分布と炭化物の出土状況から、本住居跡は焼失したものと考えられる。

第18号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存 率	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土器	A : [14.2] C : (6.0)	覆土下位 50% やや不良	雲母△、砂 粒、赤色粒	にぶい橙	頭部は極く折れ、口縁部は外傾する。外面及び 口縁部内面にはハケ溝形、胴部内面には指痕痕 が残る。	No.231
2	壺 土器	A : [12.6] B : 3.6 C : 7.4	覆土上位 90% 普通	灰石○、石 英○、雲母 △	にぶい赤褐 にぶい橙	扁平な环部からやや頸部が折れ、口縁部が外傾 して立上がる。蓋部内面に棱を持つ。底面平底。 外面环部ナデ、口縁部ナデとヘラミガキ。	No.232 炭化物付着

第18号住居跡出土土製品

単位: cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
3	土製品	土玉	3.2	3.5	38.3	覆土	完形	No.322

2. 竪穴遺構 (S X)

第2号竪穴遺構 [SX-2 (旧第14号住居跡)] (第138図 P L29)

位 置 調査区中央のY・Z-13・14区から確認された。

重複関係 なし。

主 軸 N-20° - E。

規 模 長径2.4m×短径2.2mの小型の隅丸方形を呈し、確認面からの深さはおよそ8cmを測る。

床 平坦に構築されており、硬化面は見られない。

壁 わずかに緩く立ち上がる。

炉 長径55cm×短径40cmで床面の北側に1ヶ所確認された。

柱 穴 なし。

入口施設 不明である。

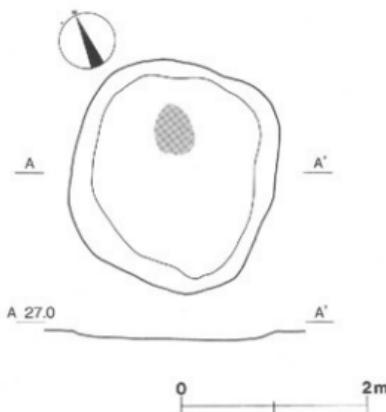
貯蔵穴 なし。

覆 土 焼土粒やローム粒が含まれる暗褐色土で占められていた。

遺物出土状況 土師器小片が出土した。

出土遺物 土師器小破片が出土したが、図化できるものはなかった。

所 見 本遺構はその在り方や覆土の状況から古墳時代前期中葉から後半(4世紀中葉から後半)のものと考えられる。遺構内には狭いながらも床面らしき平坦な部分が見られ、北側によって炉が確認されているが、規模が非常に小さい。通常の竪穴住居跡に見られる柱穴や貯蔵穴などの施設は確認されないことから、竪穴遺構として取り扱った。



第138図 第2号竪穴遺構

第3節 平安時代

平安時代の遺構として堅穴住居跡、火葬墓、溝跡が確認されている。堅穴住居跡は半島状に突出した台地先端部に1軒確認されたのみである。台地中央部では7基の火葬墓が不規則に散開して存在し、墓域の様相を呈する。これらの遺構以外に調査区内では溝跡が1条確認された。また、調査区の谷を挟んだ西側の台地縁辺付近（周知の遺跡外）からは造成工事中に火葬墓が1基発見されており、出土位置は明確にし得ないが火葬墓の項で合わせて報告することにした。

1. 堅穴住居跡（S I）

平安時代の堅穴住居跡は1軒のみ確認されており、半島状に延びた調査エリア内の先端部分から検出された。

第19号住居跡〔SI-19〕（第139～142図 P L 30・76）

位 置 調査区の北端にあたる3A・3B-1区から確認された。半島状の台地先端部にあたる。

重複関係 第49号土坑と重複し本遺構が占い。

主 軸 N-91° - E。

規 模 一辺がほぼ3.4mの方形を呈し、深さ50cmを測る。東壁の南隅付近にカマドが構築されている。

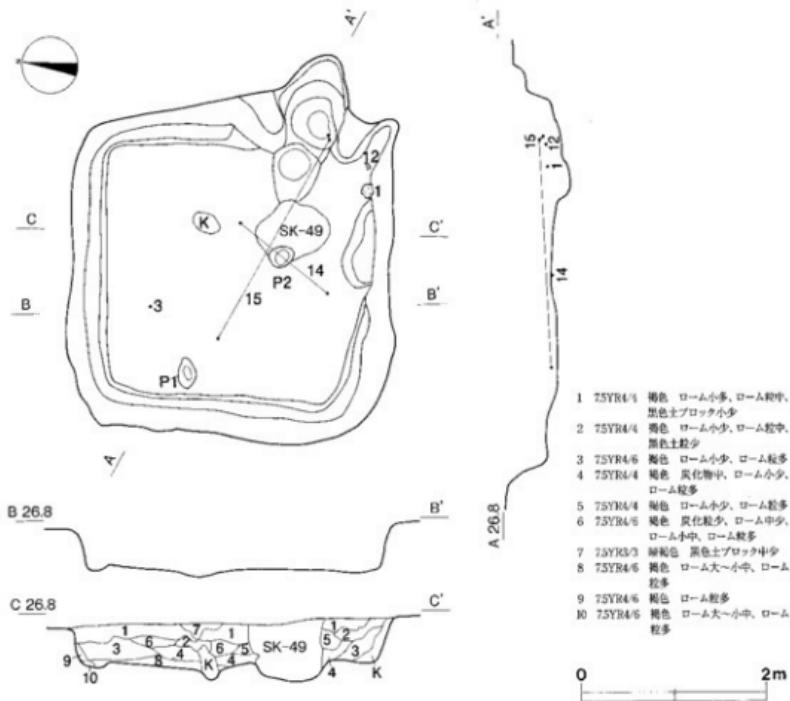
床 住居内のカマド焚き口西方で第49号土坑と重複し掘り込まれている。床面はおよそ平坦で、床面中央部の東西にピットが2基確認された。床はカマド内で見られる焼土や砂質粘土混じりの土層で貼り床されていた。貼り床の厚さは最大で7cm程であり、土器の混入も見られた。

壁 住居跡の壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマドが構築された壁際を除き壁溝がほぼ全周する。壁溝の幅はおよそ25cmで深さは4～5cmである。

カマド 東壁の南隅付近に寄ってカマドが構築されている。規模は長軸170cm・短軸79cmで、壁外を50cm程度掘り込んで構築されている。カマド燃焼部は浅く皿状に凹み、その前方の焚き口部は床面から10cm程窪んでいる。袖は住居跡壁面に接して、左右に砂質白色粘土で構築されていた。土層は11層で構成され、第8・9層に焼土粒が多量に含まれていた。第5層には白色粘土粒が多量に含まれており、粘土で構築された天井部の崩落土の可能性があろう。

その他の施設 床面中央の西側と東側に1基ずつピットが確認され、P 1は長径30cm×短径20cm・深さ11.8cmで、入り口に関わるものかも知れない。P 2は長径30cm×短径20cm・深さ46.6cmであった。

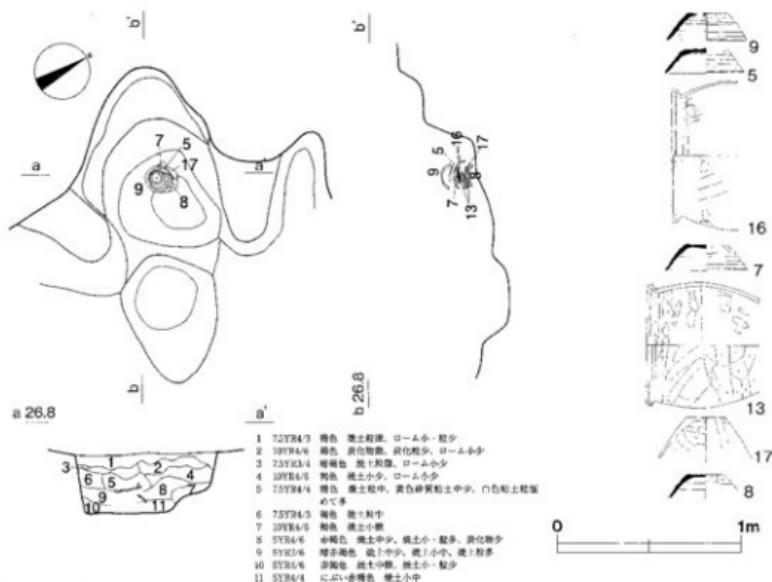
覆 土 遺構覆土は10層で構成され、いずれの土層も褐色を基調とする土層からなる。第4層に



第139図 第19号住居跡・遺物出土状況

は炭化物粒が比較的多く含まれる。第1層下の層界は明瞭で堆積状況が異なることが想定される。遺物出土状況 カマド燃焼部奥から須恵器壺や土師器壺破片が重なるように出土している。重なり具合は、下から8→17→13→7→16→5→9の順番である。須恵器壺はいずれも底部を上にして重ねられ、土師器壺底部も同様である。土師器壺破片は胴部破片を横に用いている。これらの中には土師器壺は見られない。これらの土器は支脚の転用品としての役割が考えられるが、壺の間に壺破片を挟む重ね具合には不安定さが伴い、機能的とは思われない。このことから、その重なり具合には特別な意味合いを感じさせる。また、3の土師器高台付壺は床下の貼り床土中から出土した。

出土遺物 出土遺物は土師器と須恵器が出土している。1・2は土師器壊でいずれも内面黒色。

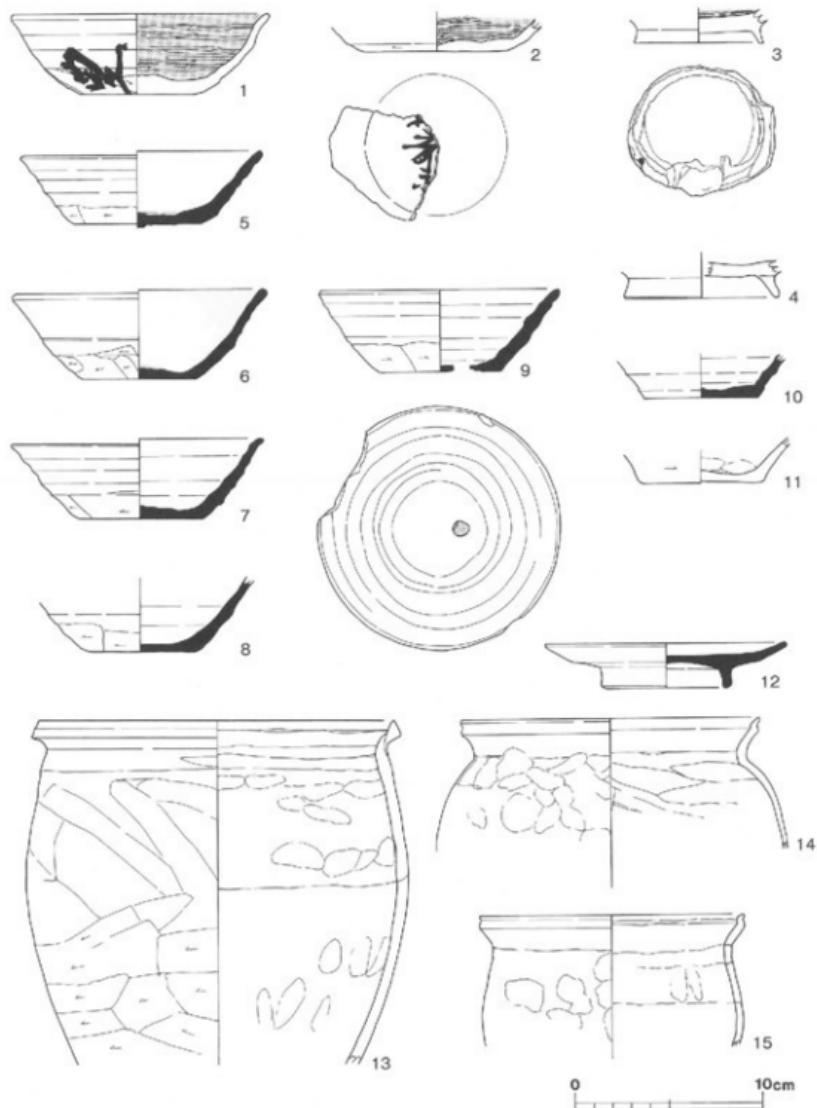


第140図 第19号住居跡カマド・遺物出土状況

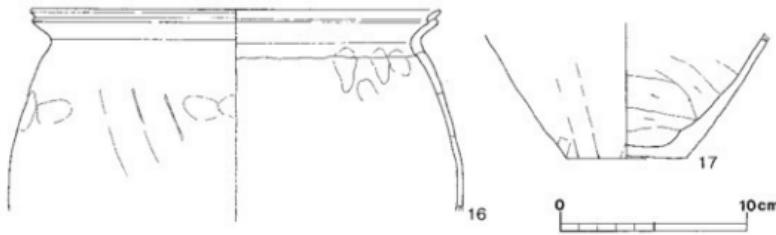
理されたものである。1の側面に「豊」、2の底面には判読不明な文字が3文字程度墨書される。3・4は高台付壺の高台部で、3の側面には墨書の痕跡が残る。5~10は須恵器付で、5のような底径がやや広めのものも出土している。6の口縁部内面には油煙が付着しており、灯明を点した痕跡と思われる。9の底面には焼成後の意図的な穿孔が内側からなされている。12は須恵器高台付盤である。11・13~17は土師器壺である。14~16の口縁部形態は当地域で一般的なものであるが、13は異質なものである。13の胎土には金雲母が含まれ、ほかの土師器壺の胎土とやや異なる。

所見 平安時代の竪穴住居跡は本跡の1軒のみである。その確認状況も特徴的で、半島状に張り出した台地先端で見つかり、集落とは隔離した状況を示してしる。類似した確認状況は同区画整理事業地内の長峯遺跡第10号住居跡や、壺杯清水西遺跡の重複した第7・16号住居跡があげられる。長峯遺跡例は立地やカマド内の遺物出土状況が類似する。また、壺杯清水西遺跡の第7・16号住居跡出土遺物に「案豊」や「□豊」の墨書き器が見られ興味深い。

造構の時期は出土遺物に須恵器が多く含まれる点や、内面黒色処理された土師器が若干見られるなどの特徴から、9世紀後半のものと考えられる。この時期については火葬墓の作られた時期とも関連する可能性のあることが指摘できる。



第141図 第19号住居跡出土遺物（1）



第142図 第19号住居跡出土遺物（2）

第19号住居跡出土遺物

回収No	器種 種類	法量(cm)	出土位置 残存 率 焼 成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	环 土器	A : [13.9] B : 6.9 C : 4.3	覆土下位 80% 良好	長石△、石 英△、雲母 △、赤色粒	にぶい黒	口縁部一部欠損。ロクロ成形。底部は両軸へラ 切りの後一方向のへラ削り。底部無縫手持ちヘラ 削り。内面はヘラミガキ、追加処理。	No.237 外面に墨書き「昌」
2	环 土器	B : [7.6] C : (1.6)	覆土 25% 良好	長石△、石 英△、雲母 △、赤色粒	にぶい黒	环の底部縫合。底部無縫手持ちヘラ削り。底部無縫ヘ ラ削り。内面はヘラミガキ。黒色処理。	No.239 外面に墨書き「□ □□」
3	高台付环 土器	B : [6.8] C : (1.7)	末ト 80% 良好	砂粒、雲母 ○	にぶい黒	高台付环の底部。細くやや聞く高台が付く。底 部・外圍はナゲ。内面はヘラミガキで黒色処理 される。	No.242 外面に墨書き又 は墨書き
4	高台付环 土器	B : [8.4] C : (2.0)	覆土 40% やや不良	長石△、石 英△、雲母 △	青 灰黄褐色	高台付环の底部。やや高い高台が付く。底部は 両軸へラ切り。外圍被熱で赤化。内面は本米色 色処理か。	No.324
5	环 須恵器	A : 13 B : 6.8 C : 3.9	内 68% やや不良	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい黄 青 にぶい(一部)	ロクロ成形。底部から外縫して立ち上がる。底 部は両軸へラ切り。底部無縫手持ちヘラ削り。 背面がざらつく。	No.235 軋用支脚
6	环 須恵器	A : [13.7] B : 6.0 C : 4.8	底内 90% やや不良	長石○、石 英○、雲母 ○	灰黄	口縫合部の一部を欠損。ロクロ成形。底部から外 縫して立ち上がり、口縫合部がやや外反。底部は 両軸へラ切り。底部無縫手持ちヘラ削り。	No.238 一部被熱赤化 口縫合部内面に 浅埋付着
7	环 須恵器	A : 13.6 B : 6.6 C : 4.3	底内 100% やや不良	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい黄	ロクロ成形。底縫から外縫して立ち上がる。底 部は両軸へラ切り。底部無縫手持ちヘラ削り。 底面に敷物の正压。	No.233 軋用支脚 外縫面に黒斑あり
8	环 須恵器	B : 6.6 C : (4.0)	底内 90% やや不良	長石○、石 英○、雲母 ○	黄灰	口縫合部を欠損。ロクロ成形。底部から外縫して 立ち上がる。底部は両軸へラ切りの後ナゲ。底部 無縫手持ちヘラ削り。口縫合部は打ち欠きか。	No.236 軋用支脚 黒斑あり
9	环 須恵器	A : [13.2] B : 6.6 C : 4.4	底内 95% やや不良	長石○、石 英○、雲母 ○	にぶい青	口縫合部の一部欠損。ロクロ成形。底部から外縫 して立ち上がる。底部は両軸へラ切りの後ナゲ。 底部無縫手持ちヘラ削り。底面に焼成後空孔。	No.234 軋用支脚
10	环 須恵器	B : [6.2] C : (2.0)	覆土 60% 良好	長石△、石 英△、雲母 ○	灰白	环の底部縫合。底部は水平に伸び、口縫合部がや く外張る。ロクロ成形。ロクロ日良く残る。底部は 両軸へラ切りの後一方向の削り、そしてナゲ。底部無 縫手持ちヘラ削り。	No.240
11	小型圓 土器	B : [6.8] C : (2.0)	覆土 40% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	明赤褐	環の底部縫合。底面に木葉模と敷物の匂氣。外 面はヘラ削り。内面はヘラナゲ。外縫に白色の 付着物あり。	No.249 一部被熱赤化
12	高台付環 須恵器	A : [13.0] B : [7.0] C : 2.4	覆土下位 40% やや不良	長石○、石 英○、雲母 ○	灰	ロクロ成形。直立した高台が付く。底部は水平 に伸び、口縫合部がやく外張る。底部無縫手持 ちヘラ削り。上半はヘラナゲ。口縫合部はナゲ。	No.241
13	壺 土器	A : [19.0] C : (18.4)	底内ほか 普通	長石△、金 雲母△、赤 色粒	黄棕	調部削は強めが見られる頭部へ続き。断面三角 形の口縫合部が破け外張する。調部下部はヘラ削 り、上半はヘラナゲ。口縫合部はナゲ。	No.243 被熱 軋用支脚
14	壺 土器	A : [16.1] C : (7.0)	底下 30% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	灰褐	調部から口縫合部の破片。調部が折れ、口縫合部 が外縫と口縫合部が横み上げられる。調部外縫 に浅埋、口縫合部ナゲ。調部内面ヘラナゲ。	No.246

図版No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
15	小型壺 土師器	A : [16.0] C : (7.0)	窓内ほか 30% 普通 △	長石○、石 英○、雲母 △	明赤褐	壺の腹部から口縁部の破片。頭部の折れは緩く、口縁部はやや外傾して肩部が飲み上げられる。肩部外面には附物痕。内面にはヘラナデ。	No247 被熱赤化
16	壺 土師器	A : 21.8 C : (10.8)	窓内 40% 良好	長石○、石 英○、雲母 △	明赤褐	頭部から壺部が話れ、口縁部が外傾し口唇部が飲み上げられる。外面はナデ、内面はヘラナデ。17と同一個体か。	No244 被熱赤化 転用支脚
17	壺 土師器	B : 6.4 C : (6.5)	窓内 60 % 良好	長石○、石 英○、雲母 △	明赤褐	壺の底部破片。底部から外傾して立上がる。底面には敷物の圧痕。外面はヘラ回りの後ナデ。内面はヘラナデ。白色の付着物あり。	No248 被熱赤化 転用支脚

2. 火葬墓 (CT)

火葬墓としたものは須恵器や土師器、そして灰釉陶器を骨蔵器として、その中に火葬骨を入れ、地中に埋納したものである。調査エリア内から火葬墓は6基確認され、骨蔵器は須恵器が2点、土師器が3点、灰釉陶器のものが1点である。このほかに、調査エリア外から工事中に出土したもの1点加えて報告することにした。

第1号火葬墓 [CT-1] (第143・144図 P L31・77)

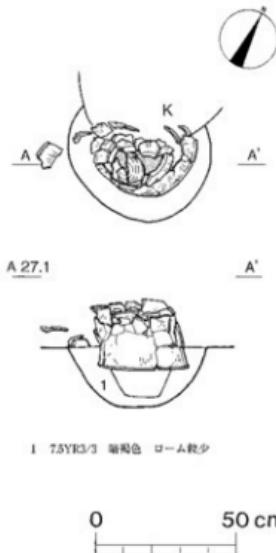
遺構 調査区の南端の2C-29区から木の根に押し潰された状態で発見された。土坑のプランは細かい根の搅乱によって確認が難しく、骨蔵器の上部を露出する程度まで確認面を下げ、さらに土坑を半截するサブトレーナーを設定して土層観察を行った。その結果、確認面において径50cm、深さ22cmの円形土坑を確認した。土坑本来の規模はさらに大きなものを考えて良いであろう。

覆土は暗褐色土の単一層である。骨蔵器は須恵器壺を本体として正位に埋納し、大きな須恵器鉢を被せていた。また、鉢の底部破片の間からは、須恵器壺が底部を上に向けた状態で検出された。この壺は、当初中蓋として鉢の中に置かれたものと考えていたが、口径が小さく壺の口を塞ぐことはできない。したがって鉢の上に載せられていた可能性が高いが、鉢の底部の破壊が著しくこれを確定することはできなかった。

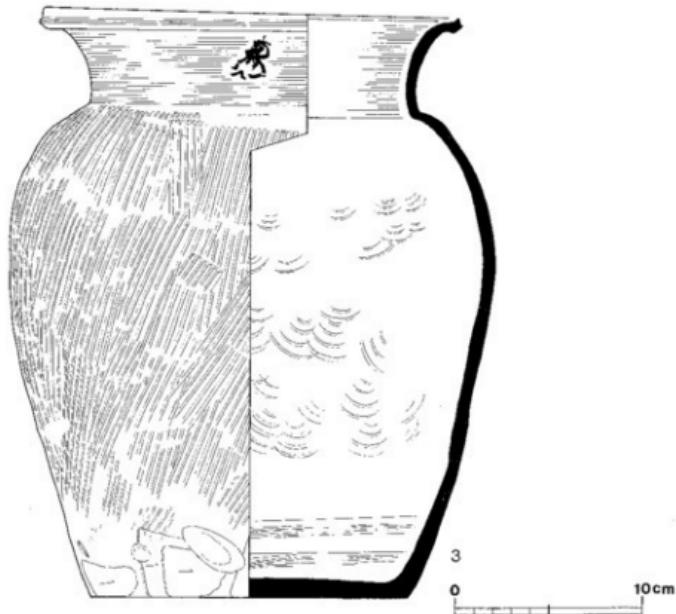
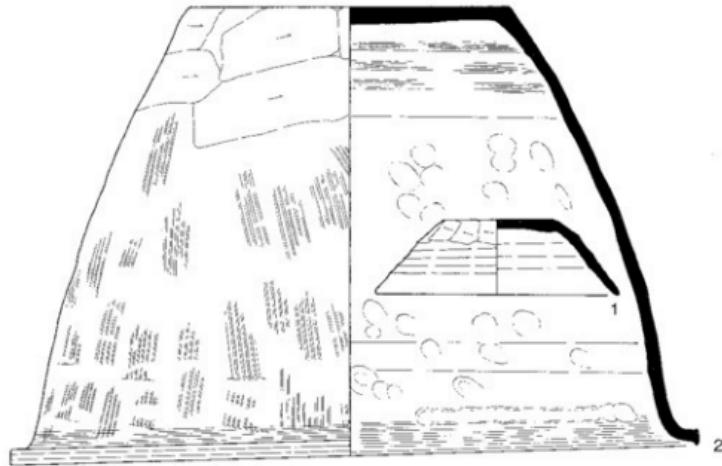
出土遺物 骨蔵器は須恵器の壺・鉢・壺で構成される。壺は完形で、比較的太い頸と大きく開く口縁部を持ち、やや軟質の焼成を呈する。鉢はほぼ完形で、大きな口径を持つため壺の上半分を覆うことができる。壺は、底部が小さく体部は直線的に大きく開く。約1/2が残存するが、完形であっても壺の口径に対応せず、中に落ち込んでしまう。中蓋としての使用は不可能と思われる。壺の頸部には墨書があり、赤外線写真の撮影を試みた。しかし、墨が滲み字形がはっきりしないため、判読できなかった。

火葬人骨の残存状況は不良である。計105gを検出し、鑑定の結果、成人女性と判定された。

なお、壺の中を精査した際、火葬人骨の他にネズミと思われる小動物の骨が検出された。この骨は新しいもので、壺の中に落ち込んだ鉢の破片の下から集中して見つかっている。近年中に壺の割れ口から侵入し、鉢の破片によって圧死したものと思われる。頸の数から少なくとも4匹は



第143図 第1号火葬墓



第144図 第1号火葬墓出土遺物

第1号火葬墓出土遺物

図版 No	器形	法華 (cm)	残存率	焼成	地上	色調 外観 内面	器形・技法の特徴	備考
1	环 須恵器	A: 13.0 B: (5.8) C: (4.4)	1/2	普通	径 1 mm の長 石・石英粒を 多量、雲母片 を中心	灰褐色 灰褐色	底径が小さく、直進的に大きく聞く 体部をもつ。体部下位に手持もヘラ 柄り、底部は切り離し後一方に向か るヘラ削りを施す。体部内側に圓板 ナゲが目立つ。	No.345
2	鉢 須恵器	A: 36.8 B: 17.0 C: 24.5	ほぼ完形	やや不良	径 1 mm の長 石・石英粒を 少量、雲母片 を多量	黒褐色 にぶい褐色	比較的大きな鋸をもつ鉢。体部はや や丸みを帯びて立ち上がり、直角的 に屈曲する口縁部がつく。口縁部は 小さく垂直方向にこまみ上げる程度。 体部外観に縱方向の平行縦の叩き、 下位にヘラ削りを施す。内面はヘラ と指による横方向のナゲと多数の指 彫刻痕がみられる。	No.344
3	壺 須恵器	A: 22.2 B: 16.8 C: 31.6	ほぼ完形	やや不良	径 1 mm の長 石・石英粒を 多量、雲母片 を少量	にぶい褐色 にぶい褐色	最大径は体部中位や上にあり肩が 強く、頭部は太く、強い角度で立ち 上がる。口縁部付近は強く横方向に 振り出し、断面三角形の小さな口唇 部がつく。体部外観に縱方向の平行 縦の叩き、下位にヘラ削りを施す。 内面は多数の同心円状の秀え跡が みられる。	No.343

確認されている。

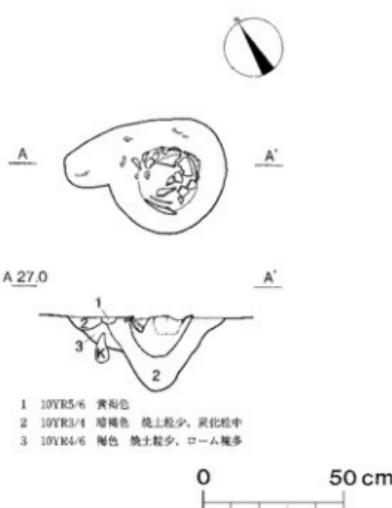
所 見 本遺構は出土遺物から9世紀中頃のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人女性と判定された。

第2号火葬墓〔CT-2〕(第145・146図 P L31・77)

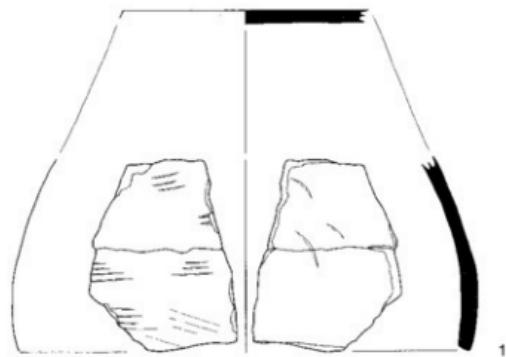
遺 構 調査区の中央やや西よりのQ-18区に位置し、最も近い第5号火葬墓との距離は約30m 程である。確認面では、不整円形の土坑に 土師器片が散乱する状態で発見された。遺構の上半分が削平されてしまった状況である。土坑は、径45cmの円形土坑を中心に、その北西側にも若干の掘り込み部分が存在する。深さは円形土坑の中心部が最も深く、確認面から25cmを測る。骨蔵器は土師器壺を用い、この円形土坑の中央に正位に埋納されていた。

覆土は3層からなり、第2層は5mmほどの炭化物粒子を僅かに含んだ暗褐色土である。

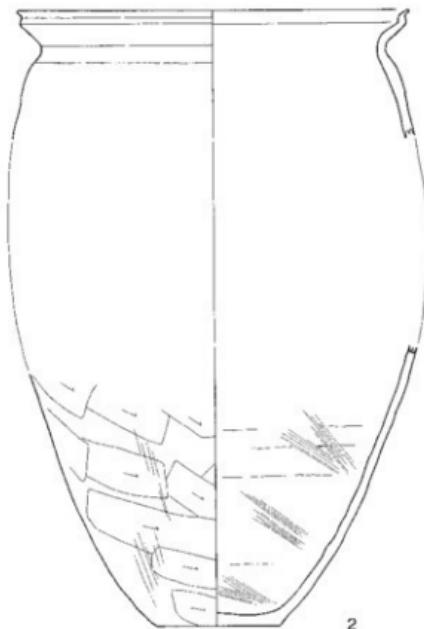
出土遺物 骨蔵器の本体は、2の土師器壺である。壺の下半分、及び口縁部付近の破片が残存している。長胴で体部中位に最大径を持つ一般的な壺であり、比較的粗い作



第145図 第2号火葬墓



1



2



第146図 第2号火葬墓出土遺物

りである。また、壺内部に落ち込む形で1の須恵器壺の破片が残存していた。体部中位と底部の破片のみであるが、特に前者には、割れ口を磨いて口縁を再生している様子が観察された。おそらく壺の口縁部や体部上位を割り取り、鉢状の形の器形に再加工したのであろう。蓋として土師器壺に被せていたものと思われる。

火葬人骨は705g 残存しており、成人男性と鑑定された。

所 見 本遺構は出土遺物やほかの調査事例から9世紀前半から9世紀中頃のものと考えるのが妥当かと思われる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人男性と鑑定された。

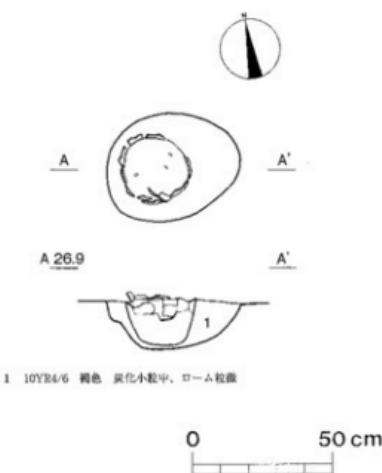
第2号火葬墓出土遺物

団版 No	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調 内面	器形・技法の特徴	備考
1	壺 須恵器	C: [10.1]	細片	不良	微細な長石粒 を少量、雲母 片を中量	にぶい黄色 にぶい青緑色	須恵器壺の体部中位と底部の破片が 残存する。体部中位の破片の上方に は割れ口を磨いた痕跡がある。体部 上位を割り取って鉢状にした後、口 縁部を再生したものと思われる。体 部外面上に横方向の平行線の叩きを施 し、内面には横・斜方向のヘラナ ガと押さえの跡がみられる。	No374 焼成は軟質
2	壺 土師器	A: [21.0] B: 6.6 C: [33.0]	1/2	普通	径1mmの長石・ 石英粒を多 数、雲母片を 少量	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	体部下位と口縁部付近が残存する。 最大径は体部中位にあり、口径より 若干大きい程度と思われる。口縁部 はハの字に開き、薄い口唇部が強く 外反する。外面上は体部中位以下に斜 方向にヘラ削り、内面は横と斜め方 向のヘラナデを施す。	No346

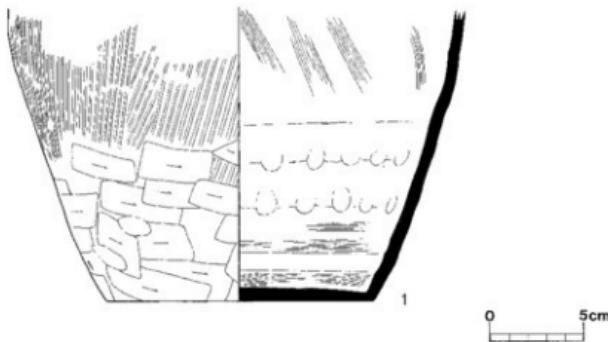
第3号火葬墓〔CT-3〕(第147図 P L32・77)

遺 構 調査区の北よりの2B-8区で確
認され、第6号火葬墓に隣接する。確認面
において壺の上半分が重機によって削平さ
れた状態で発見された。土坑は長軸50cm、
短軸38cmの楕円形プランで、深さは確認面
より18cmである。須恵器壺を用いた骨蔵器
はこの土坑の底に正位に埋納されており、
第1層の褐色土が周囲に充填されていた。
この褐色土の中にはローム粒のほかに、1
cmに満たない炭化粒が少量含まれていた。
意図的に混入したと考えるには少な過ぎる
量である。

出土遺物 骨蔵器は須恵器壺を使用してい
る。体部下位の約15cmが残存している。器



第147図 第3号火葬墓



第148図 第3号火葬墓出土遺物

形や調整は住居跡から検出される一般的な壺と共通するものである。この他に蓋に相当するような土器は検出されていない。

火葬人骨の残存状況は、壺内部への土の流入により不良であった。290gが残存し、成人女性の骨と鑑定された。

所 見 本遺構は出土遺物やほかの出土事例からおよそ9世紀前半から9世紀中頃のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は、成人女性と鑑定された。

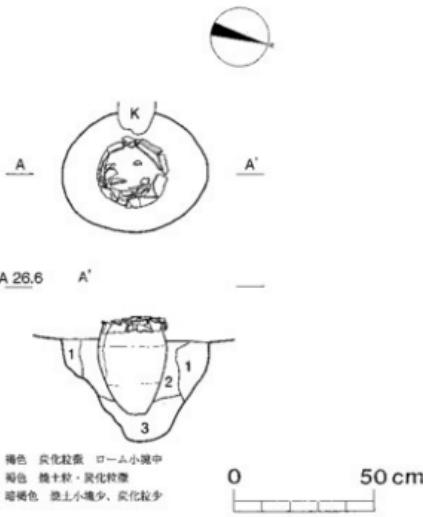
第3号火葬墓出土遺物

図版 No	器形	法面 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外側 内面	器形・技法の特徴	備考
1 須亞器	壺 B: 14.2 C: (15.6)	1/2	普通	径1mmの長石・ 石英粒を中 量、雲母片を 少量	に高い黄褐色 に低い褐色	体部中位以下が残存する。体部はは ば中位まで直線的に立ち上る。下位 外側に縦方向の平行線の明き、下位 にヘラ削りを施す。内面は体部に縱 方向、底部付近に横方向のヘナナ を施す。	No348 土筋型に近い 色調を呈する。	

第4号火葬墓〔CT-4〕(第149・150図 PL 32・77)

遺 構 調査区の西端であるC-17区に立地する。第2号火葬墓からは58m離れる。木の根の抜き取り作業中、土師器壺の口縁部が遺構確認面から露出している状況で発見された。土坑は長軸52cm、短軸43cmの楕円形で、西側には木の根によって若干搅乱された部分がある。深さは、確認面から最も深い中央部分で35cmを測る。骨蔵器は土師器の壺を使用して、土坑中央に正位に埋納していた。埋納にあたっては、土坑の底に暗褐色土を充填し、そこに壺の底部を埋め込むようにして立たせ、その後から褐色土を周囲に充填していく様子をつかむことができた。

覆土は3層から構成され、第2・3層には微細な焼土粒子や炭化粒が認められたが、ごく僅か



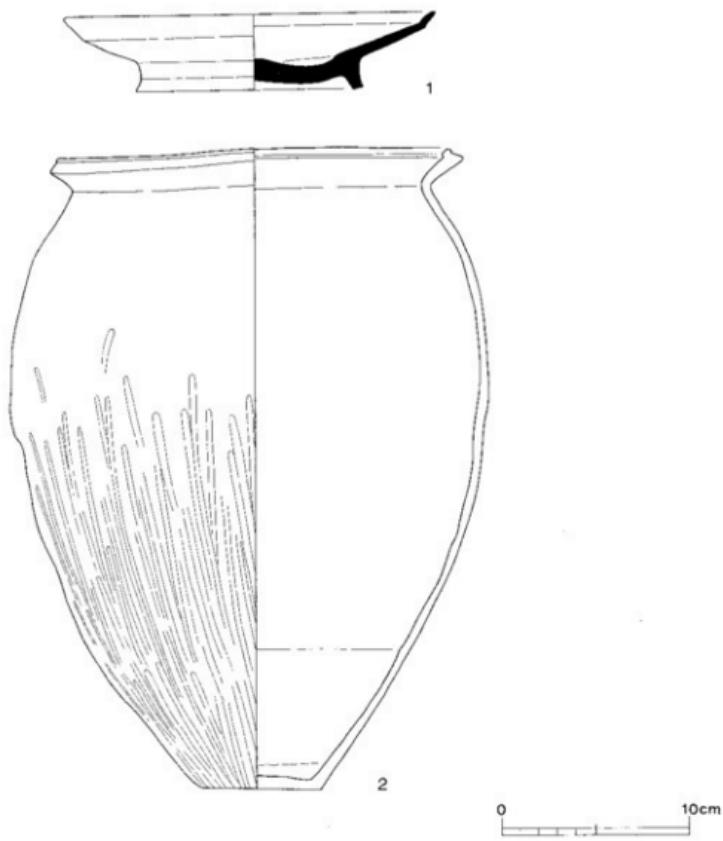
第149図 第4号火葬墓

な量である。また、壺の内部には、須恵器の高台付盤が口縁部を上に向かた状態で落ち込んでいた。蓋として壺の口を塞いでいたものと考えられる。

出土遺物 骨蔵器は、土師器の壺を本体とし、須恵器の高台付盤を蓋としている。盤は口を上に向かって壺を封じていたが、これは壺の口唇部が内傾しているため、口縁部どうしを合わせるよりも高台部を壺の中に向ける方が取扱いが良いためであろう。壺も盤も一般的な土器の転用品であるが、その組み合わせには便宜が図られているようである。

第4号火葬墓出土遺物

図版 番号	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	施上	色調 外側 内面	器形・技法の特徴	備考
1	高台付盤 須恵器	A: 19.8 B: 4.1 C: 12.1 E: 0.7	完形	良好	径1mmの瓦石・ 石英粒、雲母 片を少量	灰 灰 口縁部付近 は暗青灰色	体部は穂やかな角度で直線的に立ち上り、口縁部にかけてはくの字に屈曲する。口部には内側に内傾し、粘土板を縁部に貼り付けたような膨らみをもつ。体部中位以下は横方向にヘラ削りを行った後、その上から穂やかな縦方向のミガキを施している。内面に横方向のヘラナデを施す。	No350
2	壺 土師器	A: 20.8 B: 6.5 C: 34.5	ほぼ完形	普通	径1mmの瓦石・ 石英粒を多 量、雲母片を 微量	にぶい褐色 にぶい褐色	最大径は、口径よりも大きい。肩部は丸みを帯び、口縁部にかけてはくの字に屈曲する。口部には内側に内傾し、粘土板を縁部に貼り付けたような膨らみをもつ。体部中位以下は横方向にヘラ削りを行った後、その上から穂やかな縦方向のミガキを施している。内面に横方向のヘラナデを施す。	No349



第150図 第4号火葬墓出土遺物

甕の中には細かな植物の根が入り込んでおり、火葬人骨の残存状況は不良であった。230gを検出し、成人女性と鑑定されている。

所 見 本遺構は出土遺物から9世紀前半頃のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人女性と鑑定された。

第5号火葬墓〔CT-5〕(第151図 PL33・78)

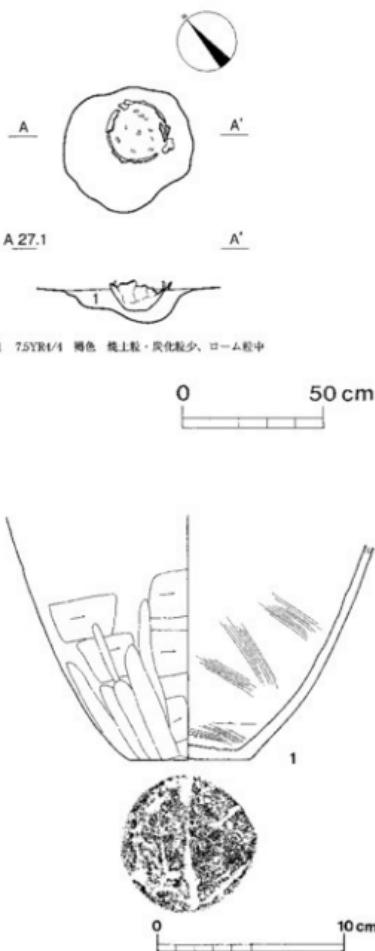
遺構調査区のほぼ中央にあたるX-14区に位置する。重機による削平が著しく、土師器片と骨片が散乱している状態で発見された。土坑の径46cmの不整円形で、深さは確認面より僅か12cmしか残されていなかった。他の火葬墓に比べ掘り方が大きいのが特徴といえる。骨蔵器は土師器の甕を使用し、土坑の中央や東寄りの位置に正位に埋納していた。

覆土は1層からなり、僅かに焼土粒と炭化粒を含む褐色土である。

出土遺物　骨蔵器は土師器の甕で、約1/3の体部下位が残存する。蓋に相当するような他の土器は一切検出されていない。

火葬人骨は370g程残存し、成人男性と鑑定されている。

所見　本遺構は出土遺物やほかの調査事例から9世紀前半から9世紀中頃のものと考えるのが妥当かと思われる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人男性と鑑定された。



第151図 第5号火葬墓・出土遺物

第5号火葬墓出土遺物

図版 No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外観 内面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	B: 6.5 C: (13.0)	1/3	普通	径1cmの石英 粒を少量	にぶい深褐色 にぶい黄褐色	甕の体部以下が残存。細長い体部を持つと思われる。外面は横方向への引抜きを行い、その上から縱方向の幅広いミガキを加えている。内面は横・斜方向のヘラと溶によるナデを施す。	Na351 底部に木系痕 の痕跡

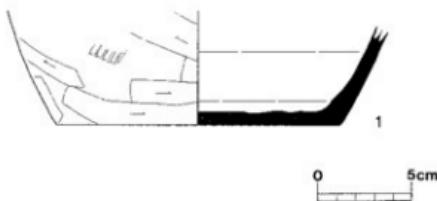
第6号火葬墓 [CT-6] (第152図 P L78)

遺構 調査区の北寄りの2B-8区で確認され、第3号火葬墓の東に隣接し、第5号火葬墓から約25mの距離に位置する。確認面において既に骨蔵器が露出しており、周間に火葬人骨が散乱している状態であった。土坑は確認されていない。本来の掘り方が浅く、重機によって削平されてしまったものと思われる。

出土遺物 須恵器の壺を骨蔵器としており、底部付近のみが残存する。内面が褐色を呈するが、非常に焼き締まりの良い壺である。他の部位の破片やこれと組み合う土器については検出されていない。

火葬人骨は、周間に散乱していたものも採集したが75gしか残っていなかった。鑑定の結果、性別不詳の成人的骨と鑑定された。

所見 本遺構は出土遺物から9世紀代のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人であることが鑑定された。



第152図 第6号火葬墓出土遺物

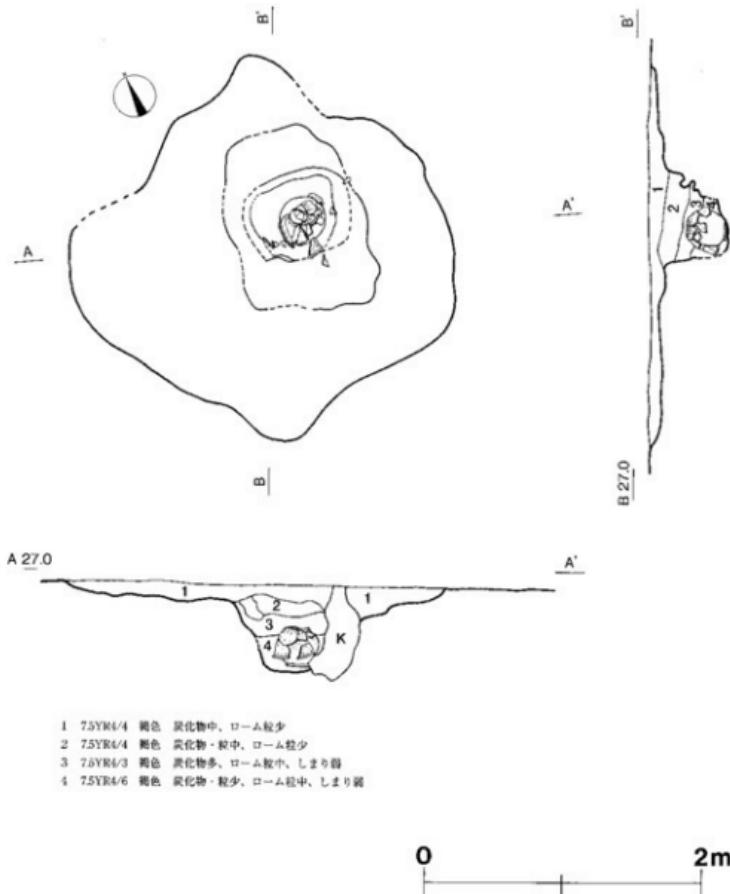
第6号火葬墓出土遺物

図版 No.	器形	法量 (cm)	残存率	施成	胎土	色調 内面	器形・技法の特徴	備考
1	壺 須恵器	B: 15.2 C: (6.1)	破片	堅密	ごく緻密な泥 石粉を多量	灰褐色 にいぶ褐色	須恵器壺の底部付近の破片。外面上にはヘラ削りを施し、発方向の平行線の叩きも壁面にみられる。内面は横と斜方向のヘラナダを施している。 胎土は比較的緻密で非常に良く焼き締まっている。	No.352 硬質な焼成

第7号火葬墓 [CT-7] (第153~155図 P L34・35・78)

遺構 調査区東側の2Q-32区に立地する。遺構確認時に南北3m×東西2.5mの炭化物の混入する褐色土の不整楕円形プランが確認され、同所から土師器小片も出土した。このことから、十字に幅25cmの土層観察用ベルトを設定して掘り下げを行った。土層の堆積状況は判然とせず擾乱も見られたためサブトレントを設定して部分的な深掘りを行った。結果的には、およそ中央部分が深く周辺部分が浅い掘り込みが確認された。そして、土層ベルトの交点で土師器鉢の一部が口縁部を下にして見られ、同ベルトを排除すると、先の土師器鉢は灰釉陶器の短頸壺に被せてある

ことが確認され、火葬墓であると判断した。掘り方はおよそ南北軸270cm、東西軸270cm、深さ10~15cmの浅い不整梢円形の掘り込みと、中央の長軸80cm、短軸60cm、深さ45cmの深い不整方形の掘り込みからなり、この後者の掘り込み内に骨蔵器が埋納されていた。これらの掘り込み内は全体的に木の根による搅乱が著しく見られ、壁面のローム層中にも及んでいた。調査途中では浅い不整円形の掘り込みの底面については、明瞭に把握することができずローム層中まで掘り進めて



第153図 第7号火葬墓

しまった。

覆土は4層に分けられた。図面上は両者の掘り込みを描いているが、本来の火葬墓掘り方は中央部分の不整方形掘り込みのみと考えた方が妥当と思われる。周辺の浅い掘り込みや遺構覆土内の著しい搅乱状況については、火葬墓埋納後に遺構上に樹木が生育し根をはびこらせ、その根が不朽した痕跡と考えることが可能かも知れない。

骨蔵器は灰釉陶器の短頸壺を使用して、不正方形の土坑内に正位に埋納していた。埋納にあたっては、土坑の底に大型の炭化材を含む褐色土を充填し、そこに短頸壺の底部を埋め込むようにして立たせ、その後から褐色土を周囲に充填していった様子を理解することが出来る。

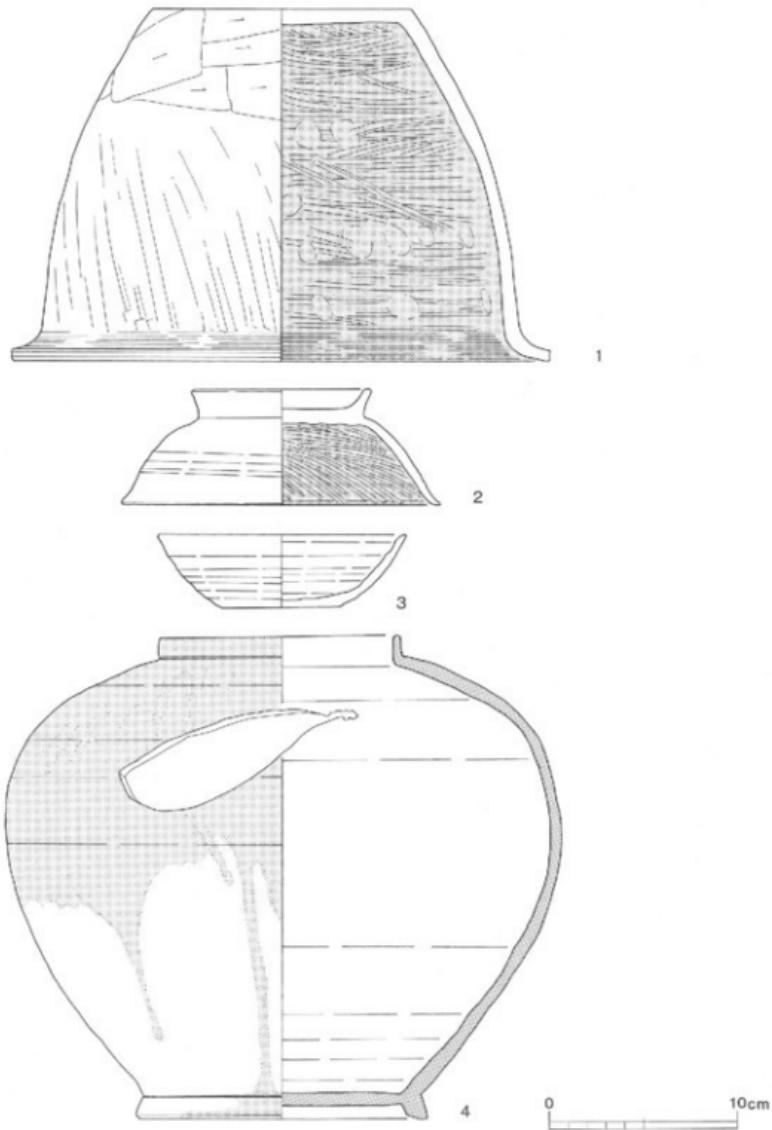
出土遺物 骨蔵器は灰釉陶器の短頸壺、土師器の壺、高台付壺、壺の4点で構成されている。短頸壺を本体とし、その口縁部にはまるよく壺を上に向かう状態で第1番目の蓋をしていた。次に口縁部を下にした高台付壺を被せて第2番目の蓋とし、さらに半截した鉢をこれに覆い被せるようにして第3番目の蓋としていた。

短頸壺は、短く直立する口縁部とやや長めで緩やかな曲線を持って立ち上る体部をもつ。最大径は体部中位やや上にある。黒窯14号窯式期のものに比定される。鉢は丸みを帯びた体部に強く外反する口縁部をもち、内面に磨きと黒色処理が施される。口縁部および体部の約半分を欠いている。高台付壺は大型で、丸みを帯びた体部は深く、高台はやや高めである。内面に磨きと黒色処理が見られる。壺は径の小さな底部と丸みを帯びて浅く立ち上がる体部をもつ。

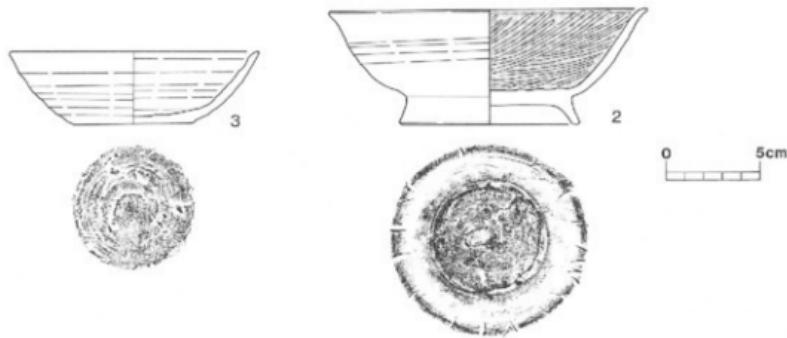
なお、短頸壺は体部上位に大きな破壊孔があり、向かって右側に銳利な器物による殴打点が見られる。短頸壺の周囲や内面を精査したがこの破壊孔に対応する破片は検出されなかった。従って、骨蔵器としての使用以前にこの孔を開けたものと考えられるが、割れ口は全く磨耗しておらず、破壊後は比較的短期間のうちに骨蔵器に転用されたものと推測される。また、鉢についても同様に、割れ口が新しく、半截にして被せた残りの破片は1、2点を除き周囲に検出されなかつた。ちなみにこの鉢は短頸壺に被せるには口径が小さく、完形のままでは短頸壺の肩部に乗っているだけの不安定な状態になる。破壊孔の閉塞も意図しながら効率良く蓋をするには、むしろ半ば破碎して覆い被せるようにした方が都合が良かったのではないかと思われる。

火葬骨の残存状況は、こうした配慮にもかかわらず土の流入によって良好ではない。205gが残存し、成人女性と鑑定されている。

所 見 本遺構出土の灰釉陶器短頸壺の製作年代はおよそ9世紀前半頃のものと思われる。しかしながら火葬墓としての年代は出土遺物の土師器から9世紀末葉から10世紀前葉頃のものと考えられる。こうして考えると、灰釉陶器短頸壺が製作されてから一定伝制された後に火葬墓骨蔵器として埋納された様子が窺える。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人女性と鑑定された。



第154図 第7号火葬墓出土遺物（1）



第155図 第7号火葬墓出土遺物（2）

第7号火葬墓出土遺物

器版 No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	黏土	色調 外画面 内面	器形・技法の特徴	備考
1 鉢 土師器	A: 28.6 B: 13.8 C: 18.8	2/3	普通	ごく微細な石英を多量、雲母片を微量	にぶい黃褐色 黒色	体部は丸みを帯びて立ち上がり、直角的に屈曲する口縁部をもつ。口唇部に深い沈線が入る。外表面は斜方向にヘラを押し当てたような叩き跡がみられ、下位には面取りするかのような鋭いヘラ削りを施している。内面は横方向のミガキと若干の滑脂圧痕が見られ、黒色処理を施している。全ての破片を接合しても約1/3の部分が欠失している。	No.354 割れ口は磨耗しておらず、原底面に被せるため意図的に破壊したものか。	
2 高台付 土師器	A: 17.0 C: 6.2 D: 9.4 E: 1.0	完形	良好	雲母片を微量	橙色 黒色	大きな口径で深い体部を持ち、瓶形を呈する。体部は下位から中位にかけて丸みを帯び、口縁部付近は外反する。高台は比較的高くハの字に開く。体部外表面に回転ナデ、内面は横・斜方向のミガキと黒色処理を施す。底部は回転ヘラ削り後斜くナガ調整を行い、高台取り付けに伴う回転ナデを周囲に施す。	No.355	
3 环 土師器	A: 13.2 B: 6.4 C: 3.9	完形	普通	雲母片を微量	橙色 橙色	径の小さな瓶形を持ち、体部は全体的に丸みを帯びている。体部外表面に丁寧な回転ナデを施す。底部は回転ヘラ削り後、一方に向かって軽いヘラ削りを行う。体部下位のヘラ削り調整は施されていない。	No.356	
4 粗粒陶 灰釉陶	A: 12.8 C: 25.8 D: 15.4 E: 0.8	ほぼ完形	堅軟	黒色粒子を中心 疊合む緻密な 灰白色土	灰白色 灰白色 輪郭は黄褐色	最大径は体部中位やや上にあり、器高よりも大きな数倍を測る。なだらかな肩から口縁部が鋭く直立する。高台は僅かな丸みをもって若干張り出す程度で、躍ん張る感じではない。体部外表面に回転などを施し、外表面下位には回転ヘラ削りもみられる。軸は口縁部から体部下位にかけて淀下し、高台の内側の底部面にも付着している。	No.353 体部上位に筆跡がある。向かって右側に段打点があり、それがIH銘利である。	

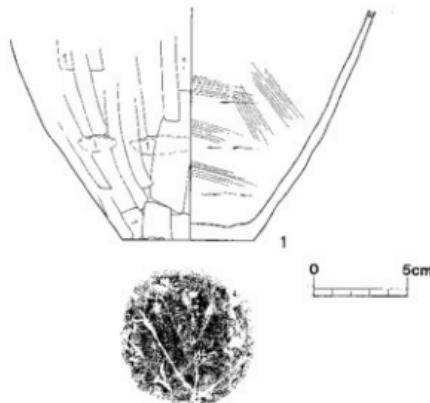
調査区外火葬墓〔CT-調査区外〕(第156図 P L 33)

遺構 当火葬墓は、八幡脇遺跡西方の谷を挟んだ台地縁辺付近で造成工事中に発見されたものである。調査対象外区域ということもあり、火葬骨の存在によって辛うじて火葬墓と認識され、工事関係者より通達を受けた次第である。発見地は石橋北・石橋南の両遺跡と同一の台地上で、八幡脇遺跡とは北から湾入する浅い谷津を挟んで西側に對峙する地点である。発見当初より当地点には重機による掘削が進んでおり、遺構の検出は不可能な状態であった。従って、骨蔵器と火葬骨のみを報告することにする。

出土遺物 骨蔵器は土師器甕を使用している。甕の上部2／3は重機による削平を受けて欠損しており、蓋などの存在も不明である。甕の体部下位には縱方向のヘラ削りに加え、ヘラナデないし幅の広いミガキが施され、器壁は薄く作られている。体部の立ち上り方は一般的な長胴の甕のものと同じであり、日常使用される土師器甕を骨蔵器に転用したものであろう。

火葬骨は、甕の残部にぎっしり詰まった状態で残存していた。全部で230gあり、2~4cm大的骨片を多く含んでいた。成人男性のものと鑑定されている。

所見 本遺構は出土遺物から9世紀代のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人男性と鑑定された。



第156図 調査区外火葬墓出土遺物

調査区外火葬墓出土遺物

図版 No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調・外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	B: 69 C: (123)	1/3	やや不良	長石・石英粒 を多量、雲母 片を微量	にかい緑色	長胴甕の底部で、器壁は最も薄いところで3mmになる。作りは粗く器面の凹凸や縦横筋が目立つ。調整は表面に縱方向の削りを施した後、ナデている。内部はヘラによる新方向の荒いナデが施される。	No.337 底面に本巣痕あり

3. 溝跡 (S D)

第1号溝跡〔SD-1〕(第157図 PL 36・78)

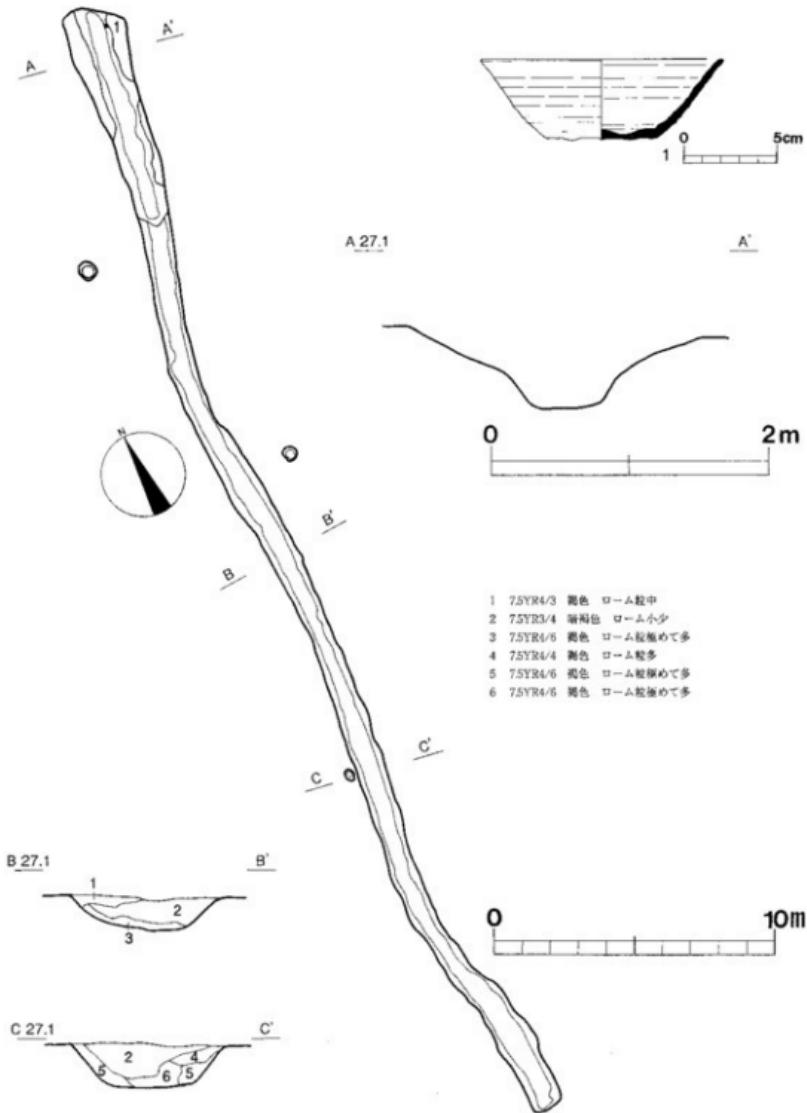
遺構 調査区の東側で、L-24区からK-33区のおよそ南北に弱く蛇行しながら延びる。北端及び南端はエリア外に延びている。幅はおよそ1mであるが、北端では2mと幅広くなっている。溝の断面形態は北端部以外では逆台形となり深さはおよそ20~30cmであるが、北端では逆台形の裾部が大きく広がり深さ60cm程度になる。関連する遺構が不明であるが溝跡の周辺に小ピットが3基確認されている。

遺物 遺物はほとんどが縄文土器片であったが北端で1の須恵器坏が出土している。

所見 出土遺物から9世紀後半の遺構と考えられる。この溝跡の東側の調査エリアには火葬墓群の中でも最も新しい第7号火葬墓のみが存在し興味深い。

第1号溝跡出土遺物

調査No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	船上	色調	器形・法量の特徴	備考
I	环 須恵器	A : (13.2) B : (6.0) C : 4.3	覆土 40% 普通	長石○、石 英○、雲母 ○	灰	ロクロ成形。底部から外側して口縁部に至る。 底面は凹転ヘラ切り。底部側縁手持ちヘラ削り。	No254

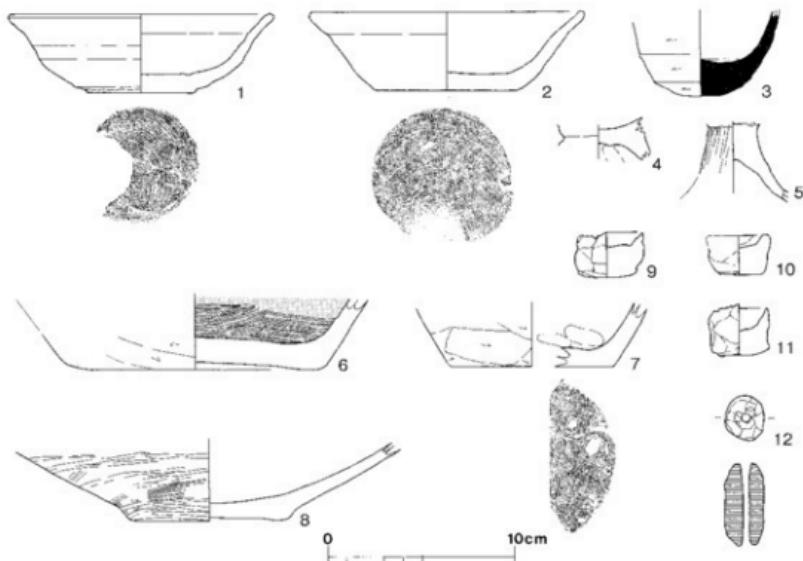


第157図 第1号溝跡・出土遺物

第4節 古墳時代以降の遺構外出土遺物（第158図）

ここでは古墳時代以降の遺構外出土遺物を掲載した。それらはおよそ古墳時代の遺物と古代の遺物に分けられる。この遺跡の時代的な特性を反映したものといえる。

古墳時代の遺物は4・5・8～11で、古代の遺物は1～3・6・7であり、12は古墳時代から古代にまで及ぶものと思われる。4・5は高杯脚部である。8は壺の底部である。9～11は小型の手づくね土器であり、同様な大きさで形態・作りも類似する。1・2は土師器坏であるが、口クロ成形され底面には回転糸切り痕が残る。両者ともに近接して出土し、類似した胎土を持つ。3は須恵器の壺底部であろうか。胎土の状況は地元産須恵器ではないことが窺える。6は土師器の鉢底部であろう。内面は黒色処理がなされている。もしかすると火葬墓に埋納された骨蔵器の蓋だったのかも知れない。7は土師器壺の底部であるが、6同様に骨蔵器の一部であった可能性がある。12は管状の土錘で手づくね成形である。



第158図 古墳時代以降の遺構外出土遺物

第4章 総括

今回の八幡脇遺跡の発掘調査では、縄文時代・古墳時代そして平安時代の特色ある遺構・遺物が確認された。以下では各時代の特徴的な遺構・遺物について述べ、関連する事例などを取り上げて総括としたい。

1 縄文時代

縄文時代の遺構は竪穴住居跡（第7・9・12・13・15・16号住居跡）6軒、竪穴遺構1基、土坑38基、土器埋設遺構4基、集石2基などが確認されている。これらの多くは縄文時代中期後半の加曾利E3式期からE4式期にかけてのものであり、市内でもこの時期の集落跡を一定の広がりを持って調査した事例は数少ない。以下は、調査エリア内で確認された遺構や出土遺物の特徴について取り上げる。

A 遺構の特徴

本遺跡内で確認された縄文時代の遺構の時期は、細かく見れば前期末葉と中期後半のものに区別できる。前期末葉の遺構で明確なものは第50号土坑1基のみであり、遺構の存在としては希薄さを感じえない。しかしながら、遺構外出土遺物を見れば比較的前期末葉の土器片も出土していることから、遺構としては認識できなかったものの、当時の人々の生活の痕跡と理解すべきものと考えられる。この時期の遺物の出土に反する遺構の希薄さについては、当遺跡のみならず事業地内の他遺跡（土浦市教委1997a、土浦市教委1997b）でも認められる特徴といえる。このようなこの時期の明確な遺構として、本遺跡で検出された第50号土坑は貴重であり興味深い。このような土坑については、形態的に当地域で後の中期中葉期に群在して見つかる貯蔵穴との関連性が指摘（塙本2001）され、類例の検討を含め今後注意を要する。

次に、本遺跡の縄文時代の遺構の大半を占める中期後半の時期についてであるが、確認された遺構は竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑・土器埋設遺構などがある。これらの遺構のうち、竪穴住居跡や竪穴遺構は調査エリアの南側で見られ、調査エリア外に集落跡の中心が存在するものと考えられる。竪穴住居跡は6軒で、竪穴遺構としたものが1基確認されている。これらの遺構の帰属時期については、その出土土器から第7・9号住居跡は加曾利E4式期、第12・15・16号住居跡・第1号竪穴遺構は加曾利E3式期、第13号住居跡は加曾利E3式～加曾利E4式期とした。ここでいう、加曾利E3式土器としたものはその多くが同式土器の中でも新しい様相のもので、加曾利E4式土器としたものは同式土器の中でも古い様相のものと考えられ（註1）、いずれも近接

した時期のものと考えられる。これらの竪穴住居跡等の配置は、調査区内の西側を中心に加曾利E3式期のものが分布し、東側に加曾利E4式期や加曾利E3式期～加曾利E4式期としたものが分布するという特徴がある。そして、これらの竪穴住居跡や竪穴遺構の土器の接合関係では、第7号住居跡⇒第9号住居跡、第7号住居跡⇒第13号住居跡、第12号住居跡⇒第15号住居跡、第16号住居跡⇒第1号竪穴遺構の関係を導くことができた。これらの遺構間の関係は、第16号住居跡⇒第1号竪穴遺構の関係以外は比較的近場での接合であり興味深い。本来であれば、これらの土器の接合関係の背景にどのような遺構間の関係が存在するのかの検討が必要であるが、現状では未了であり今後の課題としたい。

このほか、調査エリア内では竪穴住居跡等のまとまりから北側に離れて、土器埋設遺構・焼土址・陥れ穴と考えられる遺構が確認されている。これらの遺構のうち、土器埋設遺構・焼土址についても竪穴住居跡と同様な時期のものと考えられる。広い意味での集落内の土地利用方法に関する興味深い検出状況といえる。しかしながら、陥れ穴とした第28・31～36号土坑の7基についてはその用途を狩猟用罠とした場合、竪穴住居跡群に近接して同時併存で使用されたかは疑問なところがあり、集落が展開する以前または集落廃絶後の遺構群と考えたほうが妥当かと思われる。

B 出土遺物の特徴

今回の調査で出土した遺物の大半は、中期後半の時期に位置付けられるものである。土器以外の出土遺物の中で特徴的なものに、土器片錐や有孔円盤があげられる。土器片錐については漁労用の網の錐と考えられるもので、本遺跡全体で146点出土している。出土状況は、竪穴住居跡や土坑などの遺構の種別を問わず出土しているが、掘り込み容積が大きく廃棄される遺物の多い竪穴住居跡からの出土が目立つ。その大きさは数センチの小さいものから、10cmを越えるような大きなものまで見られる。これらの土器片錐の大きさや出土量の多寡については、先に述べた竪穴住居跡の時期の違いで目立った変化は認められない。このような土器片錐について、同一事業地内の中期前半の集落跡が確認された前谷遺跡群（土浦市教委1998）との状況と比べると、土器片錐における規格の変化が理解できる。それは、中期前半のものは全体的に規格の大小における幅が小さく、本遺跡の土器片錐を見ると規格の大小の幅が広がり、その差異が明確となる様子が読み取れる。このことからは、一つの可能性として、時期的な漁労対象物の変化を想定できるのと同時に、この変化に対応する縄文人の工夫の様子とも理解できるのではないだろうか。

同じ土器片を利用した有孔円盤については、正円形を基本としているが、中には橢円形のものも見られる。その最大の特徴として中央に孔が開く、または穿孔途中のものも存在する。孔の開け方は土器片の裏面から作業を開始している。その状況は、先端がやや丸みを持ちながら尖る円錐形の物体を、土器片内面に対して垂直に立て、回転運動を加えて摩擦している。その縁辺には

擦られた痕跡が明瞭である。この有孔円盤の出土数は遺跡内全体で10点であり、土器片錐に比べると非常に少ない状況である。

(関口 満)

2 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡（第1・6・8・17・18号住居跡）9軒、竪穴造構1基が確認されている。これらの遺構は、出土土器の組成の特徴からいざれも古墳時代前期中葉から後半の範疇のものと考えられる。これらの竪穴住居跡の中には、第1号住居跡のように鍛冶工房として用いられたものや、第4・6・8号住居跡のように玉作工房として用いられたものがある。このことからすれば、本遺跡の集落跡が、専門技術を持った工人の集落跡であったかの様相を呈しているといえる。

以下は、鍛冶工房跡や玉作工房跡の遺構や出土遺物の特徴を中心に取り上げる。

A 鍛冶工房跡と出土遺物

確認された鍛冶工房跡は、第1号住居跡としたもの1軒である。同一事業地内で本遺跡の北東300mに位置する、尻替遺跡の第7号住居跡（土浦市教委2007）と同様に前期のものであり、県内でも最も古い時期の鉄器生産の痕跡といえる。尻替遺跡例は遺構や遺物の遺存状況が良くないものであったが、本遺跡の第1号住居跡は良好であるといえる。遺構内の出土土器組成や、両遺跡内の前期の遺構確認状況からすれば、尻替遺跡例よりも本遺跡例の方が時期的に古くなる可能性がある。

鍛冶工房である第1号住居跡の遺構の特徴は、1辺3.9mの小型方形で、北側の床面に地床炉が設けられ、一般的な竪穴住居跡に見られる柱穴や貯蔵穴、入り口施設などは確認されず、その構造も全体的に簡易な造りである。このような状況から、長きに渡って鍛冶作業を行った様子は窺えない。このことは、先の尻替遺跡例でも同様である。本鍛冶工房内の施設としては、床面中央には鍛冶炉が設けられ、その50cm程南には金床石を据え付けたと考えられる鍛冶関連ピットも確認された。鍛冶炉の凹みは5cmほどで、その周囲には西側を除き粘土が貼られ焼土化している。この粘土の途切れ具合は、送風装置の一部である鞴の羽口の設置箇所と関連があるものと思われる。鍛冶関連ピットからは、鍛造剥片や砂岩製の金床石小破片がまとまって出土したものの、金床石の本体は検出されなかった。これは、鍛冶作業終了後に調査エリア外に廃棄されたか、次の鍛冶作業を行う場所に持ち出されたものと想定される。

鍛冶関連遺物には、鍛冶作業の道具にあたる鞴の羽口や金床石破片、鍛冶作業の残滓である腕形鉄滓、そして微細な鍛造剥片や粒状滓などが出土している。鍛造剥片や粒状滓などの微細な鍛冶関連遺物の出土状況を見ると、鍛冶炉や鍛冶関連ピットに最も集中し、その周囲からも出土し

ている。鍛冶関連出土遺物で特筆されるものに、輪の羽口と碗形鉄滓がある。この輪の羽口については、古墳時代中期に多用される高環脚部を転用した羽口ではなく、粘土を捏ねて成形した専用羽口であることが重要である。その形態は全体が円柱状となり断面形態がおよそ円形で分厚い造りとなっており、胎土には粉殻が混和されていた。関東地方における同時期の良好な羽口の出土例としては、神奈川県小田原市千代吉添遺跡出土例（小田原市教委2006）があり、形態的に類似したものが出土している。これらに見られる羽口の形態的特徴は、鍛冶技術の中に輪の羽口が導入される古墳時代前期的な特徴の一つとされる（村上2007）。また、本遺跡でも出土した碗形鉄滓については、鍛冶技術の中において鉄素材の成分調整という高度な技術の産物とされる。本遺跡の鍛冶工房出土の鍛冶関連遺物に関しては、金属学的な分析と放射化分析を実施（註1）している。その結果によれば、今回調査された鍛冶工房跡では、朝鮮半島が起源とされる精製された鉱石系鉄素材が鍛冶原料として遺跡に持ち込まれ、工房内の鍛冶炉での鍛錬鍛冶を経て鉄器製作がなされたと想定されている。同一事業地内の尻替遺跡出土鍛冶関連遺物でも同様のことが想定され、国内の古墳時代前期の鍛冶技術や鉄器生産を考える上で、非常に興味深いものであるといえる。このようなことから、本遺跡で確認された鍛冶工房やそこから出土した鍛冶関連遺物の特徴は、弥生時代に比べ技術革新の進んだ複雑な技術工程を持つと指摘される、古墳時代前期の鍛冶技術（村上1998）の様子を良く伝えているといえる。そして、本遺跡の所在する地理的位置は、この時期に鍛冶技術が全国的に拡散するといわれる（村上1998）状況を反映している。

八幡脇遺跡の鍛冶工房で生産された鉄器については、それを物語るのがほとんど出土していない。本遺跡で出土した鉄製品は、第3号住居跡出土の棒状の鉄製品（註2）のみであり、ある意味特徴的である。そこで、間接的に鉄製品の製作・使用を想定できる出土品としては、第2・3・4・8号住居跡で凝灰岩や軽石製の刃物を砥いだ痕跡の残る砥石が出土している。同様な状況は尻替遺跡でも見られ、明確な鉄製品は鉄鏃と刀子様の破片が1点ずつ出土しているのみである。このような遺跡内での鉄製品の遺存状況からは、鍛冶工房での鉄器生産の目的を明確にし得ない。しかしながら、八幡脇遺跡内の集落跡では鍛冶工房跡と同時に玉作工房跡も営まれた状況に重きを置けば、玉作作業に必要な鉄製品の製作を行ったという想定が導き出される（註3）。この玉作作業に関わる鉄製品としては、先の棒状の鉄製品を積極的に評価することによる、玉素材の調整剥離用工具などの存在が考えられる。地域や時代は異なるが、遺跡内での玉作技術と鍛冶技術が有機的な関係を保ちつつ共存する事例として、弥生時代の玉作が盛行する北陸地方の奈具岡遺跡や林・藤島遺跡があげられる。両遺跡の比較を通して、鉄器生産技術の普及と玉作における玉作工具の鉄器化する様子が指摘（富山1997、河野1997）されており、本遺跡を考えるうえでも興味深い。

今回の発掘調査成果では、集落に逗留して鍛冶作業を行う鍛冶工人の姿を明確に理解することができる。しかしながら、この遺跡で鍛冶作業を行った鍛冶工人の性格については不明と言わざ

るを得ない。この時期の鍛冶工人については、弥生時代以来の一般的な生産用具を供給する鍛冶工人と首長に従属する特定の鍛冶工人とが分離し始めることが指摘されている（村上1998）。本遺跡や尻替遺跡で鍛冶作業を行ったのはどのような工人であったのか、自らの意思で能動的に活動したのか、又はある権力のもと受動的に活動していたのかなど、今後の課題となる事柄が多い。先のような課題を考えるうえで、玉作工房群を伴う工人の集落の様相を呈する八幡脇遺跡と、当地域において一般的な集落跡の様相を呈する尻替遺跡という古墳時代前期の性格を異なる二つの集落跡で、鍛冶工房跡が確認された意味は大きいものいえる。

最後に、茨城県内の同様な時期の鉄器生産の痕跡として遺構的に明確ではないものの、茨城町の南小割遺跡第178号住居跡出土遺物（註4）や、近年報告された稻敷郡阿見町の薬師入遺跡第78号住居跡出土状況（註5）があげられる。

（関口 満）

B 玉作工房跡と出土遺物

八幡脇遺跡では、玉作関連遺物が出土する古墳時代の玉作工房跡として、第4号、6号、8号住居跡と呼称した3棟の建物跡が発見されている（以下、便宜的に4、6、8号住と表記する）。ここで、①玉作の内容と時期、②八幡脇遺跡玉作の二、三の特徴、③鳥山遺跡玉作との比較、④霞ヶ浦土浦入りにおける古墳時代玉作の特質、の4点にわけて調査成果の要点と若干の考察をまとめ、総括としたい。

①玉作の内容と時期

玉作の内容については、まず玉素材と製作された玉の種類がある。4号住からはメノウ勾玉未成品が出土し、覆土の水洗い選別でもメノウ剥片以外は見つかっていない。6号住からはメノウ勾玉及び滑石勾玉・管玉の未成品と滑石管玉の完成品、ほかメノウ剥片が出土している。また、覆土の水洗い選別では、メノウ、滑石以外に緑色凝灰岩と琥珀の微細剥片も採集されており、緑色凝灰岩管玉や琥珀勾玉の製作も行われていた可能性が考えられる。8号住からはメノウ勾玉と緑色凝灰岩管玉の未成品、およびそれらの剥片が出土している。微細な剥片にはメノウが多く、6号住と同様に琥珀片も見つかっているが、反面、緑色凝灰岩の微細剥片が認められない状況も注意される。

出土未成品の特徴と、そこから想定される玉作技法の問題がある。上記のように、本遺跡ではメノウ勾玉、緑色凝灰岩管玉、滑石勾玉・管玉の製作が確認され、このほか琥珀玉類（勾玉）の製作も想定されるが、微細剥片のみで未成品がなくその実態については不明とせざるを得ない。また、緑色凝灰岩管玉はわずかな未成品と剥片、滑石勾玉・管玉は研磨工程品のみと出土数が少なく、製作技法の特徴や工程については判然としない。わずかに、前者が角柱状の形削品の作出

を基本としていること、後者が長さ15cm以下の小型の勾玉と太さ5mm程の細身の管玉であることなどが確認できるのみである。各工房跡から未成品が出土したメノウ勾玉の製作は、厚さ7、8mmから1.5cm程度の扁平板状の礫、おそらく河川の転石と思われる自然石を素材とし加工したものと思われる。製作の基本は、形割や剥離（側面打製）により表裏に自然面を残した板状半円形品を作出することにあり（第112図60、第127図30）、次いで表裏の自然面と外周部（勾玉の背部）を研磨しているようである（第113図66・70、第127図29）。この後に行われる勾玉腹部の抉りは、打撃や押圧剥離によって成形しており（第113図69）、穿孔前の段階である。穿孔は片面穿孔で、その後に腹部研磨と全体の仕上げ研磨をしたか、腹部研磨後に穿孔し、その後仕上げ研磨をしたかいずれかであるが、破損品の状態（第114図73・76）などを見ると前者の可能性が高いと思われる（註6）。

玉類製作に用いる工具の内容は多彩である。4号住からは内磨き砥石、平砥石、内磨き兼平砥石と敲き石の類や台石が、6号住からは内磨き砥石、平砥石、内磨き兼平砥石など片岩製の砥石のみが、8号住からは内磨き砥石、平砥石、筋砥石などの各種砥石と敲き石が出土し、平砥石兼筋砥石兼敲き石のように複数機能を併用する工具が目立った。以上のように、工房跡内に残された工具はすべて石製の工具で、鉄製工具は出土していない。ただ、ほぼ同時期と思われる鍛冶工房跡（1号住居跡）の調査所見等を考慮すれば、剥離や穿孔における鉄製工具の使用は十分に予測し得るものであり、その背後にある北陸地方玉作との関係もまた一考の余地がある。ところで、工具の石材には、主に片岩、砂岩、凝灰岩などが使用され、とくに片岩製の内磨き砥石（兼平砥石）が特徴的である。使用された片岩には、灰白色や赤褐色の厚手のものと褐色や黄褐色の薄手のものとがあり、前者は大型、後者は小型の内磨き砥石に使用される傾向がある。地質学的には、いずれも石英片岩ないしは紅簾片岩に属するようで、関東近隣に目を向けると、埼玉県長瀬町周辺から群馬県南部にかけて広く分布する奥秩父三波川変成帯産の原石を使用した可能性が高いと想定される（註7）。

玉作遺物の出土状況の最大の特徴は、入口脇の貯蔵穴内及びその周辺から玉素材の微細剥片や、片岩製砥石の微細剥片など玉作関連遺物がとくに集中して出土することにあり、この空間が玉作工程の中心的な作業場であったと考えられる。この状況は3棟の工房跡すべてに共通しており、通有の竪穴住居を玉作工房として利用しつつも、定式化された姿であったと想定される。また、6号住の25cmメッシュサンプリングではメノウ材の頻度がとくに高く、その他の玉素材はごく僅かであった。この大勢は他の2棟の工房跡でも同様であり、本遺跡の玉作の主体がメノウ勾玉生産にあったことは疑いない。

玉作の時期は、各工房跡から出土している土師器が参考になる。3棟の工房跡の中、6、8号住からは變形土器を中心に比較的まとまった量の土師器が出土している。両工房の土師器の様相

は、平底壺、二重口縁壺、直口壺などの共通した形態から、両者ほぼ併行する時期が想定される。なかでも、年代の指標は「くの字」状口縁を持つ平底壺にあり、上総を中心に千葉県側に多出する壺形土器の影響下にある。本例は「くの字」状に屈曲する典型的な口縁形態と共に真珠形を呈する胴部形態が特徴的で、他の小型壺や小型器台、直口壺の特徴なども合わせ鑑みて、古墳時代前期中葉から後半の時期が想定される（註8）。4号住出土の土師器はわずかで平底壺の出土をみないが、全形のわかる小型器台は6号住の出土例と類似しており、時期の隔たりはあまりないと思われる。このように、3棟の工房跡はほぼ同時期に共存していたと考えられ、古墳時代前期中葉から後半の年代が想定される。

②八幡脇遺跡玉作の二、三の特徴

上記玉作の内容から、八幡脇遺跡の特徴を考えると、以下の二、三の点が指摘できる。第一の点は、メノウ勾玉及び滑石管玉・勾玉の生産と、その時期である。どちらも、関東地方のみならず、全国の古墳時代玉作状況に照らしてみて、初期の生産例として注目される。メノウ勾玉及び滑石管玉・勾玉ともに、その製作が古墳時代前期後半以前に遡る事例は数少なく、当地域以外には前者では出雲地域、後者では上野地域（高崎市下佐野遺跡）や畿内大和（櫛原市曾我遺跡、桜井市上之庄遺跡）などわずかに認められるにすぎない（河村2006a、米田2008）。それぞれの玉類が製作された時期とくにその開始時期は、玉作技術の系譜や伝来とも深く関わっている。片面穿孔のメノウ勾玉は、碧玉・水晶勾玉などと共に出雲系玉の典型と考えられており、八幡脇遺跡など当地域でのその製作には出雲系の技術導入があったと推測されている（河村2006a、河村2006b）。ただ、出雲におけるメノウ勾玉製作も古墳時代前期に遡る実例は数少なく、出雲玉作遺跡宮塙地区71CII号工房跡（玉湯町教委1986）がその初例とされるが（米田2005）、古墳時代前期前半以前に遡る確かな事例は認められないようと思われる。つまり、メノウ勾玉の製作に関しては、八幡脇遺跡は出雲とほぼ同時期か遅れても大きな時期差はない可能性が高い。前述したように八幡脇遺跡では勾玉腹部の抉りを打撃や押圧剥離によって成形しているが、出雲では研磨による成形が主流のようで（米田2005）、両地域の製作技法が同一ではなかったことも予測される。また、八幡脇遺跡では微細剥片の出土から琥珀勾玉の生産も想定されるが、出雲ではヒスイと共に琥珀は玉素材として全く用いられていないなど、出雲地域と比較すると時期の近接と共に、両地域間の異相と八幡脇遺跡の独自性が浮上してくる。古墳時代前期の滑石玉類に関しては、その系譜関係は判然とせず、畿内と関東では同時に成立したと考えられているが（河村2006a）、八幡脇遺跡のある当地域もこの滑石玉類成立事情の一端を担っていた可能性が考えられる。

二点目は、3棟の工房跡から出土した多様な石製工具のあり方と、内磨き砥石の顕在化の特色である。まず、石製工具のあり方に各工房間での偏在が認められ、4号住では敲き石の類が、6

号住では大型・小型の内磨き砥石が、8号住では筋砥石が目立っている。とくに、6号住出土の工具は内磨き砥石のみで、その偏りは際立っていると言えよう。内磨き砥石は量の多寡はあるが、3棟の工房跡すべてから出土している。石材は1点（角礫凝灰岩）を除き片岩製で、前述のごとく石英片岩や紅臘片岩などほとんどが奥秩父周辺の三波川變成帶産であったと想定される。平砥石としても兼用され、大型と小型とがあり、機能分化や工程による使い分けなども考えられる。メノウ勾玉の製作を主体とする本遺跡の玉作においては、これら内磨き砥石は必要不可欠の工具として定形化し、最も有用な砥石として利用されていた様子が窺われる。

三点目は、玉作遺物の出土状況にみられた工房間相互の関係についてである。各工房跡から出土した玉作遺物の比較から、4号住と6号住との間で大型・小型の内磨き砥石各1点が接合し、また4号住と8号住の間でメノウ勾玉側面打裂未成品1点が接合するのが判明している。工房間の大きな時期差はなく同時併存していたと考えられることから、この接合関係は、工房操業中、工人が工具や玉の未成品を持って工房間を移動していたこと示している。本遺跡では、前述のごとく、工房間で工具の偏在が認められた。これは、特定の工程への専従を想定させ、工房間で作業工程を分担していた可能性を示唆するものとも考えられる。工具のみでなく、出土未成品の内容にも各工房間で偏りが認められる。すべての工房跡から出土したメノウ勾玉未成品を見ると、4号住は形割段階が多く、6号住では側面打裂工程や研磨工程の未成品が目立ち、8号住では全体量は少數ながら荒削段階から研磨工程までの未成品が揃っているなど、その内容は一様ではない。やはり、先の接合関係は偶発的な移動によると考えるより、工房間分業を想定し、作業工程の分化や工程の進展に伴い工人及び未成品が工房間を移動したと考えたほうが状況を理解しやすいものと思われる（木崎2007）。なお、緑色凝灰岩及び滑石はメノウに比べ出土量が少なく、6号住の滑石は最終研磨段階のわずかな勾玉・管玉未成品のみが出土し、8号住の緑色凝灰岩は一定程度削られた荒削・形割品のみでしかも微細剥片が認められないなど特化した状況を呈している。本遺跡だけでそれらの製作が完結していたのか、工房間分業とあわせて近隣遺跡との分業の可能性も考慮する必要があろう（註9）。

③鳥山遺跡玉作との比較

八幡脇遺跡玉作の特徴を踏まえて、霞ヶ浦土浦入り南岸に近接し、古墳時代前期に遡る鳥山遺跡玉作と本遺跡とを比較し、土浦入りにおける古墳時代玉作の特質について考えてみたい。鳥山遺跡では、およそ4棟の工房跡からメノウ勾玉、緑色凝灰岩管玉、滑石管玉・勾玉のそれぞれの未成品や玉素材が出土し、その生産が明らかにされている（寺村1988、塩谷1993）。鳥山遺跡の玉作は、古墳時代前期後半を中心とし、一部中期初頭に下る時期が想定される。八幡脇遺跡とは操業時期が重なっているが、土器の様相は、八幡脇遺跡の方が前期中葉に近い時期でやや古相を

示している。玉作の内容は、琥珀（勾玉）以外は八幡脇遺跡と同じ品目の玉類が製作されていた。古墳時代前期後半に遡るA-57号住は、鳥山遺跡では最も多量の玉類未成品を出土した工房跡で、メノウ勾玉・緑色凝灰岩管玉・滑石管玉・勾玉いずれも、荒削段階から研磨・穿孔段階まで各工程の未成品が揃っている。また、工具も、短冊形を呈する大型の内磨き砥石や小型の内磨き砥石（兼平砥石）、敲き石などが各工房から出土しており、中でもA-57号住では内磨き砥石が7点とその顕在と盛行ぶりが窺われる。鳥山遺跡出土の内磨き砥石もすべて片岩製で、石英片岩・紅簾片岩の他に緑泥片岩を利用したものも認められるなど、その産地は、八幡脇遺跡と同様に奥秩父周辺の三波川変成帯に求められる可能性が高い（註10）。八幡脇遺跡から出土した内磨き砥石を観察すると、小型の砥石は全体に摩耗し利用度が進んでいるが、短冊形を呈する大型の砥石は摩耗が部分的かつわずかであり利用が進んでいない状況が指摘できる。これに対し、鳥山遺跡の内磨き砥石は側面を中心に全体に摩耗が著しく、使用度合いが格段に高く、玉作工房の操業期間の長さをも窺わせるものと推量される。

八幡脇遺跡で第一の特徴としたメノウ勾玉と滑石管玉・勾玉の製作に関しては、鳥山遺跡も古墳時代前期に遡る初期の生産例として特筆される。滑石管玉は、八幡脇遺跡同様の太さ5mm以下の細身の管玉で、滑石勾玉は長さ2cm弱の断面に丸味のあるものや、扁平で中期初頭に下るものなど大型化、扁平化し、八幡脇遺跡より後出する特徴も認められた。とともに、八幡脇遺跡でその特徴を指摘した、メノウ勾玉腹部の抉りを打撃や剥離によって成形する技法は、鳥山遺跡でも同様に確認される。上記の操業期間の長さも含め、鳥山遺跡の玉作は、八幡脇遺跡の玉作技術を継承しつつ、安定した生産が盛行したものと考えられる。

④霞ヶ浦土浦入りにおける古墳時代玉作の特質

最後に、八幡脇遺跡や鳥山遺跡のある霞ヶ浦土浦入りにおける、古墳時代玉作の特質について触れておきたい。土浦入りの古墳時代玉作は、中間に江戸崎周辺の玉作遺跡を挟んで、成田市大和田玉作遺跡群や八代玉作遺跡群など、下総の古墳時代玉作遺跡と古霞ヶ浦の内海を介して密接な関係にあった（塩谷1996）。両地域の玉作遺跡については、操業時期は土浦入りが古墳時代前期中葉から後半を、下総が前期後半から中期前半を主体とし、玉作の内容は前者がメノウ、碧玉、滑石、琥珀の玉類、後者が碧玉、滑石の玉類と、土浦入りの先行性とメノウ勾玉、琥珀（勾玉）など下総には欠落する玉製作にその独自性が認められる。

土浦入りの玉作に顕在化した片岩製の内磨き砥石は、下総の玉作遺跡にも確認されており、道具の伝播と共に碧玉、滑石玉類の製作技法も土浦入りから下総へと波及したものと思われる。片岩製の内磨き砥石は、古墳時代前期後半における関東地方の玉作遺跡で顕著に使用され、工具として確立したと推測されており（大岡2008）、その後畿内や出雲地方へも波及したものと考えら

れる。土浦入りの玉作は、全国的に見てもメノウ勾玉や琥珀（勾玉）の製作に先行性と独自性があり、片岩製内磨き砥石の顕在化も認められることから、当地域がこの工具の確立と定型化の大きな原動力となったことは想像に難くない。石英片岩や紅簾片岩の産地である埼玉県長瀬町周辺から群馬県南部にかけての三波川変成帯（神無川、鍋川流域）は、他にもメノウや緑色凝灰岩、滑石などの玉素材の関東地方における主たる産地とも考えられている（高橋1992、木崎2007）。土浦入りでは、勾玉素材のメノウに関しては、出土する扁平な礫の特徴と比較して、玉川など茨城県北部久慈川流域の転石を入手し利用していた可能性が高い（寺村1988）。久慈川流域は、当地から直線距離にして約60kmと遠方ではあるが、玉素材の利用に適したメノウ産地としては最も至近な距離にあったと思われる。内磨き砥石の産地に比定する三波川変成帯は、直線距離にしておよそ100~120kmとさらに遠方に位置している。石英片岩や紅簾片岩は、含有物など石材の特徴が研磨に有効であったことから、片岩の中でも内磨き砥石に最も適した石材として選ばれたのであろう。また、片岩だけでなく、同時に緑色凝灰岩や滑石玉類の素材をも入手するねらいがあつた可能性も考慮する必要があろう。

土浦入りの古墳時代玉作の特徴は、古霞ヶ浦の内海に面する交通の要衝に位置し、上記のような遠方が多方面からの玉材・石材の入手と、さらに関東以北を主たる対象としたであろう東日本への製品流通の最適の地として選ばれたところにある。ここでは、北陸の玉作技術を背景に関東で始まった古墳時代玉作の中で、土浦入り玉作の特色であるメノウ勾玉生産が、出雲系技術の導入ではなく、ほぼ同時期に始まる出現期の独自な生産であること。また、不可欠な工具である内磨き砥石の確立と定型化にも当地が大きな役割を果たしたことなどをあらためて提起し、選地の背景と共にその歴史的意義を強調しておきたい。

（塩谷 修）

3 平安時代

平安時代の遺構は堅穴住居跡（第19号住居跡）1軒と火葬墓7基、そして溝跡が1条確認されている。堅穴住居跡は台地の端部に1軒のみ確認され、出土遺物から9世紀後半の時期の遺構と判断される。台地上に広く展開した火葬墓で構成される墓域を避ける意識を持って構築されているように見える。この住居跡は、カマドの遺物出土状況や出土遺物が特徴的である。同住居跡のカマド内からは壊や壊破片が重ねられて出土した。その状況は、カマド使用時の転用支脚とも考えられるが、土器の重なり具合に不安定さが伴い、土師器壊破片を除き明確な被熱の状況が認められない。そして、最上部の壊には底部に穿孔も見られる。その状況には実用的というよりも儀礼的な意味合が強く感じられ、特別な観念の存在が想定される。同様な出土例は、同事業地内の長峯遺跡（土浦市教委1997b）で確認された第10・15号住居跡をあげることができる。第10号住居跡については、その立地も特徴的で、細尾根状の台地上に営まれた集落跡からかけ離れた台

地先端で検出されている。また、第19号住居跡の特徴的な出土遺物には、「豈」と書かれた墨書き土器が出土しているが、同様な墨書き土器は壺杯清水西遺跡（土浦市教委1997a）で「豈」や「案農」があり、寺畠遺跡でも「案農」と書かれたものが検出されている（上高津貝塚1998）。長峯遺跡例は9世紀後葉に位置付けられ、壺杯清水西遺跡例も9世紀後葉から末葉に位置付けられている。寺畠遺跡や長峯遺跡では規模は異なるものの、いずれも四面庇付きの仏堂らしい建物跡が見られる。両者の遺跡では仏教関連遺物も見られることから、「案農」の文字は僧名とみる考え方がある（上高津貝塚1998）。このような状況から、本遺跡事例も上記事例と関連し、同様な思想・規範を共有する集団により営まれた遺跡であることが考えられる。

また、本遺跡における最も重要な土地利用として、葬送に関わる墓域としての性格が色濃い。火葬墓はエリア外のものを除き全部で7基確認され、第7号火葬墓とした1基のみ蔵骨器に灰釉陶器を用い、その他は土師器や須恵器を用いている。ほとんどの火葬墓は9世紀前半から中葉の範疇のものであるが、第7号火葬墓のみ黒鉢14号窓式期相当の短頸壺を蔵骨器として用いているものの伴う土師器から9世紀末葉から10世紀前葉のものと位置付けられる。これらの中で、その在り方も特徴が見られ、第7号火葬墓のみ第1号溝跡の東側に存在し、ほかは全て西側に展開している。第7号火葬墓のみを特別視するかのごとくの配置状況である。第1号溝跡の構築時期については、第7号火葬墓構築より早い可能性があり、火葬墓埋納以前に墓域の中のある限定した土地を溝の区画によって確保していたという想定も可能となる。そして、火葬墓内に遺存した火葬骨の鑑定では、いずれも成人の骨で女性が4例、男性が2例、性別不明が1例であった。なかでも灰釉陶器に埋納されたのが成人女性であることは興味深い。

このように墓域の様子を見てみると、先に触れた単独の竪穴住居跡の役割については、墓域に強く関わりを持つことが想定される。それは、カマド内の遺物出土状況から特別な観念が窺われ、墨書き土器や燈明転用土器から仏教的な色彩が感じられる。八幡宮遺跡の平安時代の遺構群については葬送儀礼と一体となったものであった可能性が想定される。加えて、同遺跡は事業地内の他の平安時代の遺跡とも有機的な関連を持って存在していたことが窺われる。

（関口 満）

参考文献

- （財）茨城県教育財團 1982『宮部遺跡 鹿の子A遺跡 砂川遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告XⅤ
- 玉湯町教育委員会編 1986『出雲玉作跡保存管理計画策定報告書I－宮垣地区・宮ノ上地区－』
- 小田原市教育委員会 1987『千代南原遺跡第IV地点』小田原市文化財調査報告書22集
- 齊藤弘道 1987『出土土器について』『南三島遺跡3・4区（I）』茨城県教育財團文化財調査報告第44集（財）茨城県教育財團

- 寺村光晴 1988「烏山遺跡の玉作－その様相と意義－」『茨城県土浦市 烏山遺跡』土浦市教育委員会（大川編集）
- 高橋直樹 1992「千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察」『千葉県文化財センター研究紀要』13 財團法人千葉県文化財センター
- 塙谷 修 1993「土浦市烏山遺跡出土の管玉未成品」『土浦市立博物館紀要』第5号 土浦市立博物館
- 栃木県立なす風土記の丘資料館 1994「古代東国の大業－那須地方の窯業と製鉄業－」
- 比田井克仁 1995「下総地域の主体性－東京湾岸との相対的関係から見た弥生～古墳時代の様相－」『法政考古学』第21集 法政大学考古学会
- 塙谷 修 1996「霞ヶ浦と古代玉作り遺跡」『関東の博物館』第20号 関東地区博物館協会
- 北橘村教育委員会 1996「北町遺跡 田ノ保遺跡」北橘村埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- 土浦市教育委員会 1997a「三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壺穴水西遺跡」田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 土浦市教育委員会 1997 b『長峯遺跡』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 富山正明 1997「林・藤島遺跡（泉田地区）出土の鉄製品－弥生時代後期の玉作り工具を中心にして－」『第4回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨』鉄器文化研究会
- 河野一隆 1997「玉作と鉄器文化－京都府奈良県遺跡の遺構・遺物の検討から－」『第4回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨』鉄器文化研究会
- 土浦市教育委員会 1998「前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）東原觀音塚」田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- 村上恭通 1998「倭人と鉄の考古学」シリーズ日本史の中の考古学 青木書店
- (財) 茨城県教育財團 1998「南小割遺跡 権現堂遺跡 親塚古墳 後原遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告第129集
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1998「第3回特別展 仏のすまう空間－霞ヶ浦の仏教信仰－」
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2001「第6回特別展 弥生から古墳へ－時代の終わりと始まり－」
- 塙本師也 2001「関東地方東北部における縄文時代の大型貯蔵穴出現期の様相（上）」『研究紀要－埋蔵文化財センター創立10周年記念号－』第9号 (財) 栃木県生涯学習財團埋蔵文化財センター
- 比田井克仁 2001「第一章第二節 古墳時代前期の土器様相の展開」『関東における古墳出現期の変革』雄山閣
- 比田井克仁 2002「関東地方・東北南部の土器」『考古資料大観第2巻 弥生・古墳時代土器II』小学館

- 吉澤 惺 2003 「茨城県北浦町出土の灰釉短頸壺について」『MUSEUM』586号 東京国立博物館
- 田中 裕 2003 「五領式から和泉式への転換と中期古墳の成立」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所
- 米田克彦 2005 「出雲における古墳時代玉生産の展開と独自性」『玉文化』第2号 日本玉文化研究会
- 吉澤 惺 2006 「火葬のひろがりと古代の東国社会」『第11回特別展 火葬と古代社会－死をめぐる文化の受容－』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 小田原市教育委員会 2006 『千代吉添遺跡第Ⅰ～Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第137集
- 齊藤弘道 2006 「茨城県立歴史館史料叢書9 茨城の縄文土器」茨城県立歴史館
- 河村好光 2006 a 「倭国の展開と玉つくり集団」『玉文化』第3号 日本玉文化研究会
- 河村好光 2006 b 「初期倭政権と玉つくり集団」『考古学研究』50-4 考古学研究会
- 村上恭通 2007 「古代国家成立過程と鉄器生産」青木書店
- 土浦市遺跡調査会 2007 「尻替遺跡」田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
- 鈴木素行 2007 「X向野E遺跡における縄文時代中期後葉の集落跡について－君ヶ台貝塚の再検討を添えて－」『向野遺跡群』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 木崎 悠 2007 「関東における古墳時代前期の玉作－「香取海」沿岸地域を中心にして」『日中交流の考古学』 同成社
- (財)茨城県教育財団 2008 「薬師入遺跡2」茨城県教育財团文化財調査報告書第296集
- 大岡由記子 2008 「結晶片岩製砥石からみた古墳時代の玉作り」『月刊考古学ジャーナル』第567号 ニューサイエンス社
- 米田克彦 2008 「古墳時代玉生産の変革と終焉」『月刊考古学ジャーナル』第567号 ニューサイエンス社

註釈

1 縄文時代。

(1) 加曾利E3式から加曾利E4式土器については、(齊藤1987) や(鈴木2007)などの考え方を参考に大枠で時期設定をした。

2 古墳時代

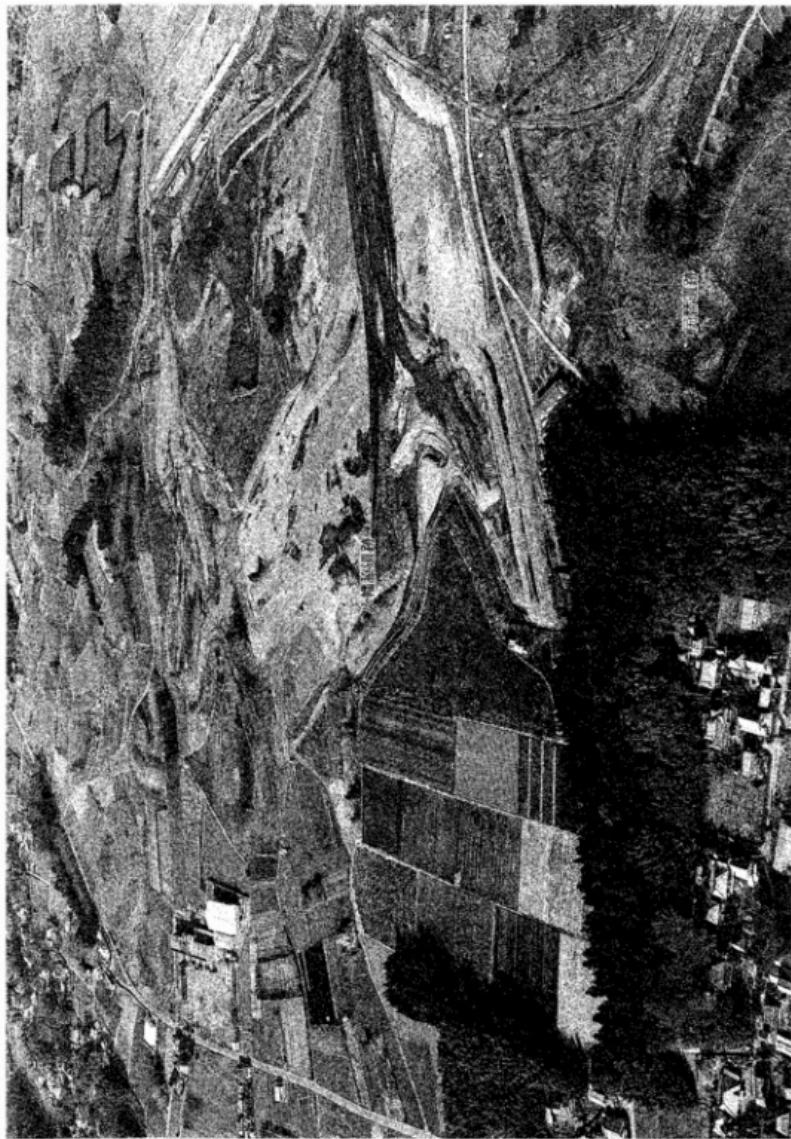
(1) 大澤正己・鈴木瑞穂「田村沖宿遺跡群(八幡脇・尻替遺跡)出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」九州テクノリサーチ・TACセンター及び、平井昭司「八幡脇遺跡および尻替遺跡から出土の鉄関連遺物の中性子放射化分析」武藏工業大学原子力研究所(いずれも未公表資料、

今後本事業調査報告書総集編で公表予定)

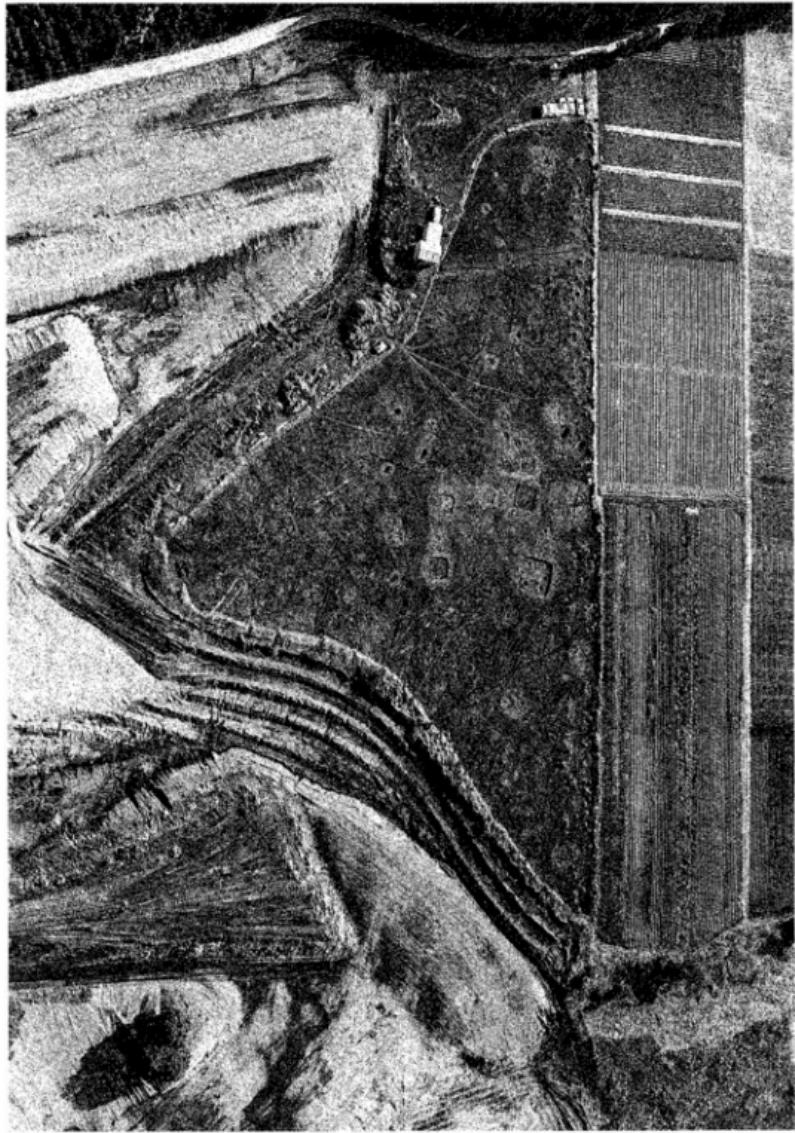
- (2) (小田原市教委2006) の中で、千代南原遺跡（小田原市教委1987）の調査成果にも触れ、鍛治作業の目的として攻玉具の製作という視点が指摘されている。
- (3) 図上での判断であるが、八幡脇遺跡第3号住居跡出土の棒状鉄製品については、弥生時代後期後半期の玉作遺跡である林・藤島遺跡（富山1997）の中で、玉素材の調整剥離に用いた玉作工具と考えられる「先端を尖らせた幅3~5mm、長さ20~30mmの棒状の」鉄製品に類似する。
- (4) 南小割遺跡の古墳時代前期に位置付けられる第178号住居跡からは、流れ込みとして羽口や凝灰岩製の金床石が出土している。羽口は2個体見られ、いずれも据広がりの形態で器厚も薄手あり、粗製器台の転用品の可能性もあるうか。
- (5) 近年報告された、薬師入遺跡の古墳時代前期中葉期の第78号住居跡については、鍛冶工房的な性格を有した遺構として報告されている。住居跡内の1区画で最高149個もの粒状滓の出土や、転用羽口とされる器台が出土している。図面上の多量の粒状滓の出土に反して鍛造片などの他の微細な鍛冶関連遺物は全く見られず、実情は不明である。
- (6) 本遺跡のメノウ勾玉の製作工程については、出土資料の整理途上に、寺村光晴先生よりご教示いただいた経緯がある。
- (7) 片岩製内磨き砥石の石材産地については、矢野徳也氏にご教示いただいた。
- (8) 平底甕の年代観を中心に、(比田井1995)、(田中2003)の成果を参照した。
- (9) 土浦市内を見ても、八幡脇遺跡以外に後述する鳥山遺跡及び浅間塚西遺跡から古墳時代前期の玉作工房跡が発見され、また大宮前遺跡、寄居遺跡、うぐいす平遺跡からは未成品や砥石など玉作関連遺物が出土している。
- (10) 矢野徳也氏にご教示いただいた。

写 真 図 版

P L 1



八幡協造跡航空写真（1）



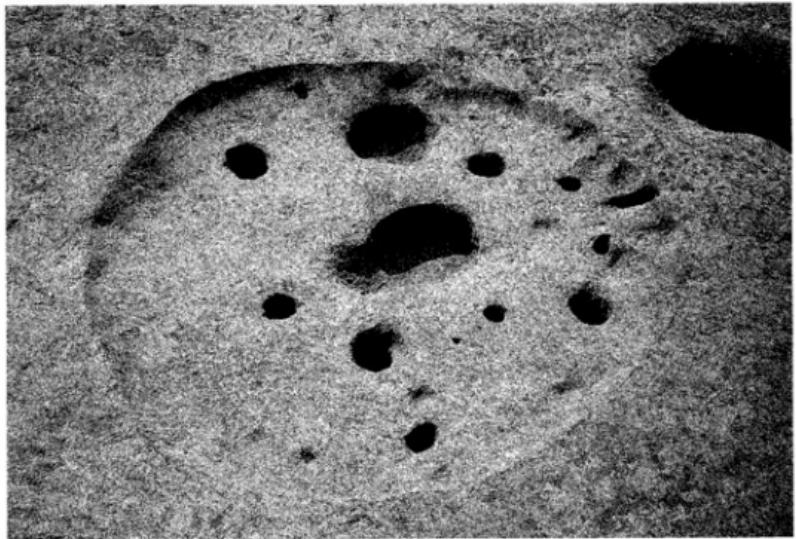
八幡脇遺跡航空写真（2）



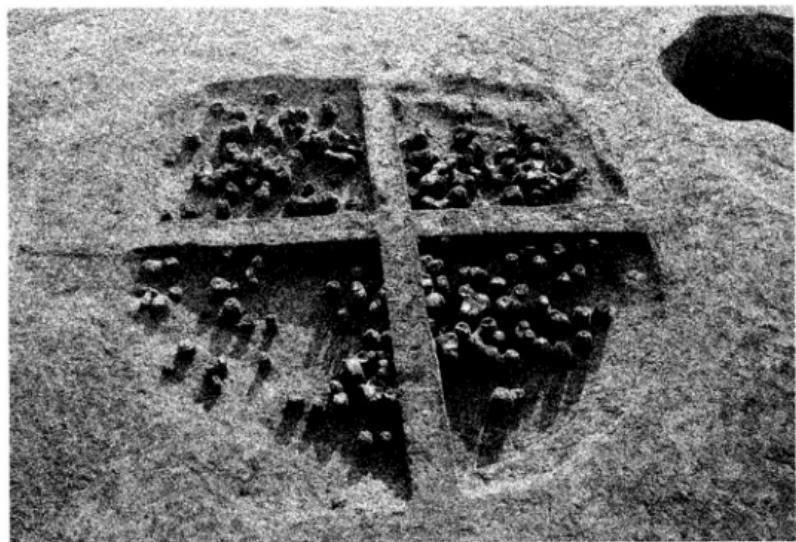
試掘調査状況（8Tr）



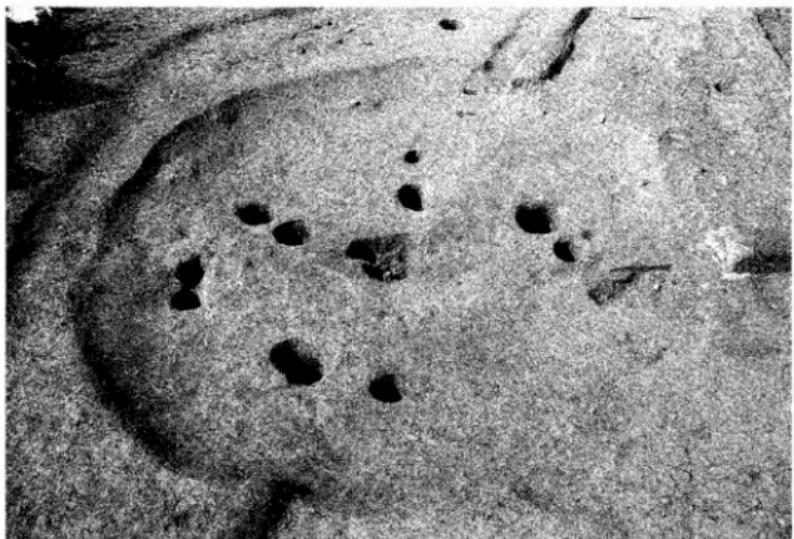
試掘調査状況（33Tr）



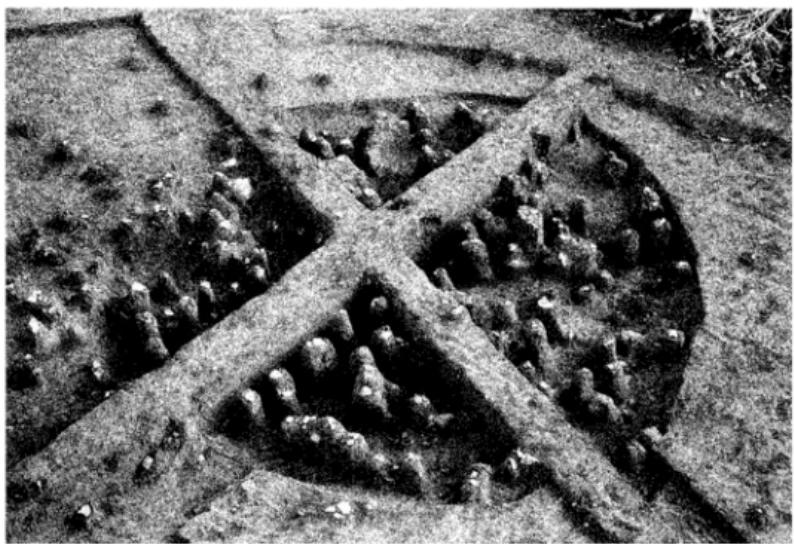
第7号住居跡



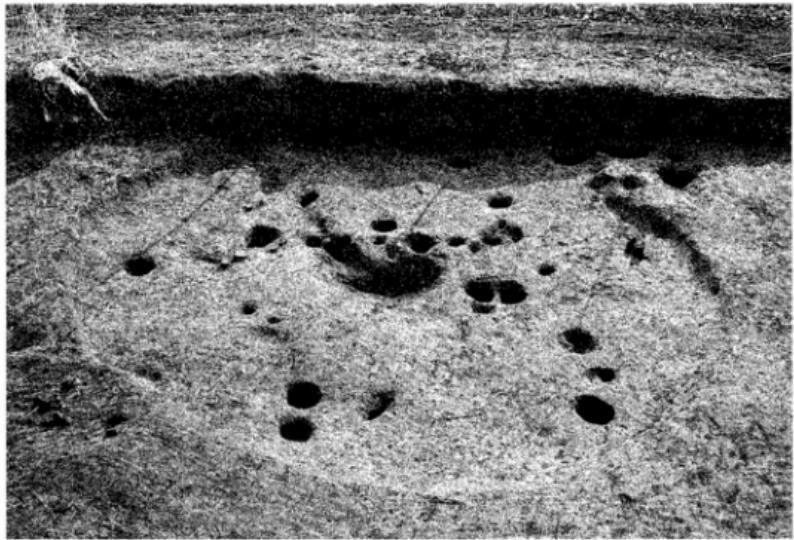
第7号住居跡遺物出土状況



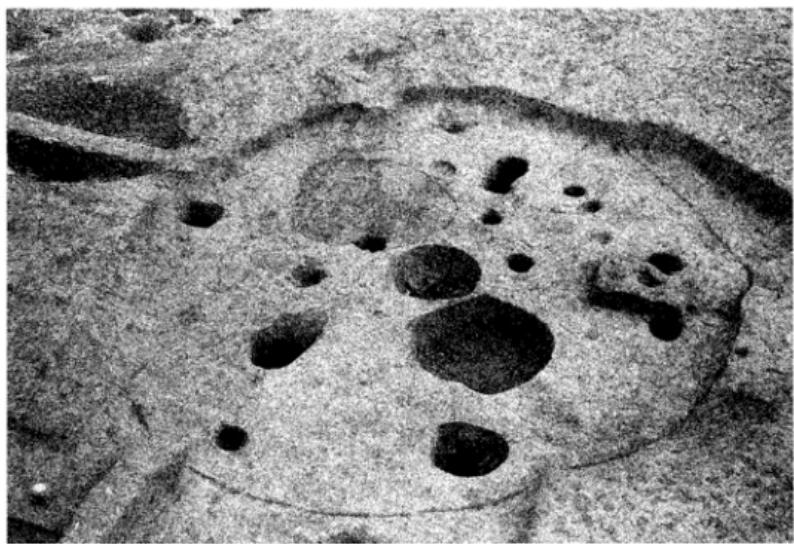
第9号住居跡



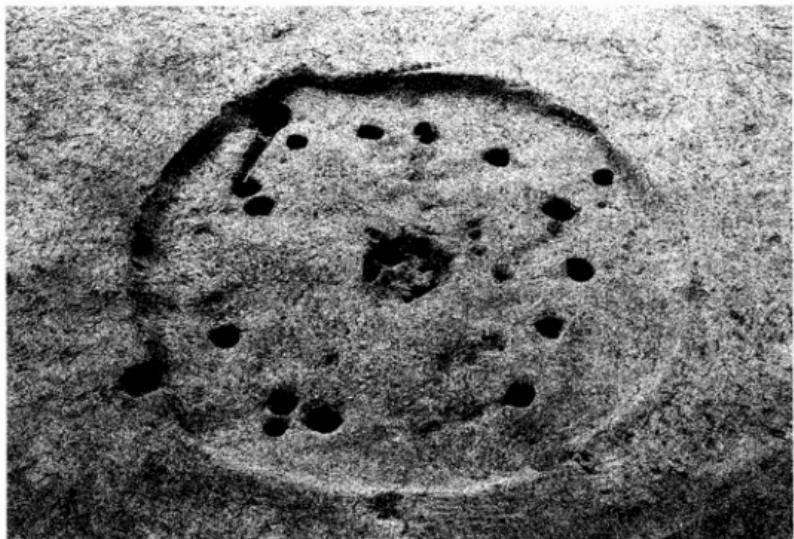
第9号住居跡遺物出土状況



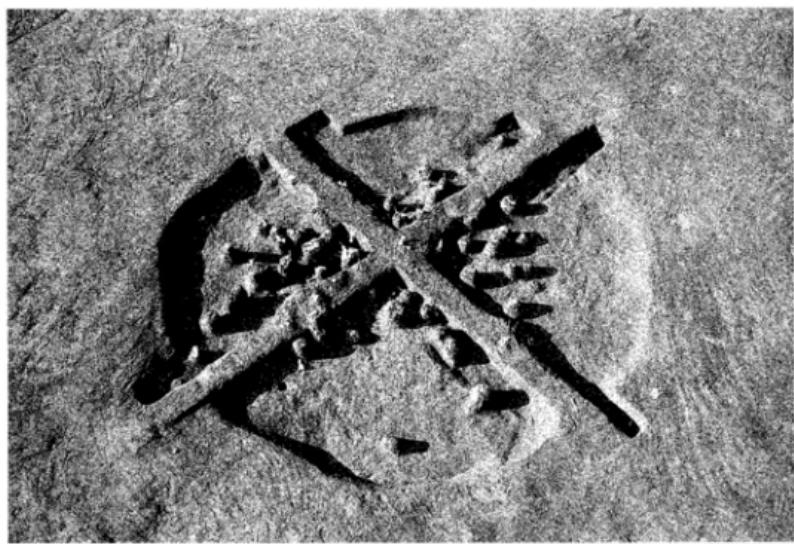
第12号住居跡



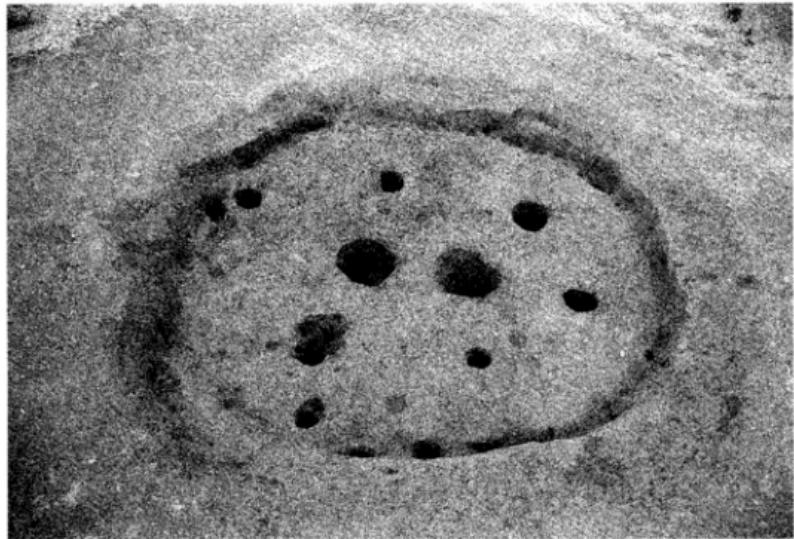
第13号住居跡（島状に残るのは第1号住居跡銅冶炉）



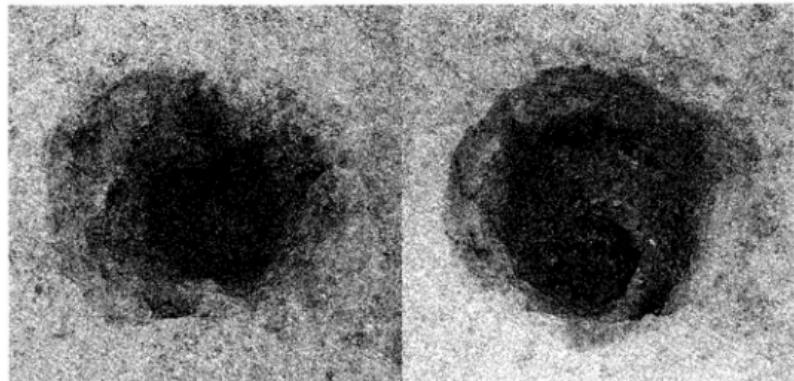
第15号住居跡



第15号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡

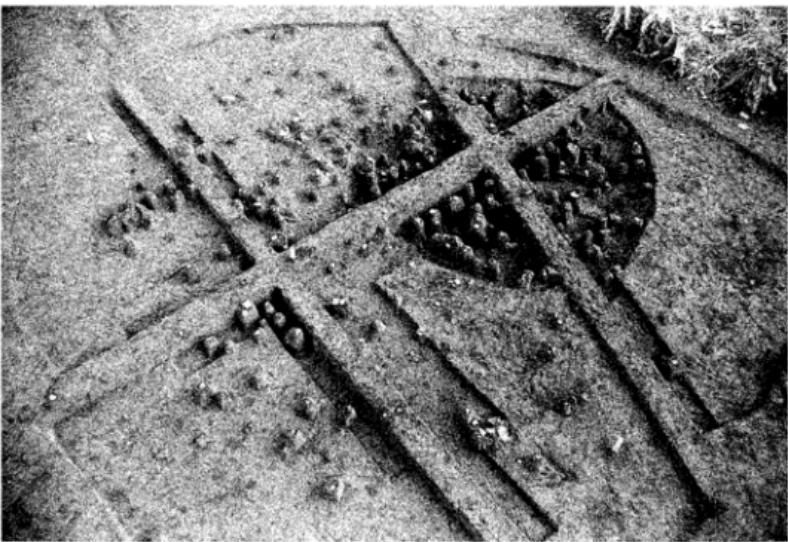


第16号住居跡炉 1

第16号住居跡炉 2



第16号住居跡遺物出土状況

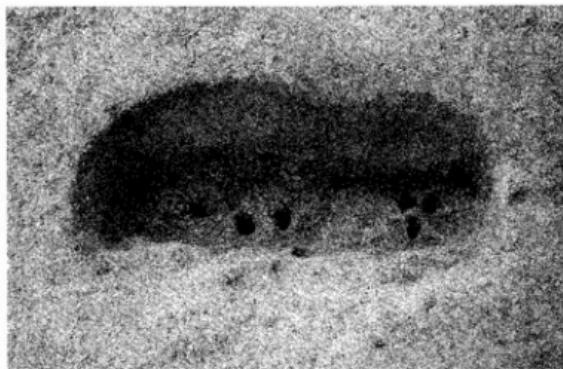


第1号竪穴構造遺物出土状況

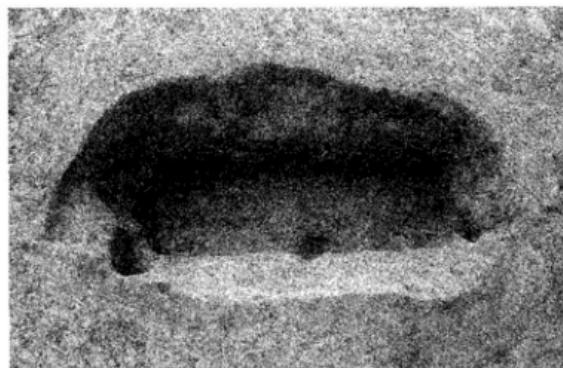
第28号土坑



第31号土坑



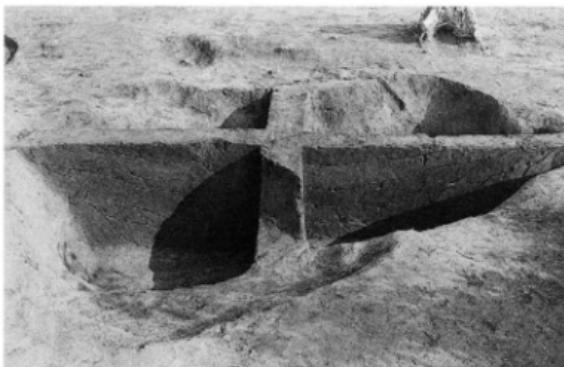
第32号土坑



第33号土坑



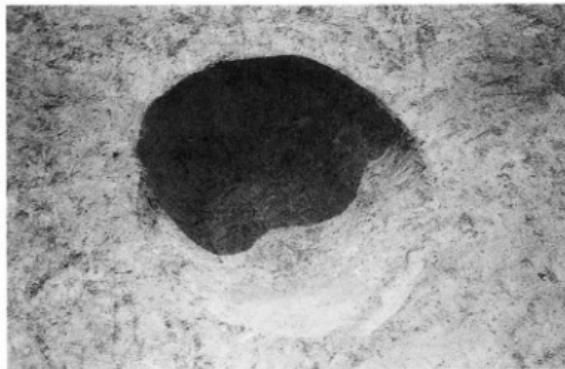
第33号土坑
土层



第36号土坑



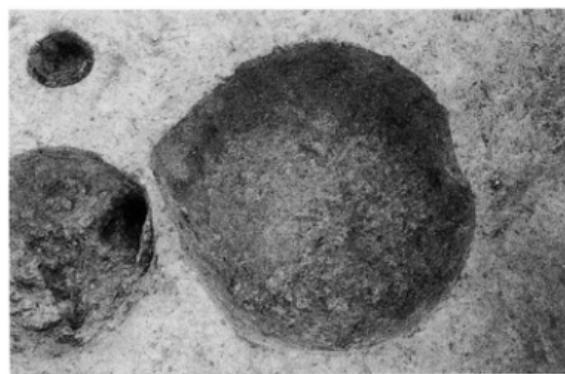
第16号土坑

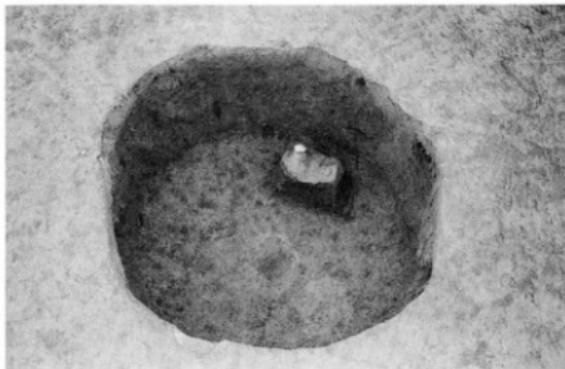


第16号土坑
遗物出土状况



第40号土坑





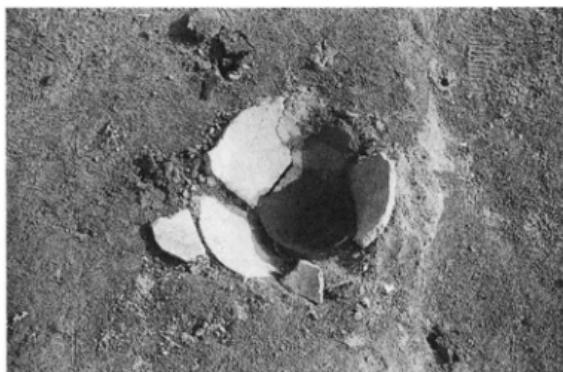
第51号土坑
遺物出土狀況



第2号土器埋設遺構



第3号土器埋設遺構



第4号土器埋設遺構



第1号集石



第1号焼土址





第1号住居跡



第1号住居跡床下溝等完堀状況



第1号住居跡鍛冶炉



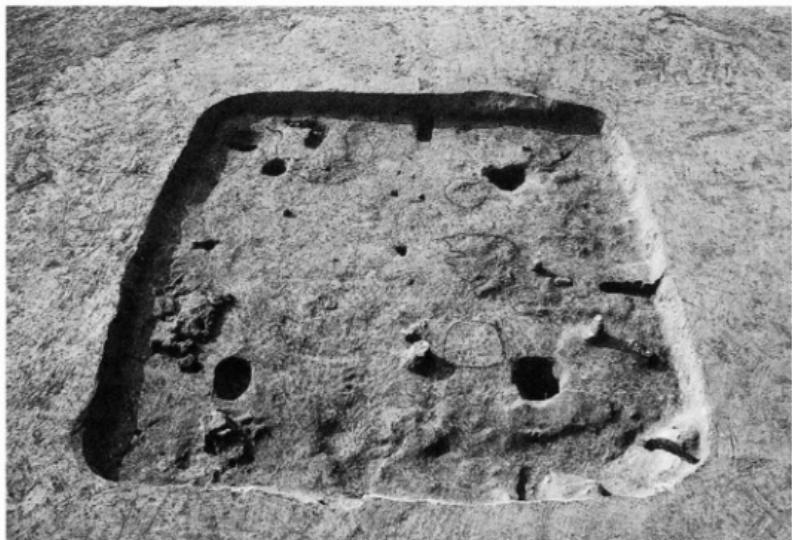
第1号住居跡遺物出土狀況



第2号住居跡



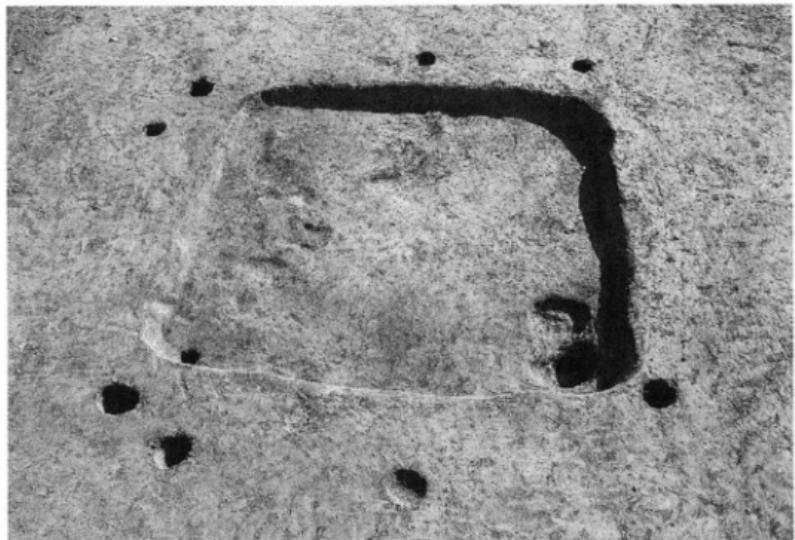
第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況

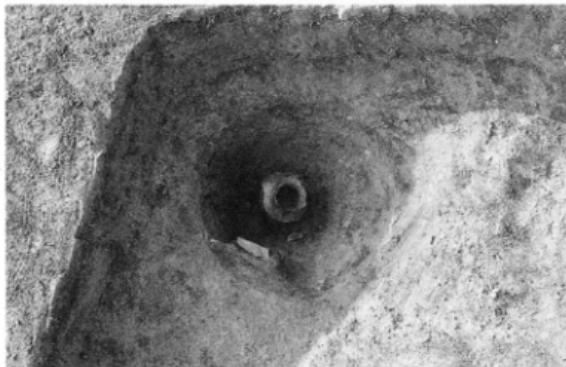


第4号住居跡

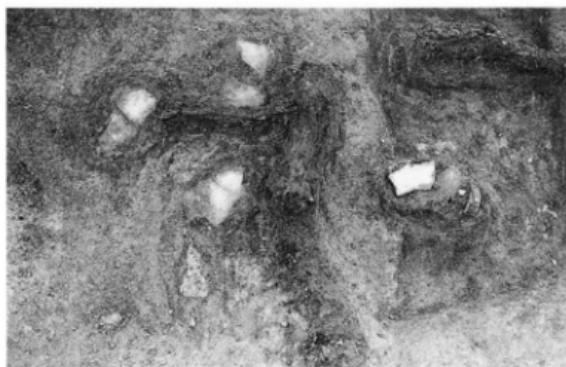


第4号住居跡遺物出土状況

第4号住居跡
貯藏穴遺物出土状況



第4号住居跡
遺物出土状況



第4号住居跡
炉2上遺物出土状況





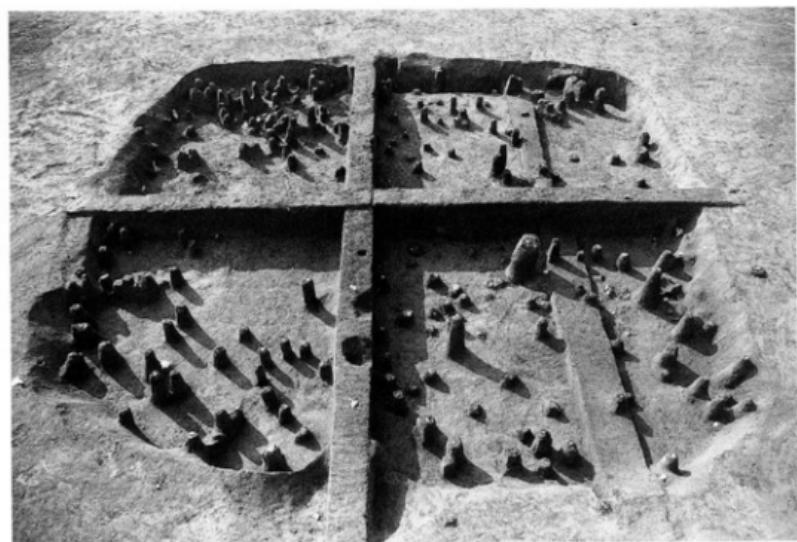
第5号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況

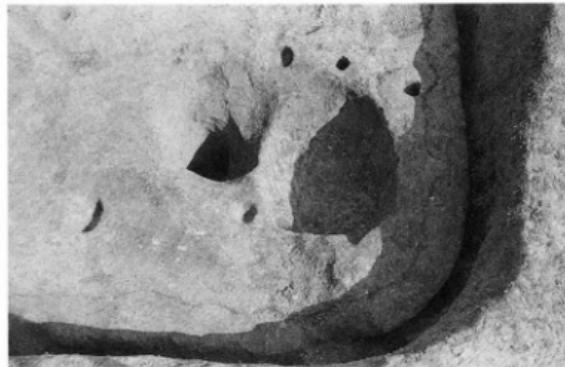


第6号住居跡



第6号住居跡遺物出土狀況

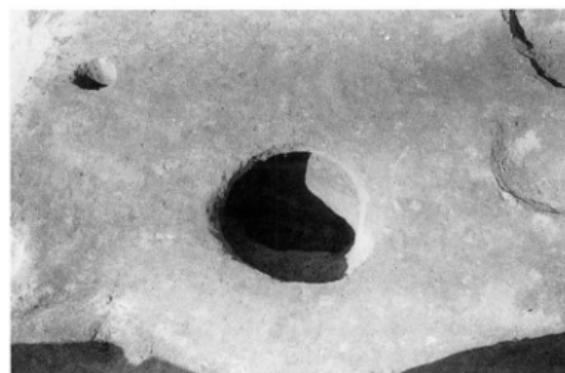
第6号住居跡
貯藏穴



第6号住居跡炉



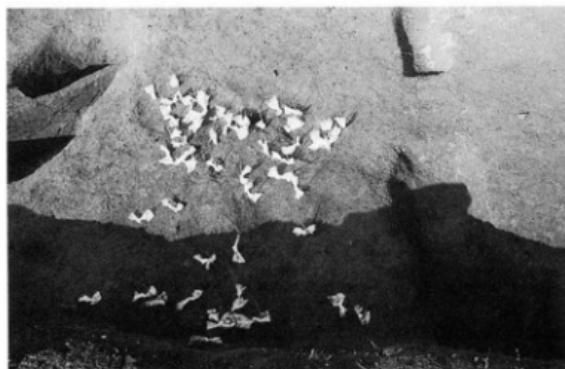
第6号住居跡
入口ピット



第6号住居跡
玉作関連遺物出土状況（1）

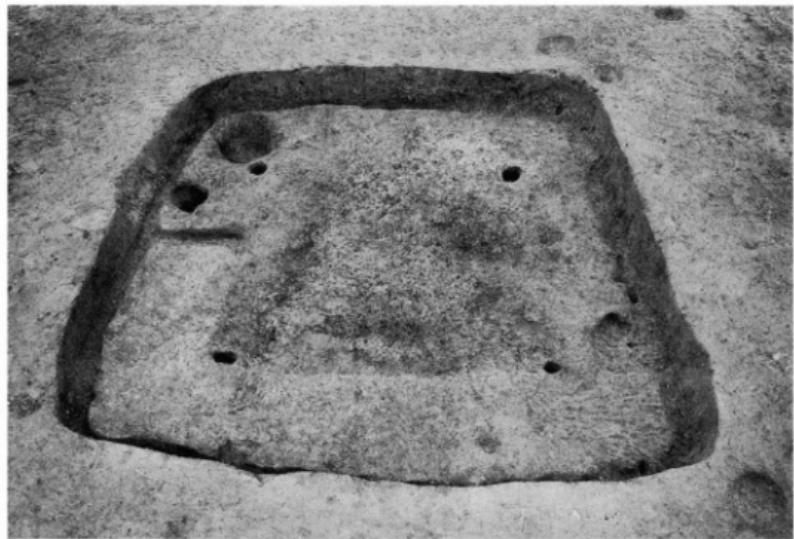


第6号住居跡
玉作関連遺物出土状況（2）



第6号住居跡
床面土層サンプリング状況

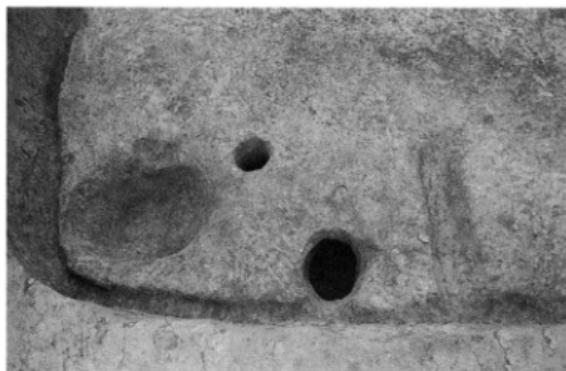




第8号住居跡



第8号住居跡炭化材出土状況



第8号住居跡
遺物出土状況（2）

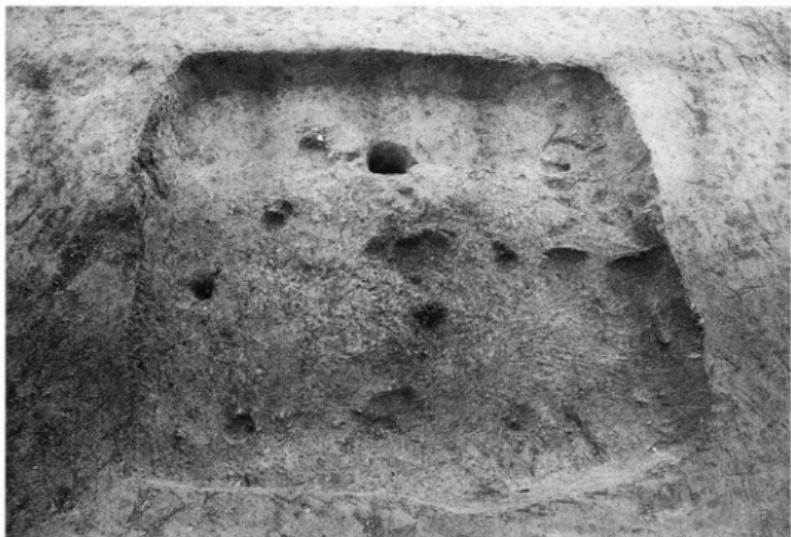


第8号住居跡
遺物出土状況（3）



第8号住居跡
玉作関連遺物出土状況





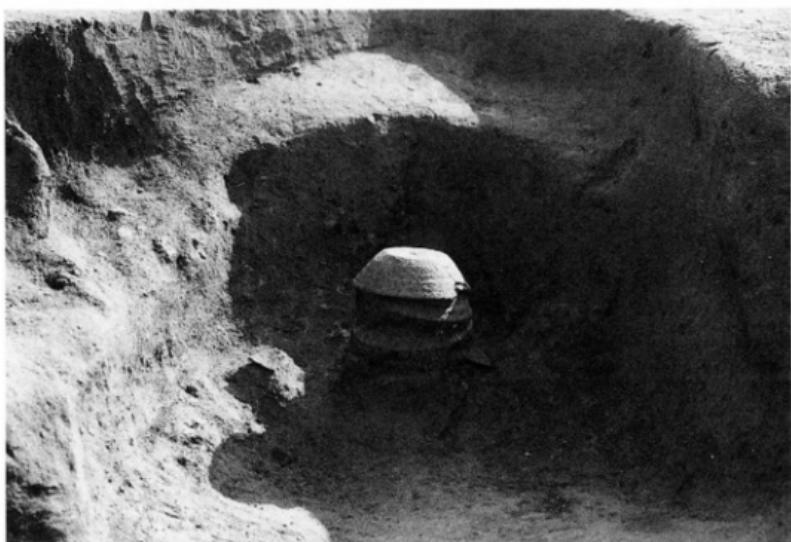
第18号住居跡



第2号竪穴遺構



第19号住居跡



第19号住居跡カマド内遺物出土状況

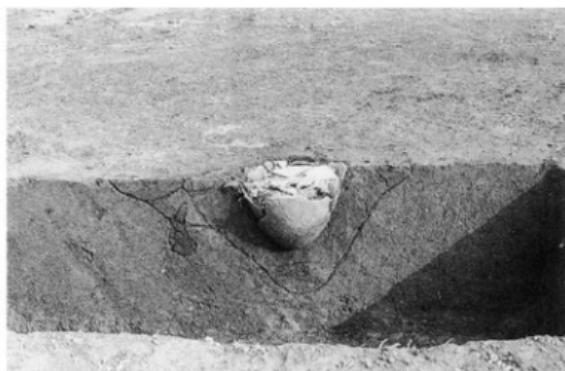
第1号火葬墓（1）



第1号火葬墓（2）



第2号火葬墓



第3号火葬墓



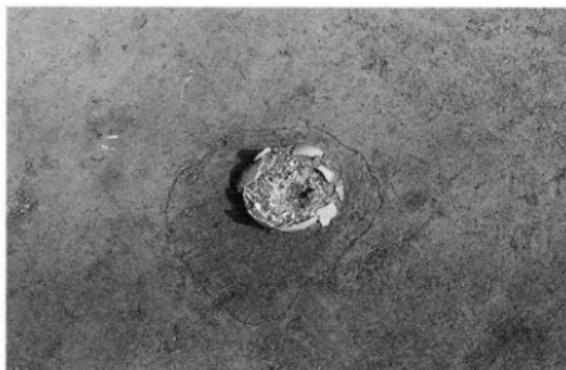
第4号火葬墓（1）



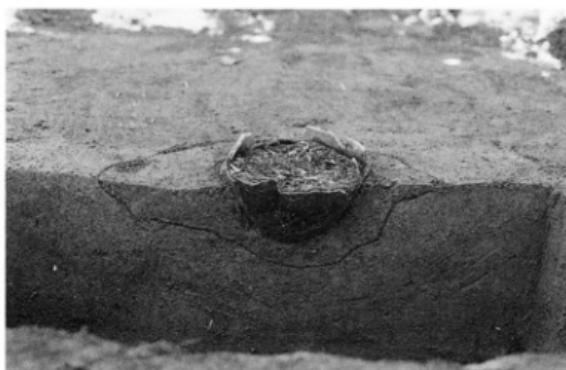
第4号火葬墓（2）



第5号火葬墓（1）



第5号火葬墓（2）

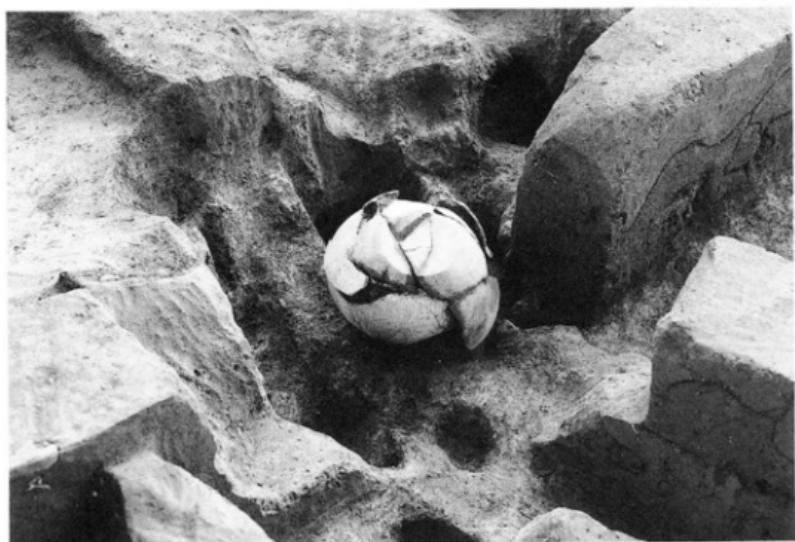


調査区外火葬墓





第7号火葬墓（1）



第7号火葬墓（2）

P L 35

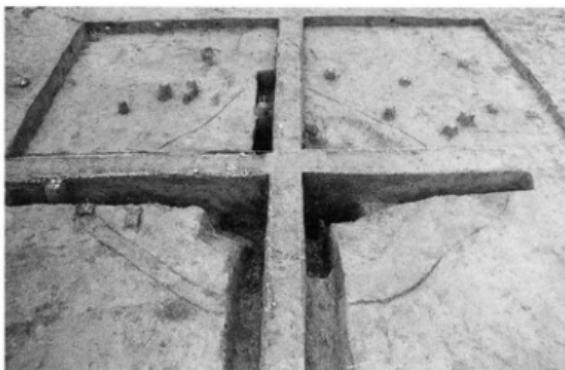
第7号火葬墓（3）



第7号火葬墓（4）



第7号火葬墓（5）



第1号溝跡



作業風景（1）



作業風景（2）





2



42



44



46

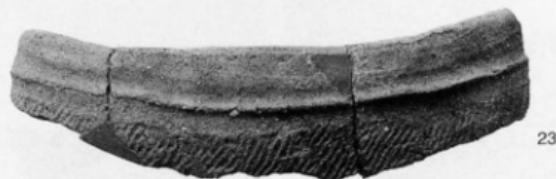
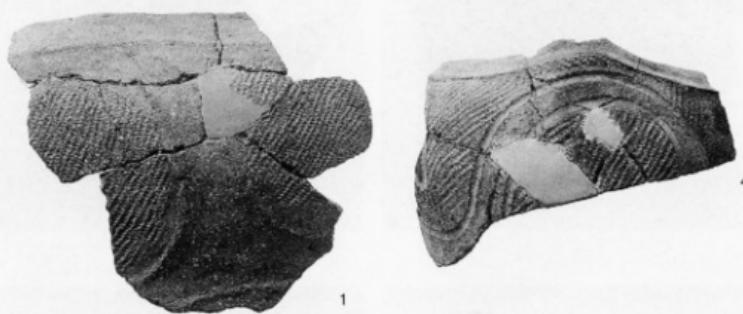


50

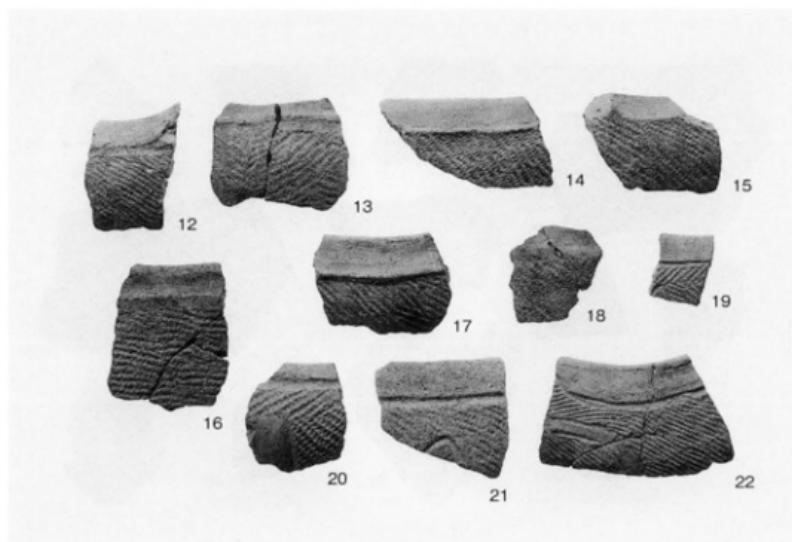
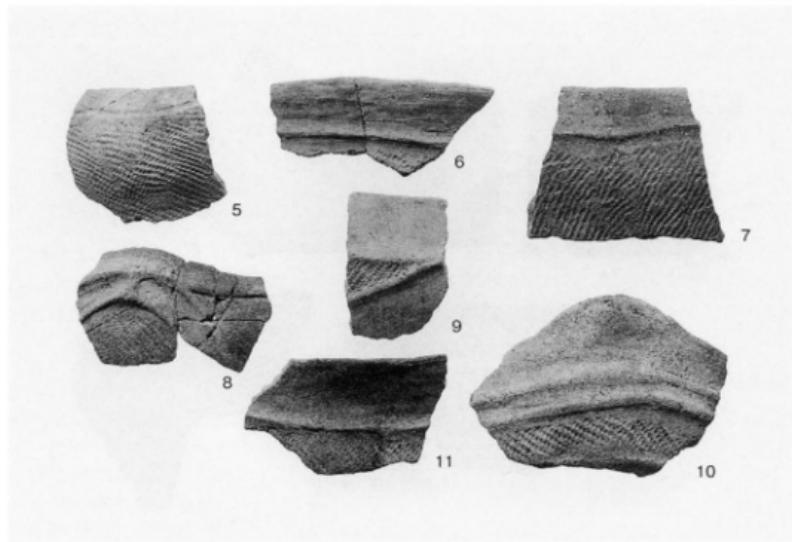


底部

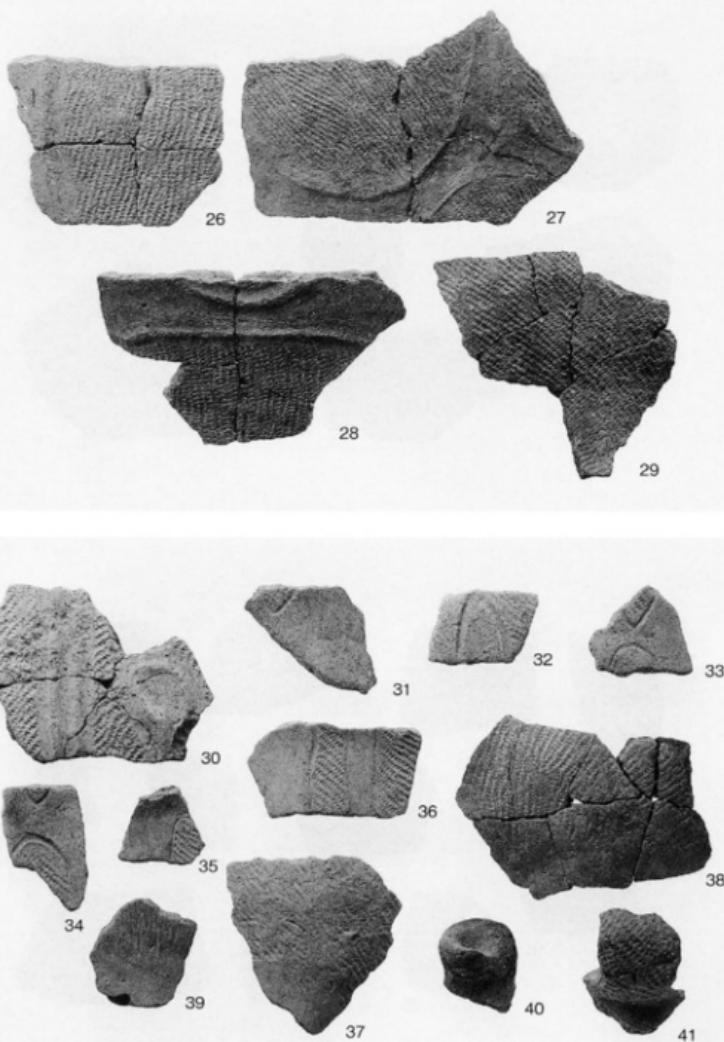
第7号住居跡出土遺物（1）



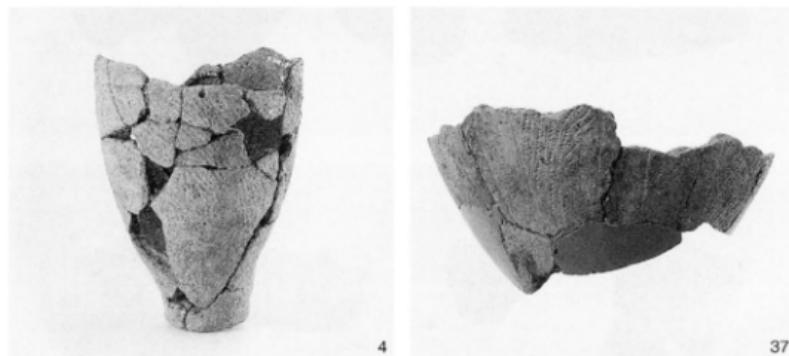
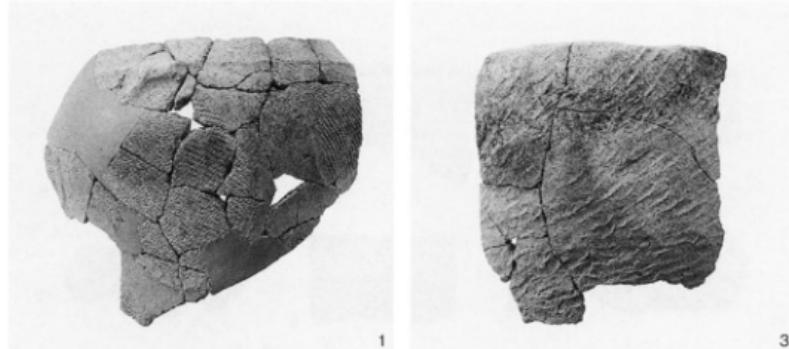
第7号住居跡出土遺物（2）



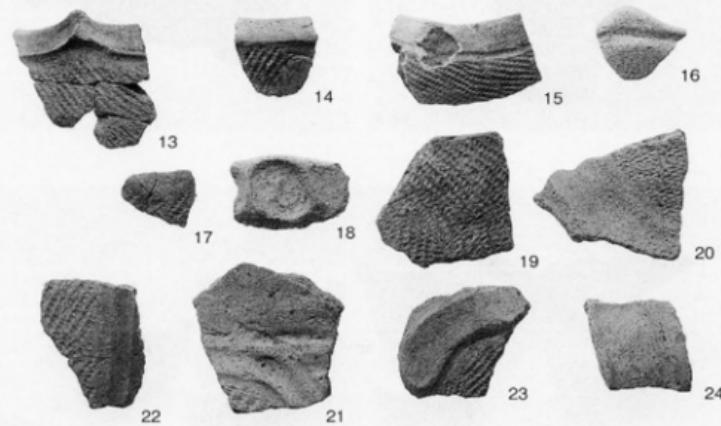
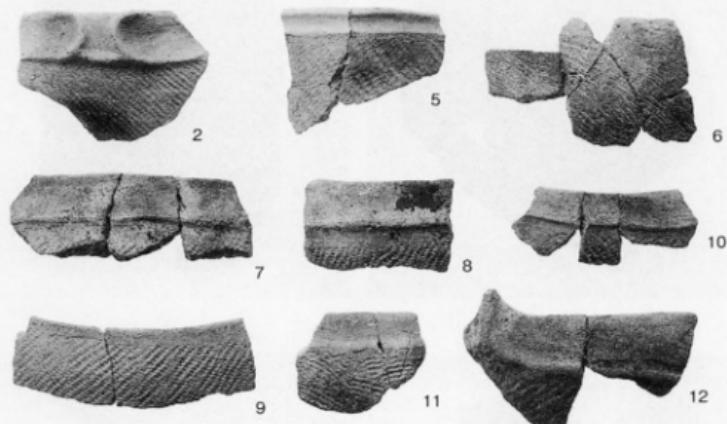
第7号住居跡出土遺物（3）



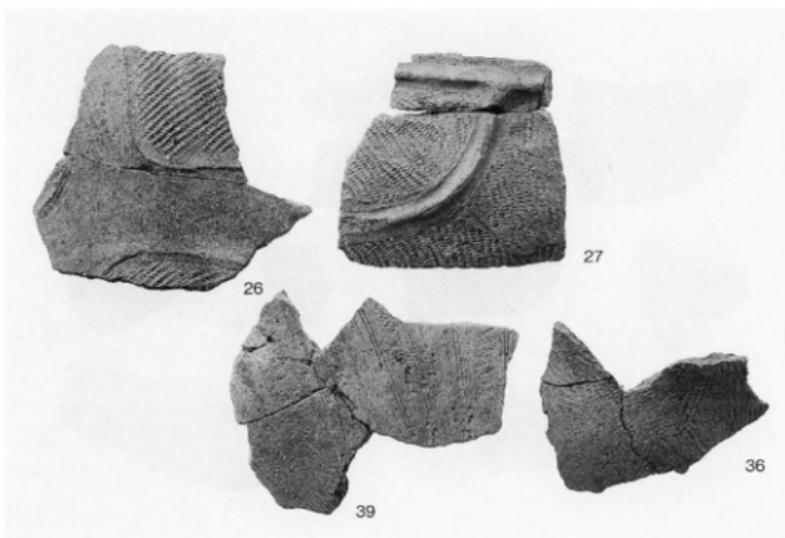
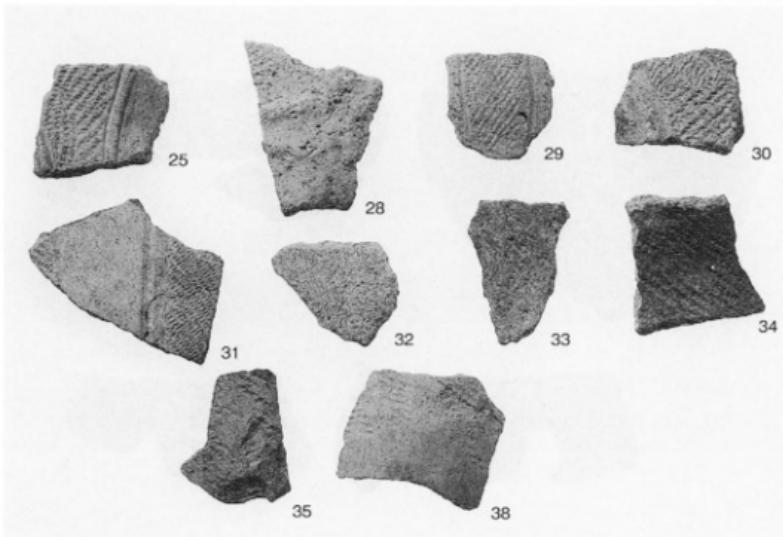
第7号住居跡出土遺物（4）



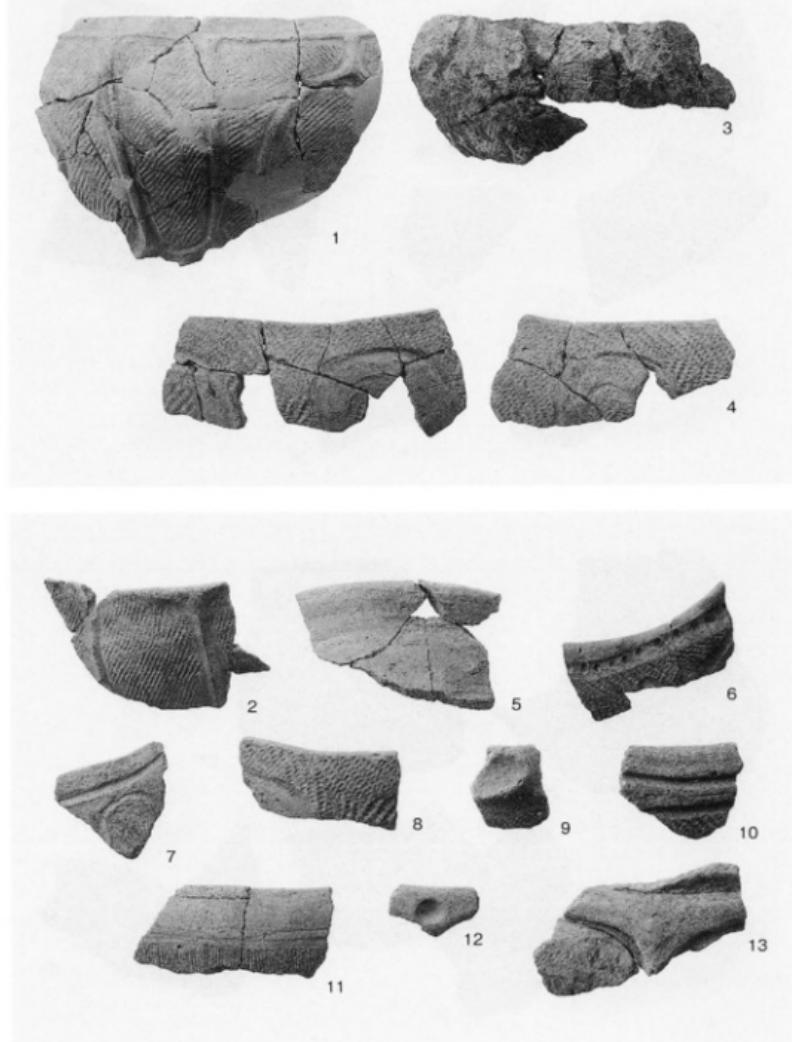
第9号住居跡出土遺物（1）



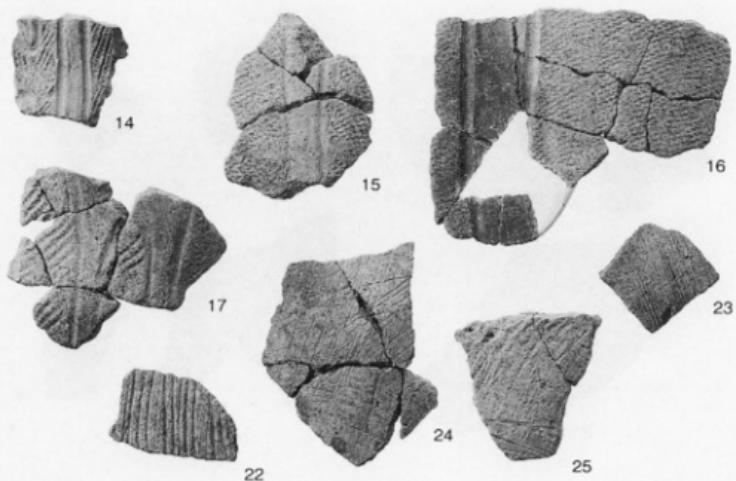
第9号住居跡出土遺物（2）



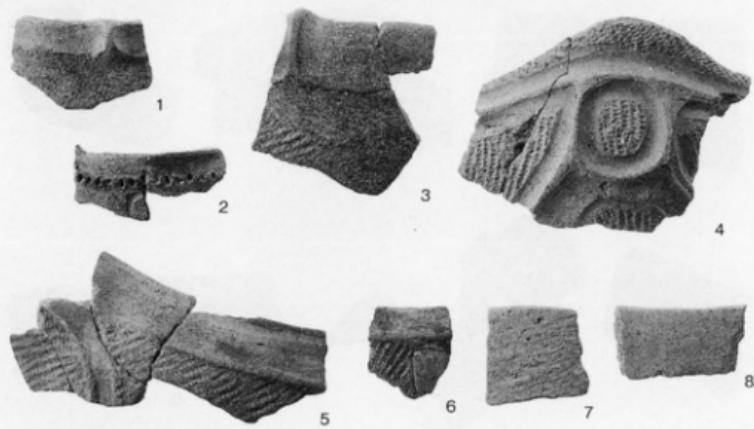
第9号住居跡出土遺物（3）



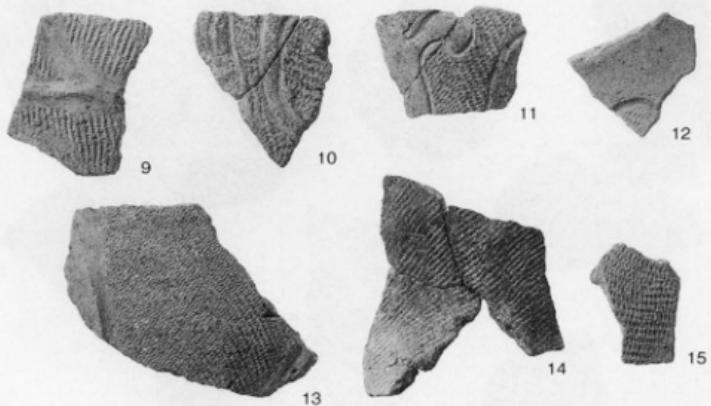
第12号住居跡出土遺物（1）



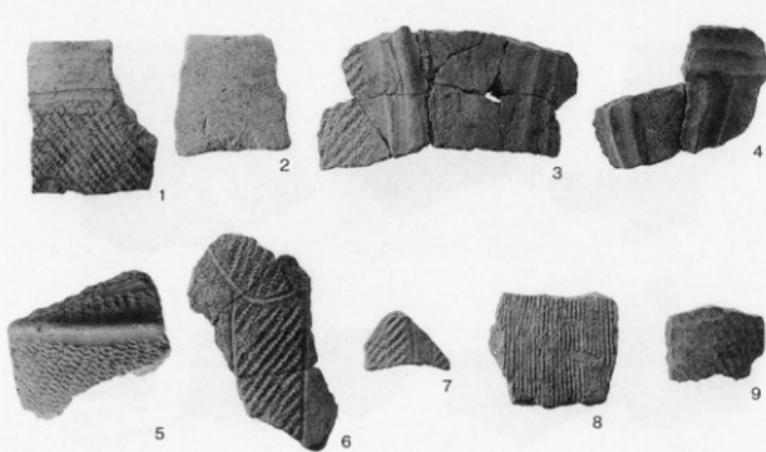
第12号住居跡出土遺物（2）



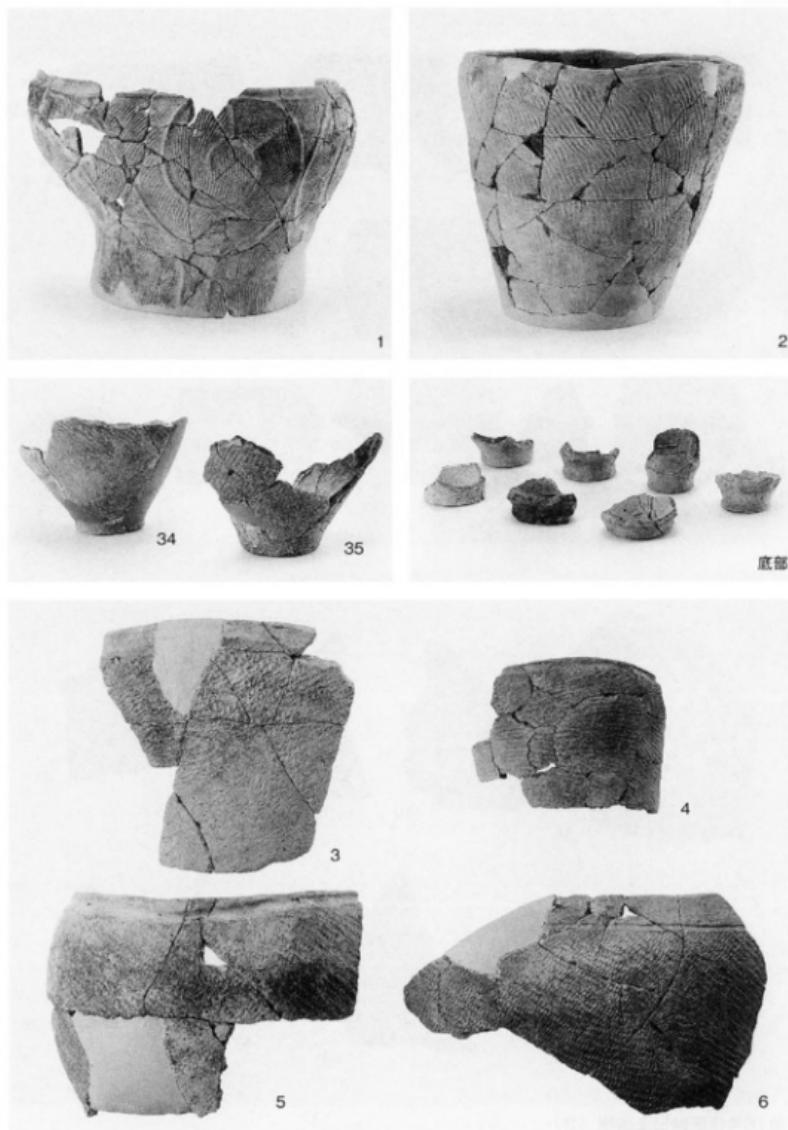
第13号住居跡出土遺物（1）



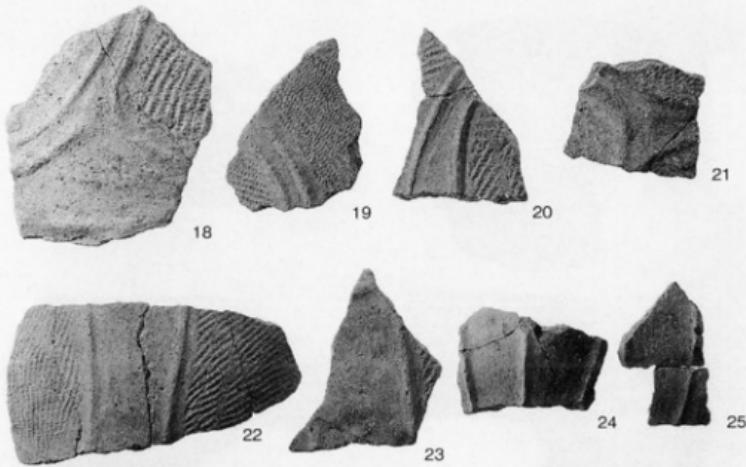
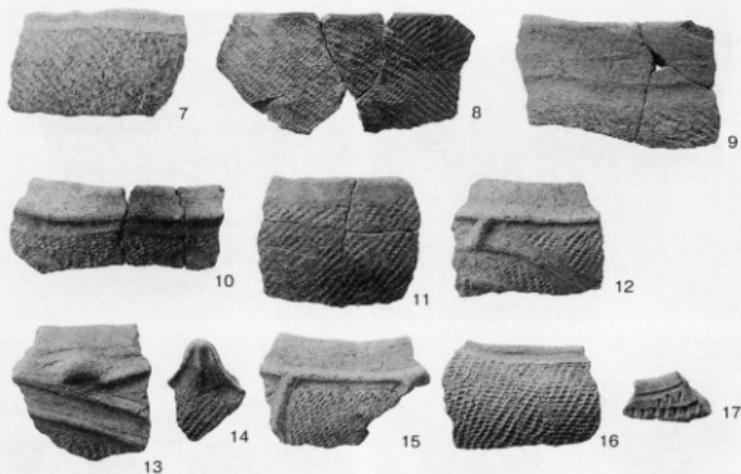
第13号住居跡出土遺物（2）



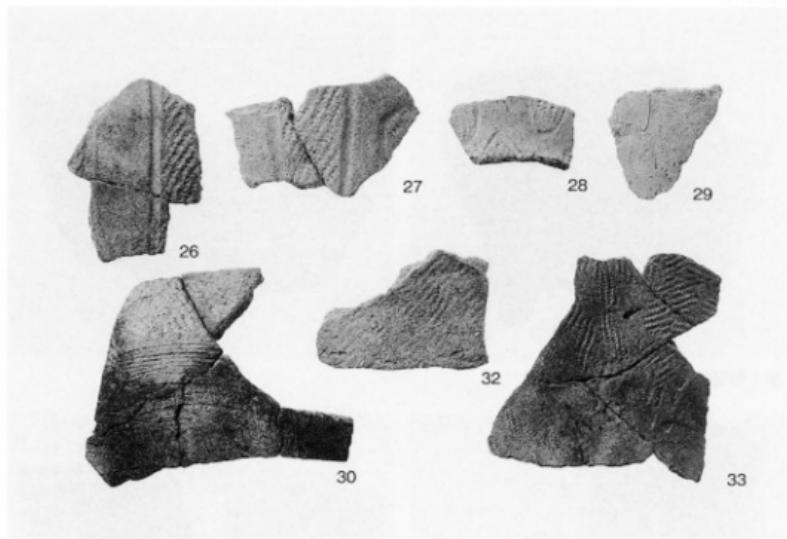
第15号住居跡出土遺物



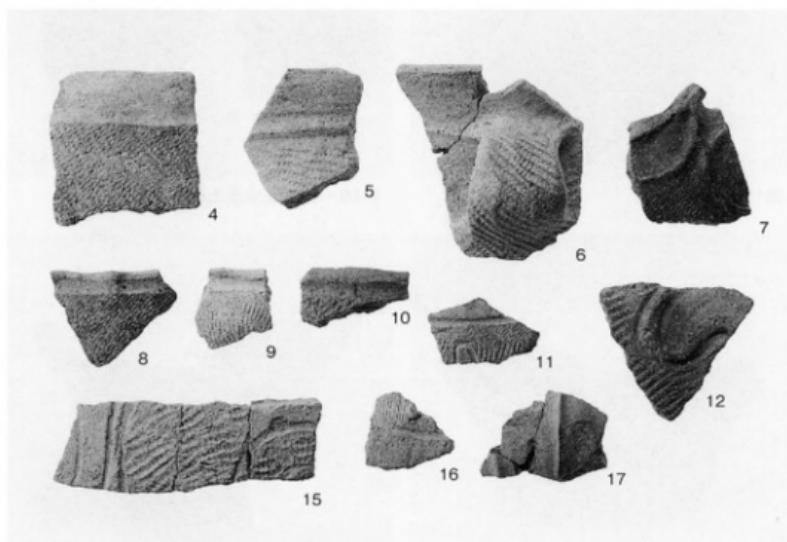
第16号住居跡出土遺物（1）



第16号住居跡出土遺物（2）



第16号住居跡出土遺物（3）



第1号竪穴遺構出土遺物（1）



1



2

第1号竖穴遗构出土遗物（2）



1



SK16-2



SK51-1

第16土坑出土遗物

第16·51号土坑出土遗物



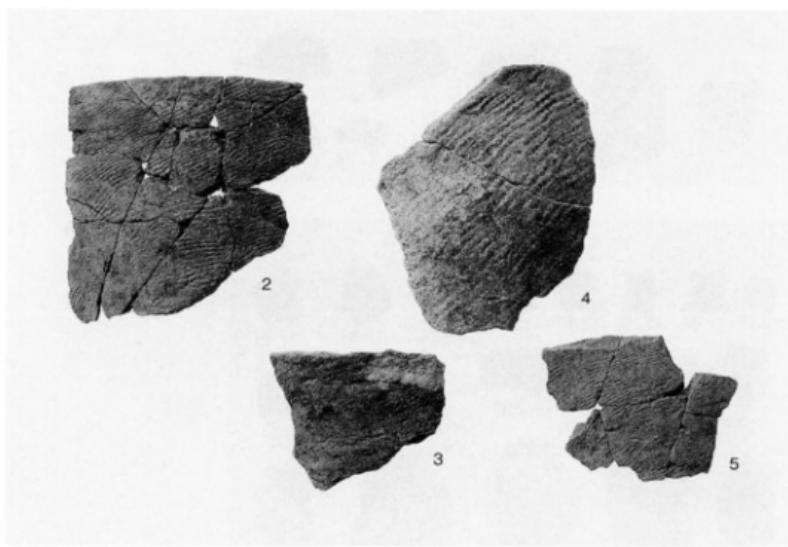
4

第16号土坑出土遗物



1

第44号土坑出土遗物

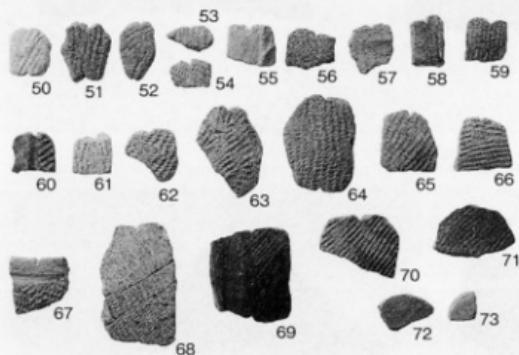


第50号土坑出土遗物

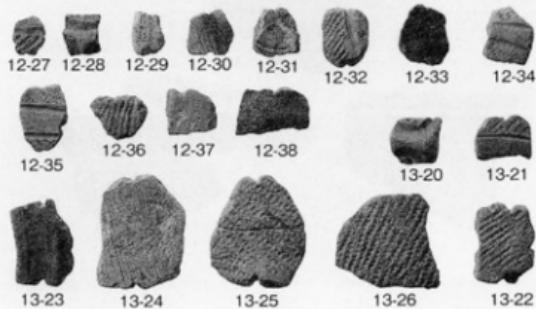
第7号住居跡
出土遺物



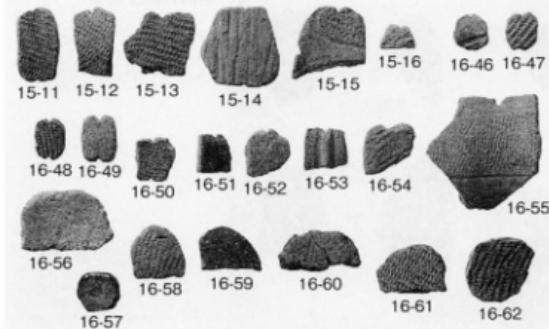
第9号住居跡
出土遺物



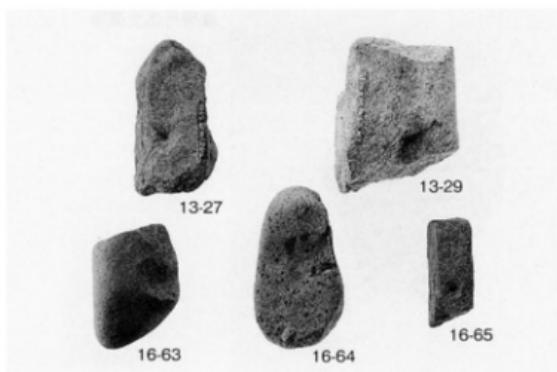
第12・13号住居跡
出土遺物



第15·16号住居跡
出土遺物

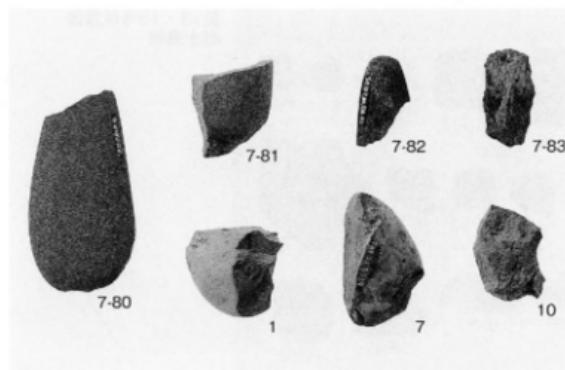


第1号竪穴遺構·
第16·33·44·51号土坑·
第3·6号焼土址
出土遺物

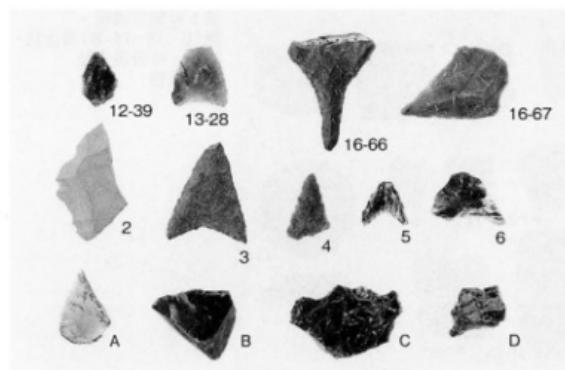


第13·16号住居跡
出土遺物

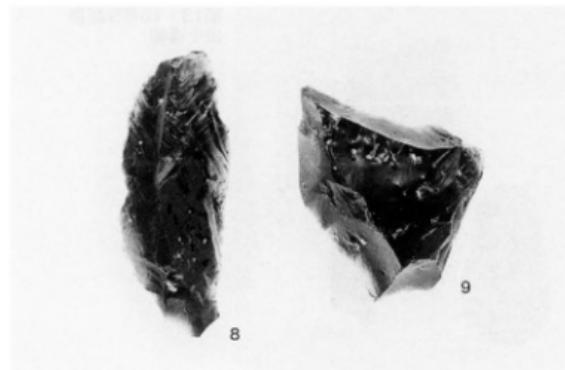
第7号住居跡・
遺構外出土遺物

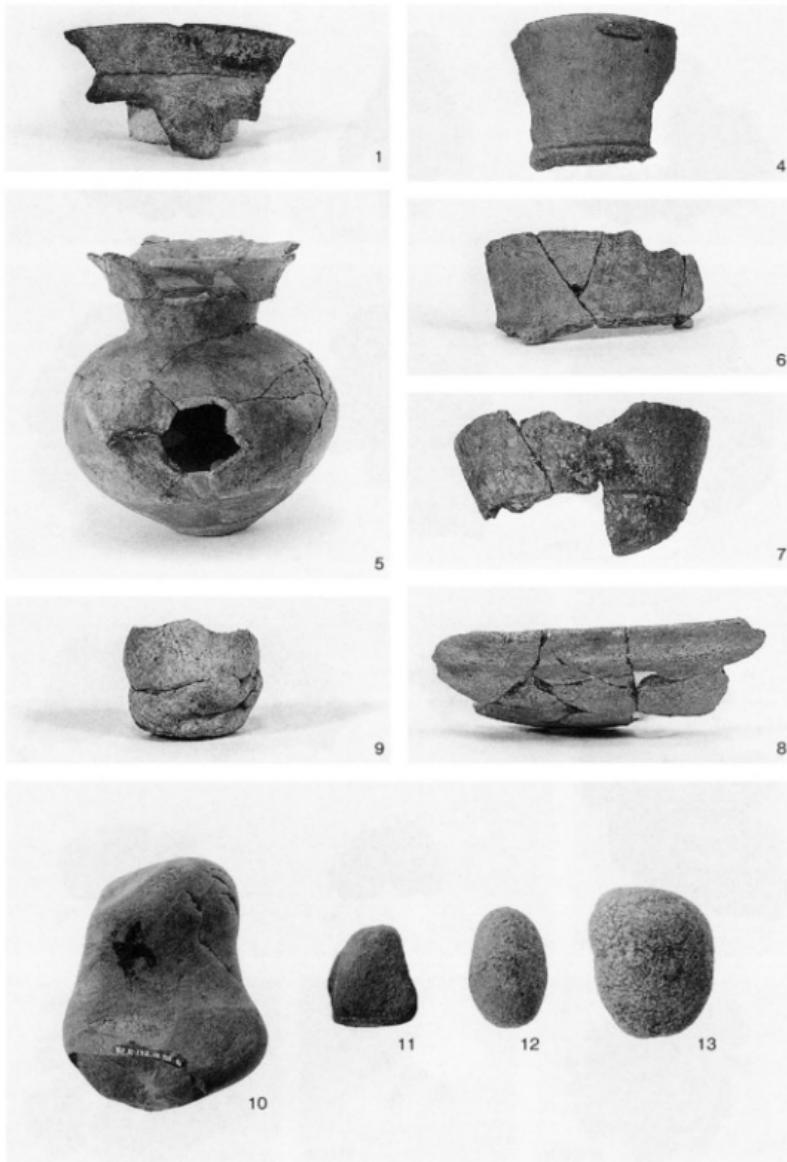


第12・13・16号住居跡・
遺構外出土遺物（最下段・
未実測蛍光X線分析資料）

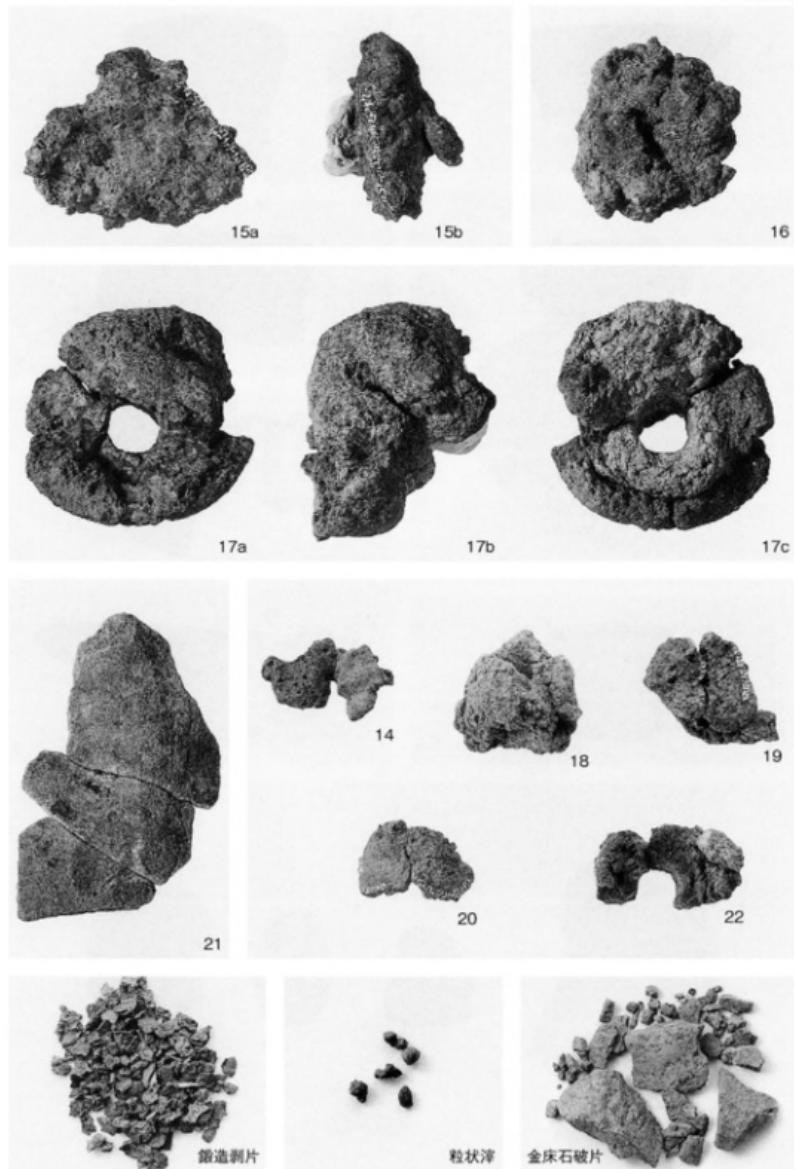


遺構外出土遺物





第1号住居跡出土遺物（1）



第1号住居跡出土遺物（2）



第2号住居跡出土遺物（1）



10



11



12

第2号住居跡出土遺物（2）



3



11



12



9



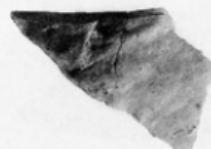
14



16

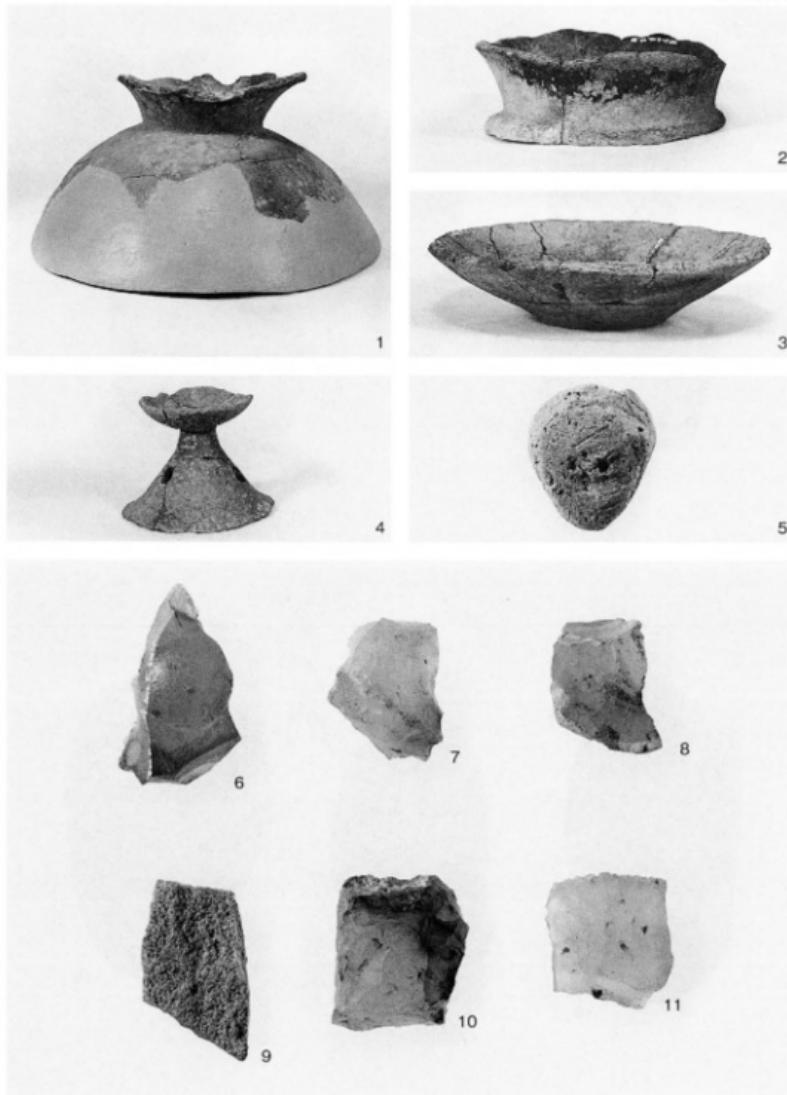


10



15

第3号住居跡出土遺物



第4号住居跡出土遺物（1）



12



13



14



15



16



17



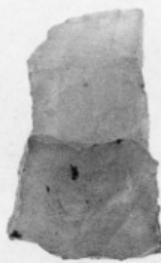
18

第4号住居跡出土遺物（2）



19

第4号住居跡出土遺物（3）



1

第4・8号住居跡接合資料

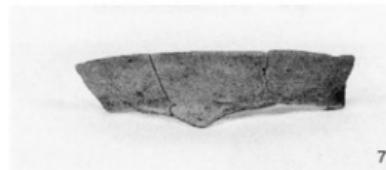


2



3

第4・6号住居跡接合資料



第5号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物（1）



4



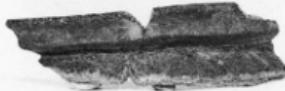
5



6



7



8



9



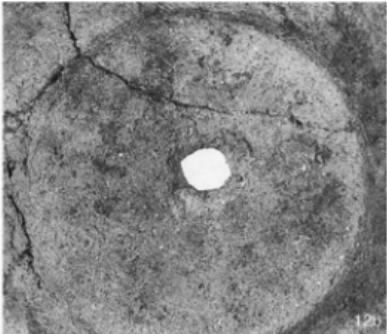
10



11



12a



12b

第6号住居跡出土遺物（2）



13



14



19



15



20

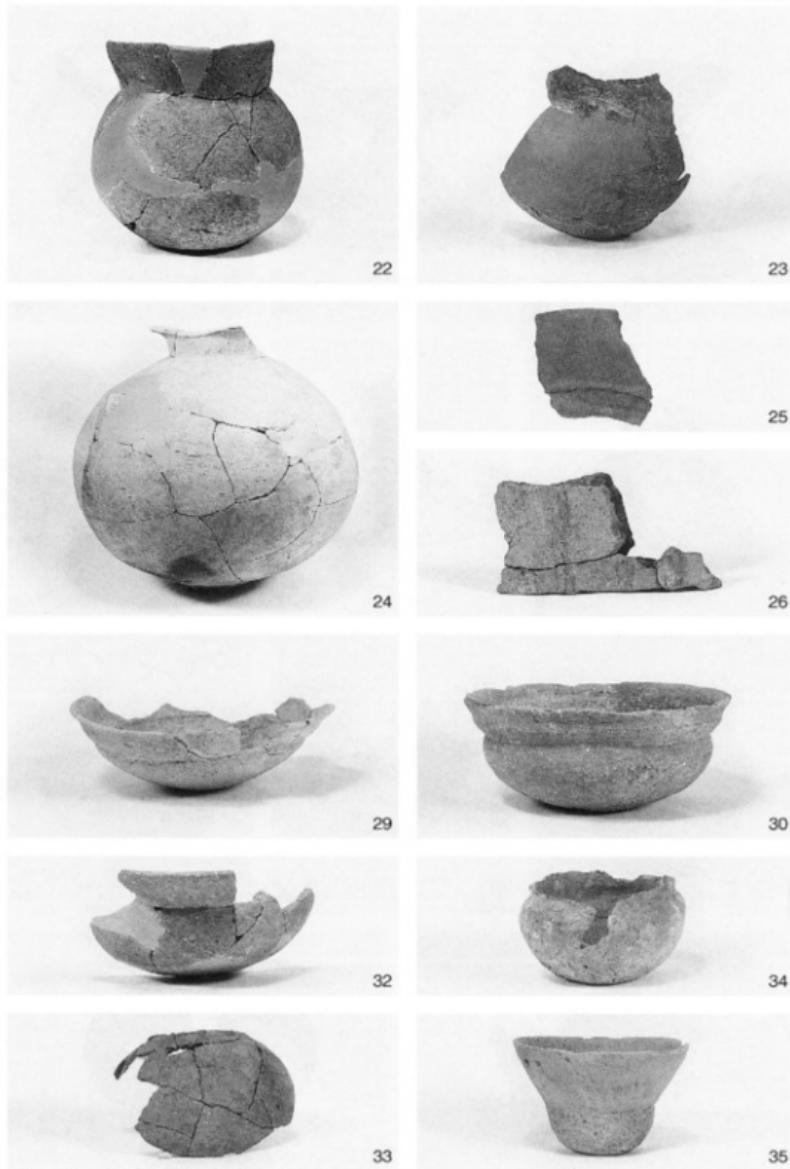


21a



21b

第6号住居跡出土遺物（3）



第6号住居跡出土遺物（4）



37



38



39



40



42



43



45



46



47



49



50



51

第6号住居跡出土遺物（5）



第6号住居跡出土遺物（6）



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84

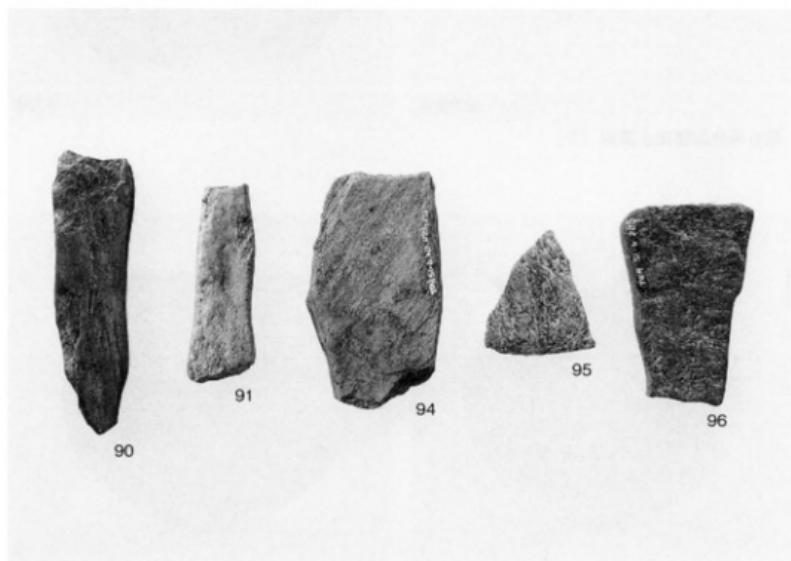
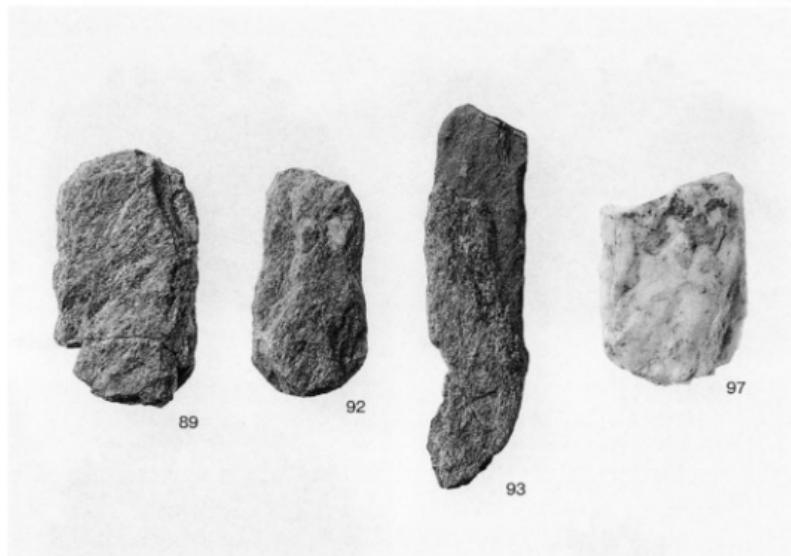


85



86

第6号住居跡出土遺物（7）



第6号住居跡出土遺物（8）



メノウ剥片



片岩剥片



琥珀破片



小円砾

第6号住居跡出土遺物（9）

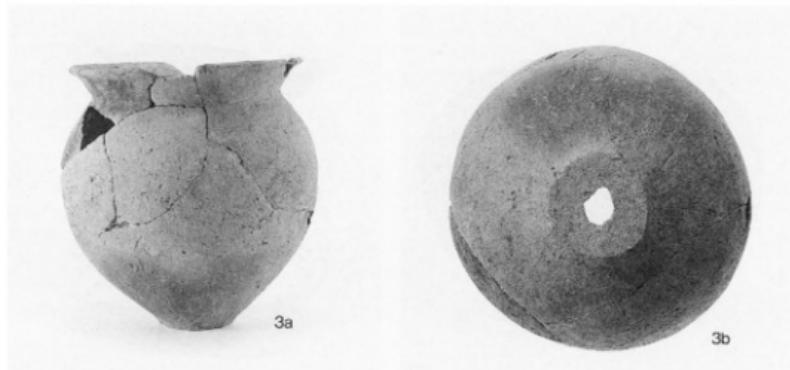


1



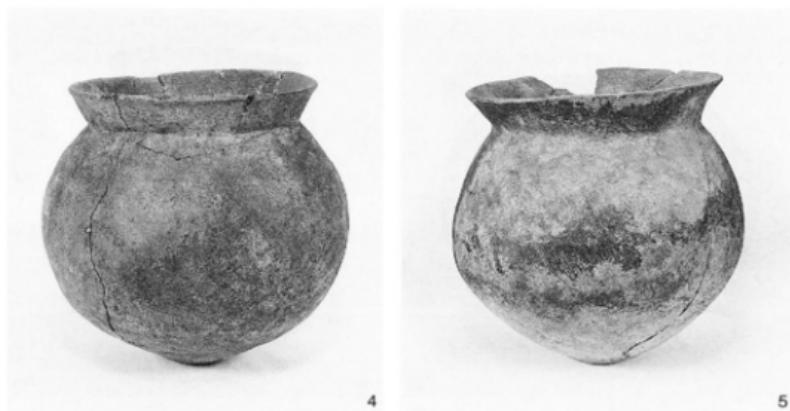
2

第8号住居跡出土遺物（1）



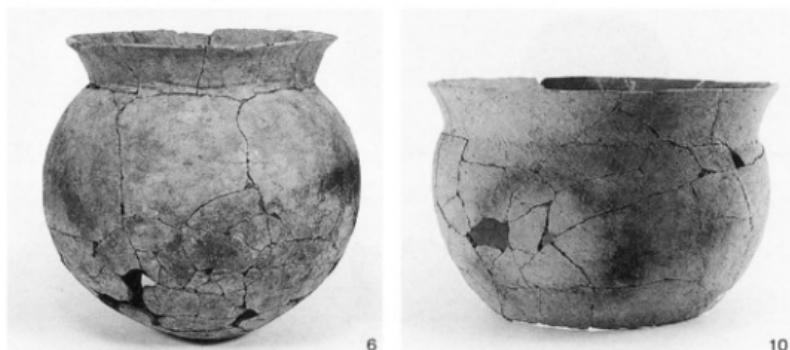
3a

3b



4

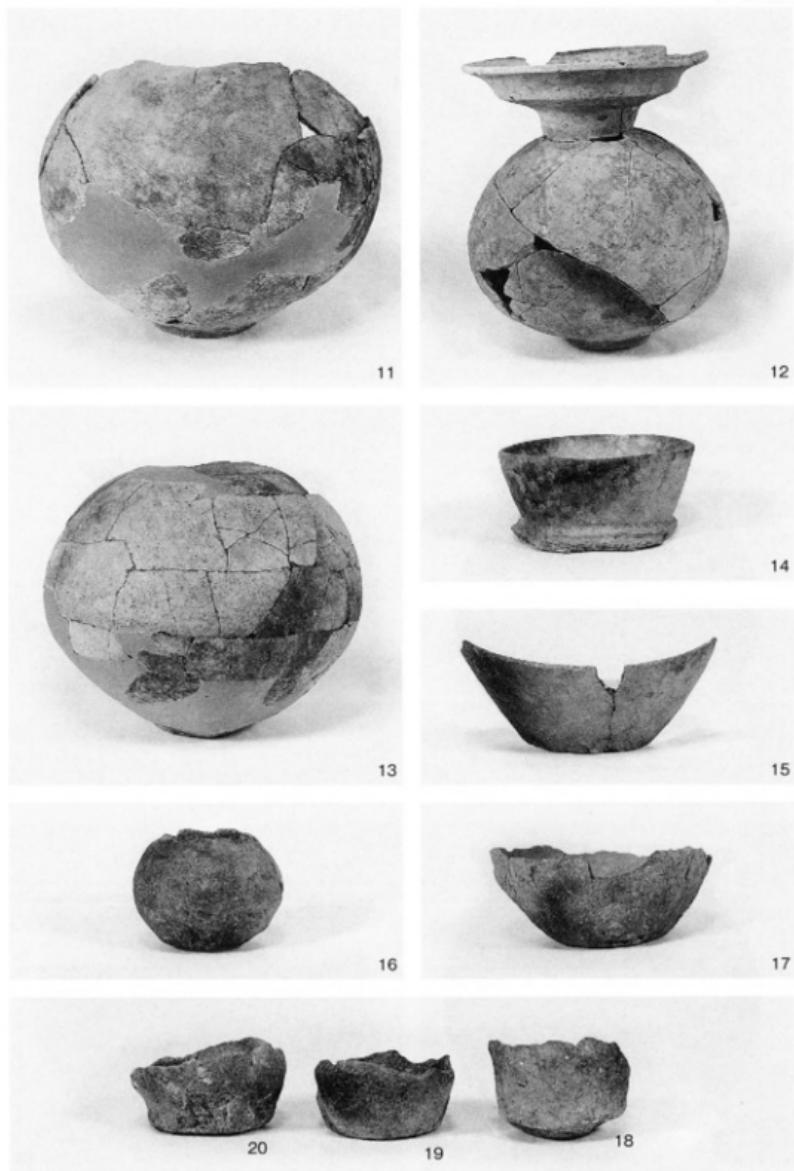
5



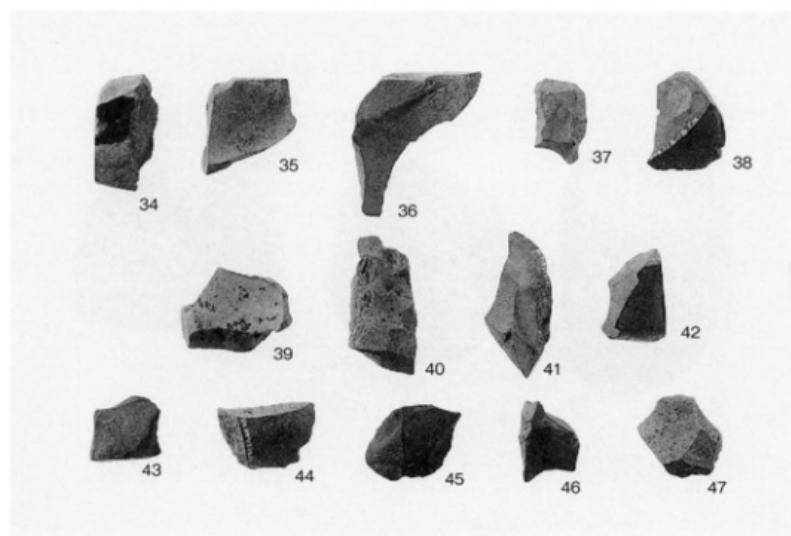
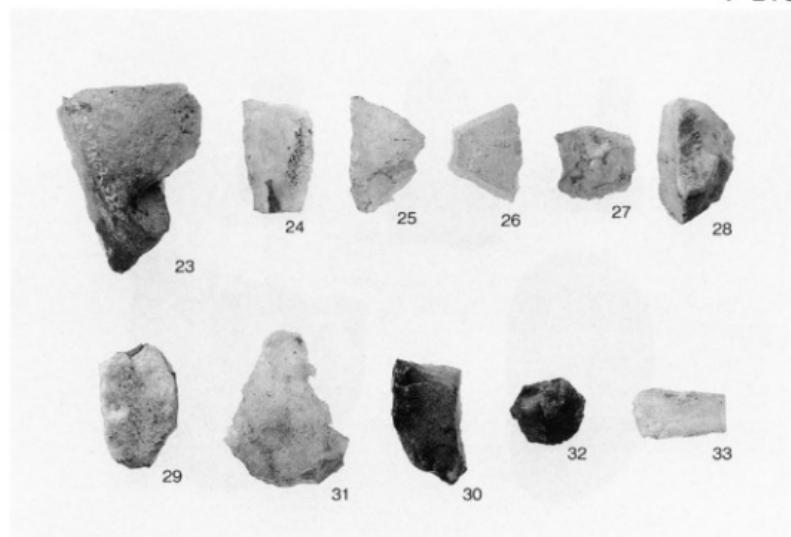
6

10

第8号住居跡出土遺物（2）



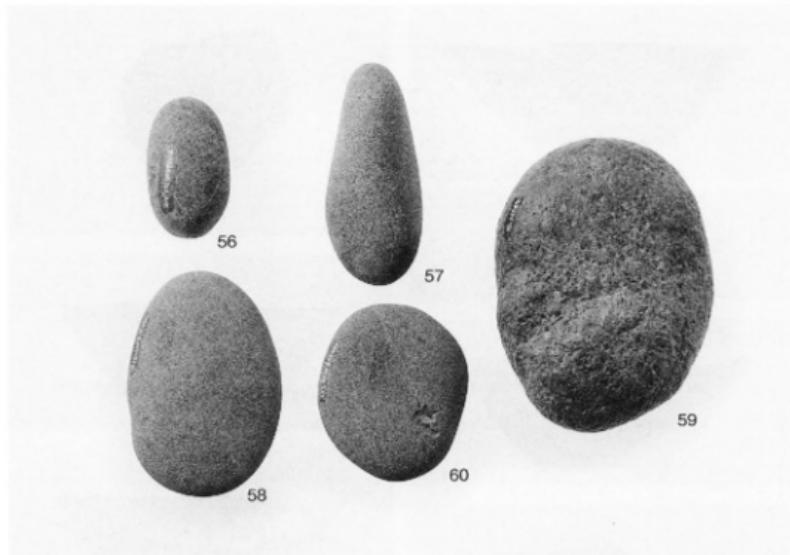
第8号住居跡出土遺物（3）



第8号住居跡出土遺物（4）



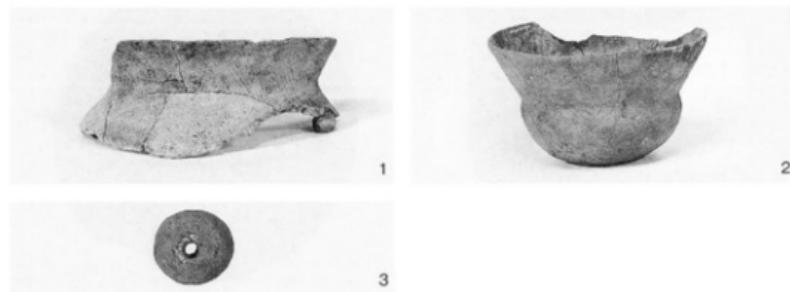
第8号住居跡出土遺物（5）



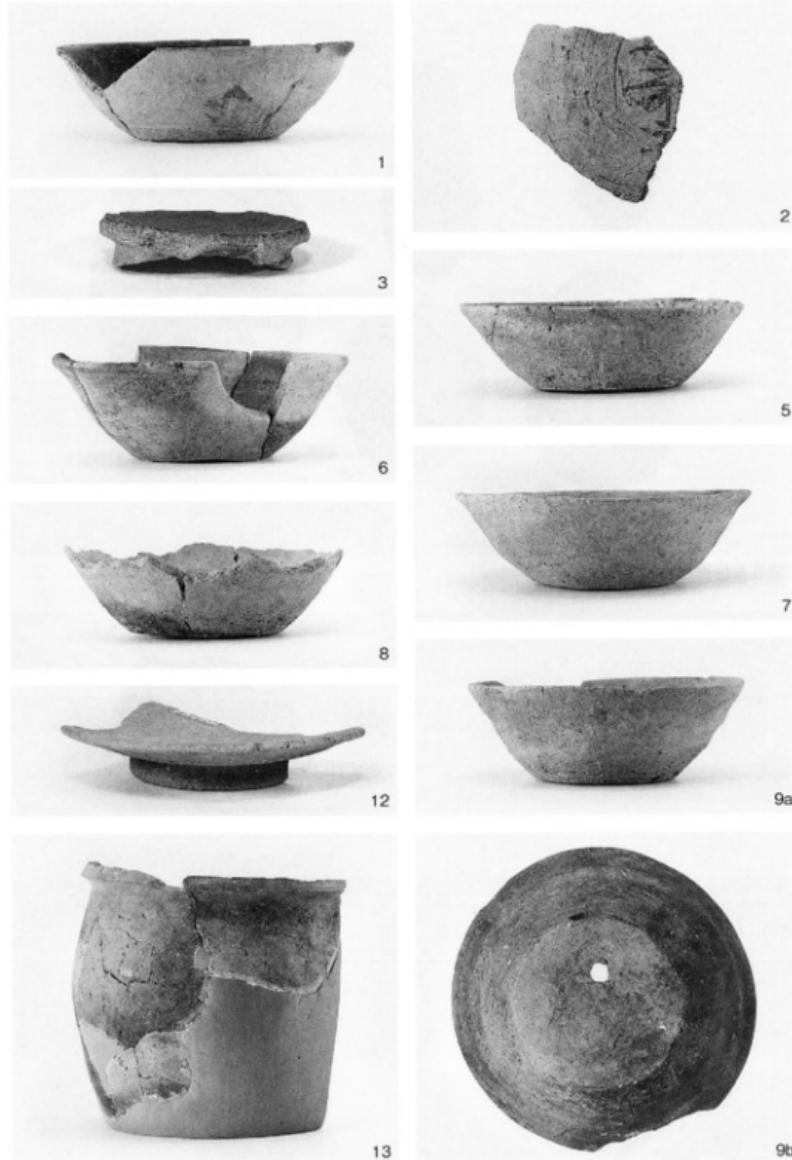
第8号住居跡出土遺物（6）



第17号住居跡出土遺物



第18号住居跡出土遺物



第19号住居跡出土物



第1号火葬墓出土遺物



第2号火葬墓出土遺物



第3号火葬墓出土遺物

第4号火葬墓出土遺物



1

第6号火葬墓出土遺物

第5号火葬墓出土遺物



3



4

第7号火葬墓出土遺物



1

調査区外火葬墓出土遺物

第1号溝出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はちまんわきいせき					
書名	八幡塚遺跡					
副書名	田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第8集					
シリーズ名						
編著者名	塩谷 修 小松葉子 黒澤春彦 吉澤 悟 吉田 匠 関口 満					
編集機関	土浦市遺跡調査会					
問い合わせ先	〒300-0811 1a029 (826) 7111 茨城県土浦市上高津1843番地 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内					
発行機関	土浦市教育委員会					
発行年月日	西暦2009年(平成21年)3月31日					
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	緯度 北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
八幡塚遺跡	つちうら し かねむら ひづる 土浦市沖宿町 字八幡塚2696 外	08203	339 36度 4分 42秒	140度 15分 31秒	1991(平成3)年 10月21日～ 2月12日	約8,700m ² 土地区画整 理事業に伴 う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
八幡塚遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡6軒、堅 穴造構1基、土坑38 基、土器埋設造構3 基、集石2基など	縄文土器、石器、土 製品	本遺跡からは縄文時代中 期と古墳時代前期の集落跡 が確認された。特筆すべき は古墳時代前期の堅穴住居 跡のうち1軒は鐵治工房跡 で、3軒は玉作工房跡であつた。	
		古墳時代	前期の堅穴住居跡9軒 (内1軒は鐵治工房跡、 3軒は玉作工房跡)、 堅穴造構1基	土器類、鐵治関連遺 物(輪の羽口、金床 石破片、鐵鋤、鐵造 溝片、粒状津)、玉 作関連遺物(メノウ 製勾玉等の未製品、 砾石、石器)など	平安時代には墓域として 土地利用され、火葬墓が7 基検出され、このうちの1 基は灰釉陶器の短頭壺を骨 蔵器にしていた。	
		平安時代	堅穴住居跡1軒、火 葬墓7基、溝跡1条	須恵器、土器類、灰 釉陶器、墨書き土器		
要約	<p>本遺跡から検出された遺構・遺物の中心は、縄文時代と古墳時代そして平安時代である。縄文時代には中期後半の加曾利E3式期からE4式期の集落跡が形成された。古墳時代には前期の集落跡が形成され、集落内には堅穴住居跡を利用した鐵治工房跡1軒と玉作り工房跡が3軒確認された。この鐵治工房跡は茨城県内でも最も古い調査事例の一つで、遺構内からは鐵冶炉や鐵治関連遺物が検出されている。玉作り工房跡ではメノウ製勾玉を中心とした生産がなされ、破損品や未製品が検出される一方、滑石・綠色凝灰岩・琥珀製玉類の生産も行っていた様子が判明した。そして、玉類の生産には欠かせない道具類も豊富に出土した。古墳時代のメノウ製勾玉生産では、市内鳥山遺跡とならび東国において最も古い調査事例といえる。</p> <p>平安時代には遺跡内が墓域化し火葬墓7基が検出され、このうちの1基は灰釉陶器短頭壺を骨蔵器とするものであった。この骨蔵器は土器類・高台付壺・鉢によって三重に蓋がなされており興味深い事例といえる。</p>					

八幡脇遺跡

— 田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第8集

発行日 2009年3月31日

編集 土浦市遺跡調査会

発行 土浦市教育委員会

問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843

TEL 029 (826) 7111

印 刷 株式会社あけぼの印刷社
